連載専門誌

対人援助学マガジン

vol. 12 No. 4

第48号

March 2022

対人援助学会

No.48　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-016
障害者福祉援助論	千葉　晃央	017-021
臨床社会学の方法（36）	中村　正	022-033
人を育てる会社の社長が、今考えていること（休載）	団　遊	
カウンセリングのお作法（30）	中島　弘美	034-039
対人援助学との出会い（4）	藤　信子	040-042
エア絵本　－ビジュアル系子ども・家族の理解と支援－	岡田　隆介	043-055
配偶者を亡くして一年日記（3）	団　士郎	056-080
社会的養護の新展開（17）	浦田　雅夫	081-083
幼稚園の現場から（48）	鶴谷　主一	084-091
福祉系対人援助職養成の現場から（48）	西川　友理	092-096
ああ、相談業務	河岸　由里子	097-101
生殖医療と家族援助（休載）	荒木　晃子	
ドラマセラピーの実践・研究・手法（7）	尾上　明代	102-105
対人援助学＆心理学の縦横無尽（33）	サトウタツヤ	106-111
きもちは言葉をさがしている（休載）	水野　スウ	
ノーサイド(休載)	中村　周平	
路上生活者の個人史（5）	竹中　尚文	112-119
男は痛い！（42）	國友　万裕	120-126
役場の対人援助論（40）	岡崎　正明	127-130
臨床のきれはし（16）	浅田　英輔	131-133
発達検査と対人援助学（7）	大谷　多加志	134-137
講演会＆ライブな日々（30）	古川　秀明	138-144
家族と家族幻想（9）	坂口　伊都	145-149
周辺からの記憶　－東日本大震災家族応援プロジェクト－（34）	村本　邦子	150-167
精神科医の思うこと（24）	松村　奈奈子	168-170
馬渡の眼	馬渡　徳子	171-172
東成区の昭和　やぶにらみ日記	柳　たかを	173-180
心理コーディネーターになるために	山下　桂永子	181-184
そうだ、猫に聞いてみよう（25）	小池　英梨子	185-189
先人の知恵から（35）	河岸　由里子	190-194
うたとかたりの対人援助学（21）	鵜野　祐介	195-198

ああ結婚（21）	黒田　長宏	199-200
PBL の風と土（20）	山口　洋典	201-206
接骨院に心理学を入れてみた（19）	寺田　弘志	207-214
現代社会を『関係性』という観点から考える	三浦　恵子	215-222
コミュニティが育つ子どもがいる暮らし（休載）	朴　希沙	
ブルーグレーの肖像（7）	天川　浩	223-226
「余地」―相談業務を楽しむ方法―（18）	杉江　太朗	227-230
統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡　園子	231-233
生体肝移植ドナーをめぐる物語（16）	一宮　茂子	234-246
こころ日記「ぼちぼち」partⅡ	脇野　千惠	247-248
「盲ろう者」として､自分らしく生きる（休載）	中條 與子	
フリースクールでの SW 実践を考える	高名　祐美	249-251
原田牧場 Note（休載）	原田　希	
みちくさ言語療法（6）	工藤　芳幸	252-253
かけだ詩（8）	川畑　隆	254-258
応援、母ちゃん（8）	玉村　文	259-262
HITOKOMART	篠原ユキオ	263-266
キャリアと文化の心理学	土元　哲平	267-275
コロナ禍の中「幾度となく会い、語りあうことの意味」を考える	本間　毅	276-290
川下の風景	米津　達也	291-292
一語一会	畑中　美穂	293-295
福祉教育への挑戦	高井　裕二	296-297
対人援助をリブートするこの一冊（5）	渡辺　修宏　他	298-303
島根の中山間地から Work as Life	野中　浩一	304-308
夫の腎臓と笑う私	両角　晴香	309-312
かぞくのはなし	きむらあきこ	313-317
対人援助学マガジン読書会報告＆第 5 回読書会告知	編集部	318-319
対人援助学マガジン執筆者トークライブ報告	編集部	320
編集後記	編集長＆編集員	321-322

ハチドリの器 31

見野 大介

Mino Daisuke

上：波紋六角皿
左：花菱皿
下：翠釉

第 48 号

執筆者@短信

きむら　あきこ

CIDP という難病の日々

前号の短信で記しましたが、私は、CIDP という難病を患っています。ネットで検索すると、どのような疾患なのかはわかりますが、この難病があることで、私の生活にどのような影響があるかを、少しだけ紹介したいと思います。

この疾患の治療の第一選択となる、免疫グロブリン大量点滴療法という治療が私にはヒットするので、体が動かなくなると、入院して点滴治療を受けます。その後、2,3か月は嘘のように体が軽やかに動くようになりますが、少しずつ治療効果は減退します。

普段は、持久力がなく、常に、手足におもりをつけられているような状態で体を動かしているので、疲労感があります。一方、とても調子が良いと感じることがあり、その時は、外出したり、家の中でも家事など集中して行います。動けることが楽しいのです。けれども、活発に動いていると、急に体が動かなくなり、その後、どっと疲れが押し寄せ寝たきりになってしまいます。このような繰り返しなので、コロナ禍で人に会う機会が少なくなった、というだけでなく、自分自身の体調を信じることができなくなり、出歩くことや、人と約束することがほとんどなくなりました。

担当医やリハビリ担当者の話だと、希少難病であり、その症状も一人一人違うようです。私は、発症から 2 年近く経ちますが、前述のような不安定さはあるものの、自力での生活はできています。これから、どのような経過をたどるのかはわかりませんが、将来、介護を要する状態になった時には、楽しい介護ロボットに囲まれた生活も楽しいかもしれない、などと考えたりしています。

かぞくのはなし
Ｐ３１１～

原田　希

大好きな祖母が急に天国へ行ってしまい、今回は休載させていただきます。何かあった時はすぐに駆けつけてぜったいひとりにしない！大丈夫やから！とずっと約束していたのに、このご時世では危篤になってからしか面会はできず、あっけないお別れでした。それだけに、祖母の人生に想いを巡らせる時間が日に日に増えています。愚痴も言わず数々の苦労を乗り越え、私たちを育て、孤独とも仲良く、海外旅行にも一人で行き、自分の生き方は決して曲げず、「百歳まで生きる！」と宣言したとおりに有言実行したスーパーおばあちゃん。エナジーいっぱいのバトンを、ハイっ！次はあんたやで！と手渡された気持ちが湧き上ってきています。コロナ渦で制約されること多々ですが、大事なひとを想う気持ちは制限されたりしない。間に合わないということもない。ただ悲しむよりも、無限大に想うことをパワーにし、歩みを進めます。

おばあちゃんありがとう。

かぞくのはなし
P313～

両角　晴香

書いて伝える、の次に話して伝えるに挑戦しています。2020 年夏に「腎臓生活チャンネル」という YouTube を開設し、旦那様に腎臓を提供したドナーさんと腎移植にまつわるお話をしています。ニッチな番組ではありますが、もうじきチャンネル登録者数 3000 人を突破しそう。たくさんの視聴者さんに支えられて毎週土曜朝 7 時更新を守り続けています。ついに昨年 12 月、大物ゲストをお招きしました。電撃ネットワークのリーダー南部虎弾さん。2019 年に奥様からの腎移植をされた方です。南部さんは現役の過激パフォーマーです。70 歳の肉体からあふれだす情熱に勇気と元気をもらっています。

夫の腎臓と笑う私
P309～

野中　浩一

この原稿を書いている 2 月下旬、島根県松江市では、これまで私の記憶にはないような連日の冷え込み具合。家でこたつに入り温かいカレーライスを食べながら、「暖かいところに行きたいなー」と思ってみたり、とはいえ「朝に車が凍結してしまうこの不便さも、生きてる実感が高まるうえで大事かも」などと自分を励ましたりしています。

そんな冷え込む冬、最近は自分が感動からは遠ざかっているなと感じることがあり、もう胸や目頭が熱くなることはないのではと思っていました。ところが、中京テレビの「オモウマい店」の番組で、おでんをひたすらにサービスしまくるおばあちゃんや、定食を出しながら若者に厳しくも温かい言葉をかけるおばあちゃんを見ているうちに、自然とこみ上げてくるものが。心と身体が一致している仕事ぶりは感動を呼ぶと改めて実感した 2 月です。

「島根の中山間地から Work as Life」
P304～

畑中美穂

遠方に暮らす娘の産後の手伝いに行った。パートナーと2人で本当に上手く過ごしている。沐浴の連携プレーなど見事なもの。出る幕なし。うれしいことである。

だから私は、せっせとおさんどんに励む。その間、娘はぐっすりと眠る。その気配を感じながら、「親にできることって、子どもが幼い頃も今も、結局、同じなんやなぁ」と思う。赤ん坊もよく眠り、私は再び、娘を眠らせるというミッションを得て、冬の静かなキッチンに立っていた。

一語一絵
P293～

渡辺修宏

（小幡知史・渡辺修宏・二階堂哲）

2020 年度年次会の企画ワークショップからはじまった「対人援助実践をリブートするこの 1 冊」。おかげさまで 2021 年度年次会にて、続編を 2 本実施できることができました。関係者、参加者の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

対人援助実践をリブートする
この一冊
P298～

米津達也

山間部に暮らすが、昨年秋は例年以上にカメムシが多かった。晴天で洗濯物を屋外に干せば、20 匹ぐらいはまとわりついている。カメムシとびわこ虫が多いシーズンは、寒さが厳しいという。厳しい気候に備えて大量繁殖、種の保存を図っているのだろう。

先日、健康診断を受けた。こちらも例年にない中年太り。厳しい寒さのなか、身を守る本能は虫も人も変わらない。

川下の風景
P291～

高井裕二

連載させていただいて 1 年経過したのは感慨深いです。これからもよろしくお願いいたします。またこの 1 年、コロナ禍を言い訳にブクブクと太ってしまいました。写真撮影が多い 3～4 月、食事に気を遣うとともに、少しでも細く見える角度を探しています。

福祉教育への挑戦
P296～

本間 毅

退院支援研究会

今回で本マガジンにおける私の連載は 1 年を迎えます。これまでの記述は、退院支援研究会が発足するまでの経緯や、支援や援助について私と仲間たちが考えてきたこと、私自身の宿題であった「阿闍世コンプレックス」の論文化など、どちらかというと私たちの「過去」に焦点を当ててきました。これからは、少し趣を変えて現在進行形の問題について論じようと思います。

昨年春にナラティブ関連の出版物が多い遠見書房から刊行した拙著『患者と医療者の退院支援実践ノート』は、発売早々に某通販書店の書評で☆5 つ頂戴しました。しかしその後、「部数が伸びません。印刷した分は完売しましょう」と、この度の第 13 回大会で関係者に配布するよう、出版社から PDF 版販促パンフレットを送ってきましたが、商業的利益相反事項に相当する気がして配布は見合わせました。購入して下さった方の感想は、「同僚の看護師さんや相談員にプレゼントしたが、文章が長くて面倒な言葉が多いので最後まで読んでくれない。プレゼントの二次的効果を感じなかった」が多かったです。三島由起夫は「日本語は本来、なよなよしたもので学術論文より文芸に向いている」と、また和辻哲朗は「ラテン語の桎梏から己を解き放った百余年前のドイツの哲学者を見習い、日常的な日本語をもって哲学を思索するものよ、現れ出でよ」と言いました。

ということで、今回は先日開催された「本学会第 13 回大会」で私が担当したワークショップ「高齢者のエッセンシャルワーク経口摂取について」の「ほぼ逐語録」を掲載します。（PP 原稿を希望される方は、目的を明記し taiinshien@ozzio.jp までご連絡下さい）

「幾度となく会い、
語りあうことの意味」
P276～

土元 哲平

12月に子どもを授かり、新しい生活が始まりました。子どもが産まれて初めて、出産が壮絶なものであること（ただし、誕生の瞬間は本当に感動です）や、子育てが絶え間ない修行であることを身をもって実感できました。なぜ育児休業が必要なのか、里帰り出産というものが存在するのか、おむつを大量買いするのか、ベビールームがあるのか…など、様々な謎が解けました（笑）1 月に迎えた自分の誕生日も、例年とは違ったものに感じました。人の誕生の大切さと有難さを感じています。

キャリアと文化の心理学
P267～

玉村 文

新型コロナウィルス感染症の流行で、濃厚接触者となった長男とともに 7 日間の自宅待機を経験しました。その記憶を記録にも残しておきたいと思って書き始めたものの、なんだか筆が進みません。なぜだろうと考えてみたところ、自宅待機では特別な何かをしたわけではなく、子どもとたんたんと生活をする、代わり映えのない日常を送った 7 日間だったからです。

一方で、自己選択での自宅待機ではないからこそ、日常生活とはまた違う感情や気付きがありました。前号までのように書きたいことを書いて執筆を楽しむのではなく、記録を残すことを目的に書きました。そうすることで、日々に埋もれてしまいそうな非日常であり日常を、特別な体験として意味づけようと試みました。

応援 母ちゃん！
P259～

川畑 隆

神戸で仲間と一緒に「新版K式発達検査を用いた発達相談」のワークショップを 25 年以上続けています。しばらくコロナで中断していましたが、1月に久しぶりに再開しました。保護者への助言のロールプレイではフェイスシールドを着けて、活発にやりとりができました。マスク越しで顔が見えないのがもひとつですが仕方ありません。でもやっぱりライブはいいです。

京都国際社会福祉センターでも「新版K式発達検査を用いた事例の検討会」が対面であって、2日間で4ケースを検討しました。1ケースにつき3時間くらいをあてるわけですからかなり中身が濃く、充実した時間を過ごせました。

みんなで「いま、ここで」じっくりと考えて話し合えるこうした機会を、早く日常的に取り戻したいものです。

昨年 12 月に、「川畑隆『要保護児童対策地域協議会における子ども家庭の理解

と支援－民生委員・児童委員、自治体職員のみなさんに伝えたいこと』2021 明石書店」が発行されました。

かけだ詩
P254～

工藤　芳幸

昨年、義父が脳梗塞を発症し、左片麻痺の後遺症が残りました。しばらく回復期リハビリテーション病院で入院生活を送っていました。今回、初めて家族の立場でMSWとやりとりをし、カンファレンスに出席する機会がありました。出席と言っても、地方の遠隔地にある病院のために大阪から越境することは認められず、リモート参加でした。

家族の視点で話を聞いていると、専門職のことばはとても難しく、展開も早いと思いました。病院では日常的に使っている言葉でも実は専門用語というものは多々あります。これはなかなか気づかないものです。

私自身、日頃の臨床で子どもや保護者に説明することばに意図せず専門用語が忍び込んでないか、改めて振り返りました。

退院にあたってケアマネージャーや福祉用具の業者さんなどともリモートですが話す機会があり、家庭訪問にもリモートで同行させてもらいました。無事に退院して自宅に帰ることができましたが、コロナの影響でそれまでの間に外泊をすることもできず、ベッドやトイレの設置、住宅改修のことなど本人の思いと現実的な問題との間で、十分に時間をかけて進めることは難しい状況でした。何とかギリギリ間に合って、介護保険サービスを使いながらの新しい生活が始まりましたが、いわゆる「老老介護」です。

我が家は核家族で大阪、実家はいずれも遠方。話し合いは何とかリモートでできて、その恩恵を受けたわけですが、やはり直接現場に出向ける状況になって欲しいと願うばかりです。

みちくさ言語療法
P252～

高名祐美

学童に通ってくる子どもたちから「ツバメ」という曲を教えてもらった。この曲は、NHKの「あお　きいろ」という番組のテーマソング。実際の番組を見たことがない私は、子供たちにリクエストされてパソコンで調べてみた。　『「あお」と「きいろ」はちがう色だけど、ふたつ重なると同じみどりになる。いろとりどりな命が重なり、ひびきあうことで、ともによろこび、ともにたすけあい、ともに生きていく。そんな「共生マインド」をはぐくんでいく番組』と紹介されていた。その番組のテーマソングが「ツバメ」。「YOASOBI とつくる未来のうた」企画のグランプリ作品、「小さなツバメの大きな夢」をもとに作られた楽曲だった。

ダンスの振り付けがついていて、学童の子どもたちは、『6 年生を送る会』で踊ることになっている。それで学童でも練習したいとリクエストされたのだった。一度聴いて、歌詞がとても素敵なことに感動した。そして私も大好きな曲になった。毎日子どもたちと聴いている。ぜひ、みなさんも「ツバメ」を聴いてみてください。歌詞がぐっと心に響きます。

詞・曲・編 Ayase （歌詞の一部抜粋）

悲しい気持ちに飲み込まれて
心が黒く染まりかけても
許すことで認めることで
僕らは繋がり合える

僕らに今できること
それだけで全てが変わらなくたって
誰かの一日にほら
少しだけ鮮やかな彩りを
輝く宝石だとか
金箔ではないけれど
こんな風に世界中が
ささやかな愛で溢れたなら
何かがほら変わるはずさ
同じ空の下いつかきっと
それが小さな僕の大きな夢

ふりーすくーるでのSW実践を考える
P249～

岡田隆介

ソロキャンプやヒトリカラオケをまねた「蜜にならず Zoom も使わぬ仮想事例検討会」。これは、つまるところ過疎事例検討会だ。

エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P43～

一宮　茂子

【脳トレはほぼ無意味】

ある新聞記事に書かれていました。70代ともなると、世代全体の 10%が認知症になり、残りの 9 割は頭がクリアだそうです。近年、「脳トレ（脳力トレーニング）」と呼ばれるトレーニングメソッドが、脳に刺激を与え、ボケ防止に役立つということでブームになっています。「頭を使っている人はボケにくい」というのは一面の真理だそうですが、もっとも効果が高いトレーニングは、人との会話だそうです。他人とのおしゃべりは、自分の話したいことに対して相手から反応が返ってきます。強制的に頭を働かせなくてはいけない局面が増えるため効果があるとのことです。それなら楽しみながらできますので早速友人たちに情報提供します。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P234～

松岡　園子

私は小学生のころ日記を書いており、そこに「市場の八百屋さんで働きたい」と自分の夢を綴っていました。イラスト付きで鮮明に描いていた夢です。テレビで活気のある市場の様子を見て、そこに行ってみたいと強く願っていました。

今、不思議なご縁があって、中央市場の仕事に関わることがあります。昔の方がもっと活気あったよと皆さん話されますが、小学生時代の自分の夢を叶えられ、私は満足しているのです。

最近、そこで廃棄される食材があまりにも多すぎることに驚き、フードロスに関心を持ち始めました。学校の休校、飲食店の営業自粛、イベント中止などで準備していた食材が余ってしまいますし、生ものだから消費者のもとへ届けるのも期限付きです。

フードロスを削減する通販サイトも増え

てきており、私も利用するようにしています。ご関心のある方は「WakeAi（ワケアイ）」「うまいもんドットコム」「ロスゼロ」「KURADASHI」などのサイトを覗いてみてください。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども
P231～

杉江　太朗

児童福祉の行政機関で働く杉江と言います。この短信を書いている、今現在、新型コロナウイルスの影響で在宅を余儀なくされています。私や身の回りの人が感染したというわけではなく、感染した人の濃厚接触に当たるかもしれない人の接触者という立場で、近いような遠いような話なのではありますが、一応、感染の可能性がゼロではないということで、数日間、在宅になりました。最初は、在宅ワークという形で、記録を書いたり、電話したりと仕事モードでしたが、当然集中が続くわけもなく、午後からは休みに切り替えて、せっかくなので好きなことをしています。カフェドゥスギエは、店主がいなくても営業中です。稼働しているかはわかりませんが、在庫過多は解消され、強制的に届けられるという不安からも脱却が出来たので、新装開店はひとまず成功と言えるでしょう。そして、今まで貯めていたポイントを還元したところ、若干ではありますが赤字の解消に繋がっています。サブスクというサービスが流行っているようですが、私自身は向いていないと思っています。安価な値段であっても固定化されてしまうことで、「見なければいけない」という強迫に駆られてしまいます。必要なときに、必要な分だけ、過剰に手に入れないという方法が私には向いていることに気付かされました。

「余地」−相談業務を楽しむ方法−
P227～

浅田　英輔

もう令和3年度が終わってしまう。児相を離れて丸々7年が経つ。直接的な臨床場面からは遠のいてしまっているが、障害福祉や高齢者福祉、地域づくりに関連する他の仕事をすることで視野が広がった感覚はある。今のほうがよい面接ができる気がしているが、ウデは落ちているだろうなあ。「相手の言動への敏感さ」はよくなっていると思うが「そこで一番適切な言葉」の感覚が鈍っている気がする。知らんけど。

臨床のきれはし
P131～

三浦　恵子

コロナ第六派の最中に原稿を書いています。この感染症におびえる心理に、私は、この新しい感染症そのものに対する恐れよりも、それに罹患することで、何らかの差別を受けるのではないか、自分の関係する集団に「迷惑をかけたくない」という気持ちがあることを強く感じています。こうした日本人の心性があるがゆえに、欧米の一部で行われた都市封鎖などの強い措置が馴染まないという説もあります。

「（感染者がいない地域や学校・職場で）一人目の感染者になりたくない」「自分が原因で他の人を感染させたら申し訳ない」という気持ちの底にも、周囲への慮りのほかに、そうなった時に自分が排除されるのではないかという恐れが潜んでいると私は思います。そうした恐れから、感染時の申告等が遅れ、より混乱を招いた事態があることも友人から聞きました。

あれだけの感染者数ですし、いくら家庭・職場で感染対策を徹底しても、ぎちぎちの満員電車等に揺られていれば、これはどこで感染してもおかしくないとも感じています
。もし自分が感染した時に、それを正直に申告し安心して療養に入ることができるかどうかは、自分自身が所属する集団や社会への信頼感と関係しているのではないかとも考えます。

こうしたことを書いていると、あるエピソードを思い出しました。私は刑事政策の仕事に携わって長いですが、奉職した当時は女性が現在ほど多くなかったこともあって、「なぜ、この仕事を」と聞かれることも多くありました。着任したポストが「女性初」と呼ばれたことも多くありました。

ただ、40 代で遅い結婚をし、親族方に挨拶に回った際（当方は私も配偶者も両親の介護をしていたため、式はスーツ姿でそれぞれの親の車椅子を押すというスタイルで、その後小さな食事会をしただけだったため） この時、比較的年齢の近い方（同性）から 「犯罪をした人を相手にする仕事なんて、怖くないの」「私なんかとてもできないわ～」「だって家庭との両立だって大変そう」と面と向かって言われたことがあります。決して意地悪や悪意は感じないのですが、自分の経験したこと以外は理解できないということをそのまま口に出されることで、相手がどう思うかという点に慮りができないのかしらと感じました。私の視界の隅にはその方の御主人に当たる方が目顔で詫びておられるのを感じながら、私は笑顔で 「せっかく専門知識を学んだのですから、それを活かして社会に還元したいという思いは学生時代からずっとありました。なにより、世の中には誰かがやらなければならない仕事というものはたくさんありますから」「●●さんの生活も、そうした人々の仕事で支えられているわけですよね。おうちの中でいらっしゃるとなかなか見えづらいですんですね。こうした言葉を平成20年代も半ばになって耳にするとは思いませんでした。なんというか、かえって新鮮ですねえ。
私は学生時代も今も、こうしたことをおっしゃる女性は周りにいませんでした。でも、似たもの同士より却って違う価値観などを学び合えるかもしれないですね。どうかご教示方お願いしますね。」
と対応しました。私としては極めて穏当な答えをしたつもりですが,以後彼女からはなぜか非常に怖がられています。

自分の生活は見えない多くの方の働きによって支えられているということが想像できない彼女は、今このコロナ禍をどう過ごしているのかしらとふと思いました。

更生保護護官署職員
（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という
観点から考える
P215～

黒田　長宏

私の中学も高校も修学旅行が偶然にもどちらも京都だった。高校の頃のはたしか、安全地帯が『恋の予感』を歌っていた頃だと思う。経緯は省くが、京都に本部を置く短歌結社の、現代短歌の歴史に必ず含まれる河野裕子氏のスカウトで、今は辞めてしまったが、そこに参加していたことがある。そして現在。CS で全30作を録画した、京都そのものではないが、片平なぎさと船越英一郎のコンビの、『小京都ミステリー』の5作までを観た。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚
P199～

尾上明代

しばらく前、ある研究の一環として、中学生に芸術を通して歴史を学んでもらうためのワークショップを実施した。テーマは、紆余曲折を経て日系移民、それも 1800 年代後半から盛んになったハワイへの移民ということになった。

ハワイ移民と聞いて映画「ピクチャーブライド」を思い浮かべる方も多いと思うが、あのような先人の命がけの苦労や力強さなどを「体験」してもらうことにした。時間や回数、対象者の状況などさまざまなことが限られた条件の中で、いかに目的を果たすかというのは、どのようなドラマワークショップやドラマセラピーセッションの計画においても長年実践してきたことだが、ここまで難しかったのは初めてである。

1回だけ（3時間）の授業で、演じることに慣れてない、しかもそもそも「ドラマ」で演じることなど友だちを意識して、恥ずかしがるであろう年代の子どもたちに、そのような自意識をなくして「役」をリアルに「体験」してもらうことを実現させるのは、とてもチャレンジングだった。

移民の方の苦労を体感してもらうことにフォーカスを当てれば、当然リアル感が強すぎて危険になる。子どもたちの心身の安全を確保することは当たり前のことであるが、楽しいだけのワークショップであれば意味がない。まったく矛盾している目的を果たすべく熟考した。その工夫には、これまでで一番苦労したと言っても過言ではない。

私が信頼できる関係性をもつ他の研究者たちが、演技その他で協力して下さったことにも多いに助けられ、結果として体験的理解と安全を両立させることができたと思う。ドラマだけでなく、歌やフラダンスなども使って子どもたちにメッセージを伝えることができた。これからもう少しゆっくり考察を重ねて何等かのかたちで発表したい。

ドラマセラピーの実践・手法・研究
P102～

松村奈奈子

いやー、今年は雪がスゴイですね。
私、「雪だるま」が好きなんです。もちろん京都市内の中心部は、ふっても薄っすらと積もるだけで、すぐ融けてしまいます。しかし、仕事でいった近畿北部の公園や駐車場の片隅で、今年はリッパな「雪だるま」をたくさん見かけました。目が人参だったりジャガイモだったり、ひとつひとつ個性があるので「どんな人が作ったんだろ」と想像しながら、立ち止まって見てしまいます。結構、大人が凝って作っている姿も見かけます。わかるなーその気持ち、私も時間があれば作りたいです。ただ今年は、そんな雪を見ながら地元の人が口をそろえて嘆きます「もう雪は勘弁してほしいわ！」と。

精神科医の思うこと
P168～

柳　たかを

あるネット対談と 6G 運用ニュースからの妄想話

docomo が 6G(5G の次)の実証実験に成功したとのニュース、2030 年頃の運用を目指すらしい。プロのピアニストの技術情報を人の脳に入れたチップが受信し、この 6G を使えば特別な練習や訓練をしなくても、自分の脳神経を通じて指がプロ演奏家のように勝手になめらかに動いて弾くことが可能になるだろうという。

素晴らしいと喜ぶよりそんな未来はどうにもゾッとするのだが、、、YouTube 動画で知った A 信介氏と M 愛氏の対談ライブ。

話題は古代に始まった歌会の話、古代はまず今日のようなエンジン音がなかった。音といえば水の流れる音、虫の音、鳥のはばたく音、風に木の葉がこすれる音、そんな静まりの中で歌会の第一声が発せられる。歌には魂の純粋さが問われ、そこが現代に一番忘れられている部分。

歌で評価される者が一番尊重された。なぜなら歌がいちばん魂を表現できるものだからだ。静寂の集まりの中、第一声を発する役は魂が純粋な者が選ばれて務めた。

現代社会は騒音があふれていて、伝わるためにはさらに大きく怒鳴らないといけない。「魂が伝わるためには真の静寂が必要」だというのがすごく腑に落ちた。

感動とは何かと考えてしまう。一流プロの技は魂をよく伝えるために駆使されてこそ輝く、技は魂より目立つべきではない。

人間は一人一人が魂の存在であり、誰もが感動を与えられるかけがえのない存在。私の魂はあなたの魂より優れてるなんてこともない。

なるほど、、、人間とロボットの違いは魂を持っているかいないかで、技や知識では人間は AI の足下にも及ばなくなるだろう。魂の価値はますます高まっていくだろう。古代の歌会に参加した人びとは魂こそ人の価値だと知っていただろうという。

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P173～

藤　信子

我が家で、この 2 カ月話題になっている「月刊住職」という雑誌がある。家族の一人が新聞の広告欄で見て、「面白そうな記事を載せている」と言い出したので、買ってみた。私は仏教徒ではないので、却ってためらいなく買おうと思った。初めて聞く名前の雑誌で、本屋で聞いても、うちでは扱

っていないと言われたので、取り寄せた。記事の一つが、香典辞退が増えていること、これは家族葬が多くなったこととも関連している、ということらしい。以前の地域社会がなくなり、自己責任ということになり、以前の様に共同体で弔うということが無くなってきたからだという論もある。ここの記事を読むと、現代の社会が具体的に見えてくる。ビビッドで面白いので、1 月、2 月と買っている。

対人援助学との出会い（3）
P40～

団遊

2月24日木曜日の夜に、編集委員の大谷さんと千葉さんに誘ってもらい、**対マガトークライブ**を開いた。一人でしゃべるよりも、色々と聞いてもらう方が心地良いのでインタビュー形式でお願いした。打合せは何もせず、その場で聞かれたことを考えて話す。その方が初出の話題になりやすく、ライブ感が出ると思ったのだ。最近、頼まれ講演も、テーマと話してほしいことが明確にあって依頼されてきた場合を除き、同様の形式を打診することにしている。

いつも通り、やり終えてみると、ちゃんと喋れたような・片手落ちのような、思ってもいないことが伝わってしまったような・それはそれで面白かったような、気持ち良さとは程遠い、なんか「もうちょっとできた気がする」感に苛まれる。自分としては、あらかじめレジュメを用意して整理したことを話した方が、やり切った感が高まることは知っているのだが、それだと自分の中に新しい発見が芽生えにくいことも知っている。企画の中に、不確実性をどの程度取り入れるかは、匙加減だ。大味過ぎると参加者に失礼だし、レシピ通りだと、こちらがつまらない。

予定調和で進む話ではないので、無理を言って録音もしてもらい、それを自分で聞き直したりもする。加えて今回は、その内容をもとに、語り足りなかったことや上手く言えていないことを文章にして採録することにした。それを第 49 号の原稿にしようと思う。というわけで、48 号は 1 号休載します。トークライブに参加くださった皆さま、ありがとうございました。

休載

村本邦子

最終年のプロジェクトは、いくらかの制限はあったものの、院生たちを現地に連れていくことができた。最終のシンポジウムも何とか無事終わった。現在は、プロジェクトまとめの出版準備をしているところである。新年度からは、規模を縮小し、福島を中心にささやかながら活動を継続するつもりである。

コロナの収束はなかなか見えず、戦争まで始まってしまった。おととし、チェルノブイリを訪ねたおり、キエフとオデッサに行った。あの頃もクリミア危機やユーロマイダーン革命の傷跡が生々しかったが、こんなことになってしまうなんて。出会った人々の顔を思い浮かべてはどうしているのか心配している。諍いや戦争は人間の性なのだろうか。一刻も早く武器を捨て、話し合いのテーブルに着いてほしい。こんなことが日常になってしまうのは嫌だ。

周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクト―
P150～

國友万裕

この原稿が出る頃には58歳になっています。2月は誕生月なので、少しはお金を派手に使って楽しくやろうと思っていたのですが、オミクロンがまだ終わっていないため、早々友達と飲食というわけにもいきません。

コロナに悩まされ続けて2年間。この2年間はそれまで生きてきた人生とは色合いが違っていました。「戦時下」のような雰囲気。実際に戦争が起きたりしたら、こういう状況になるのかとも思ったものでした。終わるようで、終わらない、長い戦い。第一次大戦や第二次大戦の頃と比べて、実際の戦争で死ぬ人は減っているけれど、自殺する人の数は多いので、悲しい死に方をする人自体は減っていないと聞いています。今や心の戦争の時代ですよね。

あと2年で還暦ですが、今は還暦の後が長い。人生百年時代です。人によっては還暦から後が人生のベストの時期だという人もいます。確かに、クリント・イーストウッド、山田洋次など90歳で一線で活躍している人もいます。

社会的に成功していなくても、充実した老年期を送っている人は大勢いるでしょう。これから僕にもそういう人生が待っていればいいんだけど、これも運命なんですよね。そうなることを願いつつ、1日一生という気持ちで生きていきたいと思います。

男は痛い！
P120～

古川秀明

コロナの影響で足掛け 2 年間講演会＆ライブが中断しています。その分、日々のカウンセリングや自己研鑽に励んでいます。まだまだ学ぶべきことがたくさんあることに気付きました。

それでもやっぱり講演＆ライブを再開したいという思いは強くありますが・・・。皆さまもどうかご安全に。

講演会＆ライブな日々
P138～

西川友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

この原稿を出したら、12年まるまる、48回、この連載を続けさせていただいたことになるのです。我ながら信じられないなぁ！と思います。「福祉系専門職養成」なんて、いってしまえば決まり決まったことを毎年繰り返すものなのだから、そんなに書くネタがないように思います。しかし、福祉は「社会」福祉ですから、社会の移り変わりにあわせて、養成のあり方も変化するのです。だから、テーマが同じだとしても、時代が変われば書く視点が変わり、また違うお話が書けるのです。…ということも、12年続けてきたからこそ感じることだなぁと思います。この連載をしていなければ、社会福祉士や保育士といった「国家資格」なんてものは、それこそ厳密で、固定化され

たものだというイメージしかなかったと思います。おかげさまで、専門職養成というのは時代に合わせてガンガン変化するものだと実感しています。

確かに毎回ネタが出てくるまでが大変ではあるのですが、ウンウン考えているときよりも、何気ない時にふっとテーマが降ってきます。しかしずっとウンウン考えていないとその「何気ない時」はやってこないという不思議。3か月に一度、ウンウン唸らせていただいて、私は幸せです。

福祉系対人援助職養成の
現場から
P92～

坂口伊都

この4月から、児童養護施設で働くことになりました。今、主で務めている NPO 法人の方から運営上、来年度は働く日数を減らして欲しいと告げられ、さてどうしようかな。娘の学費と下宿代とまだまだお金が要る息です。健康保険が国保になるのは辛い。これからの人生どう過ごすべきか、夫の扶養家族に入ってみる？里親をする？等いろいろな考えが駆け巡りました。家族に相談をすると、何かしないといられない性分なのだから、今までの人脈で何かあるのではないか？と夫に言われました。

さて、この年齢で何ができるのか、そろそろ社会に少しでも還元していけることは何かと考えたら、今なら児童養護施設で働けるのでは？と頭をよぎりました。夫が特別養護老人ホームの職員なので、施設職員は選択肢になかったのですが、娘が成人し、今までの経験が使え、体力的にもギリギリ、今を逃すともうできないなと思い、施設職員の知人に尋ねてみると、そこからは、とんとん拍子で決まりました。体力面での不安は大きいですが、養育里親をしていた時と施設職員をしている時、何を私自身が感じるのかなと思っています。この3月 21 日で 53 歳です。皆さん、私にエールください‼

家族と家族幻想
P145～

河岸由里子

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

【体調】私は「元気」が衣を着て歩いているような人間である。いくつか持病はあるが、病気や怪我で仕事を休んだことは一度もない。そんな私だが、ここのところ、ずっと湿疹と右肩の痛みに悩まされている。右肩は年末の大掃除の時に、高いところの掃除をしていて、不安定な踏み台から落ち、右ひじと右肩を打ったことが原因だ。

痛かったが骨は折れていなさそうだったので、とにかく固まらないように動かしていた。動くには動くがやはり少し制限がある。1か月余りたってからやっと整形外科を受診できた。診断結果は軽い五十肩みたいなものとのこと。リハビリに通うか自分で頑張って動かすしかないと言われ、ロキソニンと胃薬をたくさんもらって帰った。痛みを我慢するのは良いのだが、睡眠の邪魔になるのが困る。加えて、昨年 9 月ごろから出始めた湿疹が全身に広がり、かゆくてかゆくて、これまた睡眠を妨げる。結節性痒疹とかいうものらしく、原因不明。紫外線治療もあるがと言われたが、そんなに何度も病院に通える時間はないので、最強とか書いてある塗り薬（ステロイドの混合剤）をべたべた塗りたくり、あとは飲み薬で頑張る。しんどいのは睡眠不足である。私の元気の素は「快眠」なので、睡眠が良くないと体調に影響が出ているように感じる。相談業務で自分の体調はとても大事だ。クライアントの話を聴く際は、何とか集中できているが、記録を書いたり、講義や研修の資料作ったりなどに集中できない。少しでも気を抜くと、こっくりこっくりしてしまう。早く治ってほしい。

ああ、相談業務
P97～
先人の知恵から
P190～

岡崎正明

誰かと誰か。誰かと何かをつなぐのが好きである。あとで「アレとアレをつなげたのって、実は僕なんだよね～」と、1 人噛みしめてほくそ笑む…。そんな気持ち悪い趣味がある。友人にやたら飲食店や気に入った映画を勧めたがる習性も、たぶんそれとつながっているような気がする。

仕事でもその特性はフル活用しているが、最近は本来業務外の研修や講演の企画に、頼まれて携わることもチョコチョコでてきた。いよいよ特性が加速してきたのかもしれない。

おかげで勝手に日々が忙しくなるという自爆現象も体験しているが、貴重なお話やご縁を頂けることも多く。最近では、尊敬しているゆるスポーツ協会代表理事の澤田智洋さんに知り合う機会を得て、地元の自立支援協議会で講演してもらうこともできた。また近々ヤングケアラー関係の方を、職場の研修や別部署へつなげるお手伝いも予定している。樹木希林も言ってたけど、人生面白がれたもん勝ちだと思うので、当面この趣味はやめられそうもない。

役場の対人援助論
P127～

大谷多加志

しばらくゆっくり本を読む機会を作れていなかったのですが、久しぶりに読み始めるとやっぱり面白く、どんどん食指が動いてしまいます。

最近読んだのは「ブルシット・ジョブの謎クソどうでもいい仕事はなぜ増えるのか」（酒井隆史著　講談社現代新書）と、「人新世の資本論」（斎藤幸平著　集英社新書）の 2 冊で、仕事やお金にまつわる本に手が伸びたのは、これから社会に出ていく学生さんを送り出す職場に身を置くことになったことと無関係ではないと思います。

資本主義や右肩上がりの経済という幻想が崩れるのをどうにか防ぐ（というかツケを先送りする）ために世の中にあふれる不条理や矛盾、不合理、葛藤。その影響を最も強く受けているのが若年層であり、それが自死自殺やひきこもり、ヤングケアラーなど、様々な形で表面化してきているのだと感じます。やりきれない腹立たしさ

を感じたものの、現状自分もこの社会システムの一部を形成しているわけですから、これは自身の問題として問い返されてきます。

このような流れで、昨日の団遊さんのトークライブに参加できたのは本当にありがたいめぐり合わせでした。「成長」が自分の中で再定義された気がします。ということは「育てる」ということの定義も、また変わります。学ぶことで問いは増えていきますが、やっぱり面白い。そう思わせてくれる環境があることが、本当に感謝です。

発達検査と対人援助学
P134～

馬渡徳子

三月は、お別れの季節でもある。三年間研究室を共にした留学生達が、いよいよ卒業し、母国へ帰国したり、日本での就職をされる。彼らは、丁度、コロナ禍の前年に母国の大学を卒業し、日本に研究生として一年間学び、コロナ禍を迎えた年に、大学院生となった。

研究デザインを実現可能な方法に変更する必然性に、どうしても納得がいかなくて、指導教官や研究仲間との議論後に、どうにも気持ちの整理がつかなくて、研究室に入室後に涙があふれ、ただ黙ってそっと抱きしめ合う場面も、何度かあった。お互いに、苦悩しながらも前に進もうと踏ん張る姿に、彼らの親世代である自分は、逆に何度も励まされた。

二月中旬に、彼らの最終報告会があり、その直前が、バレンタインデーだった。

患者会の役員さんで、コロナ禍の二年間に、四回も、私につながる留学生さんにと、消毒シート、マスクやお米、お菓子やりんごを寄付下さった方から、「こころばかり」「日本にまた来てね」「がんばり賞」「努力賞」等と書かれたチョコレートを寄付頂いた。

最終報告会は、残念ながら全ては対面とはならなかったが、研究室でご苦労さまと労い合う機会を持てたので、その際に「宝達志水町のサンタさんから、卒業祝が届いたよ」と手渡した。すると、翌週に、「返礼の中国のお菓子」を賜り、そこには連名で「お米とリンゴのサンタさんへ。私たちも、あなたのようなお年寄りになりたい。お元気で。」とカードが添えてあった。

私も、宝達志水町のサンタさんのように、「小粋なギフト」ができる様に、歳を重ねたいと思う。

転機を迎えられる皆さん、ごきげんよう!

馬渡の眼
P171～

団士郎

25年非常勤で週一勤務していた京都市職員相談室が、財政危機で閉室になる。アウトソーシングされるそうだ。

最後の一ヶ月余は久々に会いに来てくれた人との予後面談やカルテのシュレッダー作業など、通常とはまったく違った日々になった。

組織に属すると定年退職や会社倒産やリストラなど、自分の意思とは無関係に運命が変わるのはあることだ。

対人援助学マガジン創刊以来、ずっと編集長に居座って、四十八冊目を刊行し、十二年目が満了する。切りのいい数字な気もするが、辞めなければならない理由がないので、引き続きやる予定だ。

「自分のすることを他人に決められているのは奴隷だ」という言い方があって、四十代に知ったとき、目から鱗だった。そして奴隷になって愚痴を言う人生は選択したくないと思った。

だから閉室に伴って、心理臨床業務の終了！なんて、こんな事がまだ私の人生に残っていたかと気付かされた。いつまでもなんとなく、ダラダラ続けていくような気が無意識にしていたらしい。

基本、私のすることも、しないことも、それを決める権利は私に属している。そう思ってきたが、そうはいかないこともあるのだな。

配偶者を亡くして一年日記（3）
P56～

鶴谷　圭一

2022 年に入ってからコロナ・オミクロン株　の感染が広がり、それまでは「子どもには感染しにくい」とどこか安心していたところがあった幼児教育界も、バタバタと感染、休園、学級閉鎖が相次いでいる。感染者が出ても保育は止めないこと！とされていた保育園でも休園する。

市（行政）からは詳しい情報が出てこないので、沼津市の協会では Chatwork を通じて園長同士が発生状況を報告し合っているが、頻繁に報告が来るのでだんだん慣れっこになってきている感もあり、ある意味「日常」になってきた。

そのため以前ほど“犯人”捜しが行われたりせずに、誹謗中傷の重さがなくなって精神的には良い面もあると感じるこの頃。感染予防は相変わらず重荷であることは変わりませんが･･･。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P84～

水野スウ

前々号に続いて、2 度目の連載お休み届けを出します。

2月、いつもの銭湯でゆっくり温まり、湯船から出て数歩あるいたところでふわぁっとなって倒れて、気づいたら救急隊員さんが裸の私を毛布で包んで担架に乗せるとこでした。初の救急車で緊急搬送。検査して脳からの出血なし、心臓にも異常なし。でも倒れたはずみに顔を打って（頭でなくてよかった！）、目の下のくぼみの骨が 2 本と下顎のちょうつがいの骨が折れていたことがわかって、着の身着のまま入院。骨は折れたものの幸いずれていないので、手術はせず自然にくっつくのを待つことに。

そう聞いて、入院中につらつら考えた、私のリカバリーに向けての養生プラン。その① 食べる時はおちょぼ口、話す時はもごもごぼそぼそっと宣言。その②「紅茶の時間」は約ひと月おやすみします宣言。その③ ちから強い味方チーム、以前から定期的に施術してもらっている、親しい 2 人の友人鍼灸師さんとこにすぐにも通うこと。

大口開けたり、歌ったり、硬いもの噛んだりしないで、とドクターに言われたけど、

退院後も痛くて口が開かず、言われなくてもそうなりました。おかゆからはじめて、二週間あまりたって普通のごはんが小口で食べられるようになった時のうれしさよ。

毎週の「紅茶」も、コロナのこともあって来る人は少ないので開けようと思えば開けられるけど、会えたらうれしくて、わーきゃーはしゃいでしまいそうだし、ガハハと大口開けて笑うのを我慢することの方が苦しいので、思いきってのお休み宣言。紅茶39年目にしてはじめてのA long vacationをとるぞ！そう決めたとたん、頭のなかで大瀧詠一の「君は天然色」が鳴り響きました。

友人鍼灸師さんとこにも早速通っています。鍼灸は骨融合を促進し、折れた骨の周りのダメージをうけた細胞も元気にするちからがあるそう。最初の施術で声が出るようになり、2回目の施術で硬くこわばっていたほっぺに柔らかみがもどって、なつかしい私の笑顔ともようやく再会。鍼灸は本人の持っている治る力を引き出す手伝いをするもの、と2人とも言うので、味方チーム3人の中には私も含まれています。

こうして日ごとに回復していきながらも、パソコンと長時間向き合うと頭が重くなり疲れやすいので、今回は無理せず、マガジン原稿をお休みすることにした次第です。

退院してしばらくは刻々と変化していく顔の形やカッパ色した自分のほっぺが気になっていたけど、今はもうだいぶ、いつもの私の顔。それにしても、銭湯で倒れたことをfacebookに書いたら、似たような経験あるある、の人が思いのほか多いことにびっくりです。今回の私のけがの原因はひとえに、よくないお風呂の入り方にあり。入る前、少なくとも200mlは水分をとること、湯船からいきなり立ち上がらずに、半身をお湯から出すなり、ふちに腰掛けるなりして体を冷やしてから立ってくださいね、と入院先のドクターに教わりました。どちらも私、してなかったです！

みなさんもお風呂ではどうぞお気をつけてあったまってくださいね。まだまだ寒い日は続きそうなので。

きもちは言葉をさがしている
休載

脇野　千恵

コロナ禍にも慣れてしまったなと思うこのごろ。それに加えて遠い国では、新たな危機に 見舞われている。個人にはすぐに影響はしないかもしれないが、じわじわと私たちの生活に も変化が出てくるだろう。しかし、日常の生活は淡々とこなすしかない。

4月から、また今 の職場で引き続き仕事をすることになった。一方で、セカンドライフとしての仕事も忙しい。 長年、時間をかけ積み重ねてきた研究と実践。求められれば、それに応える。もっと社会に 役立つ場面を増やしていきたいと思う。

こころ日記「ぼちぼち」partⅡ
P247～

中村正

戦争！アメリカのアフガニスタン侵攻（2001 年）の際、サンフランシスコで非行・犯罪の調査に出かけたことがある。脱暴力を試みる青少年の立ち直り施設でヒアリングをした。そこの心理士が悩ましく話をしてくれた。「こうした地道な非行や暴力に関わる臨床現場では脱暴力を説いています。しかし社会全体では国を挙げて戦争を進めています。こうした時に脱暴力の現場はささくれ立つのです。当事者たちが揺れるのです。」とため息とともに話をしてくれた。空しさをかみしめているようでもあった。世界はつながりあっていて、同じような気持ちになる現場を私ももっている。I Stand with Ukraine ! Stop War !と記したウクライナ国旗入りの T シャツを着て Zoom 会議にでることしかできない。

臨床社会学の方法
P22～

千葉晃央

対人援助学会　第13回大会に参加しました。対人援助学という領域自体を拓いてきた意味をあらためて考える機会になりました。本間先生は対人援助学会ならではの領域を超えた広くて深い理解やその協働の実績を見せてくださって知ることの喜びを感じさせていただきました。高橋先生のインターセクショナリティをテーマにした発信も、予定調和に落とし込まずに見せてくださる率直さがとても大切な姿勢だと思いました。いろんな世代がこうして発信、交わる機会があるこの学会はやはり楽しい経験でした。ポスター発表も自分が出身のフィールドにおける取り組みも多く、興味深く触れることができました。対人援助学会の独自性ともいえる、研究と現場を結ぶという使命があるように思っています。そのおもしろさが伝わってくる内容ばかりでした。こうした学際的で、しかも継続的に存在する舞台があること、しかも13年も…！という意義を感じた大会2デイズ。数年前からネット利用を漸次進めてきた流れがあったことも、こうして継続できているポイントのように思います。学会は新体制になり、また楽しく支援にかかわり続けることを応援できればと思います。

＊

7月に中央法規さんから『ジェノグラムを活用した相談面接入門　家族の歴史と物語を対話で紡ぐ』（共著）を出版させていただきましたが、紀伊国屋電子書籍の医療系部門ランキング 1 位になったことを教えていただきました。多くの人に、自分の経験が役に立つのなら嬉しい限りです！

家族支援と対人援助　**ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
P17～

篠原ユキオ

昨年から大学のミャンマー人の教員が発起人になって動き出した『1コマ漫画でミャンマーの人たちを支援する会』に協力している。その動きが本格的に知られるようになって先日朝日新聞の夕刊一面に作品とともに紹介された。夕刊とはいえ一面ト

ップに自分の漫画が載るというのは久しぶりである。

私が声をかけた仲間の漫画家の中にはすぐに反応して作品を送ってくれる人もいたが、政治的な発言は避けたいという人たちも多い。これはそれによって作家としての色付けがされることを危惧するためである。そういう世間の風潮は確かにあって悩ましい部分なのだが、ことミャンマーに関しては政治的というより『人道的』と言いたい。

誰が見ても問題だと思うことに漫画家としても発言しなければいけないと思う。

そういう意味では諷刺漫画家を名乗るバンクシーがアジアの出来事に何も発言しないのはおかしいと思っているのである。

HITOKOMART
P263～

サトウタツヤ

今回の原稿では、シンボリックリソース、という概念に触れた。最近亡くなった水島新司のマンガ『男どアホウ甲子園』と『タイガーマスク』だけではなく手塚治虫原作のマンガ『鉄腕アトム』も扱いたかったのだが、扱えなかった。鉄腕アトムにはロボット行動 3 原則が埋め込まれている。SF 作家アイザック・アシモフが 1950 年に発表した名作『われはロボット』(I, Robot)の冒頭部分で、「人間に危害を加えてはならない」、「人間の命令に従わなければならない」、「自己を守らなければならない」というロボットの行動を支配する 3 原則を提示した。その当時『鉄腕アトム』に触発され科学者や技術者になった人々は少なくない。その人々には、アトムの振る舞いを通じてロボット 3 原則がしみこんでいると思われる。また、西洋では人に似たロボットを作るより機能を代替するロボットを作るのに対して、人の形に似たロボットをロボットの典型とする理由はアトムにあるかもしれない。総務省の平成 27 年版情報通信白書(特集テーマ 「ICT の過去・現在・未来」)にも『鉄腕アトム』がロボットのイメージを決定づけた作品であるとして紹介されている。
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc254340.html

対人援助学＆心理学の縦横無尽
P106～

鵜野祐介

本日(2月 28 日)、コロナ禍が始まって以来自粛していたフィールドワークに、岡山県井原市の高屋キリスト教会へ行ってきました。30 年ほど前に何度か取材した「中国地方の子守唄」の元歌伝承者の方の息子さんとバッタリお目にかかるという、「神さまのお導き」としか思えないような奇蹟的な出会いがあり、参会された皆さんと一緒に、平和への祈りの歌詞を含む讃美歌 390 番を歌いました。快晴の空にはヒバリのさえずりが響き渡り、ひときわ長く厳しかったこの冬がようやく終わったことを告げているようでした。春の訪れを寿ぐと同時に、この澄み渡る空はウクライナにも続いていること、そしてその空の下で今起こっている惨禍のことにも、想いを馳せないわけにはいきませんでした。主イエス・キリストの平和への祈りが、かの地にも満たされますように。

うたとかたりの対人援助学
P195～

中村　周平

寒暖差のせいなのか、二月に入ってから腰の調子が良くなく、原稿の執筆作業ができませんでした。体調を万全にし、次回しっかりとお届けできるようにしたいと思います。この度は大変失礼いたしました。

ノーサイド
休載

山下桂永子

この 2 年は宿泊を伴う遠出はできずじまいですが、以前はよく旅をしていました。海外のような長めの旅は年末や年度末に行くことが多かったのですが、今思えば、どうしてこんな忙しい時期に 1 週間も休みが取れたんだろう・・・。何事もやると決めてからやる方法を考えるタイプです。ただやると決めてからでも取り掛かるのは遅く、夏休みの宿題は 8 月 31 日にやるタイプですし、旅の荷物のパッキングも余裕で前日の晩に取り掛かるタイプです。

今回の内容は、実は 1 回目から書きたいことだったのに、気がつけば 1 年以上も取り掛かれなかったものです。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P181～

中島弘美

朝ドラを観ている。主人公が同世代の物語だ。テレビ画面に京都の嵐電や鴨川が映るのもうれしい。ある日は、子どもたちの野球のシーンだった。「私も子どものころ、堤防近くの公園でブランコやドッジボールに夢中になったなぁ」数日後、再び、堤防のシーンが出てきた。どこで撮影をしているのか気になって調べてみると、なんと、幼いころ住んでいた近くの藻川の堤防であることがわかった。うわぁ、あの堤防なの？と、確かめたくてアルバムを引っ張り出してきた。すると川沿いの写真には雑草や砂利が写っている。春は友達とつくしをさがして歩き、秋の運動会の頃は、徒競走の練習をした。懐かしい！

最近は、堤防というとイネ科植物等の花粉の宝庫なので、できるだけ近寄らないようにしている。今年も花粉の季節がやってきた。この春は堤防にこれまでとは異なる思いが加わった。

カウンセリングのお作法
P34～

竹中　尚文

今回も「ホームレスの個人史」が書けなかった。コロナ禍が続く中、インタビューができない。インタビューのストックもなくなり、連載はお休み。何も書かないのも不本意なので、今回はむかしばなし。

路上生活者の個人史
P112～

寺田　弘志

年明け、接骨院に来てみたら、当て逃げされ、看板が壊れていました。新しい看板と交換する新しい看板と交換するとなる

と、30万円くらいかかってしまいます。

事故の再発防止のため、もっと高い位置で建物に直付けすることにしました。配線を移動する必要がありましたが、電気工事士の試験にも受かったので自分でできます。

シートの発注、取り外し、全体のさび落とし、取り付け台のペンキ塗り、配線移動、アクリル板カット、シートの貼り付け、本体の再度取り付け、蛍光灯の交換、シートを貼ったアクリル板の挿入、ふたと支持棒の固定といった工程でした。

作業にだいたい三日間かかりましたが、シートの印刷を良心的な印刷屋さんに頼めたおかげで、費用はトータルで三万円以内に納まりました。プリントスタジオさん。超おすすめです。

カラーでも料金は変わらないので、当院ロゴを印刷してもらいました。

接骨院に心理学を入れてみた

P207～

山口洋典

年始に父を見送りました。1 月 3 日、2 年振りに一家そろって正月を迎えようと、弟の家族らと実家で食事をしよう、というその日でした。朝食を終え、デザートのリンゴを食べる直前に呼吸困難となり、救急搬送された病院で死亡が確認となりました。病院到着後、1 時間ほど心臓マッサージを続けていたようですが、窒息の原因については、心筋梗塞や脳梗塞が考えられるものの、病理解剖をしなければわからない、とのことでした。

2018 年の 8 月に脊柱管狭窄症の手術をして以来、入退院を繰り返す生活が続いてきたものの、あまりに突然の別れとなり、特に「私がもっと気を向けていれば」と自責の念に駆られていた母をなだめる日々がしばらく続きました。

かつて大阪・天王寺の浄土宗應典院に勤めていた私は、いわゆるグリーフサポートの大切さを語ってはきたものの、いざ当事者の立場となるとままならないことも多いことを痛感する日々です。年々弱くなる身体に向き合ってきた父が、75 歳を超えて最初の運転免許証の更新時に求められる認知機能検査を経た高齢者講習に合格するように、昨年の 8 月から歩行器を使って積極的に外出するようになっていたということは、今回の久々の帰省で知りました。

無事に四十九日の法要を終え、徐々に見送りから供養のときへと時が流れている中、改めて丁寧な生き方・働き方を重ねて暮らしていくことへの誓いと、多くのご縁のおかげで父が充実した人生を送ることができたことについての謝意を、ここに記させてください。

PBLの風と土

P201～

見野 大介

案の定、正月休みは元旦のみになり、ここまで無休での制作三昧。

五月中には奈良県川西町へ引っ越しするが、それまで休暇は無さそう。…ブラック企業ですなぁ(笑)

ハチドリの器

P4

浦田雅夫

コロナになりオンラインシステムを活用した学会や催しが当たり前になってきた。それはそれで便利なのですが、集い語り、終わってから飲みに行くということもなくなりました。

いまをいきる子どもや若者はさらにコロナによって奪われたものが大きいなと思います。まして、戦争などしてる場合ではないのです。

社会的養護の新展開

P81～

小池英梨子

隣の家のおじいちゃんが亡くなって、おじいちゃんの飼い犬のお世話を引き継いだ。毎日猫とばかり触れ合っているけれど、久々に犬と一緒に走ったり散歩したりするととっても楽しい。笑顔が眩しい。

そうだ、猫に聞いてみよう

P185～

天川　浩

お久しぶりです(まず、私のことを覚えている人がいるのか？)前号は、休稿させていただきました。私事ながら、二年ぶりに、福祉の現場で働かせて頂いています。やはり利用者の方と、一緒に働くのは日々新鮮で新しい発見があります。そして、自分は、障害者福祉のお仕事が好きなのだなあ、と改めて実感しました。世の中、なかなか好きなことを仕事にできる人はいないと聞きますので、自分はとても幸せな人間なのだと思います。連載の方なのですが、唐突に新しい章に入りました。長年、連載している方々を尊敬します。私には、あんなにスムーズな展開を作れないからです。デヴィッド・リンチの映画が好きなのですが、彼の映画もぶつ切りになっていたり、全く脈絡のない展開になったりするのですが、それを私もやらなくても良いのにな、と自分で自分に突っ込んでいる次第ですが、みなさん花粉症どうですか？いいお薬、あったら教えてください。よろしくお

願いいたします。

ブルーグレーの肖像
P223～

中條與子

ご無沙汰をしています。中條與子です。今号も「『盲ろう者』として自分らしく生きる」の執筆を、お休みをさせて下さい。

新型肺炎からお互いの命を守るためのマスクの存在は、わたしにとって移動時もコミュニケーション時も、影響を大きく受けていることには変わりはないけれど、マスクをしながらコミュニケーションをすること、移動をすることは、少し慣れてきた気がします。

特に人との音声によるコミュニケーションについては、(1)オンラインのツール(ZOOM 等)を使うこと、(2)電話機を使うこと、(3)スピーカーアンプのマイクを利用して喋っていただき、私がスピーカーの側で聞くということをすると、相手がマスクであっても、音声の言葉が聞こえやすい事が多いと感じているところです。リアルで顔を合わせた対面コミュニケーション、一対一の場合であっても、(1)マイクを使っても大丈夫な部屋で、スピーカーアンプとマイクを利用してコミュニケーションをすること、または(2)電話機が二つある部屋のなかで、受話器からの音声を通してコミュニケーションをお願いすると、マスクをされていても、音声会話ができる事が多いです。

最近、ある方とスピーカーアンプとマイクの環境で会話をした時、わたしに対して、「いま喋っているみたいに、メールではなくて、声を出して会話をしたらいいと思いますよ」という内容の言葉を、方言でいただきました。

わたしがメールでの連絡が多いためだと思うのですが、メールの内容を音声で伝えるだけで、相手の受け取り方が違うと思うと、仰っていただきました。

たしかに、音声で仰っていただいた言葉を、メールでも同じような受け取り方ができるかと思うと、音声会話とメールのテキストとの印象の違いを感じました。相手の一語を聞き取るごとに、わたし自身は笑ったり、うなずいたり、考えたりすると同時に、相手にもわたしの反応が何かしら伝わっていることを感じます。また、方言で伝えられると、こころの鎧がとけ始めた気がしました。わたし自身はメールのテキストでのコミュニケーションの難しさを感じていたので、音声会話の力を体感する機会となりました。

すぐに音声で伝える機会が訪れて、相手の顔を見て音声で伝えること、また、メールで連絡をした場合も、電話や相手のところへ行って、メールを送った旨だけでを伝えることを始めました。

心なしか、メールより言葉が少なくても伝わっている手応えを感じると同時に、わたし自身が、メールでは感じなかった、テキストでは感じない、顔の表情や音声の音量などから受け取ることがある感じました。聞き取る事ができない時は、途中から電話やメールに手段を変えました。

盲ろう者のわたしのまま、マスクをしたままでも成り立つ音声会話、良いコミュニケーション方法を編み出していきたいですし、言語化もしていきたいと思います。これからもどうぞ宜しくお願いいたします。

荒木晃子

2018 年秋にスタートした研究プログラムが、来月 3 月末をもって終了する。

今月 2 月 19 日(土)には、研究成果報告会を兼ねた公開シンポジウムを無事開催。今後は研究コアメンバー11 名の研究成果を論述した出版物の刊行と研究成果の報告書作成を残すのみとなった。シンポジウムの告知は対人援助学会 ML にも UP して頂き、おかげさまで 270 名の参加申し込みをいただいた。ご参加いただいた皆様、ご協力いただいた皆様に心からお礼申し上げます。

直前に全面オンライン形式へ変更となりその対応も大変だったが、振り返れば、この大変さは 3 年半の研究期間を通し変わることがなかったように思う。大阪の豊中市から奈良県への転居は 2 年と少し前。引っ越し直後、研究調査のため台湾へ渡航。そうそう、引っ越しの半月前には、フランスから研究者ご一行をお迎えし研究会を開催したっけ。帰国した 2 か月後の春以降、コロナ感染拡大により 12 年毎月定期便で通っていた島根県の生殖医療クリニックのカウンセリング業務がオンライン対応になった。かわいいスタッフたちには直接会えないし、10 年以上毎月通ってくれているクライアントさんとも、まだ PC 画面での面談が続き寂しい限りである。コロナ感染は、不妊治療に通院する患者さんたちを直撃し、クリニックのスタッフたちもその対応に追われているらしい。松江 WS の再開も見通しが立たない。

でも、どんな年も、何があっても春は必ずやってくる。もう、目と鼻の先だ。来月 3 月 13 日に自宅近くの奈良県広陵町で始まる家族理解 WS も楽しみだ。そうだ、引っ越しの段ボールの整理はこの 4 月から始めよう。新年を迎える気分で、新たな気持ちで。

今回は、まだ怒涛の日々を送っているため休載です。次回合流させてくださいませ。かしこ。

朴　希沙

前回から重い腰をあげようやく始めた「コミュニティが育つ、子どもがいる暮らし」ですが、1回目を書いたばかりなのに…お恥ずかしいながら執筆を断念することとしました。

と、いいますのもこの 2 月に第二子を出産予定なのですが 2 人育てるのになかなか労力が取られてしまいそう。色々な制約がある中で対人援助学マガジンの執筆を続けるのは残念ながら今難しいねという結論に至ってしまいました。自分の思った通りにいかないのが子育てや家族とのつきあいですが、今回はこれで断念してもまたいつかどこかで形を変えて発信できる機会があればと思っています。

対人援助学マガジンにはマイクロアグレッションのことを書き始めてから長い間お世話になりました。思わぬところで思わぬ方が読んでくれていて、マガジンを読んでの取材依頼や声をかけてくださる方もいたり。また他の方の記事も毎回面白く読ませてもらっていました。これからも一読者として楽しみにしています。ありがとうございました。

障 害 者 福 祉 援 助 論

- これから現場に行くあなたに！ -

第６回

不安への対処を理解する

千葉 晃央

連載タイトルを『障害者福祉援助論』と銘打っていますが、あくまで私風です。その根本には『人間理解』を置いています。そのために役に立つ道具（考え方や理論など）を先人たちは残してくれました。今から現場に行くあなたにむけて、今回も始めます。

自分の不安に対処をしていることへの理解

心理的メカニズムを説明する考え方に「防衛機制」というのがあります。前回も登場したフロイトの精神分析の領域から生まれた考え方です。人はいろんな不安な場面に遭遇します。自分の思い通りにはならない、厳しい場面も少なくありません。そんな時に、自らの意見を表明し、周囲からの理解と賛同を得られて、自分が望んだような状況の変化が起こる…。そんな場面は多くはありません。若い頃は特にそうです。私は若い時に「まずは 10 年頑張りなさい」や「人は『私は理解されていないんだなぁ』と思いながら 10 年ぐらい過ごすものだ」と言ってもらったりしながら「そんなものかな」と思って、なんとか過ごしました。そのうちに、いつの間にか 10 年を超えていました。その途上ではこうした不安な場面も（支援の上でも、職務の上でも、個人の日常でも）多かったです。その時に、今起こっている状況や、利用者さんを理解するときに、この防衛機制がとても役に立ちました。そんな 10 年のためにも、ここでは防衛機制をきっかけに話をします。

人は思い通りにいかないというような「不安」に直面した時に、傷ついたり、落ち込んだりします。それは当然です。ですが、心に余裕がない時は思った以上に傷ついたり、落ち込んだりしてしまいます。そこで、人はそんなことにならないようにいろんなことをして乗り切ろうとします。そのよくある対処方法をまとめたのが防衛機制です。防衛機制にはいくつか種類があります。心理学領域ではここでは取り上げられないぐらい膨大な数

が位置付けられていますが、そのいくつかを取り上げて話を進めていきます。

やらなくてよかった、だってどうせ…

「私は顎関節症だから、やってもどうせうまくいかなったに違いない。うまくいってもそんなに今と生活は変わらないのでは…」。これは私自身の経験です。実際そうなのかもしれないし、そうでないのかもしれません。試験前に、顎の治療のために病院に通い、マウスピースまで作っていました。今思うと、勉強に集中できない理由を探して病院に通っていたのかもしれません。だから、うまくいかなかったのだと、チャレンジしたとしてもその後に起こることは大したことはない…と。よくある例え話があります。

「木の高いところにおいしそうなぶどうが実っています。あそこにある手が届かないけれども、おいしそうなぶどう！とれなくてくやしい。だから、あれはどうせおいしそうなだけで、味は酸っぱくてよくない！と思うことにしよう！」

人はこうして、できない、できなかった合理的な理由を何とか仮にでも見つけて、できなかった自分を受け入れようとしたりしませんか。そんなことをいっているのが、防衛機制のなかの「合理化」という心の動きです。「できなかったのはあなたの努力不足…」と思ってばかり、もしくはいわれてばかり、もしくはそう思われているのではと勝手に自分で思ってしまってばかりではつらすぎる。これでは、自分が到底持たない。だから、こんな対処も時にはしながら、人は何とか生き延びる。そんなふうに思って、次に切り替えることも、人の反応としてあります。そんな整理を防衛機制ではしました。

支援の場面でも、こういう様子の方に出会うことがあるかもしれません。「どうせ、あんなことしてもたいしたことにならないし…」こんなセリフの根底には不安があったり、それができなかったとしても、何とか乗り切ろう、傷つきを少なくしてこれからも平静に物事に向き合おうとしていたりする気持ちが働いていることがあります。それも援助者は理解しておきましょうね！ということです。これが理解できたら、相手を受容しながら、目先の相手の方の行動だけにとらわれることなくかかわり続けることに注力することができる。そのきっかけにもなります。

実は、私の方が嫌っている

「私は嫌われているからなぁ」そんな言葉に出会うことがあります。自分自身もそんなことを言ったり、思ったりしたことが当然あります。そんな言葉の裏にはこんな心の動きがありませんか？と思わせるのが防衛機制の「投影」です。本当は自分がそう思っているのに相手がそう思っていることにする、そんなことない？といっているのがこの「投影」です。

私は嫌われているから…ではなく、私が相手を嫌っている。支援の現場では「どうせ、嫌われているし」そんなセリフが聴こえてくることもありました。相手を嫌っている自分に直面すると、自分に 2 度がっかりします。1 度目のがっかりは、うまくいかない現実に直面することです。2 度目のがっかりは、その発端として自分が相手を嫌っているという自分自身が発端かもしれないことです。しかもその根拠が些細なことであったり、思い過ごしだったりするかもしれない。理由もなかったり、それは自分がビビっていたりするだけかもしれない。それが 2 度目のがっかりです。心の中で相手をそんなに根拠なく嫌って、不安を感じ、リアルのコミュニケーションでもうまくいかない現実。それよりも、相手が自分の事を嫌っている！

としたら、自分自身が守られる。自分のせいではない！相手のせいにできる。こんなことも無意識でしながら人は自分を保っているかもしれない…。利用者さんが、あなたを嫌っているのではなく、あなたが嫌っているのかもしれない、そんなことも自分に問う姿勢が求められます。

過去のデータから、よりよく対処…？！

あなたが相手を嫌う。その背景には支援者自身が似たような経験を過去にしていて、その経験を不安だから引っ張りだしてきて、今回の場面に生かそうとしていることも考えられます。ある場面で、どう判断していいか分からない、情報が不足しているときに過去の似たような経験をみつけてその経験からの情報で補う。そんなことも起こっているのではないかといわれています。仲いい友達と雰囲気が似ている人とは親近感を抱きます。父に苦手意識がある方は、父ポジションを喚起する人に出会うと不安に感じてしまったりすることもある…。

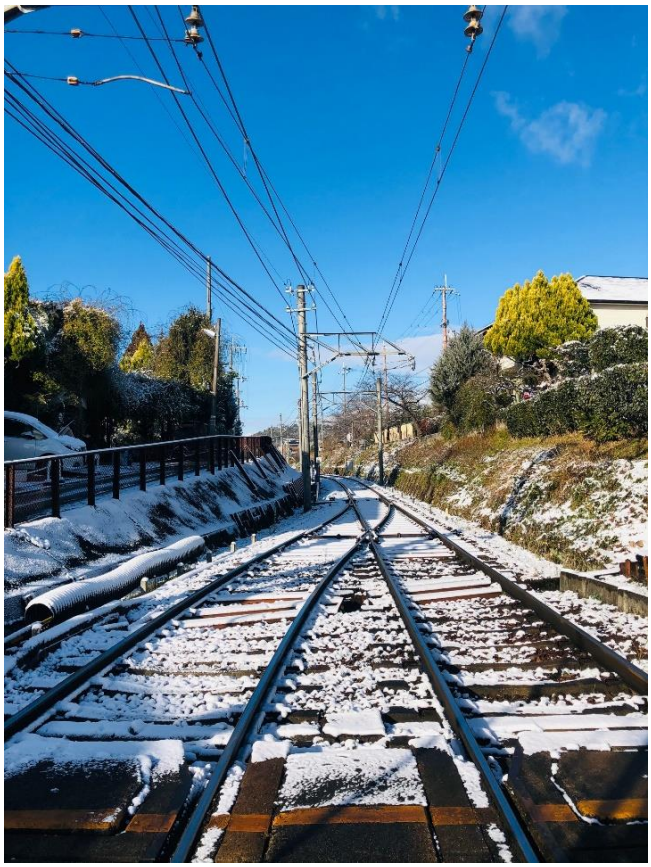
うまくいってない場面が、現在のお互いのやり取りで形成された状況だけでなく、それぞれが持つ過去の体験も反映されている可能性もあることも考えなくてはいけません。こういう「投影」「投射」といわれる今ここで起こっているものではない何かを相手に向けて投げたり、重ねたりする心の動き。ここからは現状を複層的に、多面的にとらえる必要性に気づかされます。利用者さんも今ここでのやり取りの中からのアクションだけでなく、ご自身の過去の経験からそのような行動をすることもあるかもしれない。その結果、援助者にそういう行動をしているかもしれない。その可能性もあるということも知っておかなくてはいけません。

少なくとも援助者は自分におこる過去からの影響は十分に理解しておくこと、そしてその努力を継続することが求められます。自己覚知といわれるところですね。

「ちゃんと言いましたよ」で済むのではなく、相手に伝わること、相手がきいて能動的に動こうと思えるようなことに自分の動きがつながっているか。こうして、今だけではなく過去の体験も影響しているかもしれないことをわかっておくと役に立ちます。合わせて、支援者自身が自分の何かが影響しているかもしれないとも考え続ける…。この両方が支援者には求められます。

千葉さん、やって！

「それとって！」ご本人ができる事なのに周囲に求める。防衛機制の「退行」というのはこの辺りの事です。「赤ちゃん返り」ともいわれますね。



年齢以下の幼い話し方をしていたり、支えてもらう必要もないのに引っ付いてきたり、できていることをできないといったり、しなかったり…。こういうことも、不安からそうしていることがあるといわれています。

ここまででではなくても、余裕がなくなると、できることでも、自らする意欲がわかないこともありませんか。「しんどい」と言えて言語化できる状況があればいいですが、立場や役割的にいえないとなると、行動に出る、出てしまう。それもよくある。そんな時に誰かがいて、少し手を差し伸べてくれると、また自分でできる。いわば心のエネルギー切れ状況なので、エネルギーの補充をしてもらう。親や家庭はよく安全基地やエネルギー補給基地に例えられます。こうした大切に、親切に、丁寧に接してもらうことが、また取り組もうという意欲になる。大切にされた人が他者を大切にできるという言葉にも通じます。そのこうしたいわば親切の貯蓄や相互交換は、社会のあらゆる場面で日常的に行われている、そんなことまで思いが広がる視点です。

嫌いな相手に、丁寧に接する

こんなことをしたことがありませんか。苦手な人に、それとは逆の態度をとることで切り抜けようとすることを防衛機制では「反動形成」として整理しています。

関係ができているかなと思っていたら、急に来なくなる。周囲の方にきいてみると、陰ではこんなことを言っていたよ…と後からきいて、実はケースの人が合わせてくれていただけ、むしろ苦手だから丁寧だったのかも…と思ったことは援助者ならあるかもしれません。

これは心で思っていることと、行動とが真逆です。キャビンアテンダントさんのお仕事から生まれた、心では腹が立っても、丁寧に接しなければならない労働状況を指す「感情労働」とも重なる状況です。こうして、思っていることを心の奥に抑圧（これも防衛機制）することで行き場を失った思いはどこに向かうのか？時には体に向かって心身をむしばむことも。時には、羽目を外し過ぎてしまったり、他の場面で周囲に攻撃的になってしまったり。以前の連載で取り上げた「身体化」と「行動化」ですね。そんなときこそ「言語化」の場面も作っていくのが支援者の役割でもあります。

「嫌いな相手に丁寧にする」ことはそうすることで早く片づけたいのかもしれません。しかし、丁寧にすると相手も、それまで以上に求めてくることがあります。もっともっと丁寧に扱え！とか、他の場面でも丁寧に！とか。これでは、願いと逆の展開です。やはり、社会的に容認される言語化や行動化での対処（アサーションのテクニックが役に立つこともありますね）が求められます。

丁寧だった利用者さんが来なくなった。そういう時には支援者はショックです。現実には、こういう思いがあったのかもしれないのです。それに気づくことができれば、また自分を鍛えなおすいい機会が巡ってきたととらえることもできます。

（あれっ、こないだのことはなかったの…）

受け入れがたい現実、不快な体験を認識しないようにする「否認」も人は不安からすることがあるとしています。忘れたふり、わかっていないではなく、わかってはいる。でもそれに今向き合うのはつらすぎる…。根底にあるのは不安なのです。それを理解する必要があります。

大きな病気の告知を受けた時、嘘ですよね、そんなはずはない、病気なはずはないと思う…。私の父はガンの予兆がありながらも病院にしばらく

いきませんでした。これも「否認」といえるでしょう。また、自分が交通事故を起こしてしまった時も認めたくない、嘘でしょ、まさか！となる。そんなレベルでも「否認」のような反応は起こります。

利用者さんが直前に経験した大きな影響を受けるはずのテーマについて、さもなかった感じで接してくる。いつも通りに話してくる。そんなことも起こります。今はそこに向き合うことがつらい、その元気がないのかもしれません。そういうことを、人は誰でもすることがある。このことを援助職が知っておくだけでも、こちらの心的負担や心的余裕は変わってきます。

こうして、支援者は「意図的で統制された情緒的関与」ができる心理的状況を支援者は保つ必要があります。そのためにも、こうした思考で、自分の感情をコントロールすることも必要なのです。そして、このことは「知性化」として防衛機制のひとつともいわれていて、支援者も不安なのです。そしてそれは誰にもあることなのです。

人はこうして自分を守り、防ぎながら様々な場面に対処していこうとします。ここで紹介したのは排除すべき行動集ではありません。人は不安からこうしたこともする。利用者さんも、援助者自身も。それを理解することが相手を「許し」、自分を「許す」ことにつながる。そんな一つの視点を取り上げました。その上で支援者としての質の高い支援を希求することはやめてはいけません！

心理学の防衛機制は奥深く、さらにいろんなパターンがまとめられています。機会があればふれてみると、あるある！と思うことは確実です。

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論１～６」
対人援助学マガジン 43～48 号
2020 年 12 月～2022 年 3 月

「援助職の未来 1～2」
対人援助学マガジン 41～42 号
2020 年 6 月～2020 年 9 月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」
対人援助学マガジン 16 号
2014 年 3 月

「巻末座談会 障害を持つ友達と過ごすとは？」
対人援助学マガジン 6 号
2011 年 9 月

「1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 1～40」
対人援助学マガジン 1 号～40 号
2010 年 6 月～2020 年 3 月

臨床社会学の方法

(36) 暴力の文化

—Micro Action for Violence-Free プロジェクト構想—

中村 正

1. 加害者対応の共通言語を求めて

この連載で主な話題にしている男性問題相談、加害者臨床、暴力臨床等だが、いずれもぴったりの言い方ではないと思い悩むことが多い。DV 防止、子ども虐待防止、ストーカー行為対応のための政策課題として焦点になっていることは加害男性向けプログラムを社会制度としていかに位置づけるかである。その段階まで私も所属する国の委員会で課題を詰めてきた。内閣府には加害者対応の試行的実施による調査研究事業を進める委員会がある。また、子ども虐待と交差する DV に対しても面前 DV をはじめとして関心が増加し、虐待事案の多くを占めるにいたっていることもあり、厚生労働省には虐待する養育者・保護者対応についての調査研究を進める委員会がある。虐待でも親への脱暴力支援が喫緊の課題となっている。

しかし加害者対応を実施するとなると苦慮することが多い。そして何よりも脱暴力をすすめるための相談・臨床と制度・政策に関する共通言語はまだ成熟していない。

それでも DV 防止法、児童虐待防止法、ストーカー行為規制法の 20 年程の経過のなかで徐々に加害者対応の最低限の合意を広げてきた。その考え方の中心は、「被害者支援の一環としての加害者対応」である。被害者支援団体、国の政策・制度の担当者、男性問題相談者、自治体のジェンダー政策担当者、研究者の間ではこれがミニマムな「共通言語」だろう。

私はこのミニマムな合意を踏まえた上で、さらに男性と暴力の観点から理論、政策、臨床等、広げて問題を把握するべきだと考えている。男性同士の暴力も視野に入れる必要があること、暴力の文化や男性性ジェンダーとの関連で社会の意識改革もすべきだからである。

そうすると「被害者支援の一環としての加害者対応」という点を越え、広く存在している暴力と男性の問題へのアプローチとなる。暴力につながる男性性があり、その予防・防止あるいは家族以外の親密な関係における暴力や葛藤を対象にする必要があると考えるからである。

ここでは暴力の文化あるいは文化的暴力という考え方と加害者対応の関連について検討する。この論点は、ジェンダーに関する構造的暴力、ミソジニー（女性嫌悪と訳されることが多い）、セクシズム（性差別主義）を男性の日常生活からとらえ直すことを意味している。さらにインセル問題など

を視野にいれ男性を周縁化する社会的排除を正当に位置づけること、加害者への臨床として心理化し、通例のカウンセリングへと一般化されるべきではないことを強調したい。総体として、暴力を振るう男性ひとりひとりに出来ることを提案するマイクロアクション計画へとつながるアプローチにしたいと考えている。これを何と名付けるべきなのかの検討も含め、以下、暴力を振るう男性の脱暴力プロジェクト構想のいくつかについて紹介したい。

加害者臨床・男性問題相談には、こうしたマクロな動態と個々の暴力行為からの離脱を扱う脱暴力実践を共に視野に収めるフレームが必要となる。この枠組みの構築に関連するいくつかの議論を紹介しておきたい。いずれにしても男性と暴力というテーマは通奏低音のように響いている。

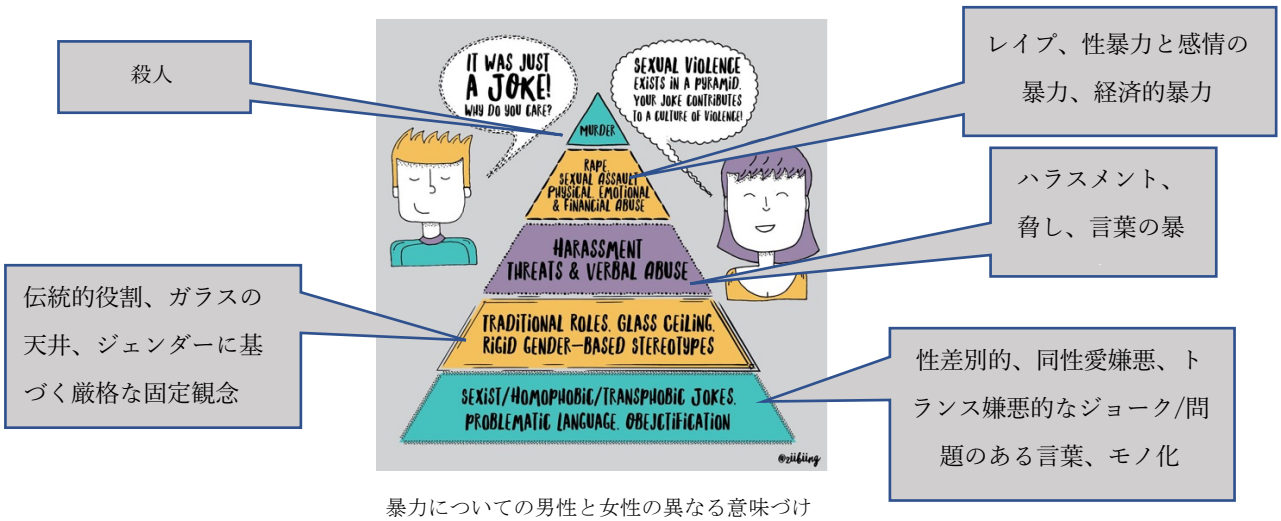
2. マイクロ・バイオレンス–関係性と相互作用に入り込む暴力

虐待した父親のための男親塾（2008 年度から）や京都府の業務委託としての DV 加害男性相談（2020 年度から）は、男性性ジェンダー論と家族システム論に基づいた支援である。グループワークと個別相談を組んでいる。男親塾は児童虐待防止法にいう親子再統合事業の一環であり、児童相談所のケースワークのなかに位置づけている。父親たちは親子分離という介入にもかかわらず再統合事業に参加するので、それは一つのストレングス（長所）でもある。参加命令制度がないにもかかわらず参加しているからである。さらに大学の研究プロジェクトによる外部からの取り組みなので、縦割りの行政とは異なり、児童福祉の枠内で DV 問題という夫婦間パートナーシップ課題を扱うこともできる。

男親塾と DV 加害男性相談の取り組みは、暴力を対象にしているので「更生」的な面はある。任意参加なので自主的である。しかし否定的な事件を契機にしていることもありしぶしぶの参加である。だから動機づけ面接を重視しつつ、男性的思考や行動の仕方に合うような、問題解決型のアプローチをまずは重視している。なかでも男性性ジェンダー作用の結果としての「対人関係能力の相対的剥奪 deprivation」という面に着目している（別稿予定）。家父長制社会を支えるジェンダー秩序がつくり出した男性優位社会は、身体的な虐待・暴力という明白な社会病理ではなく、そこにいたるコミュニケーション・相互作用の営み方のなかに見えにくいパワーとコントロールを埋め込む。それは親密な関係における非対称性をもとにした作用であり、それ自体が直ちに暴力とはいえない「関係性の力動」をつくりだす。男性性と暴力の親和性である。家父長制のもと、ジェンダー秩序は集団としての男性を支配的な位置におく。もちろん男性集団内部での差異と格差も形成され、周縁化された位置にある男性、社会的に排除される男性もいる。しかし男性という属性だけで多数派となる。これが周縁化される男性には厳しく作用して挫折のように意識させる男性性の負荷となる。あるいは男性性が資源となり過剰に強調されることもある。特に、意識や態度の面での男性特権が男性性ジェンダーに付随して遍在している。それは、ジェンダー秩序をささえるミソジニー（女性嫌悪の意識と態度とされることが多い。ケイト・マン/小川芳範訳『ひ

れふせ、女たち―ミソジニーの論理』慶應義塾大学出版会、2019 年）として半ば無意識に、しかも女性にも共有されるかたちで存在している。ミソジニー的な態度と意識は男性のコミュニケーションや相互作用についてまわる。例として、「説教する男性」（マンスプレイニングという造語がある。レベッカ・ソルニット/ハーン小路恭子訳『説教したがる男たち』左右社、2018 年。『わたしたちが沈黙させられるいくつかの問い』左右社 2021 年)、「主語がない（「わたしたち」という主語を使いたがる男性が多い)」「男性的なまなざし（女性を性化し、モノ化する)」「女性によるケアへの依存」、「嫌よ嫌よも好きのうち（レイプ神話 No means Yes)」等が例示できる。この次元へと焦点をあてることで男性特権の中心にあるものを対象化できる。身体的暴力となって報道されるような虐待や DV ではなく、多数派特権の特性は対人関係という相互作用やコミュニケーションの仕方、つまり日常生活のなかに埋め込まれている。

図 1　ジェンダー非対称な暴力の認識



暴力についての男性と女性の異なる意味づけ

男性：「ただのジョークだよ！何をそんなに気にしているの？」

女性：「性暴力はピラミッドのように存在する。あんたのジョーク、暴力の文化に加担している。」

https://knowyourmeme.com/photos/2253768-asian-fetish-yellow-fever（2022 年 2 月 28 日アクセス）

3. マイクロ・マチズモ（マチスモ）

ミソジニーは女性の側からみた表現なので、これを男性と日常生活における相互作用という観点から支配性を含んだものとして再構成したのがマイクロ・マチズモ（マチスモとも表記される）の考え方である。これは、ラテンアメリカの男性性ジェンダー研究において指摘されているマチズモ（マチスモ、マッチョ）研究をもとにしている。男性優位社会の日常生活に埋め込まれた文化として存在している振る舞い、言葉使い、思考と意識や習慣的行動のことである。目に見える身体的暴力ではなく、見えない暴力ともいえる。以下の 4 点を特徴として指摘している論考がある。

第 1 は、利用主義・功利的な・実利的な意識と態度のことである（Utilitarian)。料

理、掃除、育児等、一般的に「女性的」とされる技能があると考えることを意味する特性だ。第 2 は隠れていることである（Hidden)。女性の欲望を見えなくする目的で、微妙に感情を操作する。例えば、女性が荷物を自分で持つと言っているのに、男性が女性に「重いものを持ってあげるよ」と言うのは、無意識のうちに女性の方が自分より身体的に弱いと思っているからである。この発言に悪意はない。第 3 は、危機に関連していることである（Crisis-related)。人間関係で口論になったとき等、困難なときに女性を非難し、すべての問題のスケープゴートにすること。これは、しばしばガスライティング（自分自身、自分の行動、状況の捉え方について常に自分に疑うように仕向けること）を伴う。第 4 は、高圧的・強制的・威圧的であること（Coercive)。男性の優位性を利用し、女性に対して権力を行使し、女性の意思決定を制限することである。例えば、男性が女性よりお金を持っていて、女性が自分の経済状態に関係なく自分の分を払いたいと思っていても、自分が払うと言い張るような場合がある。

https://www.anewseducation.com/post/micromachismos

マイクロ・マチズモは、日常生活に埋め込まれた男性性ジェンダーにもとづく意識や態度・行動を明確にする視点である。ひとりひとりの男性の振る舞い方を対象にする。「接写した日常生活」とでもいえようか。身体的な暴力ではない。日常生活のなかのミソジニーやセクシズムといわれるものを、男性の日常生活に即して再構成したものだ。社会のなかに流通しているジェンダーの言葉だと、男性が「自分ごと＝私ごと」にしにくい。より身近にするための言い方として男性の日常生活にも届くような言葉を使う必要がある。まずはたとえば図 1 の暴力のピラミッドを用いた男性への意識啓発だろう。男性的意識の非難をするにせよ、それを詳細にエピソードとして記述して内省を深めるタイプの男性経験の記述をしていきたい。

マクロの視界は俯瞰的だ。微視的で虫の目のような相互作用の次元から男性が生きる現実を眺めるための概念がマイクロ・マチズモである。マイクロの言葉を冠することで、対人関係の文化的様式の網の目を把握し、行動と意識の詳細にまで入り込む過程を把握する。人格形成にまで視野が広がるので、俯瞰的なマクロ視点よりも個人の意識や行動に内在して男性性の日常生活領域や対人的コミュニケーションの様相をとらえることができる。日常生活の成り立ちを劈開していくことになる。社会問題としての暴力とはいえない、善意や愛情と思われている行動に含まれるバイアスやマイクロアグレッションを照らし出す。

男親塾や暴力加害の男性問題相談では、加害者個人の責任ある選択ができなかったことに直面化するアプローチとしてマイクロマチズモから暴力のエピソードを語る。加害者臨床、男性問題相談、暴力臨床を開かれたものにし、個別のカウンセリングに閉じ込めない、つまり心理化しないためにこの脱暴力に向かう対話をマイクロアクションの始まりと位置づけている。マイクロな中に埋め込まれたマクロとして、個人と社会、社会的につくりだされる暴力が個人の行動へと転写され、現出する過程を描き

だし、暴力の責任を召喚するエピソード分析である。

4. 暴力の文化と加害者臨床・男性問題相談

先述したようにマチズモは、ラテンアメリカ社会の男性・男性性研究、家族研究で指摘されてきた。「マチスモとは己の名誉を守るために最善を尽くすことを意味する。メキシコではそれ以上に、裏切りの不安と苦痛に耐える能力に関係しているのだ。メキシコ人をかくもマチョたらしめている裏切りへの不安と脆い男らしさは、スペイン制服に由来すると論じるメキシコ人もいる。」(パトリック・オスター『メキシコ人』晶文社、1992 年。林和宏「ゆらぐマチスモ–『転換期』メキシコにおける男性アイデンティティ」(『ラテンアメリカ・カリブ研究』第 11 号 : 1–11 頁、2004 年等)。

ここではマチズモ研究に深入りするのではなく、それをマイクロ・マチズモと名付けて日常生活の相互作用とコミュニケーションの仕方として把握することの独自さを確認したい。日常化・習慣化された暴力の文化と親和性のある男性性の側面がみえてくる。マイクロ・マチズモという言葉により暴力の文化と男性・男性性のルーティン行動を重ねることができる。

そこで次に暴力の文化について検討しておきたい。これは平和学の泰斗、ノルウェーのヨハン・ガルトゥングが提唱した概念である。直接的暴力、構造的暴力に加え文化的暴力が提起され、図 2 にあるような暴力のトライアングルとして体系化された。

ガルトゥングは「平和=戦争のない状態」と捉える「消極的平和」を提起した。さらに続けて構造的暴力(structural violence)概念を提起した。これは社会構造の中に組み込まれている不平等な力関係、経済的搾取、貧困、格差、政治的抑圧、差別、植民地主義等を意味する。構造的暴力のない状態を積極的平和と提起し、平和の理解を深めた。構造的暴力のない状態とは社会正義がある状態を意味する。積極的平和とは、経済的・政治的安定、基本的人権の尊重、公正な法の執行、政治的自由と政治プロセスへの参加、快適で安全な環境、社会的な調和と秩序、民主的な人間関係、福祉の充実、個人における幸福の存在等を意味すると定義している。

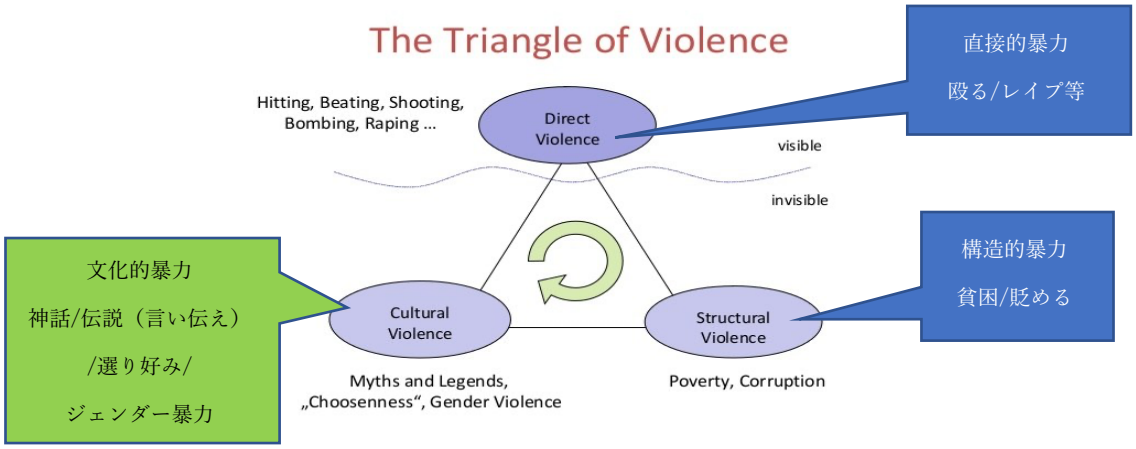
ガルトゥングの提起は、人が本来その潜在的能力を発揮できる状態以下であるような状況におかれているならば、その社会には(何らかの形で)暴力が存在すると考える潜在能力アプローチである。

ついで、文化的暴力という概念を導入した。構造的暴力の概念のフォローアップとしての文化的暴力は、暴力の直接的または構造的形態を正当化するために利用される文化の諸側面として後に提唱された。「文化的暴力とは、直接的暴力または構造的暴力を正当化するために利用され得る、存在の象徴的ナラティブ領域である宗教とイデオロギー、言語と芸術、経験科学と形式科学(論理学・数学)等文化の諸側面を意味する。星・十字架・新月、国旗・国歌・軍隊行進、あらゆるところで見られる指導者の肖像、扇動的な演説やポスターと例示されている。文化は説教し、教え、諭し、扇動し、われわれを鈍くし、搾取そして/または抑圧を正常かつ自然なものと見させるか、あるいはまたそれら(とりわけ搾取)を見させない作用を果たすと定義されている(ヨ

ハン・ガルトゥング著/藤田明史編訳『ガルトゥング平和学の基礎』法律文化社、2019年)。

文化は人を馴致していく。人は、言葉を用い、文化を形成しながら、自らの思想や行動の意味を確認して生きている。文化のなかには暴力を肯定し、称揚し、正当化するものがある。それを文化的暴力と称している。日本ではメディア作用が分かりやすいだろう。たとえばテレビ番組で歴史ドラマが制作されているが戦記物が多い。歴史は戦争という暴力によって動かされていることを絶えず伝えている。歴史観に影響を与えかねない文化作用である。文化的暴力をとおして、たとえば、戦争を容認する意識が創られていく。その姿勢や意識が、直接的・構造的暴力を正当化・合法化する文化作用を果たすおそれがある。私はこれを暴力の文化と呼称したほうがよいと考える。そうすることで、暴力の文化への拮抗・対抗のために平和の文化の議論ができるからである。暴力の文化として以下、論じていくことにする。

図２　ガルトゥングの暴力の三角形



https://www.slideshare.net/gracewithfire/love-and-peace-with-the-world（2020年2月28日アクセス）

暴力の文化は社会の中に遍在している。事例はたくさんある。たとえば部活動での体罰がわかりやすいだろう。「部活・サークル活動に関する調査」(笹川スポーツ財団調査、2013年）を紹介しておこう。これは高校２年生から大学１年生までの本人による直接回答（指導者・保護者等による回答ではない）である。「運動部系」に限らず「文化部系」も含めた高校の部活動を対象にして、暴力行為の「目撃体験」についても調査している。「指導者」からの暴力行為（身体的暴力および暴言）だけではなく、「先輩」からの暴力行為も調査している。「過去１年間に、部活動中に指導者および先輩から、以下の暴力行為を受けた経験、目撃した経験があるか」を尋ねた。例示している暴力は、「素手で殴られる/物（棒や竹刀、スリッパ、ペットボトル等）で殴られる/蹴られる/物を投げつけられる」である。

他方、部活動の満足度をみたところ、暴力行為を受けた経験のある者でも 71.5％は「満足している」と回答した。暴力を受け

ても部活動に満足しているのだ。厳しい指導を受けて伸びるという意識がこの数字の背景にあるのだろう。スポーツという文化活動に内在して暴力の文化が懐胎している。平和の文化がスポーツをとおして花開くためにもスポーツを支える人々の意識も塗り替えられるべきだろう。
https://www.ssf.or.jp/thinktank/children_youth/2013_club.html

他にも、民法にある親の懲戒権、教師の懲戒権も同じように機能する。民法第 820 条（監護及び教育の権利義務）「親権を行う者は、子の利益のために子の監護及び教育をする権利を有し、義務を負う。」とし、さらに第 822 条（懲戒）「親権を行う者は、第 820 条の規定による監護及び教育に必要な範囲内でその子を懲戒することができる。」とされている。これがしつけと称した虐待を誘発するので規定を削除する議論が開始された。改正要綱案では、規定を削除し、親の行動について「子の人格を尊重するとともに、子の年齢および発達の程度に配慮しなければならない」との規定を設けるとなっている。その上で「体罰その他の心身に有害な影響を及ぼす言動」の禁止を明記するとされている。

また、学校教育法 11 条（児童、生徒等の懲戒）「校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、文部科学大臣の定めるところにより、児童、生徒及び学生に懲戒を加えることができる。ただし、体罰を加えることはできない。」とされている。これも同じく体罰の根拠にされてきた経過があり、修正が施されてきた。

さらに一般化すれば、スポーツと暴力、教育と体罰、しつけと子ども虐待、ジェンダー非対称性とコントール、職場のパワーハラスメント、研究指導とアカデミックハラスメント等、暴力の文化が宿りやすい領域と関係性がある。これらはこの連載でも頻繁に紹介してきた「関係コントロール型暴力」と同じような特徴を有している。関係の非対称性のあるところにはこうした相互作用の力動がダブルスタンダートとして機能しやすい。暴力を被る方もそれを受容していく。暴力の文化は暴力そのものを認識させないという役割を果たすのだ。以前の連載で述べた認知的不正義と同じように作用する。文化という知的作用の力である。

5. Micro Action for Violence-Free プロジェクトの構想

1）暴力の文化のなかで

暴力の文化、しかもマイクロ・マチズモやマイクロアグレッションが社会に存在するなかで、男親塾、DV 加害者男性相談、脱暴力グループワークによる加害者臨床を行うことはジレンマがある。

私は、虐待や DV を振るう加害男性との対話をもとにして「暴力神話」（図 3）として体系化してきた（中村正「男たちの『暴力神話』と脱暴力臨床論―家庭内暴力の加害者心理の理解をもとにして―」、『子ども虐待とネグレクト』第 22 巻第 1 号、子ども虐待防止学会、2020 年）。さらに筆者らが訳出した研究書の主要概念である「日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション」を参考にしている（ドラルド・ウィン・スー/マイクロアグレッション研究会訳『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション――人種、ジェンダー、性的指向:マイノリティに向けられる無意識の差別』明石書店、

2020 年)。

図 3　暴力神話

暴力は愛のむちである。	暴力は相手が引きおこさせる。
暴力は問題解決になる。	暴力に絶えてこそ人は強くなる。
暴力は正しい。	暴力を振るわれるには理由がある。
暴力をとおして痛みがわかる。	暴力は人を鍛える。
暴力を振るうほどに関係が密である。	暴力は絆を強くする。

すべての加害者はこの暴力神話のなかを生きている。DV や虐待に関する対話ではこれと格闘する。男性性ジェンダーと暴力が正当化されてつながる回路をつくり、両者を媒介する触媒のように、空気のように、暴力神話が内面化されているし、日常生活の指針となっている。この暴力神話は、修正や再構成が可能なものとして数回の面談やグループワークで対象化できるような代物ではない。社会的に共有している暴力の文化に由来するからである。暴力加害者はここから養分を吸い取り、暴力を肯定する物語をつくる。男性性ジェンダーがこの過程に作用する。主流となっている男性性のナラティブの内容はこの既製品のナラティブでしかない。

ここで対話のプロは隘路をなんとか拓く努力をする。暴力を行動化しているのでその点に即して暴力の文化からの影響を指摘する。暴力を振るった加害者個人の責任の召喚と内省を深める対話の契機は、加害男性の暴力の行動化とその結果に直面化することにある。それを手がかりにして加害者との対話と相談が始まる。彼のための脱暴力のためのマイクロアクションのプロジェクトが組成される。脱暴力に向かう個人のためのプロジェクトを男性問題相談は用意する。諸外国では、DV や虐待、性犯罪、男性性ジェンダーに関する膨大な研究がある。脱暴力をめざすワークブックも出版されている。脱暴力プログラムへの受講参加命令制度もハームリダクション政策として裁判所命令で構築されている。これに学んでいる。

暴力の行動化を契機にしてそれぞれの法律にもとづく介入がすすみ、被害者支援が動きだす。すると彼は加害者として表面化する。周囲からの反応を受け、親密な関係における暴力の行動化に特有の心理的負荷がかかる。男性性のジレンマが深刻になる。身体的に力の弱い者に振るう暴力であることに根ざす深い悔恨の情である。この加害の悩みは深い。そこにここで提案している「Micro Action for Violence-Free プロジェクト」が添え木の役割を発揮する。以下、いくつかのポイントを整理しておく。

2) 暴力を扱う男性問題相談の基本的枠組み

遍在している暴力の文化のなかにあっても暴力を行動化せずにいる男性は多い。そうした男性には規範や倫理に裏打ちされた人権意識が内面化されているし、何らかの対人的な葛藤を含んだ問題に直面しても非暴力的な解決のための選択肢を有しているからだ。平和の文化を保持しているともい

える。しかしそうでない男性は、それを内面化してこなかった環境にいた。さらに問題解決のための非暴力的な選択肢が欠落していた。また、特定の親密な関係においてだけで暴力を振るうということは加害者が相手を選択していることに他ならず、意識的な暴力だといえる。つまり故意である。

暴力は容易く他者をコントロールできる。特に身近で親密な関係における他者は取り込み対象としやすく、二者関係のなかでのコントロール欲望を満たすことができ、DV、虐待、体罰をとおしてコントロールするという対人関係欲望を満たしている。

取り込みとは侵入のことである。親密な関係性は性的側面を典型として境界がクリアでなくなる局面がある。境界を尊重することができない程に自他分離、公私関係のわきまえができにくい領域である。暴力の文化がここに作用して境界を侵犯させる。対人関係の境目がない、それを健康的に保てない、そうした力がない、つまり親密な関係性は境界を越えることと同義だと侵入することの多い男性は意味づける。ここには家族環境が影響する。境界を侵犯しやすい育ちの中にいたということだ。「対人関係力の相対的剥奪 deprivation」があると考える。暴力の文化にさらされて構築してきた男性性ジェンダーがこれを肯定させていく。これをマイクロマチズモが指摘する男性性として把握する。

この加害の悩みの深刻さに依拠して加害者臨床による対話がはじまる。ポイントは述べてきたように、特定の親密な関係における暴力加害者に存在する根本的な矛盾である。「強さ」のなかの脆弱さを抱えていることになる。これは日常生活に習慣化された男性性ジェンダーによる振る舞いや思考である。感情表出の仕方も規定する男性優位社会でつくられる虚構の「強さ」である。この暴力は虚勢であり、その表面的な「強さ」と現実の乖離は激しい。肉体的に力の弱い者に向かう暴力は、弱い者・被害者に依存していることに他ならない。その「強さ」は脆く、加害者は脆い。その脆さを支える虚構の「強さ」。つまり加害の苦悩は深刻であるはずだ。しかし彼は気づきも弱い。何故なら他者に配慮する人間力が削がれているので、こうした根本的な脆さを抱える自己をケアできない。暴力を振るって悩んでいることについて援助要請できない。これを男性性のセルフネグレクト作用という。

親密な関係性は相互に関わり合うケアする関係を基本にしている。家族という関係性は、市民社会の契約にもとづく関係性とは異なる。国家と個人の関係における権利・義務関係でもない。情動的な関係性である。ジェンダー秩序は、誰がケアし、誰がされるのかという非対称性の基本線（分裂線でもあり協働線でもある）を浮かびあがらせる。私も、父親としての育児体験、息子としての親の介護経験、そして事実婚生活するパートナーとのケアをめぐる葛藤を含んだ生活体験、そして息子として家族のなかで育てられた体験という「ケアする−される体験」をしてきた。それが家族のなかにはたくさんある。家族をはじめとした親密体験に根ざして暴力直前の葛藤のエピソードが無数に生成する。この文脈でいえば、男性性ジェンダーはケアと折り合いが悪い。暴力の行動化の背景にある関係性がケアをめぐる葛藤だといえるだろう。これを行動化ではなく言語化するプロジェクトである。

＊以下の記述は『令和２年度 配偶者暴力に係る加害者プログラムに関する調査研究事業報告書』(内閣府調査研究事業）に座長まとめとして記したものの一部である。

3）男性問題相談の入口整備

こうしたことを考慮すると、加害者のニーズを見極め、リスクを評価し、動機づけの弱い加害者の特性に対応する応答性の高いプログラムが要請される。これを犯罪心理学では RNR モデル（Risk-Needs-Responsivity）という。とくに最後の応答性にかかわり、解決志向療法（ソリューションフォーカスアプローチ)、対話的療法（ナラティブアプローチやダイアローグの活用)、動機づけ面接法等の手法と男性性ジェンダーを考慮したアプローチ、さらに家族システム論による関係性理解やグループ療法等を接合した複合的な手法によるコンテンツ開発をしてきた。

例えば､解決志向療法の鍵となる「プロブレムトークとソリューショントーク」の違い、これまでとは確実に違う行動を取り入れ、変化を具体的なものへと導く動機の協働構築やセルフコントロール力の育成、加害者が自ら脱暴力を持続できるようにするストレングスアプローチ等の多様な内容を含めることになる。

プロジェクトで重視しているのは暴力を振るい悩む男性自らの課題の設定である。被害者非難や暴力の矮小化とならないように説明を引き出し、個人としての脱暴力計画を立てて実行していくプラン作成を協働することになる。加害者プログラムが「ハームリダクション」として位置づき、その後も時間をかけて脱暴力を持続していくためには、入り口としての暴力に焦点をあてた「男性問題相談体制」の構築から、被害者の安全を確保しつつ加害者の動機形成と脱暴力の持続について伴走し、協働できるジャスティス（責任の召喚）とエデュケーション（認知的不正義の克服）とケア（脱暴力化支援）に関わる脱暴力支援ソーシャルワーカーのような存在が不可欠だと考える。

虐待問題ではすでにソーシャルワーカーが存在していることに比べてみてもプログラムがあればいいのではなくそれを活用して脱暴力へと生きていく伴走型支援が有益だろう。克服されるべきことは、私が加害者との対話から整序した、社会もまた保持する「暴力神話」である。

4）どんなプログラムとすべきなのか–加害者プログラムの内容

現在、ジャスティス・クライアントとして、触法行為を行った高齢者、知的障害者・身体障害者・精神障害者に関して特別な調整を行い、地域生活定着や医療観察という考え方にもとづき回復や再犯防止の支援が成されている。また同じように少年に対しても特別な教育的福祉的対応をとっている。DV や虐待に関係する加害者も､特に刑事制度以外の広範な社会的迷惑、モラルハラスメント、支配とコントロールの関係、状況的な暴力となる夫婦間葛藤等として広い意味での暴力を振るう者が多く、刑罰ではなく社会内での脱暴力プログラム受講の対象にすべきである。しかし受講命令制度がないので半自発的であれ自ら来談する男性に広く門戸を開くようにした男性問題相談体制が必要である。当面は脱暴力プログラムを選択できるような機会提供とするのがよいだろう。いずれにしても参加する男性は「抵抗する、敵意のある、動機づけの弱い加害者」という暴力加害者像とは異なる加

害者がほとんどだ。悩みをこじらせないようにする脱暴力プログラムは可能性がある。加害者自らが行動を変えていくことができるような協働関係をつくることがプログラム提供者には求められる。

対象者の広がりを考えると、暴力の定義も広くおさえるべきこととなる。特に、身体的暴力を中心にして暴力を定義するのではなく、広い定義を採用して脱暴力化を試みるプログラム提供となる。また、加害者として自らも病むことが多い男性が対象となり、これを「加害のトラウマ」という。一般的には、被害者救済を基本にして、認知行動療法を基礎にして自らの暴力を振り返り、暴力を肯定してきた意識と行動の特性を知り、再発しないよう自己統制を加えていける体系的学習を行うことが基本となるだろう。

しかしその後、受講参加命令制度がある社会では、プログラムからの脱落率が高いこと、多様な類型の加害者に一つの政策やプログラムしかないこと（One size fits all）への批判、再犯率による効果測定をとおしたプログラムの精査の必要性等が主張され、プログラムの内容、期間、評価、担い手、位置づけ（教育なのかどうか）等の基本に関する問題が政策論争や学術論争となってきた。日本では、加害者対策は実施されていないので、諸外国の経験に学びつつ、Micro Action for Violence-Free（脱暴力のための小さな一歩プロジェクト）を構想した。

5) グループワークをベースにした男性問題相談の手法

プロジェクトは、グループダイナミクスを活用した男性同士のグループワーク手法を活用する。詳細はこれまで多数の論考で紹介してきたが、私たちのプロジェクトが取り組む DV 加害男性問題相談は、目標としては 5 人程度の当事者男性（毎回のクールで参加者数が安定するとは限らないが)、2 人の進行役、１人の記録担当者という構成である。受講参加命令制度がないので半構造化した緩やかなオープン参加方式がよいと考えている。１クール８回のものを３クール回すことを目標にしている。その前に動機形成面談を５回実施している。この動機形成面談は個人相談であり、用意している一回 50 分の相談に対して週に 4 コマ可能な枠を設定しているが充足率は 78%と高い。

パートナー暴力を振るい悩んでいる男性のための窓口だが、それ以外の暴力の主訴をもつ男性からも連絡がある。その面談修了者でグループワークに参加する人は30%程である。DV が主訴となって受け付けている。別居中の男性が多い。離婚調停中の男性もまれにいる。同居継続の男性も多いので、「在宅 DV」を危惧しつつも、妻命令・子ども命令で参加している等、安全の確保は本人も含めて注意すべき点である。本来はパートナーコンタクトができればいいのだが、制度もないので実施していない。

グループワークの手法もかなり工夫をしている。たとえば次のようである。①インシデント・プロセス法によるリフレクション（この説明は中村正「地域との協働をかたちにする支援者支援セミナーの経験」、『対人援助学研究』Vol.10 62—73、2020 年に詳述してある。閲覧可能)、②男性にとっては苦手な援助要請行動を可視化するエコマッピング（会社、友人、男性相談も組み込んで暴力を相談すする体制の図式化)、③暴

力エピソードのシークエンス化（図式化）、④そのシークエンスのなかで非暴力行動への選択肢を創るリフレクションワークとそれを行動化するロールプレイング、⑤グループワークの約束を反復して唱和することで対人関係の準拠枠にすること（これはグループが安心・安全であるように 7 つのルールをつくって毎回唱和している。たとえば批判する場でないこと、主語は「わたし」であること等）、⑥グループワークで体感する安全・安心の言語化（その日の振り返り作業のなかで）、⑦他者の発言へのアサーション的コミュニケーションによる応答や他者の経験のシェアリング、⑧ソーシャルスキルトレーニング等である。これを一回 90 分（DV 男性問題相談）または 120 分（男親塾）で実施している。現在は、月に 2 回の実施となっているが、予算と人的体制が整えば頻度は週に一度がよいだろう。

暴力の事例・エピソードの語りと分析を軸にして、非暴力的な行動選択肢を増やすためのマイクロアクションをめざす。

ガルトゥングの言う直接的な暴力の行動化という事実があり、弱い者が実際にケガをしている事実があるので、この加害行為は否定できない。グループで否定をすればそれは男らしくない態度だと指摘することが多い。そのことには直面化する責任があり、それこそが男性的な正義であることを強調する。

こうして、マイクロアクションプロジェクトの構造や意図を明確にして実践している。男性のシステム思考に依拠する面もある。この過程を協働するには意識化のための言葉（＝概念）が必要となる。文字通り、学習である。ワードがワールドをつくるということだ。この学習的要素は重要であり、暴力の文化や関係コントロール型暴力を理解するために彼らの行動と意識に即して暴力の用語集づくりをしたいと思う。これも男性たちとの協働作業である。ワークブックに記入させて知識を埋め込んでも力にならない。男親塾という名称もこうして男性たちと創出した名付けである。当事者たちと協働して作成する暴力理解と脱暴力のための語彙の収集である。これは動機の語彙の集積となる。これを私は暗黙理論（加害者の正当化のための内的言語）として理解するためにも有益だと考えている。こうしたワードがないと自らの意識や行動は自覚されない。暴力の文化の中を生きていることや弱い者に向けた暴力を振るっている恥辱的な自己の理解のためにも、外在化の言葉は必要となる。こうした作業がないと、加害者うつに陥り、言葉のない感情に抑圧され、孤独に陥る。ひとりでは脱暴力は困難なことなので加害者うつが悪化する。とくに恥辱となるような情けないタイプの暴力であったことは相当に加害の悩みを深くする。

プロジェクトは自己の再生に向かうための小さな一歩になるように体系化し、その総称として Micro Action for Violence-Free（脱暴力のための小さな一歩プロジェクト）と名付けた。マイクロアクションとは、マイクロアグレッションやマイクロ・マチズモからの脱出という意味であり、まずは身近な親密な他者との関係において可能なことをするという意味でもある。

立命館大学（社会病理学・臨床社会学・社会臨床論）

2022 年 2 月 28 日受理

カウンセリングのお作法　第三十回

家族面接　初回の社交的段階

呼び名、呼び方

CONカウンセリンオフィス中島　中島(水鳥)弘美

お母さん？ママ？

あなたは子どものころ、母親に話しかけるとき、どう呼んでいましたか？

「お母さん」それとも「ママ」ですか？

では、現在のあなたが、母親に直接話しかける場合、どのように呼んでいますか？同じですか？呼び方は年齢と共に変わりましたか？

二十歳前後の大学生にたずねてみると、こたえた人の多くが「お母さん」「かあさん」でした。中にはずっと「ママ」と呼んでいる人もいました。

頼みごとをするときは、「お母さん」だけれど、それ以外は「ちょっと」とか「ねぇ」と言い、大学生になってからは、ストレートに呼ぶことができない、呼ばなくなったと話す人もいました。ただし、友人と話すときは、「うちのおかん」と言っている人もいました。おかんと言っているときの話題は、ちょっとした笑い話のようです。

誰が誰をどのような場面でどう呼んでいるのかは、家族の雰囲気や、親と子の関係性また、その変化を映し出しているように考えます。

今回は家族カウンセリングの初回面接についてです。初対面での家族への呼び名、呼び方にも配慮した社交的段階のプロセスを話します。

初対面のあいさつ

初回の来所では、相談場所に家族が到着してから相談内容の本題に入る前にいくつかのステップがあります。まずは受付表などに記入をします。本人の名前、生年月日、住所、連絡先、同居家族の名前、年齢学年などです。さらに、紹介者の有無、紹介状持参の場合は、書類をみせていただきます。

事前に相談内容は電話等で把握し、受け付けられる内容かどうかの判断はできている場合が多いため、この場面では事務的な手続きが中心です。

予約の時刻になると面接室に入り、全員の着席を確認してから、カウンセラーが自己紹介をします。

約九十分の家族面接の流れを説明して、おおよその時間配分、そして、プライバシーを守ることなどを伝えます。

「それでは」と言いながら、仕切り直しのために改めてあいさつをして、本格的に面接が始まります。

呼び名・呼び方

母親の呼び方は

お母さん？

ママ？

うちのおかん

家族面接　初回面接の４段階　ジェイ・ヘイリィ

1	社交的段階	あいさつを含む社交的段階
2	問題確認段階	主訴を中心にやりとりが行われる問題確認段階
3	相互交渉段階	家族がお互いに話すように要求される相互交渉段階
4	目標設定段階	何が変わるのかを細かく話す目標設定

家族面接　初回の社交的段階

話しかける順番　だれが話したがっているか

初回面接の四段階

初回面接の段階についてジェイ・ヘイリィは次のように説明しました。

①あいさつを含む社交的段階

②主訴を中心にやりとりが行われる問題確認段階

③家族がお互いに話すように要求される相互交渉段階

④何が変わるのかを細かく話す目標設定段階

この中でもより重要とされる社交的段階についてみていきます。

家族面接の初対面のとき、ひとりずつにカウンセラーが声をかけます。参加者全員が、これから始まる面接について、さまざまな合意を得る場面となります。

家族それぞれの了解をえて、ていねいにすめる必要があります。

「お父さんのジロウさん。お母さんのカズミさん。それから、高校一年生のゴロウさんですね」

と、受付表に記入された内容を確かめます。特に子どもさんに対しては、ゴロウさんとお呼びしていいですか?と呼び方も確認をとるようにしています。「君づけ」か「さんづけ」か「ちゃんづけ」かは、年齢等に応じて対応します。

この場面をもう少し詳しくみてみましょう。

カウンセラーは父親や母親に対して、お父さん、お母さんという呼び方よりも「お父様」や「お母様」の方が良いのではないかという意見もあります。「お母ちゃん」「お父ちゃん」などと親しみを込めて呼んでいる公的機関の職員さんもおられます。

「さん」か「様」か「ちゃん」か、相談機関によって、どのような呼び方をするのがふさわしいのか、少なくともその理由を説明できるようにしておく必要があると考えています。

話しかける順番は親が先?子どもが先?

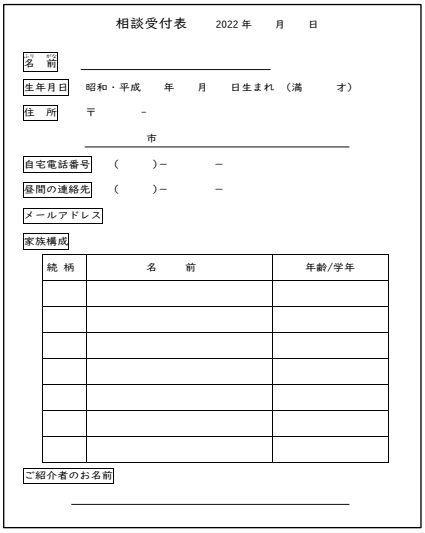
また、順番にも配慮が必要です。父、母、子ども本人の三人で家族面接に来所した場合は、最初に誰に話してもらうのが最良であるのかの判断をします。

そのために、面接の申込者は誰か?面接室に誰が最初に入室したか、座る場所を決めるとき、誰の了解を得て行動をしているのか、そのときの家族内のやりとりや呼び方などの様子が参考になります。

できる限り家族の普段のルールをくずさないように配慮しながら、話しかけます。

初回面接　相談受付表からの情報

名前　　田中ゴロウ
生年月日　〇年〇月〇日生まれ　16 歳
住所　　大阪市△△区◇◇町
連絡先　　電話
家族　　父　ジロウ　　〇歳
　　母　カズミ　　〇歳
紹介者　　□□高校



相談受付表　2022 年　月　日

名前
生年月日　昭和・平成　年　月　日生まれ（満　才）
住所　〒　－
市
自宅電話番号　（　）－　－
昼間の連絡先　（　）－　－
メールアドレス
家族構成

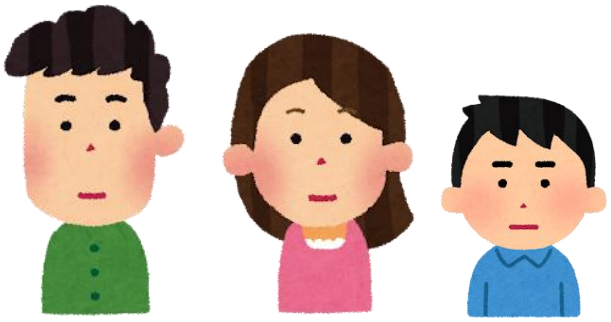
続柄	名前	年齢/学年

ご紹介者のお名前

初対面のあいさつ

カウンセラーは家族のひとりひとりと話す

話しかける順番は父→母→子ども？



お父さん　お母さん　子どもさん

配慮

家族の普段のルールを崩さないように話しかける

家族面接　初回の社交的段階

同居家族の確認　家族の負担を想像する

たとえば、父が面接の予約申込者で、当日、父が最初に部屋に入り、家族の中でもっとも多く話をしているような場合は、まずは、お父さんに話しかけます。

また、お母さんが子どもにいろいろと指示をしているような様子が見られ、面接室の中でもカウンセラーの行動をもっとも注目しているような場合であれば、最初に話しかけます。

名刺や書類などを渡すときに

「どなたにお渡しすればよいですか」

とたずねて、受け取る人を家族に決めてもらい、それに合わせるやり方もあります。家族がどう行動しているのかに沿ってカウンセラーは合流することを心がけます。

さらに慎重さが必要なのは子どもさんへの話しかけです。来所するだけでも大きな負担になっている可能性も考えられるため、子どもさんの表情やしぐさからどのような心境にあるのかを想像します。

子どもさんが話したそうにしている場合には、こんにちはと最初に話しかけます。子どもさんと関係を作ることが核となります。

しかし、不機嫌そうだったり、動作がゆっくりだったり、椅子に落ち着いて座っていない様子なら、この場所に参加している動機を推測し、学校からの指示などで来所しているような場合には、家族そろっての参加をねぎらいます。

同居家族やかかわりの多い親類の確認

また、初回で確認すべき事項の一つに同居族、そのほか、子どもさんについて頻繁にかかわっている親類などの方がおられないかをたずねます。すると、父や母から

「おばあちゃんかな？」

と、両親が顔を見合わせて確認したりします。家族には、子どもさんからみた祖母がいて、かかわりがあることがわかります。

おばあちゃん、ばあさん、ばーば、などの呼び方も記憶して記録します。

そして、

「どちら側のおばぁ様ですか」

と、確認して、ジェノグラム家族構成図に付け加えます。居住場所などの情報も集め、関係者や協力者の把握をします。

家族の負担

出会いである社交的段階は、家族にとって、何をきかれるのか、何を指摘されるのか、警戒する気持ちも少なくないことを忘れずに対応をする必要があります。

カウンセラーが、家族に近寄りすぎたり、愛想よく笑わせたりする必要はなく、少しずつ家族の中に溶け込んで、歩調を合わせていく場面となります。

同居する家族を確認する

子どもさんによくかかわっておられる

ご親戚の方とかおられますか？

→同居家族、関係する親戚を確認する

CON子さん　心理カウンセラー

家族の負担を想像する

学校から家族カウンセリングに行くように
言われたから、来た

対人援助学との出会い（４）

－環境との相互作用②－

藤　信子

先回の望月が提唱した、対人援助の３つの機能のうちの援護（advocacy）について考える時、病院（私の経験した病院は、精神科病院であるが）は、援護の機能に関心が薄いというイメージだ。病院を構成する主な医療職の人にとって、病気の原因は主にある器官に問題が生じているので、その問題へ「医学モデル」で、つまり手術・薬物などで対応する、というのが主な考え方だから、ということだろう。このモデルは、急性疾患などに対しては有効だけれど、長期にわたる治療が必要な場合は、疾患を持つ人やその家族や身近な人が病気について、理解し療養について考える必要が出てくるだろう。糖尿病やがんなどはそうだろう。疾患というかどうかは難しいが、認知症はまさにそうで、そういう意味では、まだ十分とは言えないが、認知症の本人も含めた介護をする人の相談、交流などの場をコミュニティに作る試みは少しずつ広がっているようだ。

しかし、精神科領域で研修や研究会で目にする事例では、advocacy の観点が少ないと思うことは少なくない。随分前に、看護師の社会人大学院生が、入院患者の家族のグループ（集団精神療法）を実施したことがある。それは、なぜ退院して家族と一緒に住めないかと聞いてみると、家族の人たちには入院した時の混乱した患者の状態の記憶があるため、その状態を脱して落ち着いているということが、分かりにくいことも大きかった。また、患者が退院後、どのような生活を送るのかと

いうことについての、保健所や作業所等の地域の利用できる資源の情報もあまり伝わっていないこともあった。地域生活をするにあたっての、家族の心配や不安について、医療従事者と一緒に考える場が必要だということで、入院家族のグループを持とうということになった。ただ、これには実施するには、問題があった。家族に対する集団精神療法は、保険点数が取れないので、サービスで行わざるを得なくなった。これは実施する医療従事者にとって、随分負担になることになった。結局その大学院生は、勤務時間外に病棟の外で、グループを持った。これでは長くは続けられない。

現在も精神保健福祉士や公認心理師等の相談業務が医療保険の評価の対象にはほとんどなっていないらしい（ここ数年の状況を十分に把握していないけれど）ことを考えると、精神科病院では家族の相談はあまり広がってはいないのではないかと思える。病院等の施設だけでなく、そこを含むコミュニティの人々の相談、交流する場はが必要だと思う。病気になり（ここでは私が知っている限りなので、主として精神科の病気）入院したり、療養生活を送ることに対して、当事者と家族等が病気や療養に関わることを知り、対応していくことが大事だと思うが、日本の精神医療はそうなってはいない。

日本の精神医療の中に、療養の相談に関わることが、十分に位置づけられていないことは、いくつかの理由があるだろう。私が推測する限りでは、①医療費に関わる問題：相談に携わるスタッフが必要になってくる。誰が行うにしても、相談に関わる時間の労働が必要だが、そこの人件費は現在のところ、どこからも出ないのではないだろうか。病院にそのようなスタッフを抱える余裕は普通はない。そして家族に対するグループ(集団精神療法)が認められることは、現在の医療費を抑制しようとする傾向とは、逆行しているので難しいだろう。②日本の医療におけるパターナリズム：未だに病気のことは、専門家である医師、および医療従事者に任せるというメンタリティは払拭しきれないようである。インフォームド・コンセントを必要とするようになったけれど、その説明と同意のあり方は、まるでベルトコンベアの上に載せられて、各スタッフの仕事の手順のチェックを受けているような思いを、以前整形外科で手術を受けた時に感じた。手術の担当医、麻酔医、看護師等、次々に（と感じた）来ては説明し、同意を取っていく。その説明が不親切というのではない、むしろ丁寧な説明だったと思う。ただその時の気分は、これほど同意を取っておかないと、何かが起きた時に問題になるのだろうか、と思ってしまったくらいだった。あの時、「何か、ご心配なことはありませんか？」と誰か聞いてくれただろうか？骨折の場合、

担当の医師の勧める治療法に、お任せするしかなかないので､そんなことかと思うけれど、他の病気の場合に、あのようなベルトコンベア式のインフォームド・コンセントは、耐えられるかどうかわからない。手順に従って、患者が異を唱えることはあまり想定していない雰囲気は、自分たちはあなたにとって良いことをしているのだから、任せなさい、ということだろうか？「治してあげるのだから」専門家の言うことを聞くのが当たり前、という雰囲気はないだろうか、と思う。整形外科は、どこに問題が起きているかX線で見て説明されるので、わかりやすかったので、あまり不安とかは生じなかったけれど、精神科はそうはいかないだろう。でも病気の状態と経過を説明し、退院の目途など、伝えられるところは伝えて、退院後の生活への準備などを伝えたほうが良いだろう､とここまで書いて、家族が退院して欲しいと思っているかどうかについて、考えてしまった。未だに病院で預かって欲しいと思っている家族がいると、この頃でも聞いたことがあるからだ。そういう家族にとって、病院は、面倒を見てくれ頼れる、よいところなのだろう、これは病気の問題だけでなく､社会や家族の問題もでてくる。あえて言えば、問題を病院に預けてしまっていることにある。

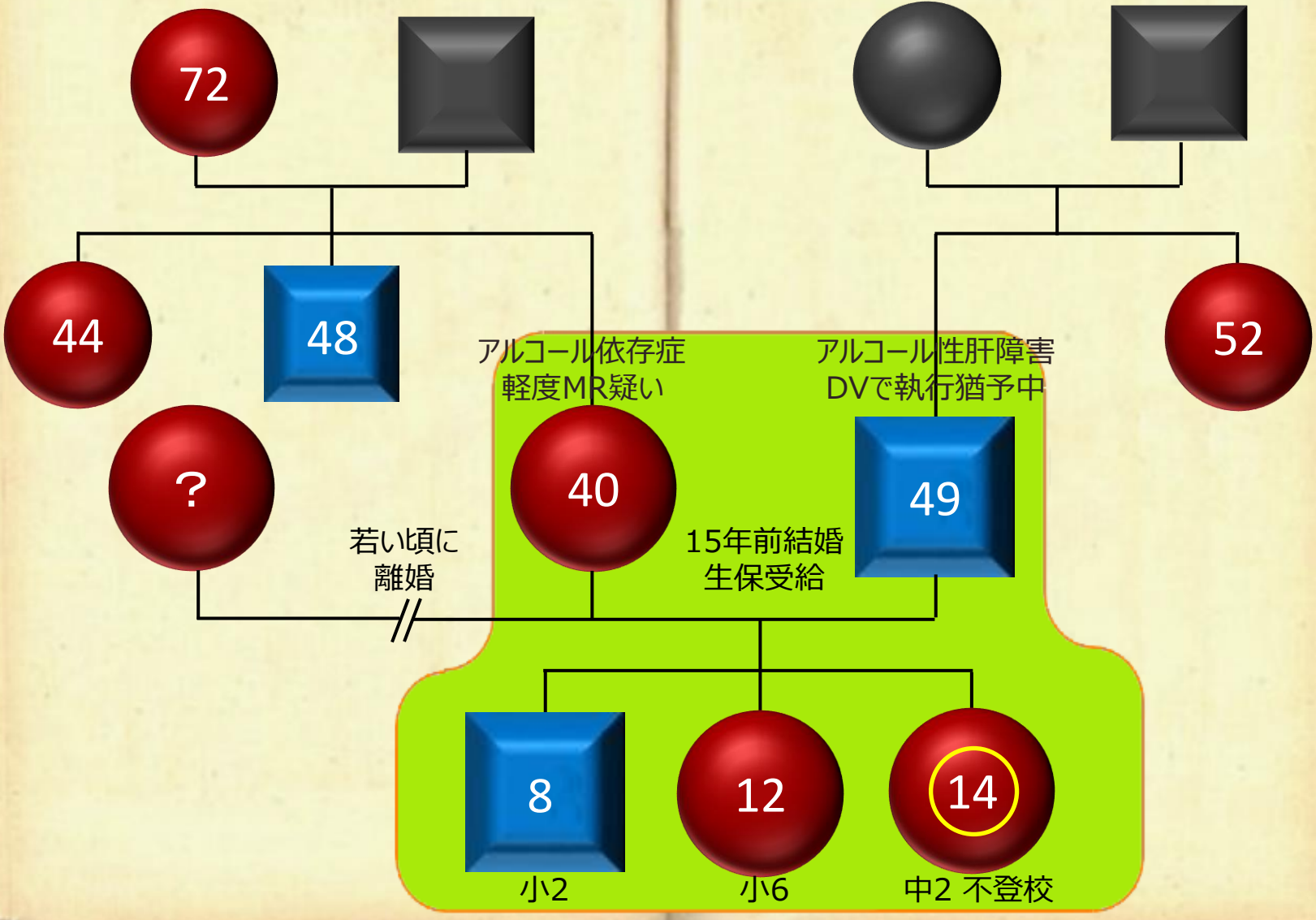
精神病院における相談が根付かないことは、他にもあるかもしれないが、以上のようなことが、関連していると思う。病気や療養についての家族の不安等に対して、理解してもらうためには、その家族の気持ちを聞く時間が必要である。病気や病気を抱えた中での生活への不安は、他の人の話を聞いて、自分にもそのような気持ちがあることに気が付くことは多い。このようなことを考えて、グループという方法を採用するほうが良いのだと考えているが、病院内での定着はまだまだのようである。ただ、精神医療領域で家族、当事者を対象にして、コミュニティで話し合えるグループを行うことが必要だと考えている。もちろん、地域生活における療養について、話し合えることが大事なのだけれど、そのようなことを続ける中で、コミュニティで精神病への理解ができることを考えるからである。地域社会が病気を理解することで、当事者、家族にとって、周りの人と一緒に病気について考えることができるようになると思っているからである。これは、advocacyの機能だろうと思う。

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

十四　仮想事例検討会②
～後編・手立て～

※　間隔があいているので、事例を再掲します。

お断り：事例検討のために作成しました。



両親について

母親は、三人兄弟の末っ子。幼少時に父親が死去し、その後、生保受給。高校を中退し、様々なアルバイトした。25歳の頃、友人の紹介で働いていた飲み屋で現在の夫と知り合う。三人目が生まれ、手が回らなくなるにつれて酒量が増えた。最近は昼ごろに起きることも多く、家事も滞りがち。軽度の知的障害が疑われている。母方兄、姉はそれぞれ結婚しており、ほとんど行き来はない。

父親は、若い頃に離婚歴のある建具師。結婚後、妻と飲酒することが習慣化し、アルコール性肝障害になる。現在は断酒している。半年前、酔った妻への暴言・暴力と止める子どもたちを突きとばしたことで逮捕・起訴され執行猶予中。

母親はよく離婚を口にするが、一人で子どもを育てる自信がなく具体的に動くことはない。父親も、自分がいなければ子どもたちが困るからと離婚は考えていない。

子どもたちについて

長女は、中学2年。小学校時代は、担任から食事・洗濯・宿題等のサポートを受けて登校していた。成績も悪くはなかった。中学に入ると学校の配慮はなく、いじめもあって休む日が増えていった。現在は週1～2回、昼ごろにふれあい教室をのぞく。家事や妹たちの世話が行き届かない母親を嫌う。父親が家事をするときは、すすんで手伝っている。

小6次女・小2長男（いずれも怠学傾向）は、身なり・宿題・登校など、父親に強く言われるとしぶしぶ従う。両親が口論すると必ず母親をかばう。2人とも通常学級で低学力、学校は様々な配慮をしている。

今回の経緯

母親の飲酒を父親が叱っているとき、長女が「いい加減にしてよ！」と言い、それに父親が「学校を休むやつが偉そうに言うな」と怒鳴った。父親の態度に驚いた長女は、発作的にリストカットをして家を出た。しばらくして近くの交番に行き、家に帰りたくない、生きていても仕方がないと訴えて児相で保護された。

母親は、児相に呼び出されて事情を聞かれたうえに長女からは帰宅を拒まれ、飲酒に歯止めがきかなくなった。激高した父親が手を上げそうになり、心配した次女が児相に電話。結局、子ども全員の一時保護となる。

話し合いの結果、母は断酒のために通院する、父親は暴言を控えると約束。次女・長男は家庭引き取りとなった。長女は迷ったあげく父親の提案を受け入れ、保護所で今後のことを考えることになった。

集団における“問題と解決行動と相互作用

特定の人※1の行為を周りの人※2が問題行動とみなす。

その人※1のこれまでのネガティブな情報・出来事を根拠に、“問題”を説明するストーリーができあがる。

その文脈に沿って周りの人※2はそれぞれに解決努力を行うが、改善されないと怒りを用いた行動を選択する。

循環

その集団※3での“怒りを含む相互作用”は解決行動のパターン化を招き、問題は維持・強化され思考はよりネガティブになる。

変化

- 根拠の再検討から肯定的な基調に導いていく。
- 解決行動を支えている文脈を変える。
- パターンの一部を変えて相互作用に変化をもたらす。

※1　たとえば子ども
※2　たとえば親、教師
※3　たとえば家族、学校

前回までの流れを図にしました。

　では、先の図の1～2段目を考えます。家族に起きていることについて、長女は①どんな文脈で、②なにを根拠に、それを“問題”としているでしょう。グループで話し合ってください。

みなさんの発表を
まとめてみました。

（長女の文脈）
我が家は次々と問題が起きる。それは、長女の自分が無力で役立たずなためだ。
（その根拠）
自分の不登校が両親のストレスになっている。母の飲酒も父の怒りも、それによってひどくなっている。自分の不登校が問題なのだ。

続けて3段目です。長女は文脈に沿った解決努力をしてきたわけですが、その結果をどのように評価していますか？グループで話し合ってください。

こんな感じですね。

（解決努力の評価）
父親を助けて家事をしようが、母の代わりに弟たちの世話をしようが、学校を休んでいるのだから認められるはずがない。
ともかく学校に行かねばならないが無理だ。

では4段目、家族の相互作用に変化が起きるような文脈を考えてもらいます。ここで忘れたらいけないのは、きちんと地ならしをしておくことです。そうしないと、置き換えは受け入れられません。

- あらかじめジョイニング（※）していること
- エンパワーしておくこと
- 実行可能なプランがセットになっていること
- 新たな文脈は従来の枠の外にあること（意外性、新鮮さ）

※
i. 不安を受け止め、解決努力をねぎらう。
ii. いまそこにある困りごとを支援する。
iii. 強みに気付いて共有する。
iv. 雑談の癒す力を活用する。

次々起こる“問題”に圧倒されてネガティブ思考に陥ると、ネガティブな事象しか目に入らなくなる。そうなると、逆にネガティブなことが集まってくる。よく見聞きする話ですね。

いまから彼女の物語を肯定色に塗り替える文脈を考えてもらうわけですが、彼女の確信が揺れるには、力のあるポジティブな根拠が必要です。
では、話し合ってください。

長女は決して無力ではない。

⇓

はじめて家族外からの支援を求めたのは長女だ。

⇓

「いま大切なのは学校より家族」という英断を下した。

⇓

長女が家に居るから父親は自制でき、暴言程度の衝突ですんでいる。

⇓

現在の母親を支えているアルコールの代役を医療機関に委ねたのも正解。

⇓

“問題”は長女の無力さではなく、長女や父親がアルコールの代役になろうとしたこと。

⇓

父親との関係

このたびの父親の暴発は、「養育と家事を切り盛りできるのは自分しかいない、自分はこの家に欠かせない存在だ」という父の信念が、長女の支援で揺らいだから。勉強の方手間に手伝うくらいがちょうどいい。

なるほど、なるほど。面白いですね。

　では、ここまでの話し合いを踏まえてロールプレイで面接をしてください。家族面接でも長女との個人面接でもけっこうですが、きちんと地ならしをすることを忘れないでください。
　そのあと長女役の方に、面接者の文脈をどんなふうに受け止めたかをインタビューしてください（続く）。

配偶者を亡くして一年日記

（3）

団　士郎

妻が亡くなって一年半。一人暮らしが一年半になったということだ。生活の基本パターンは、仕事場と自宅、半々ぐらいの滞在率で、単身なのに二カ所の維持管理は効率的でないと言えばそうだ。しかしこの時期、自宅に引きこもってしまったりしないように、通勤設定してあるのは良いように思う。一時は撤収も考えたが、当分はこのままいくことにした。

有り難いことに仕事が途切れずあるので、退屈している暇はない。コロナ禍でも新たに zoom 連続講座が始まったし、トークライブもあり、日々なんやかや埋まっていく。好きでやっていることだからストレスもなく、準備にいろいろ思案するのが楽しい。そうしていると、やっぱり新たなことを思いつく。それが面白くてやめられない。

2021/2/15

昨秋、作ってもらった私のホームページ、「士郎さん.com」に連載中のコラムが20回目を迎えた。八百字程度のものを毎週一本書き続けるノルマを課して進行中だ。すると他のアイデアが次々出てくる。何かをし続けることが、他の企画を呼び起こしてくれる。じっくり考え、満を持していると歳だけとる。

2/16

今日と明日の二日間、立命館大学茨木キャンパスで家族理解ワークショップと題したプログラム。学部生と院生が半分ずつで二十五名参加。私は楽しく話しているし、受講生も合間に質問に来てくれて、よく聞けている。いい気分で、帰路の車中。読み続けている池波正太郎「剣客商売」第十二巻。

気まぐれでスロークッカーなるものを通販で買った。2710 円、安っ！アイリスオーヤマだって。昨日、冷蔵庫に白菜が四分の一残っていて、にんじんの残りと、豚肉があったのでスープを作ることにした。さっと調理して、あとはこれに入れて一晩。昨日の味見より遥かに美味。80度でコトコト。

2/17

雪か‥天気予報通りだな‥いろんなところで呟いてるんだろうなぁと思いながら出発。立命館 WS の2日目へ。雪道途上で折りたたみ傘が壊れるハプニング。

大昔、スコールのタイ・アユタヤで同じ経験があったことを思い出す。まぁ落ち着いて対応。槍が降っているわけではないからね。

2/18

WS や講座で家族の構造理論の実用性を話している。そして相談室では、実際のケースが境界、サブシステム、パワーの特徴的偏りで問題、症状を現しているのを実感する。多くの場合、そこに変化の着手点が見えている。出来ることはあるのだから、悩みとして飲み込んでしまわなくてもいい。

夜は家族事例検討会のコロナ期間中のスピンオフ zoom 会。最近の自分の周りの話題から八人が発言して、それぞれに思うことを語った。世の中では、自分のいない場所で、様々な興味深いことが起きている。いくつになっても、そうかぁ‥と思うことが溢れている。zoom は面白い。

2/19

昨日の深夜、結果は知っていたが全編が見たくなって大型 TV の前に。ファーストサーブが入らない、ダブルフォールトが重なる。そんな中なのに、苦戦しているとは見えない強さに驚く。一挙手一投足に意思がほとばしっていた。もう一つの準決勝を見たら、こちらは昔から馴染みの女子テニスだった。

2/20

東日本大震災家族応援プロジェクト 2020 の締めくくり一日シンポジウム。

その中で映画「飯館村に帰る」を見た。素晴らしい。登場人物がみんな美しい。飯館村に戻った年配の住民。その人たちの語りと姿に持っていかれた。どういう映像と編集に真実が宿るか。学ぶところが大きかった。

2/21

30 年ぶりに自治会の本部役員を引き受けることになった。この住宅地の創立期に新自治会発足や自治会館建設に関わった。その記録を広報係として 5 年ほど担っていたことがある。久々だったが、会長は立候補があり、私も広報担当副会長に立候補した。他の役員もさっさと決まり新年度からスタート。

2/21

Twitter 社から、記念日ですと知らせが。そうだ、2011 年のこの日からツイートを始めたのだ。10 年でツイート数 7332 だそうだ。1 日ほぼ二通。途切れることもなく 3653 日。あとどれくらい続けられるのか分からないし、そもそも今何かが見えているのか、いないのかも分からん。

2/23

30 年以上も続けている京都国際社会福祉センターの 2021 年度プログラムが届いた。2020 年度は家族療法のメニューも中止したものが多かったが、さあ、21 年度はどうだろう。集ってみんなで学び合う楽しさを改めて思うことが多かったコロナ禍。だが、学び方、働き方に選択肢が登場したのは事実だ。

2/23

お知らせです。恒例のぼむ漫画展。一ヶ月後です。毎年同じ場所で、去年もコロナのはしりの頃にやったのですが、今年もやります。私は多分、また、木陰の物語の新しい掛け軸を三つ作ると思います。無理は要りません。出かけてみようと思われたら、どうぞ。

2/24

気持ちのいいものがみたくなった。シリアスなものや複雑なものに嫌気が。事件の起きない人々の物語に渇いていたのだろう。ストレッチに行って、髪を切って、ドトールで zoom 講座次回のパワポの準備をしてから観た。中華が食

べたくなったが、20 時で店は閉まる。駆け込みでラーメン屋に。

2/25

保健師のための児童虐待予防研修なるもので話すために出発。この問題については、マイナーな見方をしているので、誰が、何を話せと呼んでくれたのか、少し疑問。思うところを話すつもりだが、全体の流れを見て、浮いてないか？とは思う。

大阪から戻る道中、冷蔵庫野菜室に一本残っている大根を食べたいと思った。よぉ〜し和食だ、今夜は。駅前のスーパーで手羽中を買ってきて、いろいろやって、最後には例のスロークッカーに入れてある。大根がおいしいなあ、ドンドンすすむ。明日も食べられるぞ。

2/26

遠来の友人と食事しながら歓談。でも、緊急事態宣言下で、店は 20 時まで。カフェも 20 時までの営業ばかり。お店やってる人、みんな大変だな。

2/27

今日届いた季刊「かぞくのじかん」。木陰の物語　二話が掲載されている。連載も 6 年目。

こんな告知も載っている。好評で満員御礼とのことで第 2 回目である。さらに右下に新刊本の PR も。この本、ちょっと洒落た造りになっています。近々、しっかりお知らせします。

2/28

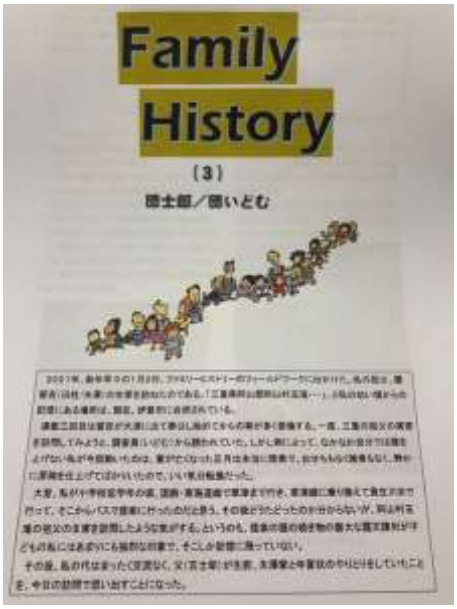
茄子料理を朝のうちに仕込んでおいた。正午から八時間、立命館博士課程の人達の研究進展を面白く聞いた。議論を聞いていて、気づく事が多々。終了後の夕飯は、少し煮込みすぎたか茄子はトロトロ気味。でも美味しい。レシピを見てやれば誰でもできるのが凄いなぁ。

3/1 朝、待望の新刊が届いた。淡いブルーの上品な一冊。この本はフランス綴じの造本にして貰った。シリーズ「新潮クレストブックス」の造本が昔から好きで、今回何か希望がありますかと問われた時、そう話した。通常の 1.5倍くらいコストがかかったとか。でも、嬉しい。どうぞ手にとって気付いてご覧下さい。

奈良県エリアからのこんな情報も届く。お近くなら、ゆっくり、大きなカラーパネル版木陰の物語をお楽しみください。

3/2

頼まれた本の扉イラスト 25 枚を完成して出版社に送った。対人援助学マガジン 44 号の連載 family history を仕上げた。執筆者五十人あまりの連載原稿もほぼ出揃った。今月下旬のぼむ漫画展の掛け軸製作段取りの手配をした。雑誌連載用「木陰の物語」の新作の下描きまでが済んだ。することが一杯。



3/3 朝から２件の宅配便を受け取り、集金の対応もした。まだもう一件の受け取りがある予定だ。この待機時間のようなところで、木陰の物語新作のペン入れから完成までの作業をする。計画通り捗る快感。合間にはこんなものを作って食べる。

3/3 夜中に YouTube で「ホテルカリフォルニア ライヴ アコースティック」に出くわす。曲に張り付いた、必ずの記憶が想起される。

体調不良でベッドに寝ていたバルセロナの安宿。地下の排気口から気持ち悪くなるような料理の匂いと共に、あの旋律が繰り返し聴こえてきた。妻と二人でバックパッカーの頃。

3/4 毎日のように本が届く。注文するからだが、それにしても来るたびに楽しみだ。なかなか読みきれるものではないが、それでも本を手にするのが楽しい。水木しげるの漫画とフランスのバンドデシネ。題材の切り取り方から、本当に多種多様だなぁこの世界は！と思わせてくれる。楽しみだ。

3/5 昨日の相談室は珍しく新規のケースが二件あった。その両方に強い既視感があった。だからどうすればいいのか、おおよそ見当がつく。実際うまくいくかどうかは人それぞれだが、長年やってきたからのことだろう。

ちょっと時間があったのでルネ・クレマン監督の「雨の訪問者」を観た。1970 年公開作。

3/5
六回継続の第五回目 zoom 版家族理解講座。参加者の評判も良く(勝手にそう思っているだけではないらしい)従って私も気分良く快調に話す。当然、脱線気味の与太話も段々慣れてきて、そこそこ呼吸も承知してもらえていると思って進める。夏には第二回目のシリーズも開催決定。早々と参加予約も。

3/7 なぜこれを手にしたのか、注文した時の記憶がない。しかし読み始めてまだ僅かだが、とても心が動かされる。ブルガリアの熊使いの話に掴まれた。社会体制の崩壊で職を失い、動物愛護の観点から家業伝統芸能の手段を奪われた。それでも自己責任で生きろと言われる男。世の中はそういうものなのか？

3/8 WEB 版対人援助学マガジン 44 号の編集をして過ごす。六十人近い執筆者の枠作りだけでも、なかなかの手間だ。内容や校正は筆者にお任せだから、いわゆる編集者とは違う。連載の場を提供し、キチンと定期発行するのが任務の発行人だ。今号は 342 ページ、なかなかのボリューム。3 月 15 日アップします。

3/9 大型書店に出向くのは、知らない本と出くわすためだ。知っているものは Amazon の方が手間がいらない。ローラン　デュリューなんて知らない。でも、大判のポスターアート集「幻影」が素晴らしい。自分ももう少し、頑張って描こうと思わせてくれるから、購入だ。

3/9
初めて zoom の世話役になって、漫画集団ぼむのミーティングをした。私がみんなを招待し

たのだ。初めての人が半分以上の第一回。平均年齢 70 歳がみんな無事参加、会話できたことを喜びたい。今月下旬の漫画展の打ち合わせが中心議題。いい感じだったねぇ。

3/10

また列車で旅がしたいなーと思っているのだろう。書店でこういう見知らぬ本に手が伸びる。ヨーロッパ大陸を列車であちこち、意味もなく散策するのが私の趣味だ。だいぶあちこち出かけた。今行ってみたいのはコペンハーゲンから北ドイツの海岸沿いをバルト三国へ。何日かかるかな。

ぼむ漫画展の準備は済んだ。期間中、午後 1 時過ぎからからは会場にいようと思っています。お時間があればいらしてください。メール、メッセージなどで事前に知らせていただけると、なお有難い。混雑はしない予定なので、マスク越しに歓談しましょう。

3/11

朝から相談室は 10 年継続のケースと初回の人の二件。午後からは古い友人が弁当、茶菓子持参で来訪。ここでも、長い関わりの人々が話題に。夜は zoom で、東北に 10 年通い続けたことを総括する出版物の企画検討。めったにこんなに働かないので、夕刻、眠くなる。春だな。

3/13

これ何に見えますか？仕事場の近所のレストランの名物らしい。全く知らなかったのだが、偶然食べログの記事を見た。そこで昨日の夕方、行ってみた。これ、チキンライス。中にご飯が入っている。パリパリの皮が美味しい。こんなの初めて食べたなぁ。

3/14

昨年中に出る予定が難産の中国語版木陰の物語。上下巻刊行予定だったのが、四冊に分けて出るとか。やっとその第一巻のゲラが届く。全く読めないから、お任せするしかないが、なんだか可愛く仕上がっている。ようやくここまできたかぁ。

3/14

数年前、面白そうだと思って購入した本が、読み続けられなかった。Netflix でその映画を発見した。多分面白いだろうと思って見始めたが全くその通りだった。トランプが大統領に選ばれた頃、ラストベルトの白人貧困層のことがよく話題になっていた。薄っぺらいだけではない貧困とそこからの脱出。

3/15

期日通りに出ました。周りの方にもお知らせください。対人援助学マガジンの新刊第 44 号がアップされました。お好みのものからご覧ください。執筆者短信を見ていただくと、どのような人たちが書いているのか、どんなことが起きているのかが垣間見えたりします。

3/16
何が起きたからと言って、考えられないとか想定外とか思う事はない。むしろ、おおこれだったかと思う。昨日アップされたマガジン第 44 号を見て新執筆者からメールがあった。新連載予定だった原稿が落ちていた。あまりにも早く原稿を下さっていた事が仇になった。謝罪して次号スタートにして頂いた。

3/16
kindle でこれをみて、アルアル！と笑っている。俺は独身女子か？

3/17
こんな書評が「本の雑誌」4 月号に。ソ連が崩壊した時、ロシア人男性の平均寿命が 60 歳を割り込んだなんて話を目にした記憶があるが、今度はアメリカか。次は日本だという話は 10 年後に現れるのかな？それはともかく、身体も社会の中にあるということだ。

3/17
久々に高い本を kindle で購入して読み始めた。面白い。年収の下がり続けている日本。若者の未来が透けてくる。

3/17
世話をしてるわけでもないのに、こんなに花が。春なんだねぇ。今日のお昼は大根と鶏肉のコーラ煮を昨夜からスロークッカーで作っておいたのを食べた。週末の広陵町の講演用の新たなパワポもできた。今年、久々に花粉の気配を少々感じる。で、夜は仕事場に。

3/19

zoom 講座全六回が無事終了。20 時 30 分から 22 時までの設定や、見逃した人はアーカイブスで追っかけ視聴できるのが良かったのか、次は 7 月スタート。その次は 2022 年 1 月スタートと決まっている。ありがたし。開講前に息子と風月でお好み焼き、焼きそば、そしてジャンボコーラで景気付け。

3/20

どこの国かなと思うような店前の雰囲気。無論どこにも行けない今、京都駅前だ。四時間のフォスタリング講座講師に出かけて zoom の形で実施後、スタッフの皆さんと食事。いろんなことにコロナによる変化の影響が。それでも楽しい事があり、毎日あれこれ対応。

3/20

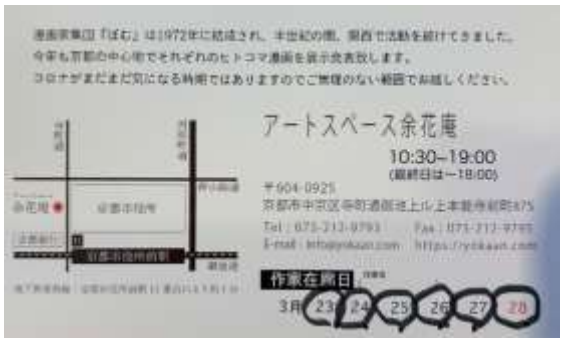
カバーが魅力的で手にした未知の本。少し読んで、仰天、爆笑。教員夫婦に子供が産まれてしばらくしたある夜。妻がおもむろに夫に言う。「つまんないと思わへん？あと 30 年もこんな人生を二人でやっていくの。この家に公務員二人はいらん。あんた先生やめて、いばらの道を行って！」、そして写真家に。

3/22

今朝、五人目の孫が生まれた。末娘が遅い初産で授かった子だ。それは同時に昨年夏亡くなった妻が、病床にも葬儀にも、来ることを禁じて妊娠初期の安全を最優先させた結果でもある。「娘として会いに来ることよりも、お母さんになることを選びなさい」と、リモートで戒め続けた覚悟が実った。

3/22

三日連続で講演を終えて、今日はぼむ漫画展の搬入に。明日から、たいてい午後二時以降は在廊しますが、いらっしゃる時にはご連絡いただけると嬉しいです。



3/23

青山文平？、「妻をめとらばを」、MBSの西靖さんの賛辞を見て、沖縄の書店で買って読んだなぁ。「泳ぐ者」が評判だが、その前の「半席」を読んでいない。折角だからと古書で求めて読み始めたら止まらずグイグイ。短編集で重複の欠陥もあるが、良さが満々。長編新刊も楽しみ。人の行為にはわけがある。

3/23 さぁ、ぼむ展がスタート。

3/24

春だなぁと嬉しくなった一日。久しぶりの友がやってきた。60 年も前から、ずっと一緒だった。長寿社会になって、思い出の数が半端なくなった。でも、生きてればまだまだ重なっていくものもある。会場に詰めていると、いろんな時代の人々が訪ねてきてくれる。あり難き幸せだ。

3/25

初日から毎日、いろんな人が来てくださる。時節柄お知らせは積極的にはしていないのだが、嬉しいことだ。ここ数年、「木陰の物語」の掛け軸展示を続けている。展示してあるのをしみじみ見てみると、中にはこの絵！なかなか良いじゃないかと思ったりする。普段は描いたらもう次のことを考えているから。

3/26

ギャラリーは来客の波がふた山ほど。出来ればゆっくりお話ししたいと思って、あちらとこちらを繋ぐ。そうしている内、もう週末を残すだけになった。コロナの心配も人それぞれ。慎重にこしたことはないので、無理のない範囲で。今日の私のお客さん、70 代三人、40 代一人、30 代一人、他？

3/27

二時前から七時まで。十人の友人、知人が途切れず来廊。八割が約束しての来訪。嬉しく疲れた。例によって七十代から三十代までの各年代の男女。撮った写真を送ってもらってから、自分でも撮っておけばよかったと気付く。あまり撮影には意欲がないのかも。

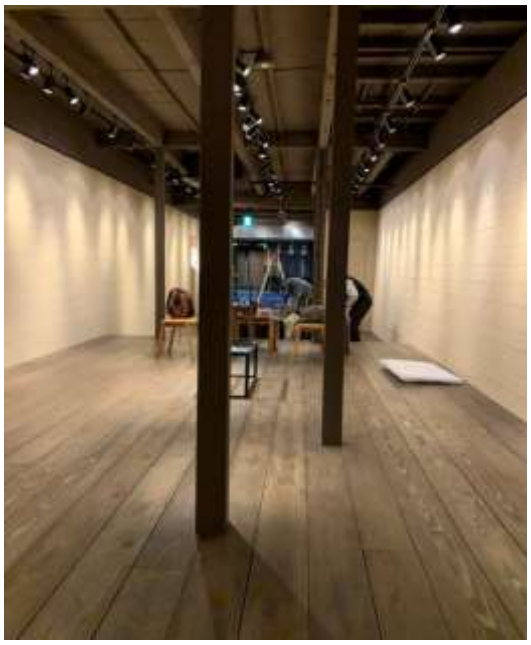
3/28

日曜日、朝から地域自治会役員の引き継ぎ打ち合わせに。ニュースを作るので前年度のデ

ータを受け取る。30 年近く前に数年関わった地域の今を知る。変化は必然だが、相変わらずなことも多いようで、地域社会のあり方がよくなったとは言えない。出来ることをする。そのあとはマンガ展最終日へ。

3/28

最終日、ゆっくり話し込めた方もあってフィナーレ。片付けだしたら早い早い。開催中、思いがけず新刊が十八冊も売れた。家族の練習問題 1-8 の大人買いも。ありがたし。今年は自分の予測を遥かに超えた来廊者があった。おそらく続いていくだろうぼむマンガ展。これからもよろしく。



3/29

展覧会明けは、一人で楽しむ休日。この二本を劇場で観た。湿った国と乾いた国で、歳とってゆくことを考える。私は比較的強い人間だと思うが、それでも「ノマドランド」では、厳しいなぁと思う。共に大事件が起きる映画ではないから、余計、我が身に迫ってくる。

3/30

確定申告の書類を義弟の税理士宛発送。届いた宅配便は落ち葉掃除機。綺麗なんだけど、落花し続けて、ご近所まで飛ばされていく木蓮の掃除をする。この半年、ほぼ初めての作業メニューが半端ない。その結果生活全体が立体化している。パートワークからトータルワークだ。ノマドランドが沁みる。

3/31

地域の自治会役員をすることになって、ニュースを作成。30 年ぶりのお役目だ。毎月の「木陰の物語」連載 254 話の下書きも完了した。ここで移動して、次の段取りに入る。その

前に、昨夜仕込んでおいたカレーを食す。美味しい。ほんとこの安価な調理器具くんは、律儀に働いてくれるなぁ。

3/31

いいタイミングで時間が取れたので映画館に。しかし去年の「パラサイト」もそうだったが、アカデミー賞と聞いても、どうも、好みではない。自分が映画に何を観たいかが、時代と私の間でずれてきているのかなぁ。合わせてもしょうがないしねぇ。

4/1

毎月の新作マンガが完成したので、夜中はシネマ三昧。町山映画情報から Netflix の「ハーフ オブ イット」を観た。こういうものが観たかったんだ！と思わせてくれる。そして、頭の中は、いくつになっても青春なのだと思った。

4/2

完成したニュースを自治会館のコピー機で全戸分印刷。ところが途中でトナー切れに。滅多にないことがなぜ今！

初めて使うプリンタのカートリッジ交換。外は桜が散り始めて道路には花びらが舞って、きれいだ。だが自宅前の木蓮の花弁は黙々と拾い集める。同じ花なのに。

4/3

木陰の物語　第 254 話が完成したので編集者に送信。毎日一つ、仕事を完了させていく日々が続いている。前週はぼむ展で、たくさんの人にお目にかかったが、今週はほぼ一人で、次々と課題をこなした。メールや SNS で新たな用件が届く。インプット、アウトプットのバランスもまあまあだな。

4/3

映画三昧。「シカゴ 7」裁判は町山解説があって、時代背景が確認でき、余計興味深くなった。我らの時代のアメリカ、元気なアメリカの話。「レッドドラゴン」は豪華俳優勢揃いだ。この前に、もっと手軽に刑事グラハムのタイトルで映画化されていて、それを追いかけて京都みなみ会館まで観に行ったのだった。

4/4

「白木蓮はきれいに散らない」、ここしばらくずっと思っていたことがタイトルだったのでAmazon でポチリ。すぐに届いて面白く感心して読了。私には描けない話。宅配で文旦をいただく。香りが凄い。早速食べよ。

4/5

ホームページの連載コラム、第二シリーズがこんな風に始まっています。第一シリーズ二十五回に次いで、自作マンガ集 ine my own way を題材にしたものです。お時間のある時にご覧ください。（＊これは続かなかった）

4/7

長男が来てくれて、早朝からレンタカーで、相続書類集め旅に。宇治市、京都市、福知山市を巡回。私が現住所を本籍にする主義だったツケである。妻が生まれてからの戸籍を、ゆうちょ銀行の為に全て用意しなくてはならなかった。郵送でも可能だが、1 日で片付けるならこれ。やっと大体の手続きが終わったかな。

4/8

19時から私が世話役で招待してのまんが集団ぼむ第二回 zoom 会。なのに、ウトウトしていて遅れた。誰も入れず、右往左往。

いやいや申し訳ない。でも、特に用件があるわけではないし、みんなも慣れてないから、それが治って、時間勘違いの人も入って揃ったのは一時間後。何の支障もない。

4/9

朝、髪を切りに。白くなったなぁと思う道すがらの京都。午後から教え子妊婦が来訪。大きなお腹は未来だ。夜は次男が来訪するので、早めに帰宅。お茶しながらよもやま話。自分のすることを、自分で決めることの人生における大切さを楽しく語り合う。四十代半ばになっていても、息子は息子である。

4/10

誰かの SNS で見かけて amazon でポチったのだった。書店でこの類のものに目がいかなくなって久しい。漫画が半分くらい。風呂読書にはちょうどいい。ほぼ同じことをしていると思える記述があちこちにある。面接による援助展開をおさらいしているような気分。

4/10

R.レッドフォードと J.フォンダ。こんな組み合わせなんて、いかにも懐かしいものを深夜に観た。でも、Netflix 新作。大きなことではなく、ささやかなことが心を捉えて離してくれない。過去のない人はいないのだからとは言うが。頑固さも自由も、歳と共に選べるはず。貴方はどうしますか？

4/10
一月に読み始めたコミックス版の第二巻。やっと読み終えた。読みにくいのではない。多分、文章の本とは異なる伝わり方があるのだと思う。ウクライナ、ベラルーシは、40 年余り後、チェルノブイリ原発事故で、また登場することになる地名だ。

4/11
朝、家族面接を見に KISWEC に。その後、メンバーとランチしながら、四方山話。語ると更にイメージが膨らむので、一人ぶつぶつ言ってるより、ずっといい。ただし、その時の発言を記憶していないのが決定的欠落。同じことを何度も言ってるのかも。今日もいいアイデアがあったはずだが。

4/12
コロナ禍の行方はまだ見えない。そんな中でも年間スケジュールは埋まっていくので、一番空いているのが今年も 4 月だった。三、四日の行程で旅に行くとか、孫の顔を見に行くとか、ちょっと考えはしたが全てやめた。人生の終盤に、不自由なことだ。

4/13
ZOOM で単発の講演を二時間。馴染みのある方の依頼だったので受けた。1 日に一仕事の約束があると、リズムが出て良いのかなぁ。あんまりゆっくりしていても楽しくない。自宅と仕事場の行き来も活性化材料なので、当分、仕事場も維持する。どちらに泊まって、どう食事を段取るかが日課。

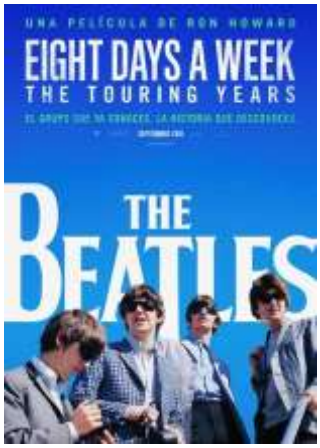
4/14
あきれた大発見。仕事場のダイニングキッチン。床が雑然としているのはいいのだ。で、昨夜、あれ？あそこって収納棚だよな。何を入れてたっけ？心当たりないなぁと思って開けてみた。左右とも見事に空っぽ。八年間、ここが収納だと気付いていなかったらしい。そんなバカなことってあるかなぁ。

4/15
朝は家族面接。午後、自宅に戻って、相続手続きのいよいよ最終段階を長男のサポートで完了。なんか疲れて、一寝入りした後、19 時からは zoom ミーティングを二時間。そして作り置きのビーフシチューで夕飯。やれやれ一日

終えたところで、明日は予定がないので夜更かし映画でも楽しもうかな。

4/16

今朝、Netflix でこの映画を観た。ビートルズは高校時代の記憶の背景そのものだ。でも音楽人間ではない私は、そんなに得意げには語れない。思い出はいっぱいあるし、初期のものは今でも歌える。英語の成績はさっぱりだったのに。映像を見ながら 60 年近くも前の出来事が次々浮かんで消える。



4/17

午後、久しぶりに旧友 K 君が来た。夢中で話してたら五時間近く経ってたので夕飯に仕事場近くの店に。左下のコロッケは追加だが、他はおばんざい定食で 880 円。お酒も飲めるが飲み屋じゃないので私もしばしば通う。時節柄、アクリル板が立っていた。食後、仕事場に戻ってまた話の続き。楽しい。

4/20

まぁなんと読書の幸せが満ちてくることか。本を手に取るだけで、おやっ？と思わせる装丁。静かな華やぎを感じる。そして読み進めながら、あらわれる人々それぞれの懐、奥行きに感服する。来し方に抱えているものが何もない者などない。それが人を深くするのだということか。

4/21

「在りし日の歌」。聞いたこともない wowow 録画の映画だった。三時間越えの中国映画。なんだか勘が働いた。そして、今年一番！と大きくうなずいて見終えた。一人っ子政策の中、その子を亡くした夫婦の 30 年の物語。私にとって、この時期に観たのが、更に良かったのかもしれないと思った。

4/22

そうか！と気付いた。2011 年から昨年まで、年初から 5 月頃までは毎年、東日本家族応援プロジェクトのために「木陰の物語」のパネル用カラー版作りに精出していた。それを10年で一区切りして、制作ノルマがなくなった。

では今年、その時間で何が出来たかと考えると、特にない。決めて何かに取り組まないと、ゆとり時間は霧散する？

4/23

溜まりに溜まった録画のブルーレイディスク。観なくちゃ話にならないが、時間が要る。日々、隙間を見つけてはせっせとこなす。今日のはゲラゲラとバカバカしいの二本立て。アメリカ！って感じの映画だった。これはゲラゲラ。

帰路、無印良品山科店でクリームソーダ飲み

ながら新作下書きと読書をしていると、石川 WS の世話人 H 君から電話。コロナ禍のまたまた怪しい様子に、でもやりたいので zoom 版は可能かとの問い合わせ。リピーターの多い、長年やってる石川プログラムだから延期ばかりでは面白くない。zoom で考える事になった。

21 時からの対人援助学マガジン読書会。北海道からパリまで、広範囲からの参加で十人。この距離感のなさは zoom の良いとこだな。ちょうどいい人数で、連載中の S 君の文章から引き出される様々な思いを交換。例によって私も色々喋っている。

4/24

朝は地元自治会の役員会。終了すぐに自治会ニュースの作成に。ゴミ問題が中心。午後、次男が所用で来訪。ついでに、持参の分別ゴミ箱をセットしてくれた。1 日ゴミが話題だった。今週、結果的にコロナ禍自粛的に外出しなかったら体重が増えた。嬉しくはない。

4/26

昨日は立命のフィールドワーク人間科学研究会 zoom に参加。正午から六時間半たっぷり楽しむ。今朝一番は、hp士郎さん.com 用の連載コラムを仕上げようとして手こずる。自治会ニュースの原案も書いて会長に送信。合間に kindle 読書。緊急事態宣言に応えて本日は自宅働き。

4/27

専門細分化を皆で持ち上げてきたせいで、世の中全般に目配りの効く人が消えた。細部の正しさを競い、おおむねという世界は誰の担当でもなくなった。政治家は専門家の意見を･･･と言って、逃れられたと思っている。専門バカという昔からの言葉を知らないのか？専門家は使うものなのだ。

4/28

昨日、昼前まで自宅で「ザリガニの鳴くところ」読書。移動して無印良品カフェでランチとお茶しながら新作下描きの完成。緊急事態宣言の京都 ZEST 御池はこの有様。篠原の展覧会を覗いて雑談後、仕事場に。録画の大瀧詠一を見ながら夜中までペン入れ。今回少し難解な話になってしまったかなぁ。

4/29

相変わらずスロークッカーを多用している。これはチキンカレーの仕込み。今夜は以前に作ったビーフカレー。ビーフシチューの作り置きがまだ二食ぐらい冷凍庫にある。GW は時間見つけて、作り置きだな。

4/30

相変わらず、併読三昧の日々。読み終えないもの、なかなか読了にならないものもある。なのに Amazon から届く本は途絶えない。注文するからなのだけど。本日入手した本。すぐ読めるか、積読・待機か、ゆっくり進むか、それは分からない。

5/1

自宅の wifi が繋がらなくなった。なんの変更もしていないから意味がわからない。Netflix も繋がらない。仕方なく BD 録画の映画を見る。「男と女」、ルルーシュのヒット作の 50 年後。同じ役者が昔話のように、昔の映画記憶を語り合う。エンドクレジットが綺麗。

5/2

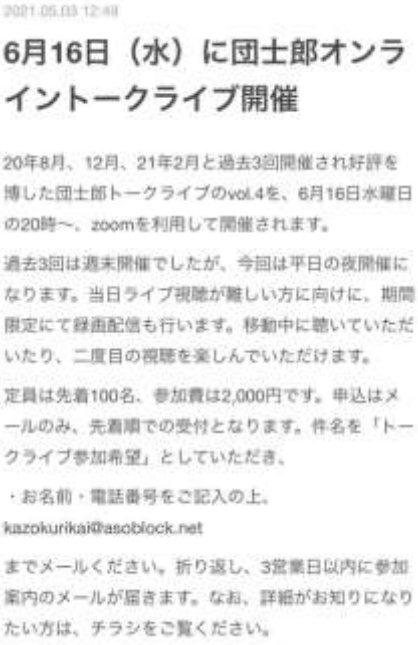
wifi の繋がらない問題、解決。昨日書いた件について広島の O さんから、ルーターの電源を一度抜いて、1 分くらい置いてから差してごらんと助言あり。やってみたら復活。ありがたし。これで作業が捗る。それにしても、何も知らないで使っているものの多いことよ。トラブルと努力の余地がない。

5/2

「いのちがけ」読了。きっかけは「高瀬庄左衛門御留書」。良かったと思えた時、その作家の他の作品に手を伸ばす。定番だ。まだ重松清が知られていない頃、図書館で読んだ一冊「ナイフ」に動かされて、既刊本を全部借りて読んだのを思い出す。だから砂原浩太朗、次はこれだ。エッと思うけど。

5/3

2000年頃、京都駅前ルネッサンスビルで足かけ 6 年続けていたトークライヴを、コロナ禍をきっかけに復活させた。毎回の満員御礼に気を良くして、四回目をやります。よければどうぞお申し込みください。



2021.05.03 12:48

6月16日（水）に団士郎オンライントークライブ開催

20年8月、12月、21年2月と過去3回開催され好評を博した団士郎トークライブのvol.4を、6月16日水曜日の20時～、zoomを利用して開催されます。

過去3回は週末開催でしたが、今回は平日の夜開催になります。当日ライブ視聴が難しい方に向けに、期間限定にて録画配信も行います。移動中に聴いていただいたり、二度目の視聴を楽しんでいただけます。

定員は先着100名、参加費は2,000円です。申込はメールのみ、先着順での受付となります。件名を「トークライブ参加希望」としていただき、

・お名前・電話番号をご記入の上、

kazokurikai@asoblock.net

までメールください。折り返し、3営業日以内に参加案内のメールが届きます。なお、詳細がお知りになりたい方は、チラシをご覧ください。

5/3

不思議な感覚だ。主人公カイアに何も起きるな！と思って頁をめくる。今、180 ページ目。小説なんだから、何も起きなければ話にならんだろうとは思う。でも、できればと思って読む。これって、自分の日常への思いと同じだ。何も起きない人生はないと知りつつ、できれば嫌なことなくと願う。

5/4

昨年、コロナ下の GW は、妻の末期癌判明への日々だった。そして今年は、孫の一人が虫垂炎で入院、手術になった。無事済んだと聞かされてホッとした。頑張れ！

あらためて何事もなく一年過ぎることなんてないなぁと思う。残り時間の見えた歳になっているのだ。出来ることは今しておこう。

5/5

ここしばらく、映画のチョイスが好調だ。「人生スイッチ」2015 年公開の短編 6 本立なんて、手が伸びない気がして、でも試しに 1 話だけと見始めたら、どの話も面白い、面白い。小説でも、こんなに満足度の高い短編集はなかなかないなぁ。とにかくスイッチが満開。

実はこの写真、孫娘とのツーショットを、次男が撮ってくれたものをトリミングした。女の子のプライバシーは守らないとね。だからこれは、おじいちゃんの顔だ。

5/6

よほど旅がしたいのだなぁ。ウォーキングがてら河原町の丸善に出かけて、手にした三冊がこれだ。いつになったら自由に旅に出られるのだろう。ウカウカそんなこと言ってるうちに、自分が時間切れになるぞ。世界のあちこちで紛争が始まっても、同じことだ。対話と相互理解でヨロシク。

5/7

一日仕事場にいると、万歩計のメーターが2桁だったりする。食事は普通にするのだから、これは運動不足だろうと思う。そこで京都散策に出かけた。近くに名所がたくさんある。行ったことのないところをなんとなく選びながら行けるところまで。ここは相国寺。

。

5/8

熱中していたら、午前5時になっていた。そろそろ眠ろう。「木陰の物語」の国際版を作った。日本語、英語、中国語、韓国語を対訳形式で一冊にしたのだ。

さてこれを読み切れる人は？と考えても思い当たらない。三カ国語いける知人はあるが、四カ国語はどうかな？私は日本語しかダメだけど。

5/9

アメリカ文化とフランス文化の対比的語りが、面白いなぁと堪能した佳作。観た人の評は☆五つから一つまで。その人の人生がよく現れている様で、真面目か！と冷やかしたくなる。ロマンチックでいいじゃないか。チョット残念なところもあるが。原題は「5to9」。この方がスッキリ。

5/10

状況の厳しさは変わらないが、負けずにプランは立てて行く。7月10日、大阪でこんなことをする。去年はやれなかったが、ずいぶん長く継続してきている集いだ。開催できるといいが。関心があったら申し込んでみてください。

5/11

GW 中は動かなかった。そこで昔、映画館の前の座席にプロレスラー（見たいな大柄）が座って、スクリーン中央が全く見えないというトラブルで見損ねた映画を観た。「2001 年宇宙の旅」、私の世代人にとってはエポックメイキングな作品。

映像が素晴らしい。あの時代にこの画面作りは驚きだ。観た後、YouTube で町山智浩の解説を見て、なるほどなるほどと大笑い、喝采した。

5/12

午前中自宅で zoom。午後から出かけようとしたら雨。この頃よく降るなぁって気がするけど、どうなのか。夕刻から草津市に出かけて、家族勉強会。コロナ禍のこの時期の雨の夕方から。どうかなと思ったが、意外なくらい熱心な参加数。そうそう、今朝の新聞の全面広告、面白かった。

5/13

本日の相談室業務は昨年の受付相談データ入力。年一度のことなので段取りは悪いが、記入しつつ振り返る。家族関係と職場の人間関係が多い。みんな他人に期待しすぎだよね。作業中、電話相談一件。

夕刻、山科の無印カフェで夕飯。なんだか健康志向の女性っぽいメニューだ。この後帰宅して zoom 会合一件。

社会的養護の新展開 17

—親と離れて暮らす子どもたちの養育とその後 5—

浦田 雅夫
大阪成蹊大学

2022 年 1 月 30 日（日）第 13 回対人援助学会（立命館大学人間科学研究所（臨床社会学プロジェクト）との共催）にて、ブローハン聡さん（フリー・モデル・タレント、一般社団法人コンパスナビ)、鈴木章浩さん（児童養護施設　二葉むさしが丘学園　自立支援コーディネーター）をお迎えし、「ステイホームとケアリーバー～ケアリーバーがコロナ禍の社会を生きるということ～」と題し、社会的養護を終えた若者がコロナ禍を生きることについて語り合った翌日、2022 年 1 月 31 日から 2 月 1 日にかけて、社会的養護からの自立に関するニュースが大々的に報じられた。2023 年に予定されている児童福祉法の改正に伴い、いわゆる「18 歳の壁」といわれる年齢制限による措置解除について、年齢制限ではなくニーズによって都道府県が判断する方針になるとの報だ。これは、社会保障審議会児童部会社会的養育専門委員会の報告を受けてのものである。この委員会には社会的養護経験者も参加している。

報告書では、若者の措置解除にあたって以下のような記述がある。備忘録的に確認しておきたい。

「20 歳や 22 歳といった年齢ではなく、児童等の置かれている状況や児童等の意見・意向、関係機関との調整も踏まえた上で都道府県等が必要と判断する時点（例えば、他の福祉制度へのつなぎができる等）まで自立支援が提供されることとする。
具体的には、20 歳まで自立援助ホームに入所していた児童等や、児童養護施設等に入所していた児童等又は里親等の委託を受けていた児童等は、20 歳以降は、児童自立生活援助事業を活用し、それまで入所していた児童養護施設等や自立援助ホーム、委託を受けていた里親等により都道府県等が必要と判断する時点まで自立支援を受けることを可能とする。その際、都道府県等が必要と判断する時点については、国として一定の考え方を示すこととする。（令和 3 年度　社会保障審議会児童部会社会的養育専門委員会　報告書 P30)」

養護ニーズによって判断するというのは、社会的養護の本来的な機能であるはずだが、実際には制度に縛られ、多くの若者は 18 歳で自立を強いられてきた。また、これまでにも何度も指摘してきたが、彼らは、18 歳に至る前に、高等学校等を中退し、所属がなくなった場合、措置解除されるようなことがしばしばあった。いや、いまも少なからずみられる。

2021 年 10 月 5 日に開催された「第 35 回社会保障審議会児童部会社会的養育専門委員会」では、委員のひとりである社会的養護経験者が次ように述べている。

「高校を中退した方とか、アルバイトで収入があるとか、あと、通信制に通わせない施設がある等全国、かなり多様な施設や里親家庭があって、やはり 15 歳で出されてしまう若者がいるのも現状かなと思います。また、施設や里親家庭は受入れが可能と言っていても、児童相談所は措置を切ってしまうこともこれまでにも何件も聞いています」
（第 35 回社会保障審議会児童部会社会的養育専門委員会　議事録より　社会的養護経験者のコメントの一部）

現行でも措置延長や社会的養護自立支援事業等の活用により状況によっては 22 歳まで社会的に養育を受けることができるが、上記のように義務教育で措置解除となる若者もいる。むしろ本来的には養護ニーズが非常に高いケースであるといえる。

こちらもまた、2021 年 10 月 5 日に開催された「第 35 回社会保障審議会児童部会社会的養育専門委員会」において、社会的養護経験者である別の委員のコメントである。

「子供・若者の状況・ニーズによって、年齢で区切らず、施設や里親家庭等にい続けられるようになる支援の拡充はとても重要なことであると思います。一方で、やはり物理的にい続けられない子供・若者も多くいます。例えば進路、進学先・就職先によって県外に自立せざるを得ない人や施設・里親家庭の人間関係等で元いた場所で生活できなくなってしまった人、また、措置延長していただけなかった若者、障害ボーダーで福祉の利用もできず、自立援助ホーム等にもつながりづらく自立してしまう若者であったり、もちろん、自分で自立を選択する若者もいるかと思いますが、やはり自立した若者は皆、同じ状況ではなくて、自立するときの背景も違いますし、い続けたかったのにい続けられない場合もあります。本来サポートを必要としているのが、サポートを得られずに自立してしまうこともありますので、何度か委員会でも発言させていただきましたが、やはり元いた施設・里親家庭にいないと支援を受けられないということは若者の行動や移動の選択肢を制限してしまうことになりますので、やはり既存の施設であったり里親に頼らない支援の枠組みを検討していただきたい。

あと、施設・里親家庭からのサポートを得られない人も含めた、安心して移行していけるような住宅支援等をどのように考えていくべきか、検討していただきたいと思います。（略）やはり公営住宅等を活用した住宅の支援なども考えられるのではないかと思います。自立後のケアを受けるのも子供の権利ですし、自立後のケアを受けるかどうかを子供たちが選べる必要もあります。退所した人全員が必要なアフターケアをどこでも必ず受けられるようにすべきだと思いますので、今後も検討し続けていく必要があるかと思います。」
（第35回社会保障審議会児童部会社会的養育専門委員会　議事録より　社会的養護経験者のコメントの一部）

今後、児童福祉法の改正により、報告書の示す方針のようになるとすれば、養護性の高い若者が社会に放り出されることがないよう、ニーズのアセスメント、措置解除の判断を誰がどのように行うのかが重要である。一方で、さまざまな理由から自ら社会的養護での生活を拒否する若者も存在するだろう。この委員のコメントのようにすべての社会的養護経験者が、どのような状況でも、どこにいても必ずアフターケアを受けられるようにするべきである。

児童養護施設の職員である委員は次のようにコメントしている。

「養育現場から見ると、人との関係性を通して安定性や信頼性が育まれていき、それを実現していく中には子供に携わる養育者側の意識であるとか覚悟であるとか、そして、子供のニーズに即したソーシャルワーク力が必要になると思います。そういう意味では本当に自立支援は課題山積だと思うのですが、施設につながり続ける子供たちの場合は一定、施設側が関わりながら支援ができるということでは、それはそれとして大切なことなのですが、ただ、やはり全ての子供たちが施設につながっているわけではない現実もあります。その辺のところをすくい上げるネットの在り方といいますか、そういう意味では公的にそういうよりどころとなるような場所が必要かと思います。
ただ、この事業が有効な事業として今後機能するようにしていくためには、ぜひとも現場に関わっている、そうした各関係機関の声を聴きながら事業を豊かにするように努めていただきたい。」

社会的養護自立支援事業の法定化による自治体間格差の是正とニーズにあった支援体制が求められる。

厚生労働省社会保障審議会（児童部会社会的養育専門委員会）
https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/shingi-hosho_126712.html

48・親子コンサート

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

今回のテーマ「親子コンサート」は、右のチラシをご覧いただいてわかるように、沼津市内の私立幼稚園と認定こども園が加盟する【沼津市私立幼稚園協会　=略して沼私幼】という団体での親子コンサート企画運営の記録です。

協会の規模は全20ヶ園（園児約2,400人　教職員約450人）で、幼稚園と認定こども園が加盟し今年度は私が協会長を務めています。静岡県下の幼稚園・こども園団体では、幼児教育振興のために**「すこやか子育て支援事業*」**という事業を毎年行っているのですが、やり方は各地域に任されています。

沼津では、推進する**『おやこんぼ*』**を前面に出して**『おやこんぼフェスタ』**と銘打って毎年イベントを開催してきました。コロナ前は、広いイベント会場を貸し切り、各園のあそびブースを設置して、のべ4,000人ほどの親子が集まって、ブースの先生たちとあそんだり、子育て相談ができる接触型のイベントをやっていましたが、コロナの影響で、昨年度はオンラインでのあそび動画配信、そして2021年度は感染状況が下がってきたのを見計らってコンサートを企画しました。１月から急激に感染が広がってきたので、滑り込みセーフ！って感じで実施することができました。

結果は当日のキャンセルも結構出ましたが、約500席を使用する予定のホールで、密を避けての適度な人数だったと思います。

◆参加人数（無料）

午前の部　申込414　参加283
午後の部　申込379　参加257
合　　計　申込793　参加540／出席率68%

コンサート終了後に、アンケートを取ったのですが、コロナ禍で大人だけではなく、子どもたちのライブ経験が極端に減っているというか、生まれて初めてのライブというコメントも多く、改めて機会の喪失があることに気づかされました。

- - - - - - - - - - - - - - - - - -

*おやこんぼとは、親子のゆかいな時間を通して絆を強くするプロジェクト／マガジン第9号参照』

*静岡県私立幼稚園振興協会と静岡県からの補助金を使って、園児や未就園児向けに各地区単位で自由に企画運営する事業

- - - - - - - - - - - - - - - - - -

《参加者の感想紹介》

ROCO・こどもじゃずを事前に知らない方が90%だったにも関わらず、アンケート回答者の全員が楽しかった、次回も参加したい！という回答をよせてくれて、自由記述にもたくさんのコメントをいただきました。親子の貴重なおやこんぼの時間になったことが、とても嬉しかったです。

♪参加者アンケートから

コロナが蔓延するこのような状況下、子供が楽しめるイベントが軒並み中止になってしまうことが続いていましたが、今回おやこんぼコンサートを開催していただき、本当にありがとうございます。コンサートが始まった瞬間から娘が笑顔になり、音楽に合わせてノリノリで、とても楽しんでいました。

ジャズのアレンジがとてもかっこよく、大人も楽しめてあっという間の時間でした。
娘は終わった後もずっと「楽しかった！もっと聞きたい！また行きたい！」と言っており、娘にとって初めてのコンサートがとても思い出に残る素敵なものとなりました。
参加させていただき、本当にありがとうございました。

はじめはじっと見ていただけの娘でしたが、だんだんと手拍子をしたり、体をゆらしたりと楽しんでいる姿を見ることができ、嬉しかったです！

普段なかなか生の楽器演奏に触れる機会が少ないので、子どもにとっても、新鮮で良い経験になりました。ROCOさんの素敵な歌声に合わせて親子で歌ったり手遊びしたり、とても楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

大人も楽しめました！
ジャズという分野はあまり馴染みがなかったのですが、童謡だった事でジャズ初心者の私でも入り込みやすかったです。
40分という時間も子供が飽きずに楽しめて丁度良かった。

子どもが大変喜んでおり、また行きたいと何度も話しておりました。
舞台の上での生演奏を見る機会がなかなかないため、とても新鮮だったようです。
また是非宜しくお願い致します。

はじめはじっと見ていただけの娘でしたが、だんだんと手拍子をしたり、体をゆらしたりと楽しんでいる姿を見ることができ、嬉しかったです！

娘はもちろん、大人の私も一緒に楽しめる、とっても素敵なコンサートでした。コロナ禍で気軽に出かけられない中、日頃から親しんでいる歌をロコさんのステキな歌声とジャズのリズムに合わせて体も心も揺らしながら娘と一緒に過ごした時間はとてもかけがえないものとなりました。ネット配信などが当たり前になるご時世、生の演奏、生の歌声はやはり胸に響きます。ありがとうございました。

はじめてコンサートに行きました。ジッと座って聴けるのか不安でしたが、手拍子したり一緒に歌を歌ったりとても楽しそうにしていて、参加してよかったなと思いました。
終わってからも、楽しかったねと嬉しそうに話してました。

コロナ禍で行事やイベントなど中止が多い中、開催していただき感謝致します。
開演の幕が上がり、カラフルなステージに大人も子供もわくわくしました。なんと言っても、ロコさんの笑顔と歌声にとても癒され、元気をいただきとても楽しいステージでした。
観客席からみるステージは、色、アイテム、バランス、そして穏やかに流れる時間、どれも完璧で子供に本物を見せる事ができとても幸せでした。

感染者数が増えているので参加させていただくのに迷いもありましたが、素敵な時間を家族で共有できてとても楽しかったです。
オンラインでは味わう事のできないライブ感が最高でした！ROCOさんの明るく楽しいおしゃれな音楽も大好きになりました。
娘にもこれからたくさん聞かせたいです。
今日は本当にありがとうございました。

音楽に興味のない息子が手を叩き飛び跳ねて楽しんでいました。こんなに楽しんでくれるとは思っておらずおどろきました。母まで一緒にリフレッシュさせていただき感謝しかありません。ぜひまた参加したいです！

あらためてこういった形で聴くと、歌詞がいいなー、歌っていいなーと感じることができた。歌が好きな３歳の我が子もノリノリで手拍子をしたり、歌の中で一緒に触れ合ったりと楽しい時間となり、またいきたい たのしかった と大満足だったようだ。
まさしくおやこんぼの為のコンサートといったかんじで一緒に楽しむことができた。このご時世なので休日に行く場所がなく家にいることが多かったが、久々にコンサートを見ることができ、私はもちろん子どもにもいい刺激となったようだ。

《オンラインで準備を進める》

これまではイベントの形式も違いましたが、実行委員が数回集まり会議を重ねて本番の準備をする形式だったのですが、コロナの感染対策を講じながら準備を進めるとき、人が集まるのを避けてオンラインで準備を進めていくことにしました。各園から一人ずつ「実行委員」を出してもらうのは同じですが、連絡や資料の共有はChatworkという連絡アプリとGoogleスプレッドシートを使って、１回も実行委員が集まることなく当日を迎えました。コロナ２年目ということもあり、各園のＩＣＴが進んでおり先生方も扱いに支障がなかったことも功を奏したと思います。

《段取り時系列》

時期	段取り	準備内容
2021年 8月～9月	出演オファー打診 コンサート承認	コロナ感染縮小を見て、当初予定していたフェスタの計画を白紙に戻し、沼私幼園長会でコンサート実施とＲＯＣＯさん出演についての承認を得る→ここから具体的に動ける。
10月	出演決定 会場予約	本来なら１年前には予約しなければ実現は難しいところ、コロナ禍でライブが減っていたために、奇跡的にマッチング。小ホールしか取れずに２ステージを行ってもらい人数を稼ぐことにした。 ここから、出演者事務所との出演交渉を密にしていく。
11月	座席割り振り決定	感染対策のため、座席は園と園の間隔を開けなければならず、園児数比率で各園の座席割当数とエリアを予め決める。
	告知案内文作成	告知のためのチラシ、協会からの案内文、座席チケットを作成し、配布日までに各園に届けておく。
11/26	告知＆申込開始	一斉に各園で案内チラシを配布し、申し込み受付を開始する。
12/10	参加者決定 ↓ 参加者名簿作成	各園で座席の調整をしつつ申込を受け付け、12/10でフィックスし、チケット配布までに参加者の名簿を作成する。 名簿はGoogleスプレッドシートに各園で実行委員が入力。 参加者名簿は感染対策で必要となる。
1/7	チケット配布	この頃から、コロナ・オミクロン株が急速に拡大しつつあり、実施についての問い合わせも増えてきたので、感染リスクを承知の上で参加していただくことと、当日キャンセルも可という旨を参加予定者に周知してもらう。
1/15	当日 9:00～16:00	午前の部　申込414　参加283　出演スタッフ6　　協会委員22人 午後の部　申込379　参加257　出演スタッフ6　　協会委員22人 ※協会内訳／園長11名、委員11名（午前午後交代制）
後日	精算・まとめ	アンケートまとめ（抽選→プレゼント発送） 支払い、県私幼への報告書を作成して終了。

《資料編》園や協会などの団体での企画の参考にしてください。

（1）委員の連絡ツール

LINEでグループを作るより、資料の添付などが容易にできるSNSが良いと思います。
Chatworkの設定のために一度全員で集まったほうが手っ取り早いですが、メールアドレスで参加者を募ることもできます。沼私幼では２年前の実行委員会で各園のChatwork設定は済んでいましたのでスムーズにいきました。
（その他の連絡アプリもいろいろあります、使い慣れた物がオススメ）

Chatwork

https://go.chatwork.com/ja/

（2）参加者名簿は、代表者が**Google**のアカウントを取って**スプレッドシート**を利用する。

（プリントして当日の受付名簿にする）
会場の座席レイアウトに合わせて作りかえる必要がありますが、
Googleスプレッドシートのサンプルはこちらで閲覧下さい。
（ダウンロードし、タイトルなどを変更してお使いください）

https://docs.google.com/spreadsheets/d/1uwK7KRXWeY1DvtViWPWhX8syDQLTIFvsXHco-f-V2y4/edit?usp=sharing

（参考までに）沼津市民文化センター小ホール座席表

http://numazu-kousya.jp/culture/facility_outline/facility/pdf/seat_view_small.pdf

（3）計画書１／最初に共有したざっくりした計画書

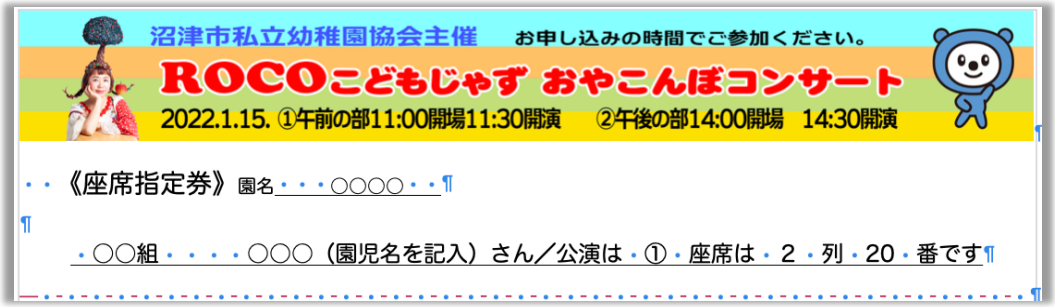
ROCOこどもじゃずおやこんぼコンサート計画	
	2021.11.2.沼津市私立幼稚園協会　おやこんぼ委員会
	おやこんぼ委員+沼私幼役員（鶴谷、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇）
1.名　称	**ROCOこどもじゃず　おやこんぼコンサート（無料）**
2.目　的	（１）沼津私立幼稚園の存在と活動を広く市民のみなさんに知っていただく。 （２）おやこんぼの意義のもと、在園児の親子がともに親子で楽しむことによって、子育てに対する喜びと関心、おやこんぼへの理解を深めていただく。 （３）新型コロナの制限が緩和されたことで、機会が減っている親子コンサートを開催する。 ※文化センター収容人数の関係で、今年は在園児関係者のみを対象とする。
3.ROCO	2010年、童謡にジャズのテイストを加え、ポップ調にアレンジしたカバーアルバム『こどもじゃず』を発売。カバーアルバムとしては異例のロングセラーとなる。「おひさまーち」などNHKおかあさんといっしょへの楽曲提供もしている。 http://worldapart.co.jp/roco/
4.日程	**2022年１月１５日（土）おやこんぼday！** **1回目：11:00開場/11:30開演(40分) 物販12:10～12:40** **2回目：14:00開場/14:30開演(40分) 物販15:10～15:40**
5.段取り	①沼津市民文化センター予約、ROCO所属会社ワールドアパートとの交渉（鶴谷） ②実行委員係分担打合せ **③在園児に広報（11月中旬）→各園予約受付（12/10〆切）→１月11日座席券発行** ④当日会場準備＆受付管理・子育て相談と記録 ⑤感想アンケートをとる
6.経　費	別紙「おやこんぼフェスタ2021予算案」参照
7.備考	ROCOと日程を合わせて１月実施→大ホールはすでに予約が入っており小ホールのみ取れました。なので２公演。 **感染予防のため小ホール利用人数は526のところ504席、更にグループ（園）ごとに一席空ける必要（-20席）従って、チケット配布は各園の割当数（別紙参照）を決めて各園ごとに予約を取る。（先着順？抽選は各園にて）** 12/10〆切で、各園で余った座席数を、キャンセル待ちの方に振り分ける。 **★今後は、実行委員で係を割り振り、座席、当日の係等を決めていきます。職員でコンサートを見たい方は当日のお手伝いで手を上げて下さい。**

（4）計画書２／具体的な日程と段取りができてきました。

各園でのコンサート案内とチケット配布の段取り

	時期	実施内容
（1）	**11月26日**	**①チラシ、②会長挨拶文２枚+③園長名で参加申込書を配布（計４枚）**
	25日迄に	・チラシとチケット（座席指定券）は拠点園に取りに来てください。 ・保護者宛案内手紙は各園でプリントして配布して下さい。
（2）	**12月10日までに**	**申込を受付→参加者を決定して通知**
	座席はMAX割り振ってありますので、座席を減らしたり、抽選方法はお任せします。（感染予防のため空席確保もアリです）	
	12/10～終業頃まで	空席を譲っても良い園は、その数をChatworkでお知らせ下さい。 空席情報を見て、欲しい園はChatworkで返事をして、先着順に個々に交渉します。 空席を譲る場合、なるべく端の席から座席番号をその園に伝えます。 譲り受けた園は、チケットに譲ってもらった園の座席番号を書き入れます。

チケット記入見本はこちらです。保護者の分も園児名で発行して下さい。

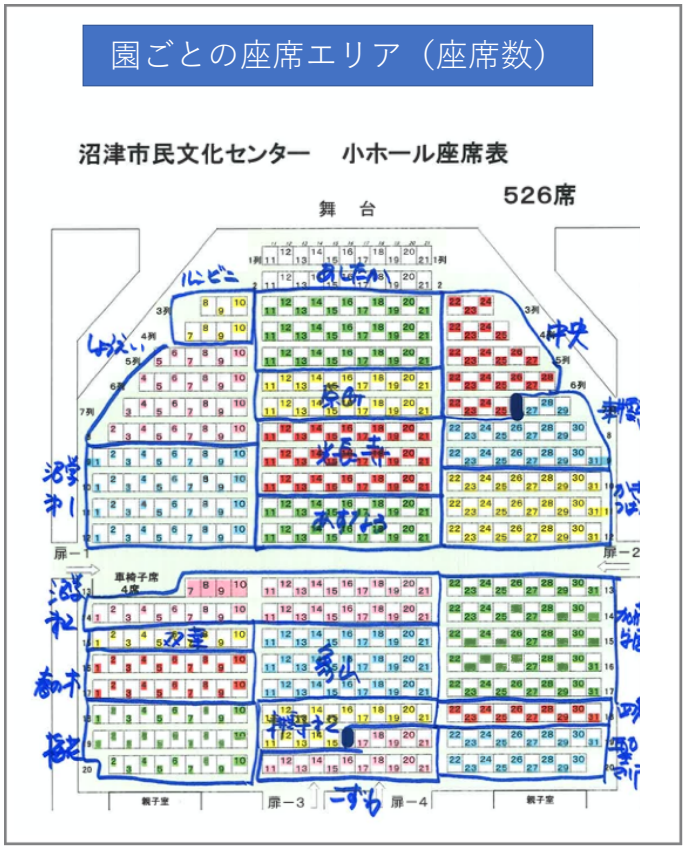


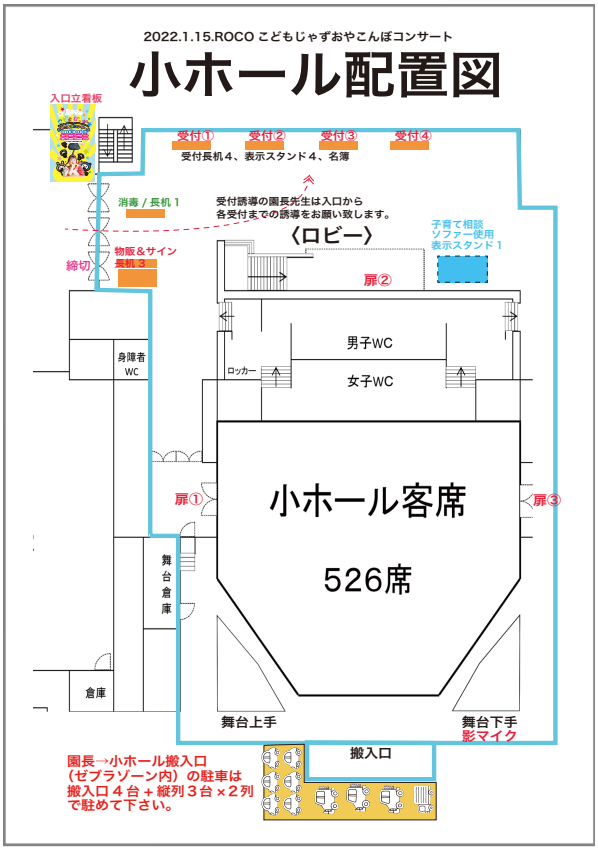
◎チケットは少し余分に配りますが、足りなくなったら原町幼稚園まで連絡下さい。

（3）	**1/7までに**	**チケット配布＆受付名簿に参加者名を入力**
	事前に入力できるか確認してみて下さい！ うまくいかない、トラブルの場合は鶴谷まで連絡下さい。	入力作業はGoogleスプレッドシートを利用して各園が入力できるようにしました。 PCを使い、下のリンクからシートに飛んで自園の欄に名前等を書き入れてください。 https://docs.google.com/spreadsheets/d/1uwK7KRXWeY1DytViWPWhX8svDQLTIFvsXHco-f-V2v4/edit?usp=sharing 受付で読むので、ひらがなで記入して下さい。 他園から譲り受けた場合は、譲ってもらった園の欄に記入するので、 確認（当日ﾁｪｯｸ）欄に園名を二文字程度で省略して記入しておいて下さい。 名簿は鶴谷がプリントして当日持参します。
	スプレッドシートでの入力ができない方はChatworkで鶴谷まで連絡ください。Excelシートを送ります。	
（4）	**1月15日**	受付係が、チケットと名簿をチェックして本人確認します。 感染等が発生した場合、座席の位置で感染状況を把握します。

※チケットやチラシ、看板のデーターは添付してありませんが、すべて自前で製作しています。実施を考えていらっしゃる方には必要なテンプレートをお渡しします。どうぞ気軽にお問合せ下さい。

（5）座席表と配置図／エリア割り振りと当日のホールレイアウト





（6）当日タイムテーブル

タイムテーブル(1月15日当日)

ROCO

こどもじゃず~おやこんぼコンサート~

TIME	進行	照明	PA	MEMBER	ETC&委員	園長
9:00	9:00スタッフメンバーＩＮ Setting					園長ＩＮ 打合せ
30	9:30-10:30サウンドチェック				午前委員ＩＮ	
10:00					段取り確認・準備	
30	ＳＴＡＮＤＢＹ			メイク	スタンバイ	
11:00	OPEN				開場（混雑時早め開場）	
30	11:30-12:10（40）　1ｓｔ ＳＨＯＷ ＴＩＭＥ					
12:00					物販＆サイン会 会場消毒 終了後退館	順次昼食
30						
13:00				昼食	午後委員ＩＮ	委員段取り確認
30	ＳＴＡＮＤＢＹ			メイク	スタンバイ	
14:00	OPEN				開場（混雑時早め開場）	
30	14:30-15:10（40）　2nd ＳＨＯＷ ＴＩＭＥ					
15:00	客だし･バラし･搬出				物販＆サイン会 会場消毒	片付け
30						
16:00					片付け	終了後退館
30	17 00退館予定				終了後退館	
17:00						

（7）経費

おやこんぼフェスタ2021　経費

項目	収入	備考
すこやか子育てフェア事業費助成	295,000	静岡県私立幼稚園振興協会
県子育て相談、情報提供事業費助成	215,000	静岡県
収入合計①	510,000	

	項　目		支出	2021備考
1	会場経費	文化センター使用料	14,650	センター本部へ
3		備品類使用	85,030	文化センター舞台使用料
4		ピアノ調律	20,900	楽器店
5		会場設営	110,000	舞台装飾（ワールドアパート）税込
6		アーティスト出演料	550,000	（ROCO/ワールドアパート 3+2=5名）税込
7		出演者抗原検査	22,003	現地購入
8		プレゼントCD	7,850	アンケートプレゼントCD5枚
9		当日出演者＆スタッフ弁当等	20,063	弁当バルテール/出演者・園長・出演者楽屋依頼品（飲料等）
10	広報事務経費	チラシA4	7,880	3500枚園児分/ラクスル
11		看板会場内	28,468	入口縦看板/ラクスル
12		入場チケット	20,000	プリント代
13		会場表示関係	10,000	スタンド表示・受付プリント他
14		雑費・その他	10,000	送料・振込手数料・@500×20
支出合計②			**906,844**	
収支差額（①-②=沼私幼負担）			**-396,844**	沼津市私立幼稚園協会負担

※計画は全てこちらで立案してChatworkで共有し、疑問に思うことはそこで解決するようにしてきました。このほかにも、園長の仕事分担や、実行委員それぞれの仕事内容を記載した資料があります。（ここに掲載はしていません）

（8）案内文／各園にデーターを送信し、プリントして配布したもの。
実際には申込書と３枚組セットで配布しました。

沼津市私立幼稚園・認定こども園
保護者の皆様

2022 年 1 月 15 日（土）おやこんぼ day！
『ＲＯＣＯこどもじゃず おやこんぼコンサート』のご案内

2021 年 11 月 26 日
沼津市私立幼稚園協会　会長　鶴谷主一

日頃より幼稚園・認定こども園の教育にご理解・ご協力下さいましてありがとうございます。毎月 15 日には親子で楽しい時間を過ごす**「おやこんぼ」**にもご協力いただいていることを感謝いたします。

さて、今年も大勢の人数が集まっての「おやこんぼフェスタ」の開催は見送りとなりましたが、代わりに親子で楽しめるコンサートを企画いたしました！

今回出演して下さるＲＯＣＯさんについてはご存じの方も少なからずいらっしゃると思いますが、ご本人のオリジナルアルバムだけでなく、馴染みのある童謡をステキなジャズテイストにアレンジしている**『こどもじゃずシリーズ』**はロングセラーアルバムとなり全国の子どもたちに親しまれています。

コロナ自粛の影響で、大人もライブ音楽にふれあう機会がめっきり減ってしまった昨今、子どもたちも同じように体験することができなくなっています。コロナが落ち着いている今、「いまだ！」というタイミングで出演を交渉し開催に至りました。

文化センター小ホールでの開催となりましたので、人数制限もあり、やむなく在園児限定で、園の園児数比率により座席数を割り当てさせて頂きました。場合によっては抽選となる場合もあるかと思いますが、多数の応募があれば、次回開催も視野に入れることができますので、ふるってお申し込みください！

おやこんぼ
OYACOMBO

おわりに

以前から、地方に住む子どもたちは、コンサートや演劇などの文化に触れる機会が少なく、地元でできるといいなあ、と思っておりました。図らずもコロナのお陰でそれが実現できたことと、協力してくれた関係者の皆さんに感謝です。

ROCOさんの所属するワールドアパート有限会社の根本さんとは、数年前からROCOさんのコンサートに出かけていってコンタクトを取っており、５年越しぐらいで実現した訳です。実施にあたっては、出演料を勉強していただいたり、舞台との調整など何回も連絡しつつ援助いただきました。感謝しています!

参加者感想からもわかるように、子どもも大人も楽しめる質の高い親子コンサートにはROCOさんは最適だと思っています。ぜひ、興味を持った皆さんもお願いしてみてはいかがでしょうか(^o^)/

http://worldapart.co.jp/

沼津でも、来年度も！だけでなく恒例の事業になれば良いなあ、と願っています。

原町幼稚園　園長　鶴谷主一（61歳）　ＨＰ：http://www.haramachi-ki.ed.jp/

－ － － － － － － － － － － － － － － － － －

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
第31号　幼稚園の音楽教育（その2・こどものうた）2017.12
第32号　幼稚園の音楽教育（その3・コード奏法）2018.03
第33号　〔休載〕（2018.06）
第34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
第35号　働き方改革って難しい（201812）
第36号　満3歳児保育について（2019.03）
第37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
第38号　プールができなくなる！？（2019.09）
第39号　跳び箱（2019.12）
第40号　幼稚園にある便利な道具（紙を切る）（2020.03）
第41号　コロナ休園（2020.06）
第42号　コロナ休園から再開へ（2020.09）
第43号　ティーチャーチェンジ（2020.12）
第44号　除菌あれこれやってみた（2021.03）
第45号　マスクと表情（2021.06）
第46号　感染予防と情報発信（2021.09）
第47号　親子ソーラン節（2021.12）
第48号　親子コンサート（2022.03）

▶気になる記事・ご意見ご質問等ありましたら

気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

－ － － － － － － － － － － － － － － － － －

福祉系対人援助職養成の現場から㊽

西川　友理

実習先から、評価表が返ってきた！

　実習が終わって、一週間ほど経った頃。
「そろそろ実習先から評価表が返ってきていますよー！実習自己評価表をまだ出していない人、出さないと、評価面談出来ませんよー！」
というと、書類や課題の提出が遅れがちなA さんやそもそも提出しないことが多いB君も、慌てて提出しようとします。
「わー、出すの忘れてた！今日出します出します！」
「私の評価面談、いつですか？」
　毎回これだけ必死に出してくれたら採点と管理に苦労しないのに！と思うほど、提出率のいい課題です。

事前・最中・事後の実習指導

　福祉系対人援助所の現場での実習についての授業は、一般的に「〇〇実習指導」と

いう形で実施されます。〇〇には保育とか介護とかソーシャルワークとか、それぞれの資格特有の名前が付きます。養成校によって、科目名は少し違うこともありますが、おおむね「実習指導」という名前で開講されています。

実習指導は、大きく分けて実習前の指導、実習中の指導、実習後の指導があります。このうち、多くの養成校では、実習前の指導にウェイトが置かれていることが多いように感じています。

それは考えてみれば当然で、今まで現場に入った経験がほとんどない学生が、利用者さんの生活の場に入り込むのだから、教員としてはそれなりの知識や技術を持って挑んでほしいと考えるためです。なにより、利用者様の生活に関わる人としての倫理観や最低限のマナーはしっかりと伝えたいところです。それから、実習全体の流れの説明、事務的な書類の作成、具体的な手続きなども説明しなければいけません。それぞれの現場には独特の言葉遣いや手法や文化があるので、ある程度は伝えてリアリティショック（学生が実際の現場を見てショックを受けてしまうこと）を回避する準備も必要です。

せっかく実習させていただくのです。利用者様の生活や権利を侵害するようなことのないように、現場職員の方々のお仕事の邪魔にならないように、そして学生がきちんと意味ある学びが出来るように…。そう考えると、自然と事前指導には力が入ります。学生も、ほぼ未知の世界に飛び込む準備ですから、期待しながら怖がりながら、聞き漏らしたら自分が困る！とばかりに、前のめりで講義を受講します。

そして実習中指導。養成校の教員は、実習をさせていただいている学生の様子を伺いに、実習先に向かいます。現場職員の皆様からもお話を伺い、学生の実習がより良いものになるように一緒に考えます。養成校教員と目が合うと、おやっ！と目を丸くし、笑顔で一礼する学生。実習先で気が張っているためか、顔を見たとたんに緊張が崩れ、泣き出してしまう学生もいます。学生と面談するための場所をお借りし、今まさに学びの現場の真っ最中にいる学生に、まずは心身に不調はないか、何か困っていることはないか確かめ、これまでの実習でどのような学びをしたか、今後実習期間終了までに何を目標とするか、短い時間でしっかりと話をします。毎日気を張り目を配り、利用者と職員の間を動き回り、帰宅してからはその日の記録を何時間もかけて書き…多くの学生はエネルギー全開、これ以上ないというほど頑張っている日々の真っ最中です。

そして実習後指導！

さぁ、そんな実習が終わりました‥‥最後まで走り切った学生たち。実習直後は思わず気が抜けてしまいがちです。実は養成校教員もこの時ばかりはホッと一瞬気が抜けてしまいます。特に昨今はコロナのこともあり、実習期間がなんとか終了した瞬間には、心の底から安心してしまいます。

しかし私は、実習指導としてはここからが正念場だと考えています。個々の体験を、学びに昇華させる作業が始まります。

実習で印象に残ったことや勉強になったことを書きだす、実習での一場面を取り上げてプロセスレコードという手法で詳細に

振り返る、皆で実習先での体験を話し合う、実践の中から理論や倫理綱領と繋がっていたところをピックアップする、体験を踏まえて自分がなりたい専門職像を描き出す…実習での体験を使って、様々な形で振り返ります。実習はやりっぱなしで終わるのではなく、実習全体を振り返るプロセスがとても重要です。

評価面談とは

さて、冒頭に挙げた評価面談とは、その振り返りの一環として行うものです。

実習が終わると、学生の実習中の学習状況について、実習先からの評価表が返却されてきます。返却されてきた評価表そのものを直接学生に見せることはまずありませんが、教員がそれを見ながら、学生に実習先からの評価を伝え、学生が自分で書いた実習自己評価表と照らし合わせ、一緒に実習について振り返り、今後の学びについて考えます。どの養成校でも実施しているわけでもないようですし、評価面談と言う名前がメジャーというわけでもないのですが、ここでは暫定的にそのように呼ばせていただきます。

実習先の許可を得た上で、実習先が書いて下さった評価表を全て学生に見せている養成校もあると聞いたことがあります。あるいは、実習先に事前に「この部分は学生に見せますので、そのつもりで書いて下さい」という所見を書くコーナーを作り、その部分だけは直接学生に見せている学校もあるようです。

実習自己評価表はその面談の時に使うツールです。自分で書いた自己評価と実習先から返却された他者評価を比較し、確認することで、自分の実習を振り返ることができます。

私自身は多くても一学年 100 人程度の大学にしか勤務したことがないので、特に変わったことがなければ１対１の面談はなんとか時間をかければ実施することはできますが、大規模な人数の大学になってくると、それはそれでまた別の方法をとっているようです。例えば実習担当者ではなく、ゼミ担当が評価面談をしたり、巡回指導教員が面談をしたり等、大学によって方法は工夫されています。

評価面談を受けたがる理由

この評価面談、学生は皆自分がどのような評価をされたのかを怖がりつつも楽しみにしているようで、とにかくほとんどの学生が心待ちにしています。なぜこんなに学生は、評価面談を受けたがるのでしょうか。

それは、学生各々が実習先でこれ以上ないというほど頑張ってくるからではないかと感じています。その努力に対して、きちんと褒められるのではないかと思い、とても楽しみにしているようなのです。

ありがたいことに実習先の先生方は、ほとんどの方がまずは褒めるところや努力したところを評価表の所見欄に書いて下さいます。それを伝えた時の学生の嬉しそうな顔たるや！実習先やその学生の親御さんにお見せしたいほどです。

そして当然ですが、いい評価ばかりではありません。きちんと改善点も書いてきてくださいます。

「ああ、それですね…わかります、確かに

それはうまくいかなかったです」
「それ、私どうしても難しかったです…」
と言いながら、その時の様子を振り返る学生。
「ええっ！私、それに関してはちゃんとやっていましたよ！」
と言っている学生も、一緒に詳しく状況を振り返ると、思い当たる節があるようで、
「やっているつもりだったんですが‥‥確かにちょっと足りなかったかも…」
と、納得していきます。
時には、学生が自分自身で想定しているよりもかなり低い評価で、それを聞いた学生が涙を浮かべてしまうこともあります。そのような場合でもおおむね、学生は結果を受け入れ、次に向けての改善案を一緒に考えることが出来ます。

納得感のない評価

しかし、ごくまれに学生が評価に対して納得がいかないような顔をする時もあります。
例えば、単純に同じクラスを担当していた別の学生と間違えていらっしゃるのではないかという内容の評価。それから、当たり障りのない、「今回の経験を今後の学びに生かしてください」といった趣旨のみの評価。そんな時、学生はちょっと失望したような表情を浮かべます。

学生は、しっかりと自分を「見て」ほしいのだと思います。評価が良かったか悪かったかというより、頑張ったところを見てくれていた、どうもダメだったところをしっかり指摘してもらっていた、それで納得感が生まれるようです。
実際にダメなところを指摘してもらった評価表に対しては、ショックを受けつつも、
「ちゃんと見てくれてはるんですね…」
と落ち込みながらも、しみじみとつぶやく学生です。

“最近の若いもん”の真面目で真摯な姿

最近の若いもんは、というような、若者を低く見るような言い方がありますが、とんでもない。上記のような様子を見るにつけ、学生はちゃんと伸びたがっている、成長したがっている、良く成りたがっているんだなぁという印象を強く持ちます。
万が一、適当にしようとか、まぁこれくらいでいいやろ…といった手抜きの感覚で行った実習だとしても、対人援助のプロの方々はそれをきちんと「見て」くださり、そして指摘してくださいます。その指摘に対して、彼らはまず、
「そうですね‥‥私、甘く見ていたかもしれません…」
と、きちんと痛みを感じます。

いつも本当に、ありがとうございます！

評価表の入った封筒が現場から養成校に返却されてきます。それを開封するのは実習担当者です。封を切る時にはいつも緊張します。所見欄のスペースいっぱいにびっしりと細かい字で書きこまれた学生への評価を見ると、本当に胸が熱くなります。言葉一つ、表現一つに、
「どうすればこの学生に伝わるだろうか」

「どういう表現なら、理解してもらえるだろうか」
「指摘したことを心に留めた上で、次に向かう気持ちで頑張ってもらえるだろうか」
と、試行錯誤しながら書いてくださっていることがわかります。
現場のお仕事が忙しい中、この学生をしっかり「見て」くださり、こんなに時間を使ってくださり、思いを持ってくださり、文章にしたためてくださっている。感謝してもしきれません。

それらの思いをきちんと伝えることが、養成校教員の大事な仕事だと考えています。そして、学生にはちゃんとその思いを、受け止める力量があります。

現場と養成校で、専門職として成長しようとする学生をサポートする、というのは、こういうことだろうなと思います。

現場と養成校の連携で、養成する。

多くの養成校で例年開催されている実習懇談会や実習連絡会。養成校が日頃お世話になっている実習先様を招待し、より良い実習について話し合う場です。これについて、多くの養成校では、新型コロナウィルスの影響で、昨年と今年については開催されなかったようです。

何でもそうですが、「残念だけど今年は中止にしましょう」という事が２年も続くと、関わる人達の状況は変化します。現場も養成校も、然りです。そんな中でも、実習生は現場と養成校を行き来します。

先日オンラインで養成校何校かと福祉現場の実習担当者が、実習について話し合う機会がありました。養成校は現場の今の状況を把握しきれていなかったことが分かったり、現場は現場で今の学生達の状況が把握できる機会になったりと、大変有意義な話し合いになりました。
「このところ、実習懇談会がなかったから、こんな話がなかなかできなかったんです。」
「話せてよかった、聞けてよかったです。」
「やっぱり、ちゃんと話し合う機会がないといけないですね。」
と、確認する場になりました。

現場と養成校の有機的な連携があってこそ、次の福祉現場を担う職員を育てていくことができます。それは、ZOOM などのデジタルの手段であっても、実習評価表のやり取りというアナログな手段だとしても、何も変わらないことだと思います。

養成校も、福祉現場も、もう Web での会議やミーティング、研修に慣れてきました。オンラインミーティングで不具合を感じることも、ほとんどなくなってきました。まるでドラえもんに出てくるどこでもドアのように、移動時間と電車代を無視して、私たちは顔を見て話が出来ます。コロナ禍がもたらしてくれた、大きな恩恵です。
様々な形での繋がり方を活かして、新たな連携のあり方、それに基づく実習のあり方が考えられると思います。

現場の先生方、今後とも、一緒に実習生を「見て」いきましょう。どうぞよろしくお願いします！

ああ、相談業務

～愛菜ちゃんの話～

8

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

愛菜ちゃん家族

愛菜さんの家族構成は、父２６歳、母２４歳、長男５歳、次男４歳、長女３歳、愛菜ちゃん２歳の６人家族。父親は塗装関係の仕事。母親は専業主婦。母親自身８人兄弟の５番目で、市では子だくさんなだけではなく、障害を持つ子が何人もいることから有名な一族の次女であった。市内に母方祖父母や兄弟が住んでいる。父親は三人兄弟の次男で、実家は本州にあるが早くに家を出てきており、疎遠な状態であった。

愛菜ちゃんの兄（次男）は脳損傷から歩行困難と知的障害を持つ障がい児で、リハビリのために母子通園センターの訪問を受けている。長男、長女、愛菜ちゃんは保育園に入園している。

相談の始まり

今回のケースは、愛菜ちゃんの１歳半児健診未受診から、家庭の事情を勘案して、訪問で発達検査を実施したことから始まった。１歳半児健診未受診の場合、保健師から何度か勧奨し、それでも受診されない場合は保健師が訪問して確認することが多い。保育園を活用していれば、保育園での様子を確認することもできる。しかし本ケースでは、心身障がい児と三人もの幼児を抱えていること、子どもたちは保育園児だがほとんど通えていないことから、訪問での実施となった。

相談経過

北海道も桜がそろそろ咲くかなという４月終わりに、家庭訪問をした。

愛菜ちゃん（以下本児）が住む家は、二階建ての一軒家である。玄関を入ると、ダイニングルームで座卓がどんとあり、奥に台所がある。座卓のある部屋の隣が居間兼夫婦の部屋のようだった。子どもたちの部屋は二階にあるそうだ。部屋は子どもが多い割には、きちんと片付いていた。

訪問時、父親は留守、障害のある次兄と本児

と母親がダイニングルームにおり、長兄と長女は二階で遊んでいるとのことだった。

本児はおかっぱ頭にピンクのジャージズボンと紺色の少しよれよれになった半そでシャツを着ていた。兄はヘッドギアを付けていて、言葉はなく、座卓に寄りかかりながらなんとか伝い歩きをしていた。本児も兄も、訪問者に興味津々という感じで寄ってきた。兄は、やっと立つことができるようになった 1 歳ごろに、倒れて頭を机の角にぶつけ、頭蓋骨骨折から脳損傷を起こしたと聞いていた。頭蓋骨はまだ穴が開いた状態で、脳を保護するためにヘッドギアを使っているのである。伝い歩きをしている兄は時々倒れそうになるので、また頭をぶつけるのではと、いくらヘッドギアを付けているとは言え、ひやひやした。母親は慣れっこなのか、あまり気にしていない様子だった。

本児はとても人懐こいところがあり、発達検査も楽しんで受けてくれた。発達的には問題なかった。言葉もほぼ順調だった。母親にも本児の発達は問題ないことを伝えて、保育園にできるだけ通わせるようにと話をした。途中で長兄が二階から降りてきたが、騒がしく、落ち着きもなく、母親の注意も指示も通りにくい感じで、年齢からしたら幼いと思われた。母親もただでさえ次男の世話で大変なのに、長兄含め三人の子の面倒を見るのはさぞ大変だろうと思われた。母親は大変だとは言わないものの、怒鳴って言うことを聴かせようとしている様子から、やはり大変なのだろうと感じたため、保育園をより活用するよう勧めたのである。

しかし母親は、本児たちを送り迎えすることができないという。母親は免許を持たず、父親は朝早く出てしまうし、帰宅は夜遅い。従って父親にお願いすることもできない。兄の病院受診があるときはタクシーを活用し、その費用は障害児への補助として配布されているタクシー券を使えているので困らないが、保育園に毎日タクシーを使って送っていくことはできない。

何とか子どもたちが保育園に通える方法はないものか？役所に帰ってから考え、あちこち相談してみた。その結果、地域の主任児童委員の方が、送り迎えをして下さるというので、お願いしてみることになった。毎日というのは申し訳ないので、できる範囲でしてもらうこととなった。こうして本児たちは以前よりずっと保育園に通えるようになった。

数か月ほど経った、北海道の短い夏の始まりのころ、保育園から相談があった。長兄は多動で指示が通らず、園で対応に苦慮しているし、姉と本児の服装が全く異なるというのである。以前は、たまにしか来なかったのでそれほど気にならなかったが、ほぼ毎日来るようになって、様子がはっきりしてきたようである。よくよく聞いてみると、姉は、髪を長くしていて、かわいく結ってリボンを付けてくる。服装も、かわいらしい服を着せている。しかし本児は、いつもおかっぱというより、残切り頭で服は兄のお古と思われるシャツとジャージのズボンばかり。サイズも本児に合っていないというのである。ただ、決して洗濯されていないということでもないし、ボロボロというほどでもない。兄弟間差別があるようだというのである。送り迎えをしてくれている主任児童委員さんにも聞いてみたが、朝や夕方の母親の様子からは、そこまで本児への対応が気になるということはないとのこと。今しばらく特に気を付けて様子を見てもらうように保育園にも、主任児童委員にも伝えた。

その後、しばらくして、保育園から本児のほほに痣があり、聞いてみたら母親に叩かれたと訴えているとの連絡がきた。写真を撮っておくように伝えて、確認に行った。確かに左ほほに３㎝程の痣がついている。どうしたのか聞いてみると、母親の言うことを聞かなかったから叩かれたようだった。

児童相談所に通告し、児相福祉司と一緒に訪問することになった。母親との関係は前回の訪問や、主任児童委員さんを紹介したことで良い

方だったので、同行し、母親の困り感を聞くようにした。母親の話では、本児が食べ物に対し意地汚いという。他の子と同じように食事を与えているのに、三角ごみとりに捨てたようなものまで食べようとするので、何度も注意したが、やめないので叩いてしまったのだそうだ。もともと本児は頑固で、姉と違って扱いにくいと感じていたという。児相福祉司から、いうことを聞かないとしても、叩いてはいけないという話がされ、母親は「以後気を付ける」とのことで今回は月 1 回、家庭児童相談員が訪問し、母親のストレスを軽減するよう話を聴いていくこととなった。

話を聴く中で、母親自身、多い兄弟の中で愛情不足で育った感じがあった。それ故、次女という同じ立場の本児に対し、ことさらきつく当たっていたように思われた。母親は意識をしていないが、原家族における自分の投影である。本児が食べ物を欲しがるのは、愛情不足からくるものであるのは明らかだったので、母親との関係性を回復していくことが必要ではと思い、母親と本児の時間をあえて持つようにという処方をした。しばらくの間、母親は本児との関係性を回復し、本児の表情も良くなっていった。そして、夏が終わりそうなころに、母親の懐妊が発覚。第 5 子出産に向けて母親のストレスが上がっていった。

母親との話の中で、まだ夫婦とも若いので、まだまだ子どもが欲しいのかという話をしたことがあった。その時母親からは、母親自身も兄弟が多かったので、子どもは沢山ほしい、野球チームが作れるくらいほしいと言っていた。父親も同様の考え方だと聞いていた。子どもを妊娠したら生むというのが父母の考え方であった。したがって今回の妊娠は特に驚くような話ではなかった。ただ、出産となると、入院中、子どもたちの面倒を誰がどうみるか、障害児もいるのでその対応を誰がするのか、母親の両親は、母親の弟に重度の障害があってその子の面倒を見ているため、次兄の世話を見ることはできない。父方祖父母は遠方にいるし、関係性も薄いため頼めない。あとは父親が何日休めるかということになる。母親の出産に問題がなければ、1 週間とかからずに退院できる。

今までの出産ではどうしていたのか尋ねたところ、母方伯母と伯父夫婦が手伝ってくれたそうで、今回も又お願いするつもりとのことであった。そういうことなら心配しなくても大丈夫となり、月 1 回の訪問を続けながら出産まで見守った。本児に対し、イラっとして怒鳴ることはあっても、叩くことはなかった。

翌年 3 月末に男児を出産し、4 月には長兄が小学校に入学となる。初めての小学校生活に向けて、母親はこまごましたことも何とかこなし、無事に入学となった。長兄が落ち着きがないことについては、母親と何度か話し合い、発達検査と医療機関の受診を勧め、ADHD の診断が出た。この 1 年近くの付き合いの中で、次兄がけがをしたのは、長兄が突き飛ばしたことが原因という話も聞けた。長兄の ADHD については、学校や医療機関とも連携しながら、支援していくこととなった。そして、姉と本児については、保育園ではなく幼稚園を活用することとなり、
園バスが目の前まで来てくれるので、しっかり通園できるようになった。幼稚園の方に、いままでの経過を伝え、本児については気を付けてみてもらうようにした。赤ちゃんが生まれたことでの変化を確認し、特に問題がなかったことから、児童相談所とも相談して一旦終了となった。

しかし、その後半年ほどたったころに、幼稚園から通告があった。本児の太ももを母親が箸で刺すという事件が起こったのだ。

再び児童相談所と訪問し事情を聴くことと同時に本児は一時保護となった。母親の話では、相変わらず頑固でいうことを聞かないところがあったが、今回、隠れてお菓子をたくさん食べ、ご飯を食べなかったことに母親が腹を立てて、つい箸で太ももを刺してしまったというこ

とだった。警察が入れば傷害罪で母親が逮捕されるような話であったが、警察介入はなかった。今回は父親にも話を聴いたが、母親も父親も本児と暮らすのは無理と言い張り、施設活用をお願いしたいとなった。本児も家から離れることに抵抗もなく、すんなりと擁護施設措置（１）となってしまった。本児が施設入所になってからも時々訪問して様子確認をしていたが、母親は長男に怒鳴ることはあっても叩いたりということもなく、家族は比較的安定していた。第６子は女の子で、父母ともにとてもかわいがっていた。本児についても、「施設で楽しくやっているみたいで、安心している。盗み食いの癖がなくなると良いが」と母親は話していた。

こうして本児は幼稚園を卒業し、小学校高学年まで養護施設で過ごすことになった。最初のうちは帰省はなく、児童相談所での面会のみであったが、その後は毎年何回か帰省したり、本児の学校行事などに父母兄弟が見学に行ったりして、親子・家族関係を継続していた。

児童相談所の話では、「本児は学校で楽しく過ごせており、施設でも友達と一緒に遊んだりなど、適応的に暮らせている。成績は中の下か下の上くらいで、運動なども特に目立つところのない、おとなしい感じの子というのが学校の評価。盗み食いというか、隠れてお菓子を食べるというようなことも施設では見られない。」とのことであった。

小学校 6 年の夏の帰省後の児童相談所との面談で、引き取りたいという話が出た。今までの親子の様子を学校や施設から聞き取り、本児も家に帰りたいと言っていることから、中学入学前に施設措置解除（２）とすると連絡がきた。

小学校の卒業式には出たいという本児の希望もあり、３月中旬の小学校の卒業式後に措置解除となり、家に戻ってきた。中学入学の準備も母親が着々と進めていて、入学式にも母親が参加した。

本児が小学校を卒業するときに、筆者も家庭児童相談員を退職し、臨床心理士としてカウンセリングルームを立ち上げ、様々な家族支援を行い始めた。そのことは母親にも伝えてあり、何かあったら相談に来てと名刺も渡していた。

順調に家族再統合が進んだものと思っていたが、中学 1 年の終わり、節分のころに本児がまたお菓子を隠れて食べるようになったという相談で筆者の私設事務所「かかし」に母親が来た。母親からは、長女はそういうことをしないのに、何故だろうという話が出た。母親にいままでの事、自身の過去の育ち、本児に対してと姉に対しての関りの差などについて、確認しつつ、何が問題だったかを再度一緒に考えてみた。母親は自分自身の育ちの問題、原家族の中で母親が幼少期からほとんどかまってもらえず、障害のあるこの世話をしながら一人で頑張ってきたこと、原家族でも長女は見た目もかわいく、兄弟の中では賢かったこともあり、両親がとてももてはやしていたこと、それに比べて母親は、頑固でかわいげがないといつも言われていたこと、母親自身がとても寂しい思いをしていたことなどが語られた。そう語りながら、母親は本児の気持ちを少し理解できたと話した。

数日後本児もつれて来室。本児にはトラウマ処理をしたうえで、母親と本児との関係性を強化するために、何度か二人で面談に来てもらうようにした。二人だけの時間を持てることで本児も安定し、盗み食いのようなことはなくなった。それでも、３歳から 12 歳まで離れて暮らしていたことからくる関係性の薄さは、中々埋めることが出来ず、ちょっとしたことで本児が母親からひどく叱責されることが繰り返された。

母親と本児の面談を繰り返しながら、本児には、中学を卒業したら遠くの高校に行くなどして家から出るか、経済的にそれが難しければ高校卒業と同時に就職し、家を出ることを提案した。本児も「高卒後は家を出たいし早く働きたい」と自立に向けた気持ちが育ってきた。

本児たち一家は、本児が施設入所したあとも

家族が拡大し、三女の他に 3 人生まれ、兄弟の数は 8 人になっていた。そして本児が高校に入るときに、、家族全員で本州の父方実家のそばに引っ越していった。本児も母親との関係があまりよくないことに悩みつつも、何とか家族の中で生活していき、高校卒業まで頑張って、その後就職し、自立していった。

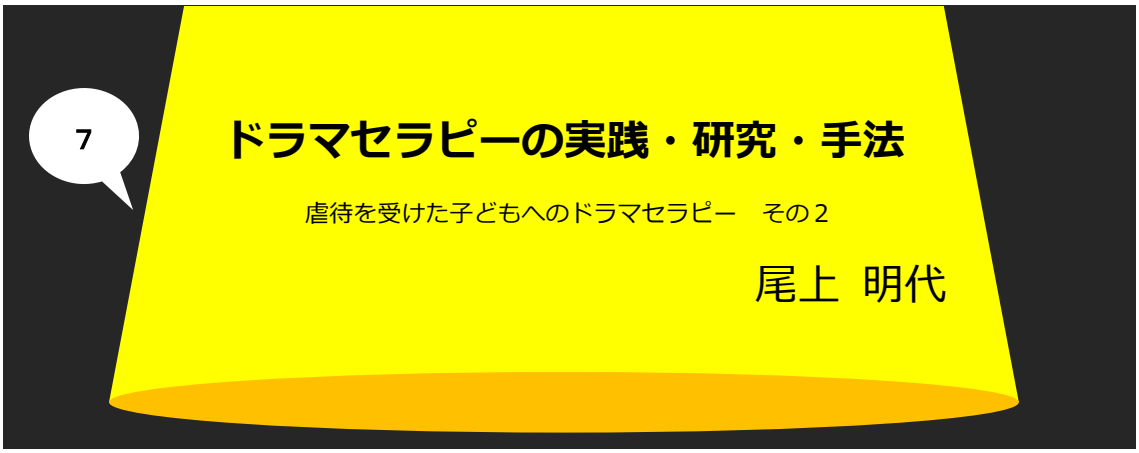
まとめ

本ケースは、決してうまくいったというものではない。母親から虐待を受けた本児の心の傷は、完全に癒えたとは言えないだろうし、母子関係も多少は良くなってもやはりできた溝を完全に埋めることはできなかった。

本児は最初からあまり表情のない子で、父母に対し、頑固さを示すことで主張するため、かえって父母から疎まれるという悪循環の中にいた。虐待ケースでは児が頑固ということは多々ある。頑固であることは自己主張なのだから、良い意味で捉えてもらえればよいが中々難しい。両親の言う通りには動かないため、「関わりづらい、面倒な子」というイメージになり、それが虐待に繋がってしまう。子どもは愛情を十分に受けられないとその不足を何かで補おうとする。本児の場合それが「食べること」であった。母親は決して食事を与えないなどということはなく、子どもが沢山いて大変なのに、むしろしっかり食事を作る母親であった。愛情が不足しているために、いくら食べても満腹感を得られない状況だったから、本児はお菓子をあさったり、三角ごみとりまであさったりしてしまったのだ。そう伝えて、時には良い母親になるのだが、良い状態にしてもすぐにそうした問題行動が消えるわけではないので、我慢しきれず、その行動があてつけがましいと思えて、受け入れがたくなってしまったのだ。

家族を引き離すことは、本ケースの場合は容易だった。父母は手放したいと言ったし、本児に対し身体的暴力は明らかだし、本児もその時は父母や兄弟から離れたら楽しい生活が待っていると思ったのだろう。しかしいったん離れてしまうと、いくら年に数回面会交流をしていても、関係性はどうしても薄れてしまい、むしろ理想化が始まり、母子共に良いイメージだけを持つようになるだろう。再統合した時に、最初は良いがそんな良い関係ばかりが続くはずもなく、少ししたらイメージと違う現実に母子ともにがっかりしたり、幻滅したり、傷ついたりする。

母親自身が自分自身の育てなおしをし、本児と自分を重ねないようになれば、母子ともに安定した関係を保てただろう。当時はまだ、育てなおしのすべを持たず、未熟な心理士だったこともあり、どうしてもうまくいかなかったこの母子の事は反省の気持ちとともに、今も心に残っている。



前号に続き、「発展的変容(Developmental Transformation)」という手法を用いて実施された、虐待を受けた子どもとの長期セッションについて、米国のドラマセラピスト・James、Forrester、Kim の 3 人の研究論文（2005）から紹介する。この手法で実施されたセラピーの報告は多くあるが、その中でも特に手法の意義がよくわかる事例として、古典の一つとみなしたい実践である。

セラピー開始後から半年ほどが経ったころ、ジャマーが、とうとうセラピストが強い怪獣の役になることを許すようになったことを前号の後半で記した。セラピストは、ジャマーが逃げ込む場所を事前に作ったり、怪獣の動きを止めることができる（想像上の）フリーズガンなどを渡しておくなど、創造的な仕掛けで、ジャマーが興奮しすぎたり解離してしまわないよう工夫を凝らしながらプロセスを進めていった。

チームでより良いプロセスを作る

そのうちに、ジャマーはセラピストを穴や押し入れに閉じ込める場面を創り始めた。そういうときの彼のエネルギーはとても高く、だんだんと自分の性虐待のテーマに「象徴的な距離」から近づいてきたのが、セラピストに認識されたという。ジャマーは相変わらず強い役のみに一体感を感じていた。弱くて小さい傷ついた役に自分を重ねることはなかったのだ。またセラピストが負った傷の世話をする役の中では、彼は感情的距離をとりながら「傷つくとはどういうことか」をセラピストに教えているように思われた。

セラピーを進める一方で、セラピストは里親のシャーリーに性虐待を受けた子どもについての心理教育も実施した。ジャマーの回復を阻止する一番大きな問題は、近くに住む加害者（叔父）に、ジャマーが朝の登校時に会う環境であること、また夕方、帰宅時にシャーリーがジャマーと彼の実の両親の家の前を

通る際、両親が２人をじろじろ見ることだった。そんな夜は、ジャマーは決まっておねしょをした。シャーリーは、出来ることはすべてやりたいと考え、加害者となるべく会わないように、ジャマーを転校させた。その夏、ジャマーはあるキャンプに参加することができ、そこでは、自分が「問題児」ではないという認識を得ることができた。学校側の理解と協力も欠かせなかったであろう。学校や里親も一緒にチームとなって、与えられた状況の中で最善を尽くしているのがわかる。さらにシャーリーはその環境からジャマーを出してあげたいと、家を買うためのローンに申込んだ。引っ越しの準備ができたころには、おねしょは減っていったのだった。シャーリーは喜んだ。たとえおねしょをしたとしても怒鳴らないで対応するなど、より良い子育てができるようになり、またジャマーも期待に応えて頑張った。セラピーが始まって９ケ月経ったころには、セラピストやシャーリーたちへのジャマーの信頼は増していた。同時に「チャッキー」が出てくる悪夢を見ることもなくなり、朝まで１人で眠ることができるようになったのである。

目隠しゲームとヒーローインタビュー

このころジャマーは、あるゲームを創り、セッションでそればかり行うようになる。セラピストだけが目をつぶって、ジャマーを捕まえようとするゲームである。目を開けているジャマーを捕まえることは当然無理なので、ジャマーが必ず勝ち、セラピストをバカにする。

ここでまた、そのセラピストの創造的なアイディアが生まれる。セラピストはテレビのアナウンサー役になり、ゲームに勝ったジャマーに「ヒーローインタビュー」をしたのだ。これはジャマーのお気に入りとなり、その後何度も行われた「インタビュー」の中で、彼は世界の飢餓、正義などについても語り初め、ゲームで戦う両陣営も、白人 VS 黒人、男子 VS 女子、先生 VS 生徒、そして被害者 VS 加害者、というふうに発展していった。

あるセッションで、セラピストは、目を閉じてジャマーが自分に近づく音をじっと聞き耳をたてているとき気づいたことがあった。「これは、加害者が虐待をしに来るのを、ジャマーが寝たふりをしてじっとしていたときの状態だ。ジャマーは、それを自分に教えているのだ」と。つまり、ジャマーが無意識のうちに作って遊んだこのゲームは、彼が恐怖とともに暗闇の中で、加害者が来るのを察知しながらじっとしていたときのことが象徴的に表現されたものだったのだと思う。そのゲームで毎回ジャマーが勝ち、セラピストをバカにして恥をかかせるという行為も、ジャマー自身が加害者からされていたことの再現であろう。明らかにジャマーは、加害者と自分を同一視していたことになる。

そこで、セラピストはジャマーに、セッション中、自分が見られたくないときは「透明人間になれるボタン」を押してよい、というルールを提案した。もちろん、ジャマーはこれを大変気に入った。すかさずセラピストは、「叔父さんが来たとき、透明人間になれたら良かったね」と話しかけると、ジャマーはうなずいた。さらに「ベッドでのおねしょは、叔父さんを遠ざけるのには良いアイディアだったと思うよ」と言うと、ジャマーはセラピストをじーっと見つめてから「うん」と答えた。ここのフェイズの転換は非常に重要である。今までの象徴的な行為の意味を子どもに伝える段階に一挙に突入したという感じがする。このタイミングを決して逃さずに、理解をクライエントと共有する判断が素晴らしい。しかし、全面的な現実における語りかけなのではなく、現実を含んだ象徴的行為を続行しながら、つまりプレイスペースでの架空空間を保ちながら、ドラマ＝象徴の意味を確認している。ジャマーにとっては、自分に非があると信じていた「おねしょ」が肯定的に受けとめられ、かつ加害者への自分の戦略を褒められた瞬間であったと思う。

そこでセラセラピストは、「インタビュー」の場で想像のマイクをもち、次のようにアナウンスした。「少年少女の皆さん、自分の叔父さんから虐待を受けたすべての子どもの代表として、ジャマーはここでプレーしています。彼はあなたたちのチャンピオンです！」ジャマーがこのゲームで勝つたびに、観客たちの喝采が起き、彼は腕を高くあげてそれに応えた。多くの観客たちの前で、何度も自分が勝利して、叔父を見返すことができたのである。セラピストは、アナウンサーや観客など１人何役も演じながらセッションを進めていく。

このゲームは２－３ヶ月続いた。あるとき「インタビュー」の中で、アナウンサーが「視聴者の皆さんは、君がどうやって性虐待に対処してきたか知りたがっています」というと、ジャマーは、「里親とセラピストに、そのことを話すこと。学校ではけんかをしないで良い子になること。とにかく、前に進みつづけることさ。」と答えた。「番組」最後の、この「インタビュー」場面は、その後も何度も行われた。ジャマーは「視聴者」の子どもたちに、学校でちゃんとやっていく方法や、誰かに性的な行為をされそうになったらどうしたらよいか等についてアドバイスをした。これは、自分が自分のセラピストになるワークとも言えるが、「視聴者」を想定した「記者会見ドラマ」になっているところがとても良い。このときジャマーは、自分の叔父がしたことは間違ったことであり、虐待は自分が悪かったせいではないことなども語った。さらには、叔父さんの悪いところばかりでなく良いところも、そして両親を恋しく思う気持ちにも言及した。

セラピストと子どもの力

セラピストとジャマーは、ドラマセラピー開始から1年ほどが過ぎた時点で、ここまでのプロセスを創ることができた。同じ言動が繰り返されるジャマーのドラマを受容しながらともに歩むセラピストの忍耐強さ、時々のセラピスト自身の気づきやジャマーの様子から得る鋭い洞察力、文字通り創造的な介入、遊べないもの（トラウマ）を遊びに変えるプレイフルネスなど、セラピストの多くの特質が発揮されている。単にドラマで遊ぶということを超えて、ドラマ内容をとても上手に利用しながら、そして被害を受けた子どもが、ヒーローとして他の子どもたちに教えるという形をとりながら、非常に難しい認知の修正と、憎しみだけではない加害者たちへ抱く複雑な感情表現も見事に実現させている。セラピストが素晴らしいのはもちろんであるが、そこには、当然クライエントである子どもの力も発揮されている。ジャマーはネグレクトを受けていた期間も長く、彼の「子守」をしていたのは、テレビやビデオゲームの攻撃的なキャラクターたちだったのではないかと推察されていたにもかかわらず、短期間で生きる力を示してくれた。

また、良い結果を引き出したことには、この「発展的変容」というアプローチも多いに貢献している。この手法では「プレイスペース」でのドラマや遊びの中に振り返りもすべて含ませる。（対象者が大人でもやり方は同じだ。）ジャマーのセラピーの場合は、ヒーローインタビューの中にクライエントのリフレクションを取り入れたのである。そして彼が8歳だということを考えると、セラピストの苦労は大きかったと思うが、ここまでの結果だけでも、その甲斐があったと言える。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

さて、シャーリーはジャマーにさらに愛着を感じ始め、ほどなくして彼を正式に養子にしたいと申し出た。しかしジャマーは、しばらくその話を避けている様子だった。

その後ジャマーは、長くやり続けたこの目隠しゲームを突然、辞めたのである。そしてセラピーはついにクライマックスを迎える。

＜次号へ続く＞

文献：

James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C. (2005). Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment. Taylor & Francis Group.

対人援助学＆心理学の縦横無尽

（３３）

故水島新司を悼む

ーあるいは想像力とシンボリックリソース

サトウタツヤ

（立命館大学総合心理学部）

この連中の真の敵は国会権力ではなく想像力の欠如だろうと僕は思った。

村上春樹『ノルウェイの森』

１　はじめに

漫画家、水島新司（敬称略）が 2022 年１月１０日、亡くなった。享年８２。新聞・テレビ・ネットでも様々に報道された。

彼は様々な野球マンガを発表してきたが、その代表作を 1 つ選ぶとなればやはり『ドカベン』だろうか。『あぶさん』『野球狂の詩』『球道くん』なども代表作であろう。

しかし今回ここで取り上げたいのは『男どアホウ甲子園』である。1970 年から 1975 年まで『週刊少年サンデー』で連載された。1970 年から 1971 年にテレビアニメが放送された。第 19 回（昭和 48 年度）小学館漫画賞受賞。ただし、この作品は原作・佐々木守、漫画・水島新司であるから、純粋な水島作品とは言えないかもしれない。ついでながら、原作の佐々木守にしてもその生涯を一瞥する限りでは、代表作の１つは『ウルトラマン』であり、『男どアホウ甲子園』は佐々木の代表作とは捉えられていない。

２　水島マンガの凄さは予見力？

水島新司の追悼番組（NHK）を見ていたら（日時も番組名も不明）、水島新司の凄さの 1 つに、将来を予見したということが上げられていた。五〇歳で活躍する投手、五打席敬遠される高校球児、女性野球選手、などなどである。もちろん、単なる予見ではなく、水島野球マンガを見た者たちに何らかのインスピレーションを与えたことが、実現に至った要因だったということは十分考えられる。トランザクション（相互相乗効果）である。

さて1970年代といえば、会社の定年は五五歳であった。中学校の卒業生が金の卵としてもてはやされた時期である。一五歳から働き始めて40年間勤め上げたら立派な爺さまである。そんなときの五〇歳のイメージと21世紀の今のイメージは全然違う。2015年に50歳代で登板したプロ野球投手は山本昌（本名：山本昌広）である。1965年生まれ。神奈川県茅ヶ崎市で育ち日大藤沢高等学校を卒業後、1984年に中日ドラゴンズに入団し2015年に引退。10月7日の広島戦に投手として出場し、50歳代で登板を実現した。

『野球狂の詩』の岩田鉄五郎は確かに未来を予見していたと言えるかもしれない。しかし、水島マンガの『男どアホウ甲子園』はもっとすごいのである。このマンガは1970年から1975年まで『週刊少年サンデー』で連載され、1970年から1971年にテレビアニメも放送されていた。

主人公の藤村 甲子園（ふじむら こうしえん）は、サウスポーの豪腕投手であり、いわゆるスポ根主人公そのものだが、その相棒の捕手・「豆タン」こと岩風 五郎（いわかぜ ごろう）は自動車事故で失明してしまう。盲目のキャッチャーとなった後は剛速球の音を聴いてボールを捕るのである。一塁手の丹波 左文字（たんば さもんじ）は暴力団一家の生まれで、右目・右腕を失っているが野球をやっている。言って良ければ身体障害者である。二塁手の結城 翼（ゆうき つばさ）は知力にあふれピアノも弾くという意味で野球選手らしくない。三塁手「美少女」こと千曲 ちあき（ちくま ちあき）は女性である。当時はマネージャーのベンチ入りさえ認められなかった時代である。遊撃手・神島 竜矢（かみしま りゅうや）は東海一帯を仕切っていた番長である。左翼手は時に「美少女」がついたがはっきりしない。中堅手・知覧 太郎（ちらん たろう）は右翼。右翼手は松葉 月夫（まつば つきお）で、名前の通り生まれつき足が不自由で、松葉杖姿でグラウンドに立ちプレーしている。そのほかに、投手・三塁手としてジャック 時田（ジャック ときた）がいる。アメリカ軍兵士を父に持つハーフである。

図　『男どアホウ甲子園』の登場人物（左から藤村・丹波・千曲・時田）
https://www.ne.jp/asahi/krk/kct/mz/mz_doaho.htm

つまり、その当時の高校野球において「普通」であった健康な男子は主人公の藤村甲子園の他、二塁手の二塁手の結城翼、遊撃手・神島竜矢、中堅手・知覧 太郎、投手・三塁手として大熊牛吉の５名であり、数の上で多数派だったわけではない。不良や番長等を

「不健康」であるとするなら、さらに主人公の「どアホウ」も普通じゃないなら、結城翼１名のみがノーマル男子野球部員だったにすぎない。

このようなインクルーシブなスポーツの楽園が、１９７０年代のスポ根マンガそれもスポ根の一丁目１番地の高校野球を描いたとしてマンガとして人気を博していたのだからたいしたものである。そして、もっとすごいことは、多くの読者はインクルーシブなマンガだというようなことには注意を払わず（そもそもインクルーシブなどという概念を当時の子どもたちが知るはずもない）、マンガを楽しんでいたということである。とはいえ、マンガは絵を用いているため、読者は片手片足だったり松葉杖をついていたり目が見えなかったりする高校生が活躍するマンガとして楽しんでいたことになる。

３　イマジネーションとシンボリックリソース

スイスの文化心理学者・タニアこと Tania Zittoun が重視する概念にイマジネーションがある。Imagination は一般的に想像（力）と訳されることが多いが、日本語の想像や妄想や空想とも意味が近くなってしまうことに注意が必要である。西洋の哲学・心理学の用語としてのイマジネーション（Imagination）は、構想力と訳す方が適切な場合がある。「“直接的設定(setting)”を抜け出して、過去や未来、現在において可能なことや不可能なことさえも探索することを可能にする経験を作り出すプロセス」がイマジネーションであるとタニアは定義している（Zittoun and Gillespie, 2016）。そして想像のループモデルを提案している。「イマジネーションというイベントは経験（から）の分離によって始まり、大抵の場合、（経験への）再結合という結末になる。つまりイマジネーションとはループである」（Zittoun and Gillespie, 2016; p40）

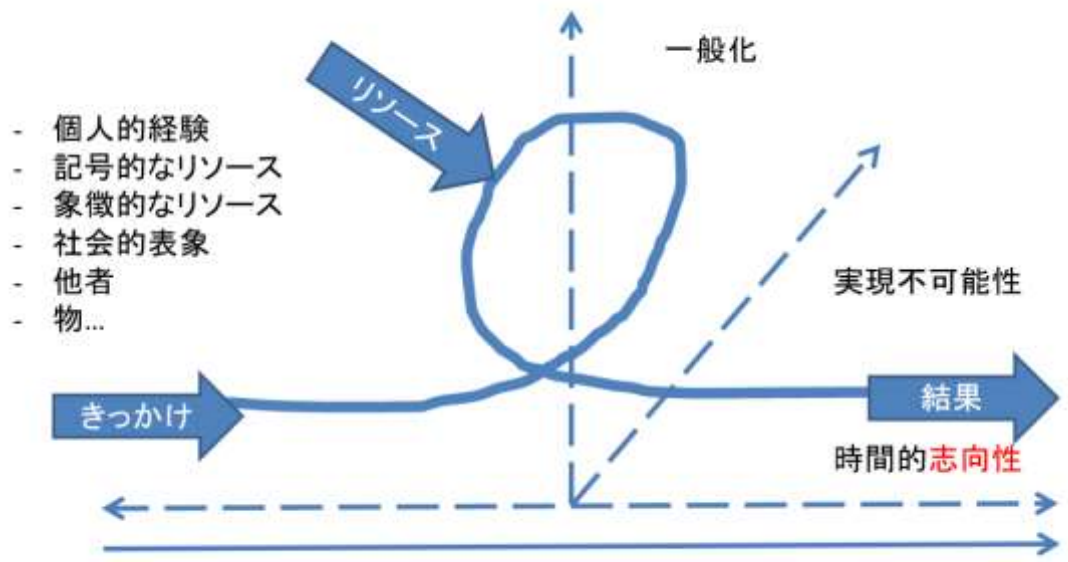


図　イマジネーション・ループ（Zittoun and Gillespie, 2016）

イマジネーションはある時間に何かのきっかけで始まり、時間的志向性、一般化、実現不可能性の三次元上でループを描く。ここではイマジネーション・ループの考え方自体に深入りすることは避けるが、あるきっかけで始まったイマジネーションを促進したり抑制したりするリソース（資源）が存在することにタニアは注意を促している。リソースには様々なものがあるが、その中の１つにシンボリックリソース（Symbolic Resource／象徴という資源）がある。ここで資源とは石油やお金のようないわゆる物質的な資源のことを言っているわけではない。小説・映画・マンガのような素材がシンボリックリソースであり、イマジネーション（想像）を促進したり抑制したりする１つの要因だというのである。

そして、イマジネーションが妄想や空想ではなく構想力に近い概念であることを思い出すならば、こうしたシンボリックリソースが個人の人生のあり方に影響を与えることは十分に考えられることであろう。「＊＊＊という小説・映画・マンガに触れて＊＊＊という仕事に興味を持ちました」ということは十分に考えられるし、このような明確な形をとらずとも人生のあり方や価値観に影響を与えていることも十分に考えられるだろう。

４　伊達直人現象

2010 年 12 月のクリスマスの日。群馬県中央児童相談所の玄関前に 10 個のランドセルがプレゼントとして置かれていた。贈り主の名は伊達直人であった（この名前にピンと来る人と来ない人がいる）。このことが報道されると、全国で伊達直人の名前による寄附が相次いだ。同一人物が行ったのではなく、多くの人が同じ伊達直人の名を語って同時多発的にプレゼントを贈ったのである。世に「タイガーマスク運動」として知られることになった社会現象である。最初に伊達直人の名で寄附した人は、2016 年になって実名を明かす（河村正剛氏）。彼は伊達直人の名を名乗る以前も匿名で寄附をしていたという。しかし、「世の中をなんとかしたい」という思いが募り、そんなときに「伊達直人」を名乗って社会に強いメッセージを送ることを思いついたのだというのである。

タイガーマスクは日本のプロレスラーとして活躍した実在の覆面レスラーだが、そのアイディアの源は雑誌マンガの『タイガーマスク』にある。原作：梶原一騎・作画：辻なおきによって 1968 年から 1971 年にかけて週刊雑誌に連載されていたマンガである。孤児院「ちびっこハウス」の主人公・伊達直人は出奔して悪役レスラー養成機関「虎の穴」で訓練されてタイガーマスクとしてデビューする。本来はファイトマネーの一部を虎の穴に収めるべきであったが、ちびっこハウスのために寄附したことから虎の穴が送り出す刺客レスラーと次々に闘うことになる、という物語である。

河村さんは雑誌マンガのタイガーマスクではなくプロレス界に一大ブームを巻き起こした「初代タイガーマスク」に影響を受けていてその名を借りたのだが、伊達直人の名は、雑誌マンガの『タイガーマスク』の主人公・伊達直人に親しんでいた河村さんよりも少し年長

の年齢層の感情をも大きく揺さぶり、全国各地に伊達直人が現れ、「タイガーマスク運動」と呼ばれるようになったのである。このマンガを読んだ当時の小中学生は、伊達直人の名をフェアプレーでレスラーと戦い孤児を助けるために寄附するヒーローとして取り込んでおり（すり込まれており）、だからこそ、伊達直人の名で寄附が行われたニュースが流れると、多くの人が伊達直人を名乗って寄附を行ったのだと思われる。寄附行為に及ばなかったとしても、「伊達直人と寄附」という物語に目頭を熱くしたのである。

アラ還（１９６０年代生まれ or 昭和３０年代生まれ）やそれ以上の年齢のおじさん達は、今からみれば男女同権意識も低くその他いろいろ今から見れば劣った考え方を持っていることは否めない。社会的包摂（ソーシャルインクルージョン）とか積極的格差是正措置（アファーマティブアクション）などとは縁遠い子ども時代であった。しかし、そうであったとしても子ども時代に触れていたマンガ『男どアホウ甲子園』『タイガーマスク』がシンボリックリソースとして機能している。時代を先読みするような物語がシンボリックリソースとして機能するからこそ、その当時の価値観（簡単にいうとマイノリティを認めないとか男尊女卑とかの価値観）を離れてイマジネーションを働かせることとができているのかもしれない。

水島新司さんの死を悼みつつ合掌。

付記

前橋市は 2017 年から、ふるさと納税の寄付金を活用してタイガーマスク運動支援プロジェクトを開始したとのことである。

前橋市長・山本りゅうのブログに「タイガーマスク運動ふるさと納税」という記事がある。
https://ameblo.jp/ryu-yamamoto/entry-12646890713.html

以下のような記事もあった。
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_zeisei/czaisei/czaisei_seido/furusato/case_study/pdf/33.pdf

ただし、前橋市で 2022 年も継続されているかどうかは不明である。2022 年にふるさと納税でタイガーマスクを活用しているのは、佐賀県鹿島市と高知県日高村であるようだ。

また群馬テレビでは 2022 年 1 月に【新春特集・今年にかける】タイガーマスク運動　2 度目の寅年　河村正剛さん＝前橋市）(22/01/06)を放映し、それは YouTube で視聴可能である。
https://www.youtube.com/watch?v=RWi_DkiI8Yg

さらに、タイガーマスク運動を一過性のものとして終わらせないためのタイガーマスク基金というものがある。タイガーマスク基金は、「児童養護施設などの退所者や社会的養護が必要な子ども・若者に、生活自立、学業、就労、家族形成、社会参画などの支援を総合的に行い、社会で活躍する人材を育成するとともに、広く一般にこの問題を提起し、児童養護

施設や自立援助ホームなどが抱える課題、係る法律・政策の改善、ひいては児童虐待予防の啓発事業などを展開し、この問題の根本解決を図ることを目的とするNPO」だとのことである。
http://www.tigermask-fund.jp/what.html

引用記事
タイガーマスク"伊達直人"が本名で語る意義　正体を明かした会社員が見つめる過去と今後　東洋経済オンライン　2018/04/18 6:00　(2022/02/25確認)
https://toyokeizai.net/articles/-/216524

ホテルニューグリーン

竹中尚文

私がホテルニューグリーンに滞在したのは、1983 年 10 月 4 日から 11 月 11 日までだった。この間、断続して宿泊した。

ホテルニューグリーンは、パキスタンのペシャワールという町にあった。この町は現在のカイバル・パクトゥンクワ州の州都である。この州名変更は 21 世紀初頭のことだった。それまでは北西辺境州という名で、この州の大半は部族地域と呼ばれ、パキスタン政府の力が及ばずにそれぞれの族長が実効支配をしていた。当時、バスで北西辺境州から州境を越すときには、警官によって停車させられて荷物検査があった。北西辺境州では、物品に間接税がかけられず免税状態であった。北西辺境州で購入した品物には、こうして州境で税を課した。

ペシャワールの名を耳にされた方も多いと思う。この町の西にあるハイバル峠を越せば、アフガニスタンである。最近まで、アフガニスタンに関する報道の発信地はペシャワールだった。1979 年からアフガニスタンは内戦状態になり、戦乱の首都に報道関係者が常駐するのは困難だったからである。最近はアフガニスタンの首都カーブル発の報道が多くなった。

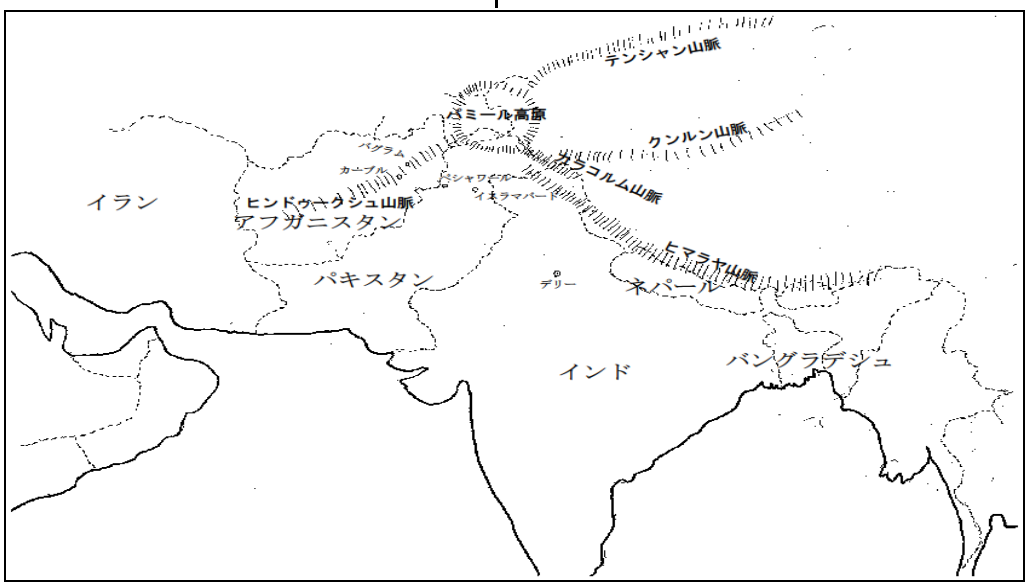
ペシャワールからハイバル峠までは 30～40 ㎞で、ここから西はアフガニスタンである。峠を越えて西に 80 ㎞程進むとジェララバードという町があって、さらに西に 150 ㎞程行くとカーブルがある。カーブルの町はヒンドゥークシュ山脈の山中にある。カーブルから北に山脈を抜けると、シルクロードに出られる。ヒンドゥークシュ山脈というのは、アフガニスタンの北東から南西にかけて連なる山脈で、「インド人殺し」という意味の山脈名である。この山脈の北東の付け根はパミール高原であり、この高原から南東にカラコルム山脈・ヒマラヤ山脈と続く。

インド亜大陸という平原は、北からパミール高原が両腕を広げたような山脈で閉じられた世界なのである。インド人が外の世界に出ようとするなら、陸路では北西のヒンドゥークシュ山脈を越えるしかなかった。海上交通は、古代ギリシア時代にアラビアとインドを結んだ記録もあるが、一般的ではなかった。西のアラビア海を渡って中東と結ぶ航路、東のベンガル湾を渡って東南アジアとも結

ぶ航路は大航海時代以後のことになる。

紀元前 4 世紀末にアレキサンドロスが東方遠征をおこなった。彼の軍は、ヒンドゥークシュ山脈を越えて、インダス川あたりで引き返した。アレキサンドロスが去って、紀元 1 世紀頃から紀元後 3 世紀ごろまでこの地を支配したのがクシャーン王朝であった。カニシカ王が有名であるが、シルクロードからインド北部をその支配下においた。この国の都が現在のペシャワールであった。夏の都にしたのが現在のカーブルの北にあるバグラムで、冬の都にしたのはインド北部にあるマトラーであった。この時代に、仏教においては大乗仏教が興り、ガンダーラ美術という彫刻や建築に見られる仏教文化が栄えた。大乗仏教の興隆と仏像彫刻の起源は、仏教の歴史において革命的な出来事であった。多くの仏教学者が大乗仏教の興隆を思想的展開で追い、ガンダーラ文化という具現的な展開を異なる研究としている。同じ時代に同じ場所での研究対象であるのだから、一体となった研究がなされるべきだと思っている。

カーブルの北にあるバグラムは 20 世紀半ばよりフランスが発掘調査をしてきたところであるが、1979 年のソ連によるアフガニスタン侵攻で調査は中断された。バグラムはクシャーン朝の夏の宮殿のあったところで、カニシカ王に関連する発掘品もある。バクラムを北に抜けるとアムダリアの上流を渡って、シルクロードの要衝サマルカンドに至る。またバクラムから西に行くとバーミヤンを経てペルシャに至る。古代より重要なここにソ連は空軍基地を中心とした巨大な軍事基地を築いた。1989 年にソ連が撤退すると、アフガニスタンの民族・部族の勢力争いになる。2001 年の同時多発テロによるアメリカのアフガニスタン侵攻が始まった。バクラムはアメリカ軍の基地となった。2021 年 7 月にアメリカ軍機が人を振り落としながら離陸して、この地はタリバーンの支配下となった。



私がこのホテルニューグリーンに泊まることにしたのは、その前に泊まっていたタキシラの宿舎の従業員が勧めてくれたからである。「ペシャワールに行ったら、私の兄がホテルニューグリーンに勤めているから訪ねてみろ」といわれた。

タキシラというのはパキスタンの首都イスラマバードの西にある都市遺跡である。20 世紀初頭にイギリス人の考古学者ジョン・マーシャルによって発掘された。発掘報告書は 20 世紀中頃に出版されるが、ガンダーラ文明の考古学的研究の教科書のようなものである。この地は紀元前 4、5 世紀から約 1000 年間の活動期だったという。最盛期は紀元 1 世紀から 3 世紀ごろまでというから、まさしくクシャーン朝の時代である。タキシラにあるシルカップは都市遺跡で、上下水道を備えた町であった。マーシャルはここで「双頭の鷲」のレリーフを報告している。彼は鷲というが、私には鳥としか見えない。この「双頭の鷲」が東ローマ帝国に伝わったというのを否定する材料はない。そして、それをアーリア人の文化の象徴と考える人たちがいるようである。二つの頭を持つ鳥については、『仏説阿弥陀経』の「共命之鳥」(ぐみょうしちょう:共命の鳥なり)が二つの頭を持つ鳥であると経典の注釈書は述べている。『仏説阿弥陀経』は、おそらくこの地で書かれたものであろう。

タキシラの話を始めると止まらないので、これくらいにしたい。私が 1983 年にパキスタンを訪れたのは、その前年に大学の掲示板に海外で研究をしたい大学院生に研究費を提供すると書かれていた。博士後期課程だった私は、パキスタンの仏教遺跡についてのフィールドワークをしたいと書いて提出した。しばらくすると、掲示板に私の名前が貼られた。そんなわけで、パキスタンのフィールドワークはタキシラから始めた。

タキシラには、小さな博物館があった。その前に客室が 2 部屋だけの宿舎があった。パキスタンの政府観光局の駐在管理官と従業員 2 人で、およそ黒字は見込めないように思うが、他に泊まるところもないのでありがたい施設であった。管理官はパンジャービで従業員はパシュトゥと民族が異なった。彼らはできるだけ言葉を交わさないようにしているように見えた

パキスタンでは、パンジャービとパシュトゥとシンディが主な三民族である。最も人口が多いのは、パンジャービでパキスタンの東部からインドにかけて暮らす人たちである。シンディはカラチを中心としたパキスタン南部に暮らす人たちである。パシュトゥは北西辺境州からアフガニスタンにかけて暮らす人たちである。アフガニスタンの主要民族でもある。

タキシラから馬車で幹線道路にで

て、しばらく待つとペシャワール行きのバスが停まった。ペシャワールまで５時間ほどは、乾燥した平原を埃だらけになって走る。ペシャワールの町に入ってくると、道路脇で焼くシシカバブの煙が埃に混ざる。夕暮れのお祈りの時間になると、モスクから礼拝をうながすアザーンが流れる。映画の一場面に身を置くような気分だ。

夕刻の時間であるから、滞在するホテルを早く決めたいと思いながら、ホテルニューグリーンに向かう。町外れのバス溜まりに路線バスが到着した。バスターミナルというしゃれたものではなく広場にバスが到着して、また出発していく。出発するバスは助手が行き先を連呼する。それに応じて客が集まってくる。思惑の人数に達するとバスは出発するのである。バス溜まりからホテルまでは三輪タクシーである。

勧められたホテルニューグリーンは新しい建物で、清潔感があった。客室は、空調のある部屋と扇風機の部屋の二種類で値段がかなり違う。乾燥地帯の秋だから、迷わず扇風機の部屋に決めた。新しく町に着いて、最初に訪ねたホテルで決まることは珍しい。

私は南アジアを旅するとき、ホテルを予約したことがない。その町に着いたら、その地の人にお勧めのホテルを尋ねる。そのホテルに行くと、自分の目で部屋を見て値段を聞いて、納得がいけばそこに泊まることにした。ある町では、バス溜まりのすぐ向かいのホテルに入った。値段を聞いて部屋を見たら、４畳半ほどの広さの土間だった。他のホテルを捜してみるというと、受付の男は「おまえはまた戻ってくる」といった。他をさがしたら、その町にはホテルが１軒しかなかった。簡易ハンモックのようなものを借りてそこに泊まった。

ホテルニューグリーンは、４、５階建ての真新しい建物で大通りに面していた。入ると受付と小さなロビーがあって、ロビーの向こうは中庭が吹き抜けになっていた。中庭の右側にエアコン付きの部屋が並び、左側はエアコンなしの部屋があった。中庭の向こう側の１階はレストランになっている。日が暮れると、入り口には大きな鉄の扉が閉じるようになっている。このホテルは安心できそうな気がした。

私は北西辺境州で銃声を聞かない夜はなかった。ここの住民は銃を持つ。パシュトゥは銃を持たない男は存在しないという。この地では、女性は家の中で暮らし、必要な用事のみブルカを被って外出する。男が集まれば、銃を取り出して自慢し合う。そうした彼らの会話に私は馴染めなかった。彼らにいわせれば、私は銃に関して全く無知であるという。

あるとき、私の持っているウォークマンが話題になった。私は順番に

ヘッドホンをかけて曲を流した。その中の一人が
「それ、売ってくれないか？」
「いやだよ。僕がいつも使っていたいから」
「おまえは銃を持ってないから、カラシニコフ３丁と交換しないか？」
彼にしてみれば、ずいぶんと好条件の提案をしてくれたらしい。銃は私を癒やしてくれない。

パシュトゥの男たちが銃を持つのは最近のことではない。イギリスのインド統治はこの辺りが境界だったらしい。北西辺境州には、あちこちにイギリス軍の砦の跡が残っている。ペシャワールから西にはイギリス軍は入れなかった。パシュトゥの大部分はアフガニスタンにいる。銃を持って山岳地帯で暮らす者たちにイギリス軍は手を出せなかったようである。彼らはとてつもなく目がいい。そして、銃の扱いがきわめて巧みである。かつて、大英帝国はその植民地から勇猛な部族をイギリス兵と採用した。ネパールの一部族であるグルカ兵は、フォークランド紛争の時にも活躍した。パシュトゥを支配下に置くことはできなかった。

ハイバル峠には銃を作る有名な村がある。世界中の銃を手作りで複製するらしい。何百年も前から複製銃を作っているという。彼らにとって銃は日用品であるようだ。

ホテルニューグリーンに到着して翌朝、私は久しぶりにゆっくりした朝を迎えた。部屋の前のベランダから中庭を眺めていたら、一階下のベランダでカメラの調整をする人がいた。一階下まで降りていって、近づいて
「日本人？」
「えっ！そうだよ、日本人だよ」
彼は、アフガニスタンの戦争の取材に来たカメラマンだった。

彼は私と同世代ということもあり、すぐに仲良くなった。それからもうすぐ 40 年になるが、今も大切な友人である。

ノリさんはフリーのカメラマンでフリーのライターと共に大手テレビ局のニュースと雑誌の取材で来ていた。これから、ムジャヘディンと共にアフガニスタンで取材をする予定だという。

アフガニスタンでは 1979 年 12 月 24 日に突如、ソ連軍が全土に侵攻をした。世界中がクリスマス休暇で気を許している時だった。不意打ちだった。この頃、アフガニスタンでフィールドワークを狙っていた私は、こうした状況の変化をチェックしていた。ソ連軍に対して、アフガニスタンの人は銃を手に反抗を始めた。常より銃を手にして、チョットした問題解決も銃で計ろうとする民族性もあるので、多くの人たちが戦うことにしたようだった。

私は 1980 年 3 月にもペシャワールを訪れた。ソ連侵攻の 3 ヶ月後のことだった。この時、私は修士課程の学生だったが、私はこのままでは現場を知らないまま研究をするかも知れない。現場を知らない研究者になりたくないと思った。そんな焦る気持ちで、ペシャワールを訪れた。

それから 3 年で、アフガニスタンからの難民が増えた。北西辺境州のあちこちに難民キャンプができていた。多くの人たちはアフガニスタンから逃げ出したのだった。いくら銃を持って男の誇りなどといっていても、家族との安全な暮らしを優先した人が多かった。私の同じ歳の男が「自分は家族そろって安全な所で暮らしたい」といった。彼がペシャワールで家族の暮らせる場所を確保しておいて、その間に父親が家族全員をカーブルから連れて来る手はずになっているという。私が彼に出会った時は、彼の家族がアフガニスタンから逃れてくるのを待っている時だった。彼の家族を案ずる目には、涙が浮かんでいた。

ノリさんたちは、ムジャヘディンの事務所を訪ねては、アフガニスタンに潜入する手はずを依頼しているようだった。ムジャヘディンというのはイスラム自由戦士ということらしいのだが、アフガニスタンでソ連軍に挑むゲリラのことをいう。すでにアフガニスタン周辺の人たちは、イスラム原理主義のような暮らしをしているようにみえる。ほとんどの人たちは自分たちの暮らしが標準だと思っているが、他のイスラム教と比べてみれば原理主義のような暮らしである。

ホテルニューグリーンに滞在中、私はノリさんたちと一緒に食事をするようになった。隣のテーブルで食事をしている人たちは北欧のテレビ取材チームだった。あと数日でアフガニスタン潜入らしい。入国ではない。戦争中の国に入っていくのだが、入国手続きをして入国するのではない。ゲリラと一緒に密かに潜入するのである。このホテルにはそんな報道関係者がたくさん泊まっていた。一人のアメリカ人カメラマンもいた。海兵隊を辞めてから、戦場のフリーカメラマンになったそうだ。この頃、日本やアメリカではテレビ局や新聞社の社員を戦場の取材に出さなくなったそうだ。ベトナム戦争の時は正社員を派遣した。その経験で有名になった記者やカメラマンがずいぶんといた。私はその人たちの本を読んだものだった。

私はホテルニューグリーンにずっと泊まっているのではない。ここから北西辺境州内のいくつかの地域でガンダーラ遺跡に関する調査をするのである。ペシャワールの北東に広がる平野にある遺跡は、クシャーン朝最盛期のものが多い。そこから北へマラカンド峠を越えると、スワート渓谷である。ペシャワールより少

し標高が高いので、日本の本州のような気温ですごしやすい。この地域はイタリアが発掘調査をしたところである。仏教の歴史を研究する上で、大変に興味深い遺跡が多い。現場に立って、どんな空気のところで思想が形成されたのか考えてみたい。また、遺跡はそうした思想展開の表現であるように思う。スワート渓谷はとても興味深い土地である。

ところで、このスワート地域で2012 年にマララ･ユスフザイさんが銃撃された。

私がスワートからペシャワールに帰ってきたら、ノリさんたちが従軍する部隊が決まったという。パンチシールに向かう補給部隊と行動をともにするのである。この頃、ソ連軍に対抗するゲリラは主なもので３グループあった。マスードを中心にしたグループ、ヘクマティアルを中心にしたグループ、ドスダム将軍を中心にした軍閥だった。マスードはタジク人、ヘクマティアルはパシュトゥ人、ドスダムはウズベク人である。彼らが何人であるかが、あれから今日までのアフガニスタンの歴史展開の大きな要素となった。

ノリさんたちのアフガニスタン潜入の日が近づくにつれて、緊張が高まる。ノリさんと一緒に行くレポーターがこんな話をしてくれた。

「俺、この前、アフガニスタンの北の国境の所、アムダリア(川)あたりで、取材したんだ。アフガニスタンからソ連に兵士を乗せたトラックが橋を渡ってくる。兵士たちは、笑い合い、ほんとうに嬉しそうだった。そのあと、逆にアフガニスタンに入っていくトラックに乗せられた兵士は緊張感いっぱいの張り詰めた顔をしていた」

ソ連兵は戦車のハッチを開いて顔を出したりしないという。顔を出すと、そこを狙撃されるからだそうだ。戦車が破壊されたり、ヘリコプターが撃墜されたりすると大変だ。捕まった兵士はなぶり殺しにされるという。ゲリラとして戦うアフガニスタン人は、戦争で家族を亡くした者だという。

出発の前夜は、ノリさんは眠れただろうか。その朝、ペシャワール郊外で何台かのジープに荷物が満載されていた。ノリさんは荷物の後ろの隙間に足をいれて、進行方向と逆向きに坐った。振り落とされないように積み荷のロープをしっかり握って、ジープは出発した。ノリさんは私の目を見つめていた。ジープが離れていくが、ノリさんはじっと見つめていた。私もずっと見つめていた。ジープが見えなくなってもノリさんの視線をさがした。ゲリラのオフィスに帰ろうと声をかけられるまで、私はその場に立ち尽くした。

ノリさんたちとアメリカ人カメラマンがアフガニスタンに行ってから、ホテルニューグリーンに活気がなくなった。郊外の高級ホテルから通っ

てきていたイギリス人ジャーナリストも取材ネタのおこぼれを拾えなくなったので来なくなった。報道関係者が少なくなると、話をしに来る人もほとんどいない。そんな中、老人が訪ねてきて私に話を聞いてくれという。私は報道関係者じゃないよといったが、かまわず話し始めた。彼は、この戦争はいつまでも続かないという。ソ連の補給が保たないという。そもそもソ連はソ連南部でイスラム教徒が増えて、数十年でソ連はイスラム教徒の国になるという。この戦争を続けていると、ソ連南部のイスラム教徒が補給路に戦いを仕掛けるだろうという。その後の歴史は彼のいうようにはならなかったが、ソ連が自国に異なる宗教を入れさせないためその外側を侵略するという話には驚いた。

私はノリさんたちの安全を尋ねるためにペシャワールの町の中にあるゲリラのオフィスを何度か訪ねた。そのグループはマスードを中心とするグループだった。そこで私はマスードの弟に紹介された。風貌はよく似ているが、自分は兄のように戦闘に出ることはできない。自分は、文学が好きで詩作などをしていたいから、ここに居るのだという。

マスードはソ連が侵略を始めたとき、学生だったが故郷のパンチシールに戻り、数人の仲間とソ連軍に戦いを挑んだ。彼のグループは勝利を重ねた。パンチシールは戦場になることはなかった。マスードはここに学校と病院を作った。そして、ソ連兵の捕虜収容施設も作った。ノリさんたちの一つの目的は、この捕虜の取材であった。パンチシールのみに捕虜収容施設があった。マスードは1989 年にソ連が撤退するときに、すべての捕虜を解放した。私の想像であるが、マスードのこうした行為は一般的なアフガニスタン国民には受け入れがたかったのかも知れない。1989 年にソ連が撤退して、アフガニスタンはいろんな勢力が名乗りをあげた。ちょうど映画『アラビアのロレンス』を見るかのようになった。その中でアルカイーダが台頭する。アルカイーダの登場はタジク人のマスードがアフガニスタンの中心になることを嫌ったパキスタンがパシュトゥ人の政府を作ろうとする狙いがあったといわれる。しかし、アルカイーダはビンラディンに牛耳られてしまう。そして、マスードは 2001 年 9 月 9 日にビンラディンの送った暗殺者によって爆死する。マスードの死を確認したビンラディンは、9 月 11 日に同時多発テロを実行した。

今は昔、もうすぐ 40 年になろうとする。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第42回

『総理の夫』

1．里帰り

年末、突然、里帰りすることになった。3 年ぶりくらいである。この 2 年くらいはコロナが続いていたので、母の方も今は帰らないほうがいいとずっと言っていた。やっと少し収まってきて、本来ならば父の命日の 2 月に帰る予定だったのが、急遽、里帰りを決行することになったのだ。

俺が帰省するときは、大概はこうだ。その時の勢いで突然里帰りする。母や弟も突然帰ってくるのでびっくりする。

俺はあまり故郷に帰りたくない。この連載で何度も書いている通り、俺は故郷が好きじゃない。それに強迫的心配性なので、留守中に家が泥棒に入られるんじゃないかと心配になる。前もって里帰りの計画を立てていると心配があれこれ募っていく。むしろ、思いついた日にパッと帰るのが一番いいのだ。

とは言っても、俺は長いこと故郷にいることはできない。京都のことが気になって 3 日くらいでとんぼ帰りしてしまう。せっかく自分の京都での生活を確立してきたのだ。実家にいる間に泥棒にでも入られて、あるいは家が火事になって、全て無くしたりしたら、俺はこれから何を支えに生きていけばいいのだろうか。

今回帰ることになったのは、暮れも押し迫った 26 日である。その日たまたま大阪でちょっとだけ発表を頼まれていた。若い先生たちが中心の会で、今まだ 30 代の彼らから見れば、俺はベテランである。何か話をしてくれないかというのだ。場所は大阪。大阪まで行くんだったら、その後、そのまま新大阪から帰れる。

しかし、もう 12 月に入ってだいぶ経つ、チケットが手に入るのか。俺が大学の頃、1 月 2 日に里帰りから京都に戻ろうとすると、指定席はいっぱいで自由席しかなく、座るどころか立てないという状況だった。もう 2 度とあんな思いはしたくない。それで俺は正月には帰らないと割り切ってず

っと生きてきた。

ところが、直前になった頃、ふと思いついてネットで見ると 26 日の夜はまだ席がある。正月は、3 日は流石に埋まっているが 2 日までだったらチェットが空いている。昔に比べれば、新幹線の本数も増えて、帰省時期もばらついてきて、席に余裕が出てきたのだろう。

じゃあ、久しぶりに帰ろうか。母はもう 80 代である。いつ何が起きるかわからない。その日発表が終わり、若い先生たちと焼肉を食べて最終の新幹線で帰ることになった。大阪というと近いようで遠い。土地勘がないので、思わぬトラブルも起きる。その日は早めに食事会の席を立ってタクシーに乗り、早めに駅に着いたのはよかったものの、雪で新幹線が大幅に遅れてしまい、30 分くらい待つ羽目になった。

最終の新幹線である。30 分であっても雪で遅れてしまうとその後の時間もどんどん押していった。故郷の駅に着いたのは深夜の 12 時を回っていた。駅は昔に比べると相当変わっていて、綺麗になっていた。

しかし、着いた途端にちょっとしたトラブル。タクシーが来ないのだった。もう深夜を回っているので駅前であってもタクシーは泊まっていない。一緒に並んでいた、女性二人が親切にも電話で俺の分のタクシーも呼んでくれた。

実家は駅からタクシーで 10 分もかからないところなのだが、危うく道を間違うところだった。街の風景がだいぶ変わってしまっているのでタクシーの運転手さんに指示しても、うまく通じないのだ。

踏んだり蹴ったりで、どうにか家に着いたのは 12 時をはるかに回った時間だった。母はまだ起きていてくれてインスタントラーメンを作ってくれた。

そしてそれから 1 週間ほど実家に滞在することになった。 1 週間も滞在するのは本当に何十年ぶりだろうか。

母は今 83 歳。今年の 3 月で 84 歳になる。しかし、歳の割には元気だ。帰省中は毎日俺のために食事を作ってくれた。商家だったため、母は仕事が忙しく、俺が子供の頃には美味しいものを食べさせてあげられなかったことが後悔だと言っていて、今回はその埋め合わせに張り切っていたみたいだった。

母は高齢だが、死ぬことは怖くないと言っている。母の人生は 60 くらいまでは大変だったが、その後、徐々に幸せが巡ってくるようになって、今では幸せを感じているみたいだ。終わりよければ、すべてよし。母は自分の人生を後悔していない。

弟は親孝行ないい子だが、どうにも婚活がうまく行かなくて、もうすぐ 50 なのに独身である。今更相手が見つかったにしても子供を持つにはもう遅いだろう。母は結局孫の顔を見ることはないのだが、そのことも気にしていない。

親戚のおじさんたちはすべて亡くなった。おばさんたちはまだ体は大丈夫だが、もう頭はボケてきている。時は確実に流れていくのだった。

１週間帰っても何もすることがあるわけではない。故郷に帰省しても変わらず映画館通いが続いた。街は昔に比べると都会化している。洒落た都会風の建築物が増えて、垢抜けしてきている。

都会との違いは、私服の高校がないということだ。実は俺が地方を拒むのは、そこに理由の一つがあったのだ。これは前にも書いたかも知れないが、俺は大学の頃から付属校から入ってきた連中が好きだった。俺が同一化の対象にできるのは彼らだけだったのだ。私立大学の付属校だと制服もない、規則も厳しくない、受験もない、おおらかで、高校くらいからディスコに行ったりしていたような子が当時から多かった。

俺は故郷にいた頃、散々、体罰や校則に苦しめられ、不登校になった。不登校を理解してくれる人は少ない時代だった。地方の公立高校に通っていたような連中は、俺がどうしても受け入れられなかったことを受け入れてきた奴らだ。その一方で、付属校組はのびのびと 10 代を生きてきている。だから俺は彼らだったら同一化できる。俺だ

って、付属校だったら、まともに高校に行けていたかも知れないと思うからである。

考えてみれば、俺の人生は自分が同一化できる人を探しての旅だったのだった。これも前に書いたか（笑）。

２．アイデンティティを探して

人生というのは長いようで短い。京都に初めてきた日のことが昨日のことのように蘇る。地方の学生が都会に来てまず失敗するのは地下鉄や私鉄の乗り方である。俺も京都から梅田に初めて遊びに行った時、チケットの買い方がわからず、当時は駅員さんも無愛想だったため、まともには教えてくれず、どうにか買い方はわかったものの、普通列車に乗ってしまった。

地方都市には路面電車しかない。だから地方から来た学生は、特急に乗ると追加料金が発生すると思ってしまう。これは、今でも変わっていないようで、地方から来た学生たちに京都に来てからの失敗談を訊くと、その話が必ず出てくる。

とは言っても、東京の人から見れば京都も地方だ。俺は、東京に行くたびに東京はメトロポリスだなあと思う。かつては東京に憧れた俺だったけど、結局、東京で暮らすことはなく、京都でもう40年暮らそうとしているのだった。そして今となっては京都での生活をどうしても手放したくない。その気持ちが強過ぎて、強迫症になってしまっているのだった。

俺は故郷とうまく行かず、入った学校とうまく行かず、自分のアイデンティティと胸を張って言えるような場所が一つもないのだ。それはもちろん、自分の居るところに満足できない、俺の性格のせいでもあるのだけど、性格は宿命である。そうそう変わるものじゃない。自分の居場所をどこかに探したい。それを求め続けてきた俺は、ついに京都での生活が40年近くになり、京都に居場所を築こうとしているのだった。今の俺には京都がなくなったら、自分のバックボーンもアイデンティティも無くなってしまうのだった。

俺の今の生活は、仕事、外食、映画、マッサージ、ボクシング、そして電車とバスの通勤で過ぎている。以前は水泳も俺の人生の一部だった。

しかし、今は水泳はほとんど行っていない。仕事が忙しくて、なかなか近所のスポーツクラブに行くことができない。それで一応退会して余裕ができてから行くのだとついに割り切った。お金さえ払えば、単発でクラブを利用することもできる。これからお金も倹約して、老後に備えなくてはならないので、行きもしないのに無駄な月謝を払うよりも、その方がいいだろう。

この原稿が出る頃には俺は58歳だ。確実に歳はとっている。自分の写真を見ても、おじさんからおじいさんの領域に変わりつる顔だなあと感じる。それに、何よりも気力や体力が峠を超えてきてしまっている。

先日、毎年恒例の『キネマ旬報』のベストテンが発表になって、去年の外国映画の２位にワイズマン監督の『ボストン市庁舎』がランクされている。ちょうど今出町座で上映中だ。　30代の頃だったら大阪や神戸であっても軽い気持ちで見に行っていたのだけど、今は京都でも4時間を超える映画は見にいく気にならない。それどころか近所の蔦屋まで自転車を走らせることすら億劫になっている。今や、映画も配信の時代。それに慣らされているため、ほとんど外に出る気にもならなくなっているのだ。

ボクシングはチケット会員なので、どうにか３週間に１回ほど通っている。ここが楽しいのは、男ばかりの世界を堪能できることだ。女性の会員もいるのだが、俺の行く時間帯は男ばかりなので、他のマッチョな男性たちの一員になれる。伊藤公雄さんによると、俺が憧憬しているものは「ホモエロティシズム」なのだ。俺は彼らと肉体的な関係を持ちたいとは思わない。だけど、体育会的な男同士のつながりを持ちたいと思うのだった。俺は子供の頃からこういう体育会的環境に憧れながらも、運動神経が鈍かったため、参加することが

できず、結果として引きこもってしまったのだった。

その傷跡はいまだに癒えてはいない。大人になってからは、プールも 20 年くらいは本格的にやっていたわけだし、ボクシングも少しずつ上達している。俺が運動神経がなかったことを知っているやつなんていない。

もう運動音痴だった自分は卒業して良いのだ。誰も俺の少年時代なんて知らんのだから、しかし、俺が少年時代に受けた傷はあまりにも大きく、50 年近くが経った今でも解決することはできないのだった。

あの当時の体育教師は、結局、校長になって教師生活を全うしたようだ。その間、紆余曲折あって、多少はあいつも変わったのかも知れないが、ネットに出ていた写真を見ると大して変わっているようにも見えない。元々お山の大将になるのが好きな人だったから、自分から校長を志願したのだろう。

俺は何も悪いことはしていない。少なくとも自分の意思を他人に強要して、相手を傷つけるようなことはしていない。だけど、神様は俺には試練を与えた。どん底の試練を与えた。人生の早い時期に心が壊れた俺は、家庭的な幸せも欲しない人間になってしまい、社会的にも認知されないまま、還暦を迎えようとしているのだった。

一方で、あいつは俺の人格を粉々に傷つけ、おそらくそのことに気づきもせず、一生を全うしようとしている。このやりきれなさをどう消化したら良いのだろうか。

３．周縁的男性

周司あきらの『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』（大月書店）という本を読んだ。

この本にはコンネルの説が引用されていて、男性を４つにカテゴライズしている。最も高い規範と見做される覇権的男性性(Hegemony)、それに追随しようとして利益を得る共犯的男性性（Complicity)、男らしさが欠如している従属的男性性（Subordination)、異なった、特有の男らしさを保持する周縁的男性性（Marginalization）の 4 種類である。この著者の話だとゲイは従属的で、トランスは周縁的にカテゴライズされるとのことだ。

俺は従属的というよりも周縁的だった。どこにも属さない。群れから外れた子羊のような子だった。今でも俺は周りの人から「ユニークだ」と言われる。相手は悪気もなく、むしろ、面白いという意味でポジティブに言ってくれているのだが、そう言われると俺は今でもなんとなく、胸が痛いような気持ちになる。

今は、それなりに友達もいるが、俺が 40 ぐらいまで長い孤独な人生を歩まざるを得なかったのは、どこにも属さない男だったからなのだった。大学に入ってからは、どこかに居場所を探そう、どこかに属そうと必死だったのだが、それが裏目に出まくった日々だった。本当に亀の歩み。一歩、一歩しか前に進むことはなかった。

そして、その俺も 58 歳。結局、仕事は非常勤のまま。このままどこにも属さないまま孤独に人生を終えることになるのだろう。その方が俺に合っているとは言えるけれど、やはりこういう宿命を背負って生まれた自分が悲しくもあるのだった。

これまでの 30 年間。勉強は山のようにしてきた。将来への不安をかき消すために勉強をしていた。しかし、今となってはどんな本を読んでも昔ほどには引き込まれない。ジェンダーの勉強も山のようにしてきて、今となってはジェンダー関連の新刊を見ても、食指が沸かないのだった。

これからはボランティア活動でも始めて、自分よりも他人に目を向けるのも良いかも知れない。誰かの居場所になることが悩みの解決策なのかも知れないのだ。

４．男も映画が安くなる！！！

痛恨の思いを抱えたまま人は一生を終えるのだ

ろうか。おそらく、一生、俺を傷つけてきた人にリベンジするチャンスは巡ってこない。これからの人生を取り戻すチャンスも巡ってこない。あるものと言えば、悔しい気持ちとまだ癒えないトラウマである。

ただ、世の中は着々と俺が望んでいた方向に進んでいる。

最近の一大事として言えるのは、映画のレディスデーがなくなったことだ。今は京都の映画館は水曜日はレディースデーではなく、割引デーに代わり、男性であっても割引料金で見ることができる。

レディースデーは数ある男性差別の一つだった。

20 年くらい前から「男性差別は？」と訊くと、「映画のレディースデー」と答える男子学生が多かった。「男だって安い方がいいのに！」と言っていた。昔だったら男性の方が収入は多かったから、たまに女性が優遇されるのは仕方がないと思っている人が多かったはずだが、今の若い男性たちは男女平等が当然の中で生きてきているので、なぜ、そこで女性が優遇されるのかがわからないみたいだった。

普段は「男女平等！」「性差別反対！」とうるさく言っている女性たちも、この部分になると声が小さくなっていた。

例えば、15 年ほど前ある女性の先生にレディースデーのことを話すと「せせこましいー。そんなこと言っているような男の人に限って映画なんて見ないくせに」と笑われたものだった。

また、男女共同参画センターに置かれていたチラシにも、「レディースデーは映画館がお客さんに来てもらうための苦肉の策なのだし、それに今はレディスデー以外にも、映画の日やレイトショーなど男性でも割引料金で見ることのできる時はあるから、そういう時に男性も見に行けばいいのですよ」と書かれていた。

女性差別となったら絶対に許そうとしない人たちが、男性差別に対しては「それくらいのこと」と一蹴してしまう。その態度が問題なのだと俺は思っていた。実際、アメリカではレディースデーなんてないはずだし、作ったら問題になるという話を聞いたことがあった。

でも、やっとこれで男性差別ひとつ解消である！！！　これはこれで価値あることなのだ。男でも差別を摘発できるような世の中にしなければ、男性問題はいつまでも認知されていかない。映画のサービスデー自体は小さな差別であったにしても、小さいことを少しずつ積み重ねていくうちに、男性も差別されているという認識が世の中にできあがっていくはずなのだ。男性が差別を訴えることができるようになったことが進歩なのである。

とは言っても、俺はもう 58 歳だ。サービスデーの恩恵を受けられるのはあと 2 年だけ。60 歳になったらみんなシニア料金なのでいつでも割引になるのだ。

やはり俺は生まれてくるのが早過ぎたのだった。

5．　失ったものを求めて

58 にもなると新しい世界に出会うことも少なくなっていく。しかし、最近になって縁ができて、キリスト教の聖歌隊に参加させてもらうことになった。とは言っても、まだ入ったばかりの新米なので、いつまで続くかはわからないが、とりあえず、新しい世界の入り口に立った。まだしばらくは希望を持って生きていけ！という神様のお告げなのだろうか。

俺の声はバスである。俺の声は他の男性たちよりも 1 オクターブくらい低い。俺は女みたいな男なのに、声が低い。自分に合わないなあ。体の横幅がでかいのも自分のキャラとあっていない。俺はやはり「まだらマッチョ」なのだ。

まだまだ歌の方はメロディをまともに覚えてもいないが、上等の楽譜ファイルを買った。これでしばらくは続けるという決心をつけるためだ。

日曜日の礼拝が終わった後、毎週 30 分くらい練習。聖歌隊のメンバーは俺より年上の人が大半で、しかも元学校の先生だった人が多い。そのせいか、

人の世話をするのは得意な人たちのようで、まだ入ったばかりの俺にも気を遣ってくれる。メロディが覚えられないので、わざわざ、テープに録音してくれた人もいて、感激だった。

皆で 30 分ほど指導の先生のピアノに合わせて、歌を歌っていると若い頃の切ない思いが湧き上がってくる。俺は高校の時にそれができなかった。皆が高校に通っていた 3 年間。俺は一人で過ごしたのだ。俺が一人で過ごしていた頃、他の人たちは、クラブで青春を謳歌していたのだろう。

あの当時の俺は本当に苦しかった。袋小路だった。しかし、誰もわかってくれなかった。見当はずれなことばかり言われた。白眼視された。まだ不登校という言葉もなかった頃である。

あー、また過去の悲しみへと引き戻される。

若い頃の空白を埋めるために、俺はアクティブおじいさん、スポーツマンおじいさんになりたい！と思うのだが、その一方で、この頃は趣味や人間関係を整理しなくてはという気持ちにもなってきている。そうしないことには体力がもたないし、歳をとってくると、自分にとってプラスになることとならないことがなんとなくわかってくる。

昔、『母の眠り』という映画で、「小さな世界の中にこそ、大きなものがある」というセリフが出てきた。まさにそうなのである。

若い頃はさまざまなものを試したが、歳をとってからは全てを試すゆとりがなくなってくる。今までしてきたものを深めつつ、新たに縁があるものが見つかればやっていく。そういうスタンスに変えていかなくてはならない。

一時期はさまざまな飲食店を食べ歩きするのが楽しかったが、この 10 年くらいは徐々にお気に入りの店に絞られてきて、そこの常連さんになってしまっている。量よりも質。これからは見る映画も、通う飲食店も、スポーツも何から何まで手をつけるのではなく、本当に自分に合ったものを探し続けなくてはならない。

6.『総理の夫』（河合勇人監督・2021）

ネットのサイトを検索していたら、田中圭は最も筋肉が美しい男優に選ばれているみたいだ。この人はいつだって可愛い雰囲気の男の役で、性格的には男っぽいというイメージはない。この体とキャラのアンバランスがいいのかもしれない。顔はかわいいのに体はムキムキ。そういうタイプの人を韓国ではだいぶ前からモムちゃんと呼んでいた。日本はこの頃韓国ブームで、俳優さんたちも韓国人的顔の人が流行り（例えば、坂口健太郎など）みたいだ。アジアの大衆文化の中心は今となっては日本よりも韓国なのである。

田中圭の主演の『総理の夫』を見た。タイトルとポスターだけ見ても、大体内容は推察がつくが、これは明らかにジェンダーの反転を意識した映画だ。日本初の女性総理（中谷美紀）の話である。その夫を演じるのが田中圭となっている。

ここで田中圭は、自分よりも社会的に上位にある女性と結婚生活を送り、しかも、家庭的で、妻の体の様子なども気に掛ける男を演じている。女性の仕事をサポートする男という部分に焦点を当てるシンデレラストーリーの反転なのである。田中圭は、これまで『おっさんずラブ』でも、同性愛関係になる男をなんの不自然さもなく演じていた。しかもあの映画では、キャビンアテンダントという常套的な女性の職業をしている男性役だった。そういう男性がハマる人なのである。

これはもちろんジェンダーがなくなっていく社会を風刺しようとしているのだろうが、その部分を強調しないところが、これらの映画の良さだと俺は思っていた。同性と恋愛関係になるということ、男のキャビンアテンダントだということ、妻の方が社会的地位が上であるということ、これらのことをテーマとしてシリアスに描くのではなく、コメディタッチで軽く描いている。もちろん、現実はこうは行かないということはわかっているが、気楽に笑って観ることができるところがいい。

映画の後半、子供の問題がリークする。女性は総理であっても、子供を産む性であるという問題

がクローズアップされる。また別の場面で、「女性女性と騒がれるのは不愉快だ」という総理のセリフが出てくる。定石通り。要するに男女の反転に女性特有の問題が一部絡むとう話でしかないのだ。だけど、こういう映画が増えるうちに次第に国民の意識も変わっていき、現実の「総理の夫」となる人が出ることになるだろう。それを期待したいところだ。

田中圭は、『そして、バトンは渡された』（前田哲監督・2021）でもこれに相通じる役を演じている。ここではヒロイン（永野芽郁）のお父さん役だが、義理の父親という設定であり、血のつながらない娘と二人暮らし。家事はお父さんである彼が担っている。

10 年ほど前までお世話になっていた先生が言っていたのだが、男性が離婚して、女子を引き取る場合、実の父親であっても性的虐待の可能性が懸念されるため、女性よりも親権の獲得が不利になることがあるのだそうだ。つまり、男は血のつながった子であっても性的虐待をするので、子供は女性といた方がいいという考えである。父になった経験のない俺には、実の子というのがどういう感覚なのかがわからないが、確かに映画などでは実子に性的虐待する男性は出てくる。

ところが、この映画の田中圭の場合は、実子ではなく、義理の父である。そうなると実子よりもさらに性的虐待の可能性は高くなるはずで、それがこんなに微笑ましく、血のつながらない父と娘で二人暮らしているというのが新しい時代を感じさせたものだ。

事実、一つ屋根の下で血のつながらない子供と暮らしていても、性的虐待をする男ばかりではない。『マイダディ』（金井純一監督・2021）という映画でも実の娘と思って育てていた娘が、検査の結果実子じゃないと判明するのだが、そのことで彼女が父にとって性的な存在になるわけでもないし、父性愛も変わらないという描き方をされている。

アメリカ映画で『ひとりじゃない、わたしたち』（ニコール・ベックウィズ監督・2021）というのを観たが、これは 40 代のシングル男性が代理母に子供を産んでもらおうとする話だった。ちなみにこの男性はゲイではなく、ただ子供だけ欲しいという人だ。

昔だったら、女性が結婚しないで子供だけ欲しいという話はあったが、男性でこういう人が描かれただろうか。しかも、子供の性別はまだ生まれてみないことにはわからないので、娘である可能性もあるのだ。これはアメリカではどう受け止められているのだろうか。そういう問題を考えた。

性の問題はものすごく大きい。そのせいで男が悪者にされる。女性よりも男性の方が性衝動が強いし、相手が子供であろうが、実子であろうが、虐待する奴はするとみんな思っているからだ。しかし、女性だって肉体的・精神的虐待を子供にする人はいるし、女性から男子への性的虐待が存在しないわけではない。これからは個人に寄り添って解決すべき時代なんだけど、そこまで個別化するのは現実的に難しいのだろう。

まだまだ、ジェンダーの問題は割り切れない事柄が山積である。こんな問題に囚われてしまった自分を恨むなあ。しかし、今となっては俺の人生はジェンダーなしでは語れなくなっている。俺の人生のテーマとして、死ぬまで考え続けるのが俺の宿命みたいである。

役場の対人援助論

（４０）

岡崎　正明

（広島市）

理解するということ

帰ってきた男

今年度、16 年ぶりに児童相談所へ戻った。
「10 年ひと昔」というが、最近の時代の流れはさらに早い。パソコンなんか５年で古い機種。芸能人のスキャンダルなんてもっと消費スピードは早い。
久しぶりに戻った児相は、変わらないこと・変わったことが半々か、むしろ変わったことのほうが多い印象で。それがますます戸惑いの原因となった。
そこは昔と同じく、家族支援の最前線ではあったが、警察との関りや虐待対応へのルールは大きく変化していた。
それもそのはずで、なにせ私が以前いた頃と比べ、虐待相談件数は全国で 10 倍。そして職員数は２倍になっていた（この数字がもはやミスマッチだが）。

チームリーダーという仕事を与えられ、日々悩み、考え、憤り、時に小さな希望に感動しながら働いている。
奮闘している若い職員たち。支えてくれる同僚や上司。そして関係する他機関や社会資源。常に「足りて無さ」を感じながらも、それでもその場に踏みとどまって、できること精一杯をする。それが今も昔も変わらぬ児童福祉現場のリアルだ。そんな仲間たちに、心から敬意と感謝を表したい。まあそれと同じくらい悩まされ、ぶつかることもあるのだけれど。でも人が交わるって、そういうことだとも思う。

以前のいちワーカーという立場から、スーパーバイザーとして。その役割にふさわしい仕事をまだまだ模索中で、日々至らなさを感じている。かといってあまり不足ばかりを思うと続ける気力が失われる。そうなると、結局巡り巡って職場や市民の利益にならないな…と思い、目の前のできたことを正当に評価することも忘れないようにしている。

リーダーやバイザーという立場になると、広く多くのケースを知り、俯瞰することが求められる。ケースへの関りも間接的になりがちである。ワーカー時代のように担当ケースにどっぷりと深く、至近距離で関わり、直接的に働きかけることは少なくなる。

ケースに真正面から対峙する機会は減るが、当然楽になるわけもなく。ワーカー時代の数倍のケースへの「理解・判断・選択」を迅速に求められる業務は、常に気が抜けない。ワーカーと協働しながら助言や指示・サポートを通じてケースと関わっていく感覚は、手の届かない奥歯に詰まったもやしを、舌だけでなんとか…と思うけど、どうにもできない！というくらい、もどかしくてしょうがない（この例えいるか？）。

バイザー的業務は前職でもやってきたし、虐待対応もそれなりに経験してきた自負はあるが、正直なところ児相に来てから感じるストレスや不全感は、昨年までの比ではないほど私自身を揺さぶっている。原因は様々あるだろうが、その中でも大きいのはやはりケースの圧倒的な分量だろう。

私が所属する児童相談所が、昨年度受けた虐待通告・相談の件数は、約 2200 件。

私のチームは市内の半分を管轄しているため、単純計算でおよそ 1100 件。1100÷365＝1 日平均 3 件ほどとなる（現在、それ以上のペースで相談件数が伸びているが…）。

実際のところは休日があったり、きょうだいのケースもあるので単純には言えないが、それにしても 1 日に 3 件の子どもついて、限られた情報からリスクアセスメントを行い、その家族像についてアレコレ想像し、早期の安全確認や、考えられる支援策、効果的な関わり方、関係機関との連携…などなど、多くのことをかなり短期間のうちに検討し、進める必要がある。

中には緊急度の高いものも低いものもあるが、それを見極めるのも十分な注意が必要で。表面上の情報だけで「リスクは低い」とした判断が、後から思わぬ形でひっくり返されるおそれもある。かといってそんな不安から何でもかんでも手厚くできるほど、時間的・人的な余裕もないのが現実だ。

そのように神経を使う作業が、毎日毎日尽きることなく続く。この負担と精神的な消耗感の中に、私を含め全国の児相職員がいると思われる。

理解とアセスメントの違い

日々さまざまな子どもや家族の情報に触れ、それを扱って仕事する中で、私はふと「人を理解する」「家族を理解する」とはどういうことか？改めて考えることがある。

「理解」という言葉を辞書で引くと、

「物事の道理や筋道が正しく分かること。内容をのみこむこと」「他人の気持ちや立場を察すること」などと書かれている。

「あなたのお気持ちはとても理解できる」

「相互理解が重要です」

「私のその時の思いが理解できますか？」

普段の会話や、ニュース・ドラマなどでも頻繁に使われるその言葉の意味は、私の中でもそんなにズレてない気がしている。

だが今の仕事において、「ケース理解」や「家族理解」という意味で使う時。私は果たしてどれだけ正しい意味で、この言葉を扱えているだろうかと思う。

児童虐待相談の現場で重要視される理解とは「その家族がどれだけ虐待の危険度が高いのか？」を知るための、いわゆるリスクアセスメントが中心である。
子どものケガやアザの状況、身辺の乱れ、発育発達特性、対人関係、登校状況から、親の病歴、経済状況、親戚や地域との関係、生育歴など。今ある情報から虐待のリスク（危険因子）を見極める。もちろん家族の強みや安心につながる情報も大事にするが、家庭という密室で起こる悲劇を見逃さないために、どうしても危険や心配な情報にウエイトを置き、敏感になることが求められる。

ただその時気をつけなければいけないと思うのは、私たちはつい自分が知った情報だけで、相手を理解した気になりがちである、という事実だ。
先に述べたような虐待のリスクアセスメント中心で家族を見ることを繰り返していると、つい「この親はこんなリスクがある人だから」「この家族はこんなにリスクが多いから」という視点だけで、相手を判断してしまう。「典型的な DV 夫だね」「パーソナリティ障害の親って、こんな感じ」。ステレオタイプや偏見が私たちの中にできるのは、あっという間だ。
しかし家族というのは、別に虐待が「おきるか」「おきないか」だけの価値で測るために存在しているのではない。もっと複雑で多様で、個性に富んだ存在のはずである。

その対象者は関係機関とは度々衝突するが、友人とは長く関係性を維持できる人かもしれないし、片づけられないけど、風呂掃除だけは好きで丁寧にする人かもしれない。
甘いものが好きだけどあんこは苦手かもしれないし、勉強は嫌いでも推理小説は好きかもしれない。意外な特技があって全国大会に出てたり、乾燥肌で、暑がりで、おまけに胃が弱いタイプかもしれない。どんな遊びが好きで、どんな芸能人が好きか。小さいときの夢は…。そんなあらゆる些末でささやかな特徴の集合体が個人であり、そんな人が集まっているのが家族だということを、忘れてはいけない。
私たちが見ている家族の姿は、たかだか訪問や面談の限られた時間の中で、しかも支援職相手に見せた顔にしか過ぎない。自分が病院にかかったときに医者や看護師に見せる数十分の姿が、自分のすべてでないことを思えば、その理解が家族の一面でしかないことは至極当然のことだろう。

理解の海を深く潜る

本当に相手を理解するというのは、ただその人の情報を知ったり、何かの尺度でアセスメントすることだけではできない。そういう前提を、対人援助職として忘れたくない。
もちろん今の仕事ではそれだけを突き詰めていくことは難しいだろう。それでも私は、つい分かった気になってしまいがちな己に自戒を込めて、そう思っている。

では相手を深く理解するということは、どういうことなのか。
私なりに考えて今辿り着いているのは「自分がその相手になったら、どういう景色が見えるのかを想像し、追体験すること」という感覚である。

BSNHK で放送している「英雄たちの選択」という番組がある。個人的に歴史が好きでよく見る番組なのだが、番組の中で毎回、歴史上の人物が大きな選択をする場面が取り上げられ「あなたがその時その人物ならどうしますか？」と問われる形式になっている。例えば石田三成なら、関ヶ原の戦いをあの時あの状況でするか、しないかとか。それはすでに歴史の答えを知っている今の自分が、後出しジャンケン的に「こうすりゃよかったのに～」としたり顔で言うのではなく、己がその人の立場に置かれ、その状況を迎えたとして…という想像を求める作業だ。

前者は他人の立場から評論するだけだが、後者は本人の気持ちや立場を想像し、その存在になってみる行為。どちらが深く対象に迫れるかは明らかだろう。

ブレイディみかこ氏が紹介していた英国の諺「他人の靴を履いてみる」も、この感覚に通じるものがある気がしている。

これは以前私が行っていたお店での話。

当時の職場の近くで、時々ランチに利用していたお好み焼き屋さんだった。

行き始めた頃は、足の不自由な私がフラフラと歩くのを見て、接客担当のバイトと思しき青年が戸惑いの表情をしながら、こちらをチラチラと気にかけている様子があった。先輩と思われる店員も私の様子を気にし、「カウンターで大丈夫ですか？」と、ちょっと特別なものを扱う感じで案内してくれた。支払いを済ませて店から出ようとする私を見ると、バイト青年は慌てて店のドアを開けに行こうとし、それを目の端で捉えた私は速度を緩めて歩き、彼がドアを開けるタイミングを待ったりしていた。内心「別に出入りに支援はいらんのだけどなー」と思いながらも。

そんなことがしばらく繰り返されていたが、ある時支払いを終えて店を出た後に気がついた。

そういえば今日はわざわざ扉を開け閉めしに来なかったな…。別に客が多くて忙しい状況でもなかった。バイト青年はレジで会計を受け持ってくれ、迷いのない表情で私に「ありがとうございましたー」と営業スマイルを示すと、すぐに私のいた席に行って皿やコップを下げていた。先輩定員も「お好きな席にどうぞ～」と他の客にするのと同じような声かけだけで、すぐ調理に集中していた。

一連の流れがあまりに自然で店を出るまで気づかなかったが、その時私はあの店と少し距離が縮まった気がして、なんとなく嬉しくなったのだった。「常連」まではいかないにしても、「よく来るランチ客」くらいに昇格できたというか。

店側の私という存在への理解が深まったことで、互いにとって自然な距離感や付き合い方を見つけられた。そんなことを体感した経験だった。

相手をより良く理解する過程には、実はこういう時間の共有や体験的な部分が、とても大切なのではないだろうかと思っている。昔から「人には添うてみよ馬には乗ってみよ」というではないか。それがより相手への想像や共感を深めることにつながる気がしている。

周りの評価や表面的な情報、目的が限定された会話の中できる理解は、一面的なものになりがちだ。一見効率が悪くとも、繰り返し出会うことや、無駄と思える情報、たわいない雑談の中に、実は相手への理解を深めるヒントが隠されていることもあるのではないか。そしてそういう意外なところに、膠着した支援を大きく転換する鍵があったり。そんな場面に、２０年の対人援助業務の中で何度か出会ってきたように思う。

臨床のきれはし

Sheet 16

浅田 英輔

Framework

○お金の枠組み

心理のお勉強で初期に学ぶのが「枠組み」のことである。心理的支援はカタチのないものだし、「話を聞いているだけ」と思われることも多い。でもただ聞いているだけではなく専門技術の提供であるので、料金をいただかなければならない。ここで、「無償のカウンセリングの是非」を考えることになる。相手がお金持ちならいくらでももらえばいいが（本当は、いいかどうかも考えなければならない）、困って相談に来る人はそんなにお金持ちではないことも多い。自分自身の生活を考えても、「毎週 90 分 5000 円（とか 1 万円とか）」を出せるだろうか。私は出せない。出せないこともないかもしれないけど、だいぶきつい。そう考えても、相応の結果や効果を提供するのはもちろんだが、「この人は安くはないお金を払ってここにいる」ことを大事にしなければならない。生活が厳しい人だからといって、今日はまけときます、というわけにはいかない（最初から決めておくならあり）。「1 回くらいいいだろう」と思うかもしれないが、1 回で済まなくなることも多いだろう。そうなると、今度はこちらがわが「なんでタダなんだよ」とか「こんな安くやってるのに」といった不満がでてくることになる。ほかの人との兼ね合いを考えても、きっちりと料金を決め、お金を払う人、お金をもらってサービスを提供する人という枠組みを作ることが、セラピスト、クライエント双方の安全を作るのだ。

○関係の枠組み

まず料金の枠組みについて書いたが、実際場面で大事なのは役割における枠組である。公認心理師法で定められ、よく話題になるのが「多重関係の禁止」である。「セラピストークライエント」以外の関係がある人にセラピーを提供できないという禁止事項だ。家族、パートナー、友人等々、日常生活における関係がある人にはセラピーしてはいけないのだ。余計な背景を考えてしまったり、その後の関係性を考えて言うべきことを言わなかったりすることもある。また、セラピーにおいてはどうしてもセラピスト側が強い力を持っているので、それが日常の関係性に影響してしまう危険があるのだ。この場合の強い力とは、「この人は誰にも言っていない私の秘密を知っている」ということもあるし、セラピストが「自分のことをわかってくれる素晴らしい人」に見えているということもある。そして普通のセラピーでは、クライエントがセラピストの秘密を知ることはない。

「オマエの大事な秘密を知っているんだぞ」ということを盾にされると、通常の関係とは違ったものになるだろう。そしてそれはクライエントのためにはならない。

そういったことから、多重関係におけるセラピーが禁止事項になっている。

○役割の枠組み

また、セラピストといっても立場は様々であり、病院の臨床心理士と、児童相談所の児童心理司、学校のスクールカウンセラー（ＳＣ）はどれも心理職だが、役割は違う。ＳＣは虐待を受けている子を一時保護することはできないし、児相の心理はセラピーの料金を取ることはできない。病院の心理士が学校で面談をすることは、できないこともないだろうけど普通はしないだろう。

自分の役割が何なのかを、しっかり考えなければならない。児相の心理は、学校での子どもへの対応について助言することはあるが、学校生活の一部しか知ることはできない。そこはＳＣの出番である。それなのに、児相心理が「私が一番この子のことをわかっている」という態度をとり、学校での対応方法に口を出しすぎ、先生を批判していったらどうなるか。学校との関係は悪くなり、結果としてその子のためにならなくなってしまう。児相の役割はなにか、児相における心理の役割はなにか、心理として自分がすべきことはなにかを考え続けなければならない。

以前は、校長などが「学校として一時保護することに決めました」などと児相に連絡してくることがあった。子どもの状態がどうであれ（ひどい虐待を受けているとしても）、一時保護を決めるのは児相の権限である。こういう校長は、役割の枠組みを全くわかっていない残念管理職である。

同様に、児相に相談にきた子について、学校の対応がまずいなーと思っても、児相ができるのはあくまでも「助言」である。「学校での対応をこれこれこうしなさい！」なんていう権限はない。もちろん、助言の範囲で学校側に対応を理解してもらうための手はつくすべきである。このビミョウな違いが判らない人は、心理臨床に向いていないかもしれない。もっというと、仕事なんてみんなそういう枠組み理解が必要なのではないだろうか。

○縦割りとは

これまでのことをまとめると、「自分の領分をわきまえて仕事しろ」ということになる。しかし、それを突き詰めていくと今度は縦割りの問題が出てくる。「これは私の仕事ですが、これは違います」というのは普通のことなのだが、誰に属するかわからない案件が出てきたときなどに、仕事の取り合いや押し付け合いになってしまう。18 歳～20 歳のはざまの問題や、診断はつかないけれど生活に困難がある人たちへの対応などが典型的である。これまで通りの対応をするとなると、「19 歳はウチじゃないので」「発達障害の診断がない人はだめです」とするしかなくなる。また、通常業務が大変になってくると、我々はとにかく「仕事を断る理由」を捜してしまう。そして、「ウチの仕事じゃないんで」とシャットアウトしてしまう。これが縦割りの問題である。

自分の仕事でないにしろ、例えば「隣の事務所で相談に乗ってもらえますよ」とか言うことができれば、縦割り感はだいぶ薄れる。ただし、「よくわからないけど、それは福祉事務所が担当なんじゃないですか？」というのはたらいまわしである。ある程度理解していて、児相ではなく福祉事務所でその手の相

談を受けていることがわかっていれば、「紹介」といえる。

縦割りの問題とは、自分の仕事と相手の仕事を分けることではなく、「相手の仕事に関心のないこと」から生まれると考えられる。

○連携の場における枠組み

心理のギョーカイにおいても、「多職種連携」の波が押し寄せている。心理職の「面接室にひきこもって出てこない」というイメージは、もはや古典となりつつある。心理も当然のように外に出て、他の専門職とやりとりし、情報を共有してクライエント、ケースに取り組むのが当たり前になってきた。

そこで大事になるのが、枠組である。多職種連携の場において、「自分の立場はどういうものなのか」「何を期待されているのか」「何をしてはいけないのか」「誰とケンカになってはまずいのか」「誰に何を理解してもらうことが重要なのか」「どうあっても守るものはなにか」といったものもあるし、「自分の上司は誰なのか」「誰の味方でいなければならないのか」「自分に与えられている権限はなにか」といったことも考えなければならない。「クライエントのため」といえばなんでも許されるものではないのだ。誰かがやらなければならないが、自分の役割ではないことがあるのなら、しかるべき人が行動できるようにしなければならない。

一時保護の是非が話題になるのであれば、児相の職員が（職員個人が決めるわけではないが）「保護するのかしないのか」を明らかにしなければならない。

また、そこにいる他職種の役割もある程度理解しておかなければならない。何を言ったら失礼になるのかということもあるし、「これはあなたの役割ですよね」と言わなければならない場面もあるだろう。「この課題だったらあの職種の人にお願いできるね」ということもわかっていたほうがいい。

多職種連携とは、結構大変なのである。

○枠組みを超えて

枠組みの考え方はいろいろあるが、なにも「枠組みをきっちりして、そこから一歩もはみ出すな」と言いたいわけではない。前にも書いたが、法律なんて変えられるんだし、よくない枠組みだったら変えてしまえばいいと思っている。そして、既存の枠組みをちょこっとずつ超えることが「進歩」だと思う。

しかし、枠組みを超えるのであれば、いまある枠組みを理解していなければならない。「本当は私の役割ではないのだけれど」という前提がなければならない。このあたり、悪い意味で「知識のない善人」の援助者が例になる。自分や相手の役割を理解せず、「クライエントのために」という盲目的ともいえるセリフをのたまって余計な事をするのだ。アンタがやっていることは、アンタの目の前の不安を発散するだけで、誰のためにもならない。

連携・協力をするためには、お互いが自分の役割を理解し、できる範囲で実行している者でなければならないのだ。「私できないんで、まかせます」は連携ではなく丸投げだ。「私があれもこれもやります」は、連携ではなく業務妨害だ。こういうことをしている人たちは、周りはつながりたがらない。自分の役割について考えずに「縦割りはだめだ」なんて言うのは罪深い。

連携していくには、自分の枠組みをわきまえ、相手の枠組みをある程度理解した上で、「ちょこっとだけはみ出す」というのがミソなのではないだろうか。

発達検査と対人援助学

⑦フィードバック

大谷多加志

新しい職場での初年度が終わりに向かっています。職場を変わる時点では、新しい仕事の全容は把握できていなかったですが、業務量はともかく、時間の使い方が色々と工夫できる余地が多かったので、思ったよりも研究や現場の仕事に時間と体力を向けることができ、コロナ禍の影響を考慮しても充実した１年になったと思います。中でも、医療や教育の現場での発達相談の仕事は難しくも面白く、学ぶところが多かったです。そんなわけで、今回は久しぶりに発達検査を用いた発達相談をテーマにしてみようと思います。発達相談のプロセスの中でも、最終盤である「フィードバック」を中心に取り上げます。

1. 発達相談の一連の流れ（実施・報告書の作成・フィードバック）

まず、改めて発達相談の一般的な流れを確認しておきます（図１）。

図１　発達相談の流れ

一般的に、最初に初回相談（インテーク）があります。もともと発達相談を主な相談として位置づけている機関の場合は、初回相談時にそのまま検査まで実施することもあります。ともあれ、相談の主訴に応じた助言やコメントを返す必要がありますので、初回相談に来られた折に、相談の動機やニーズを確認しておくことは重要です。

続いて、検査を実施します。原則的には検査者と子どもと２人で（一対一で）実施することになっていますが、子どもの年齢や保護者の希望によって、保護者も同席している状況で実施する場合もあります。

新版Ｋ式発達検査の開発者である生澤雅夫先生は、検査場面を「構造化された観察場面である」と定義しており、実際、検査場面

においては課題の成否以上に、子どもの行動観察がとても重要です。ここでどれだけの情報をキャッチしておけるかによって、フィードバックの成否はほぼ決まると言っても過言ではないかもしれません。

検査が完了したら、検査報告書を作成します。決まった様式があるわけではないですが、相談機関ごとに何となく慣例として使われているフォームがあったりします。それぞれの現場に応じて最適化された様式になっていることが多いので、基本的には機関のフォーマットに合わせて書いていけばOKだと思います。分量としては、A4用紙1-2枚程度にまとめることが一般的です。

そして、最後が検査結果のフィードバックです。検査報告書を渡すと同時に、報告書の内容について説明したり、保護者や本人からの質問・確認に応じる形で進めていきます。保護者に対する説明はもちろんですが、本人が同席している場合、子ども自身に対するコメントであることも意識しながら説明していくことが求められます。また、時にはご両親やおじいちゃん・おばあちゃん、おじさん・おばさんなど、家族総出で話を聞きに来る、というケースもあったりします。検査者としては少し動揺するかもしれませんが、基本的には、ご家族みんなが、子どものことを心配していたり理解したいと思っていたりされるのだと受け止め、精いっぱいの説明を尽くすことになるかと思います。

2. 報告書作成という難所（情報を整理する・要点をまとめる・言語化する）

以前にもどこかで書いた気がしますが、K 式発達検査は数値的な結果から言えることがそれほど多くありません。そのため、数値的な情報以外の部分は、行動観察の結果や検査場面全体を通してみた発達的特徴、行動上の特徴などを整理して報告書を作成していきます。先ほども述べた通り、決まった様式があるわけではないのですが、新版K 式発達検査 2020 の解説書に例が示されていますので、参考にして頂くとよいかと思います。

以下、報告書を作成する手順について「情報の整理」、「要点をまとめる」、「言語化する」の3つのステップに整理して考えてみます。

【情報を整理する】

数値的な結果から言えることは少ないとは言え、数値に全く触れないというのも、それはそれで不自然な気がします。保護者の方も、検査結果として発達年齢や発達指数が算出されることをご存じである場合も少なくないので、数値に触れないことを『隠している』と受け取られてしまう場合もあります。

一方で、考えておくべきこととして、数値的な結果がその子どもの発達像をどの程度的確の表現することができているのか、という点については、検査者として一度考えておく必要があると思います。例えば、「日常場面ではたくさん困りごとがあるのに、数値的な結果は平均的」という場合や、反対に「日常は特に困っていないけど、数値的にはしんどい」という場合もあります。この時、“この検査結果は正しいのか！？”と結果に対して疑義を投げかける方もおられるのですが、実際のところは「検査場面」という特殊な環境が子どものパフォーマンスに

影響しているケースが大半であるように思います。「個別対応の場であること」、「子どもの興味やペース、発達状態に合わせて課題が提示されること」など、検査場面の特殊性はさまざまなものがあります。検査場面どの要素が、どの程度影響したのかを考察しておくと、支援や配慮に活かせる情報が得ることにもつながります。

また、検査中に繰り返された言動や反応の傾向なども、数値化はされないですが、重要な情報です。例えば「離席（席を立ってうろうろする、検査用具を触りに来る等）」であれば、頻度も大事ですが（検査中に数回～度々）、特定のきっかけや、検査場面のどのあたりの時間帯で生じていたかによって、理解の仕方が変わります。よくあるところでは、「課題の合間で離席する」（やることがない場面／指示が明確でない場面）、「検査の後半」（疲れてくる／集中が切れる）などがあります。前者であれば、支援の例として「指示を明確にする」とか「無駄な待ち時間が生じないようにする」という対応が考えられますし、後者であれば「休憩をはさむ」とか「状況に合った形でリフレッシュできるようにする（授業中なら、前に板書しに来てもらって合法的に離席できる場面を作る、など）」という対応が考えられます。

また、発達的側面と関連づけて考えることも重要です。「授業に集中できない」という訴えがあったケースのうち、何割かは「そもそも授業がよくわからないから面白くない」という理解面の問題がベースにあったりします。そうであれば、支援は「どのように授業を理解しやすくするか」が焦点をあてて行うことになります。

このように、“どのくらいの情報を得ることができているか”、“その情報をどのように整理できるか”によってフィードバックの内容や精度はほとんど決まってくると言ってもいいかもしれません。そういう意味では、一番最初の過程ですが、一番重要であると思います。

【要点をまとめる】

フィードバックに向けて、次の手順は「要約」です。検査場面における具体的な行動観察から得た情報をただ並べてみても、なんとなく冗長になりますし、情報の羅列という感じで、子どもの発達の特徴としては伝わってきません。行動観察の結果から、その子どもの特徴をうまく抽出する必要があります。ただし「注意がそれやすい」とか「言葉の理解が弱い」など、一般化しすぎるのも考えものです。例えばですが、2－3歳の子どもであれば、ほとんどの場合注意は長時間持続できませんし、言葉の理解もまだまだ未熟です。“年齢と比して苦手”という意味なのか、もう少し特徴的な苦手さを示しているのか（例えば、言葉の理解であれば、身近なものの名称はわかる、とか、擬音語・擬態語だとわかりやすい、とか）を明確にしておく必要があります。

どのように要点をまとめていくかは人それぞれやり方が違うと思います。気になった点を箇条書きにして眺めてみたり、ＫＪ法のように視覚化して配置しながらまとめてみるなど、自分にとってやりやすい方法を工夫してみるのがよいと思います。

【言語化する】

最後は「言語化」です。報告書を受け取る相手のことを考えて、伝えたいことにぴっ

たりの言葉を選んでみましょう。ついつい専門用語や、検査上の用語を使ってしまいがちですが、専門用語無しで書けるならそれに越したことはないです。できる限り誤解なく、正確で、わかりやすい言葉でまとめてみましょう。

ある程度報告書作成に慣れてくると、どうしても前にも使った表現や言い回しを多用してしまうことがあります。慣れにはそういう側面がありますし、実際に 1 件の検査報告書にかけられる時間は限られていますので、ある程度止むを得ないとも言えます。一方で、「その子らしさ」を記述し、伝えるためにも、時々は立ち止まって、その子を表現するのにぴったりの言葉を見つけられたらと思います。「いつも同じ所見を書いてしまっている…」と悩む検査者の方ともたくさん出会いました。多分検査者がみんな出会う壁なのだろうと思います。

私の場合は、自分の中にある“感じ”を言葉にするようなイメージで、言いなれた言葉との齟齬や差異になるべくこだわって、何が違うのかを正確に言葉にしようと努めてみる、という手順でトライすることが多いかなと思います。成否はほぼ五分五分という印象で、あまりアテにはなりませんが。

3. いざフィードバック

ここまで準備ができれば、後はフィードバックに臨むだけです。検査報告書にまとめた内容を説明する形になることが一般的で、その場合はまずは報告書に沿って一通りの検査結果を説明し、その後確認したいことや疑問点などについてお聞きしていくという流れになるかと思います。

説明しているうちに、インテークでは把握していなかったニーズや事情があることが浮かび上がってくることもあります。「先に言っておいてよ！」と言いたくなるかもしれませんが、言い出せなかったり単に言いそびれていたり、様々なケースがあります。準備ができなくて動揺するかもしれませんが、その都度対応しましょう。「ちょっと確認してから改めてお伝えしますね」と一度間を取るのもひとつの手です。

実際、過去に発達検査を受けたことがある子どもさんのケースでこんなことがありました。検査のニーズが「発達の経過観察」とお聞きしていて、数値的には前回とそれほど変わらず、課題への意欲や取り組み、検査者とのやりとりでは随分変化もあったので、その点を中心的にフィードバックしていたのですが、お母さんは前回とほぼ同じ「数字」の方を聞いてとてもホッとしたようなご様子でした。ちょっと不思議に思って、よくよく確認してみたところ、「実は数値が〇以下だったらゲーム機を没収しろと夫に言われていたんです」という裏事情がありました。また、ひどく緊張したご様子でお見えの様子で、フィードバックをしてから感想をお聞きしたところ、「検査結果によって障害かどうかが判断されるのだと思っていた」とおっしゃった方もおられました。

フィードバックの場面は、検査者にとっても緊張感がありますが、保護者の方にとっても様々な思いや不安、緊張がない交ぜになっていたりします。相手の状況を理解して、最善の形で検査結果をこれからの生活に活用してもらえるように、十分な準備と少しだけの気持ちの余裕を持ってフィードバックに臨んで頂けたらと思います。

講演会＆ライブな日々㉚

古川　秀明

『SC・SSW・養護教諭による新しい学校内対人援助システム物語』

第四話・実践経過Ⅱ

②アディクション（依存症）

【概要】

この５年間で児童生徒１名、保護者１名に実施。

児童生徒の症状はゲーム依存。保護者はアルコール依存だった。

アルコール依存に関しては、本人の動機付け面接が大きな鍵となる。

依存症、特に薬物やアルコールに関しては、心理療法はなかなか歯が立たないのが現状。

医療機関や断酒会の協力は不可欠となる。

このケースに関しては、医師、精神保健福祉士、ＳＣ，ＳＳＷが協働。

特に精神科の医師もオープンダイアローグに関して、病院内の精神保健福祉士の推薦もあり、協力的だった。

リフレクティングチームはＳＣとＳＳＷが担当。

ゲーム依存に関しては、昨今、多くの保護者を悩ましている。

ゲーム依存と不登校、ひきこもり、発達の問題は常に紐づけられる。

このケース（アルコール依存症）に関しては、担任教師、養護教諭、ＳＣがリフレクティングチームを組み、本人と家族を含めたオープンダイアローグを実施。

【実践経過】
「京都府 K 高校(私学)１年男子まさしと、S 小学校６年女子あきこのケース」

＊まさし、あきこはきょうだい(名前は全て仮名)

来談理由

- 古川が SC として勤務する私学の高校に入学したまさし。
- ところがその年の GW 明けから全く登校できず、このままでは留年が確定してしまうため、心配した担任からの紹介で来室。
- 朝は起きれないので、夕方からの面談となる。

まさしの状態

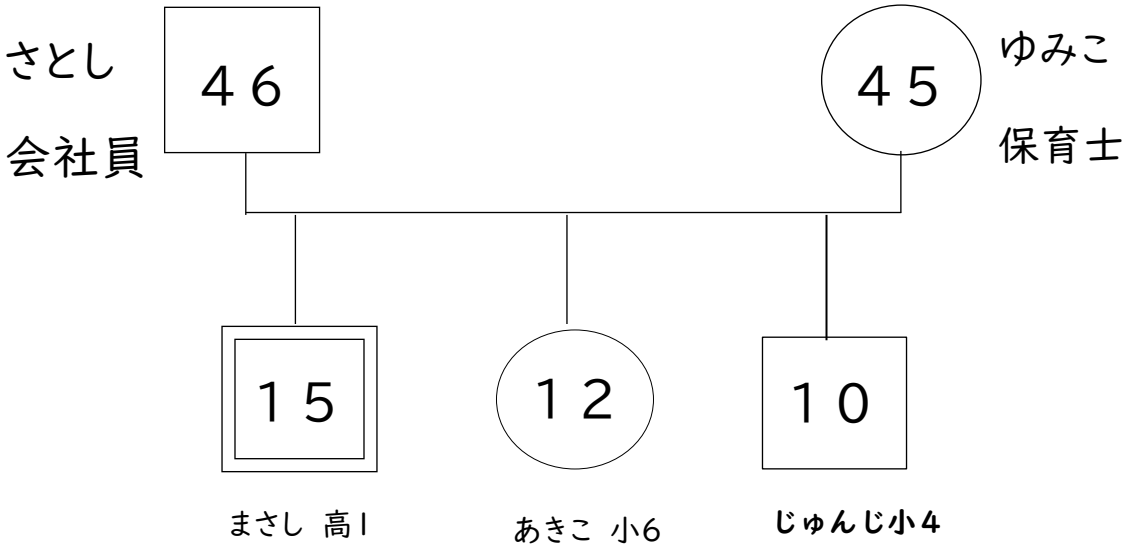
- 小学校５年生から不登校気味。
- 中学２年からほとんど登校できなくなった。
- 不登校だったが勉強はよくできた。
- とにかく人に会うのがしんどい。
- 朝、身体がだるくて起きられない。体重が減り続けている。
- 何もする気が起きないが、なんとか高校は卒業したい。
- 小学校も中学校も、それなりに楽しかった。
- いじめなどのトラブルもなく、友達もいた。
- 家ではほぼ部屋に閉じこもり、ゲームをしている。 親の夫婦仲が最悪の状態。

【第一回面接：まさし、SC】
SC 「今、君が一番しんどいことは何？」
まさし「お父さんとお母さんの仲が悪いことです」

SC 「私は家族療法が得意なので、両親のことは私が全部引き受けるから、君はがんばって登校してみたら？」

まさし「父と母が仲良くなれるなら、がんばって明日からでも登校します」

- ここからジェノグラム面接開始。



＊名前は全て仮名です。

SC 「ところで君の出身中学はどこ？」

まさし「はい、K 中学です」

SC 「え？小学校は？」

まさし「S 小学校です」

SC 「 俺、今 S 小学校で勤務してるよ」

まさし「そうなんですか。妹は今 S 小学校に通っています」

SC「これは運がええな。この高校やと次の面接は２ヶ月か３ヶ月後になるから、小学校でも話が聞けるなら面接回数増やせるな」

まさし「家は小学校のすぐ裏にあるので、僕も近いし有難いです」

SC 「よしわかった。君の両親は高校と小学校のダブルでたっぷり時間をかけて俺が夫婦カウンセリングするから、君は約束通り、学校に行き」

まさし「わかりました。よろしくお願いします」

- 翌日から、約束通りまさしが登校を始める。
- 久しぶりの登校、かなりヨレヨレ、フラフラ状態で、心配した担任と養護教諭が「しんどかったら保健室で休むか、家に帰ってもいいよ」と言ったが、「カウンセラーさんと約束したから、最後まで授業に出ます」と言ってがんばり、その日から休むことはなかった。

【小学校の情報】

- 養護教諭の先生は永く S 小学校におられるベテランで、まさしのこともよく覚えておられた。
- 成績はとても良かったが、４年生くらいから急に元気がなく　なり、休みがちになった。
- 妹も休むことがあり、登校しても休み時間の度に必ず保健室に来て、保健の先生に「なんかしんどい」と訴える。
- SC が「とにかく両親を呼んでほしい」と担任を通じて親に連絡すると、両親とも「すぐにでもカウンセラーに会いたい」との返事をもらう。

【第二回面接：SC、両親】

父 「どうも、この度はうちの子どものことで大変ご迷惑をおかけして申し訳ありません。また私達親の為に貴重なお時間を取っていただき本当にすみません」

- なんて丁寧なお父さんなんだろう。好感度１００％！！
- それにひきかえ、お母さんはずっと壁のほうを向いて、夫の隣に座ってはいるが、身体を斜めにして少しでも夫から離れようとしているように見えた。

SC 「実はまさしくんに、お父さんとお母さんの夫婦仲を何とかしてくれと言われまして。ご両親の関係は自分の不登校よりも重大問題みたいです」

父 「いや、お恥ずかしい話ですが、私達夫婦がうまくいっていないのは事実です。ずっと妻は家の中で口をきいてくれません。僕にはその理由がよく理解できないんです」

- その言葉を聞いて奥さんが、「はぁ～」と、怒りとあきらめに満ちた、深いため息をつきました。
- 私はあんなに悪意と絶望に満ちた、ダークでブラックな、人間のため息を聞いたのは初めてでした。

SC 「お母さん、今のため息にはどんな意味が？」

- さっきは深いため息で息を吐いて、今度は思いっきり息を吸い込んで一気にまくしたてはりました。

母 「酒です！酒！みんなこの人のお酒のせいです！そやのに、なに！僕にはその理由が理解できない！？はぁ？それが何よりの問題です！自分のやっ

てることが何もわかってない！酒のせいでわたしら家族がどんなに苦しめられているのか、何もわかってない！しかも、その理由がわからないって、ようそんなことが言えるもんやな!」

SC 「まぁまぁまぁまぁ、お母さん、いっぺん落ち着きましょ、いっぺん落ち着きましょ。お父さん、お酒飲まはりますの？なんか思い当たることないんですか？」

父 「正直言ってお酒は好きですし、仕事が終わって家に帰ってから晩酌をたしなむのが唯一の楽しみです」

SC「まぁ、そんな人はたくさんやはりますわな。そやけど、めちゃくちゃ奥さん怒ってはりますで」

父 「妻の機嫌が悪いのはいつものことなので、僕は気にしません」

● その言葉を聞いた奥さんの眉間にシワがよって、額に青筋が立ち、今にも夫に襲いかかりそうなオーラが出ていました。

SC「ちょっとくらい気にしゃはったほうがよろしいで。奥さん、怒りモードの大魔神みたいな顔してはりますで」

父 「妻には妻の言い分があるでしょうから、良かったら聞いてあげてください。私がいくら妻と話しても、妻とは話がかみ合わないので」

SC「了解しました。それではお母さま、ご意見をどうぞ！」

母 「何が家に帰ってから晩酌を楽しむや。帰って来た時にはもうすでにグデングデンやないか。帰ってきたらいきなり玄関の戸をガンガン叩いて、『早く開けろ！何やってんだ！早く開けろ！』と怒鳴りまくって、ドアを開けたら、『お帰りなさいくらい言え！』ってまた怒鳴って、そのまま冷蔵庫に直行してビールを持ってきて、机をバンバン叩きながら『子どもらを呼べ！なんでお帰りなさいの挨拶をさせへんのや！』子どもは怖がって部屋から降りてこないというたら、『今すぐ呼んで来い！来ないなら俺が行っ

て呼んでくる！』と言って子ども部屋のドアをまたガンガン蹴って、子どもが泣き出したら『なんで泣くんや！』と言って窓ガラスを何枚も割って・・・」

SC「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。それ実話ですか？」

母 「全部実話です。嘘やと思ったら隣近所の人に聞いてください」

SC「お父さん、ほんまですか？」

父 「妻は僕にそう言いますが、正直、僕はあまり覚えてないんです。ただ、朝に部屋を見たらガラスが割れてたり、ドアが壊れてたりしていることは何度かありました」

SC「う～む、酒飲みにようある、酔った時の記憶がない『ブラックアウト』というやつですな。奥さん、他には・・・」

母 「家に帰ったらすぐに、みんなが見ていたテレビを消して、自分の話を延々と聞かせます」

SC「延々と、と言いますと？」

母 「ひどい時には明け方まで怒鳴り続けます。外に逃げようとすると、また机をバンバン叩いたりビール瓶を投げつけたりします」

SC「お父さん、そらあきませんで。酒は飲んでも飲まれるなて言いますやろ。奥さんや子どもに迷惑かけるような飲みかたしたら嫌われるの当たり前ですよ」

母 「うちの家族がめちゃくちゃになったのはみんなこの人が悪いんです」

父 「妻はいつもこう言いますが、そうなのかなぁ、全部僕が悪いのかなぁ」

SC「と言いますと？」

父 「家に帰っても誰も僕と話してくれない、僕のそばにも来ない、一生懸命働いても家族に無視されたら、先生・・・誰だって愚痴のひとつでも言いたくなりませんか・・・」

SC「それはそうですけど、愚痴の域をはるかに超えて、虐待の域に入っているような」

母 「そうです。これは立派な虐待です。DV です。つかまえて警察でも病院でも放り込んでください」

父 「妻は興奮してこう言いますけど、みんな僕が悪いのかなぁ」

母 「まだそんなこと言うてんの！あんたがお酒飲んで無茶苦茶するからや」

父 「父親の話を家族が聞くのは当たり前なんじゃないかな」

母 「話を聞くて、３時間も４時間もおんなじ話をグルグルグルグル聞かされるもんの身にもなってみ」

*もの凄く丁寧な物腰の父親と、阿修羅のごとく興奮した母親の緊迫した水掛け

論が続き、この日の面接は終了。

第三回面接：SC、母親、妹（あきこ）

- あきこもカウンセリングを希望したが、男のカウンセラーと二人は怖いからということで、母親も同席。
- 面接の中であきこが、授業中知らない男の人の声が聞こえてきたり、知らない男の人が見ているような気がして怖くなると訴える。
- それはお父さんの声ではないの？と聞くと、違う、もっと怖い声と答える。
- お家でも聞こえるの？と聞くと、一人で部屋にいたら聞こえてくる、寝る前や夜中にも聞こえてくる時があると答える。
- 母親も知らなかったようで、驚いていた。
- 母親も終始泣いており、ずっと心療内科に通っていてうつ病と診断され、抗うつ薬と眠剤を服用しているとのこと。
- また、時々「もう死にたい」という気持ちが強く湧いてくると訴える。
- あきこに両親のことを尋ねると、お父さんはお酒を飲むと人が変わって怖いし、お母さんがかわいそう。夫婦喧嘩をやめて欲しいと泣きながら訴えた。
- あきこの担任教師によると、授業中急に「うわぁ～」と両耳を塞いで叫んだり、理由もないのに男の子を蹴飛ばしたりすることがあった。

その後の面接

- とりあえず、子どもの症状と母親の状態を考えると、父親に酒をやめてもらうしかないが、父親はそこだけはかたくなに「僕はやめたくありません」の一点張り。
- 妻や子の症状を考えればもうやめるしかないのでは？と言っても「僕だけが変わらないといけないのでしょうか？」「僕だけが悪いんでしょうか？」「家族はみんなで協力して変わらないといけないのではありませんか？」などの意見を出して、同じところをグルグル回る。
- ただ、父親は酒を飲んで暴言や器物破損はあるが、妻や子に直接暴力を振るうことは一度もなかった。

｛長くなるので、続きは次回に掲載します｝

最後までお読みくださり、ありがとうございました。

ふるかわひであき

家族と家族幻想９

坂口　伊都

子どもは、純真無垢に親や大事な大人と共に心地よい時間を過ごしたがる。そして、大好きな大人がしていることを真似して、子どもなりに頑張ってみせる。大人を喜ばせたい一心でしているようだ。

同じ楽しみを得ようとしていることが、子どもの目的なのかも知れない。楽しみを分かち合う経験は、心の奥底に残り続けるのだろう。

ワクチンを２回接種して、新型コロナも落ち着くと思えば、次はオミクロン株、そしてステルスオミクロン株と出てきて、３回目の接種が進められています。ウイルスの変異とワクチンのいたちごっこです。歴史から見ても２年も経てば、ある程度感染が落ち着くものだと思っていましたが、人流が世界にまたがってくると、終息も簡単ではないのだなと実感します。オミクロン株は、あまり症状が出ていない方が多いといいます。一昔前であれば、症状が出ていなければ感染症は沈静したと判断されていたでしょう。今は、検査での判定をするので、無症状でも判明します。いったい終わりはどのような形でいつ訪れるのでしょうか。なかなか晴れやかな気持ちになれない日が続いていますが、皆さま体調はいかがですか？

元里子との外出も１月に初めにすることができました。その時に、里姉である娘も同行しました。娘と里子が会うのは、２年ぶりぐらいになります。お互い、見た目がずいぶんと変わりましたが、一緒にいる時の雰囲気は、昔のままです。娘が「お汁

粉を食べる」と言い、里子にも「食べる？」と聞くと、「うん」と頷きました。里子は、家にいた頃はお餅が嫌いだったのですが、成長と共に好きな食べ物も変わるようです。二人でお汁粉を食べている姿は、微笑ましかったですが、娘と里子が話している様子もあまりなく、相変わらず口数の少ない里子を見て、どんな気持ちなのだろうなぁと心配していました。次に会う日を相談していると、「この次もお姉ちゃん、来て欲しい」と言い出しました。そうかそうか、嬉しかったか。お姉ちゃん、大好きだものね。娘も会いたいと言ってもらって満更でもない様子で、姉弟の２人に癒される瞬間でした。

大好きと言えば、里子も息子も釣りやキャンプ、プラモデル等、父の趣味を好きになりました。父子の様子を見ていると、父が楽しんでいることに同調することで、それらを好きになるのではないかと感じます。わからないことがあれば、父に手取り足取り教えてもらえ、魚が釣れれば一緒に喜んでもらえます。息子の時は、父親の遺伝子がそうさせているのかと思っていましたが、里子とは遺伝子レベルでのつながりはありません。それでも、兄と同じように父が好きなものを自分も楽しんでいました。大好きな父と共にできることの意味は大きいのだろうと感じます。

私も夫と釣りに何回か行きましたが、それほど好きにはなりませんでした。釣りが全然上手くならないのと、釣られる魚を不憫に思ってしまうことが邪魔をして、夫との時間よりも、私の好きなものに引き寄せられます。小さな子どもから見たら、上手にこなす父の姿は、憧れの存在です。父との楽しい時間の共有は、子どもにとって大きな喜びとなるのでしょう。父が趣味を持たない人なら、子ども達はもっと違ったものを好きになったかも知れません。

私は子どもの頃、母親に本を読めとよく言われましたが、母親が本を読んでいる姿を見たことがなく、母自身が楽しく感じていないことを勧められることに抵抗と反発を覚えました。結局、その当時の私は、本に苦手意識を持ち、本を手にしようとしなかったです。大人になってから、楽しそうに本を読んでいる人と出会い、そこから興味を持ち、読むようになりました。本の中にある、いろいろな物語が面白いと感じます。その姿を見て育った娘は、私が何も言わなくても本を楽しんでいました。娘とは面白かった本をそれぞれにお勧めして楽しんでいます。面白かった物語を語りあえると嬉しくなります。何かを好きになる時、同じように好きでいてくれる他者の存在は大きいようです。

子どもの頃、自分と近しい大人が喜ぶものを好むのは、その人との関係性が良好であり続けることを望むからなのでしょう。小さい子どもは、よく大人の真似をします。「もう、早くして」と子どもが私と同じような口調で言うと、ハッとさせられます。私が、子どもの前で言っている姿を見せつけられているようで、反省します。良いことも悪いことも丸ごと子どもは受け入れ、大人の行動を手本とします。親が子どもに万引きを強要すれば、それに従う、大人から暴力を受けたり、目の前で暴力をふるう姿を見せられれば、その子はどこかで暴力をふるいます。大人がしていたり、するように言われたことが、悪いなんて思いもしないのではないでしょうか。

大人は躾けるために、子どもの行動を責めて叱

ることがあります。説教をして、子どもに言い聞かせますが、反省しているように見えない時がしばしばあります。子どもの立場になると、他の人を大人と同じように責めたのに、それをするとまた大人から「そんな言い方をして、だから嫌われるんだ」と責められ、子どもは、大人を手本としても上手くいかず、混乱します。子どもによっては、癇癪を起します。癇癪を起すと、自分勝手だとまた責められ、悪循環が終わりません。子どもと私たち大人は何を共有していくかで、その子の交渉する力が大きく異なっていくように感じます。

生きていく中に楽しみを求めることは自然なことです。何か楽しみがあると、そこに向けて、日々の暮らしを乗り切ろうと頑張れます。それが逆転してしまうと、楽しみを作ることに疲れてしまうというようなことが起こるようです。

それは、もはや楽しくはないでしょうね、きっと。

生きていく中で楽しみを求めることは、自然なことです。悲しい、辛い、苦しいだけでは生きていたくなくなるし、同じことの繰り返しで全く刺激がないのもつまらない。何か楽しみがあると、仕事や勉学を頑張ろうと思えます。何を楽しみと捉えるかは、人によって違います。旅行やパーティなど特別なイベントを楽しみにということはよくありますが、それが終わってしまうと、その後の楽しみがなくなってしまいます。

イベント事の楽しみは、その時の流行りや、誰と一緒に過ごすかで左右されます。例えば、私が20代の頃、よくスキーに行っていました。スキーを楽しむというより一緒に過ごす友達との時間の方が楽しくて行っていたなと思います。スキー以外のものが流行っていたら、それをしていたでしょう。今思えば私は、スキーが本当に好きというわけではなかったようで、一端離れてしまうと行こうという気持ちが起きません。スキーが楽しみなのか、誰かと楽しい時間を過ごすことが優先されるかは、意識しなければ気づけないものだと感じます。人は、誰かと楽しさを共有したい気持ちを強く持っているようです。

子どもが何かを好きになるきっかけは、親や身近な大人が楽しんでいるかどうかから始まっているように見えます。成長するにつれ、一緒に楽しみたい相手が、友達や恋人へと変化して、その子の世界が広がっていきます。また、誰かと一緒に楽しむことが主になっている時期から、だんだんとそれでは満足感を得られなくなってきます。それが、自我の芽生えや自立していく過程です。人は何を面白いと感じるのでしょうか。

よく子どもは、ゲームが好きだと言いますが、多くの場合、子どもがするゲーム時間が長くならないように大人が気を配り、ルールを設けています。もし、その枠組みがなく好きなだけゲームができたら、ゲームに飽きる子もいるでしょう。大人になってからもゲームが好きという人は多いですが、ゲームをすることを心底楽しみにしている人の割合は、子どもと比べると少ない印象を受けます。周りを見渡すと、ゲームを時間つぶしでしていたり、何も考えたくないからしている、前は熱中していたが今は冷めてしまっているといった人が多いように見えます。私は、すぐにゲームに

飽きてしまうたちなので、ゲームを本当に楽しむ人に出会えないのかも知れませんが、ゲームを楽しみ続けることも簡単ではないでしょうです。現実逃避でなく、これがあるから面白いと思えるようなものは何だろうと考えて、これだと言えるものが思いつくでしょうか。私は、すぐに答えられないので、つまらない人間だなと感じます。

私の母は、時間があるといろいろと要らないことまで考え、思い悩んでしまうので、退屈を埋めるための用事を欲しがります。母は、「楽しい＝イベント事」と決めつけているようです。老人会の食事会、カラオケ、麻雀、旅行、買い物等の予定が入ると楽しみができたと喜びます。それを楽しんでくれるといいのですが、あの人がこんなことする、あんなことを言うと愚痴ります。「やっぱり家族で気を遣わずに行くのが一番楽しい」と言ったかと思えば、「最近、近所で車を出してくれる人がいて 4 人で出かけていて楽しい」と嬉しいそうに言い、そしてしばらく経つとあの人がこんなことする、あんなこと言うとなります。母に学習能力というものはないのかと突っ込みたくなります。母は退屈が嫌で仕方がないようなので、働いたり、ボランティアをしたらと勧めると、そこは断固拒否、きっぱり嫌がります。母子家庭で子どもを育て、自分一人で頑張ってきたという自負心が強いので、社会の中に属することから逃げたいようです。自分で何かと決めつけてかかることで、生きる幅を狭めてしんどくなっているのですが、それを止められません。

母は 3 回目のワクチン接種も、「モデルナの方が効くみたいだからそちらを受けたいが、1 回目も 2 回目もファイザーだったから、今回もファイザーになると思うのよ」と言い、落ち込んでいます。「その情報はどこから？」と尋ねると「私の頭の中」と言います。「それは議論にならないかな」と返すと、笑いながら「そうか、議論にならないか」と母が言います。話すことで、母自身も気づいたようです。私は、それなりの根拠で今のワクチン情勢を伝えますが、母に取っては、私の裏付けよりも娘が言ってたからの方が重要度が高くなっていると思います。結局、3 日目ワクチンの予約が取れて、モデルナだったと照れくさそうに報告の電話がありました。

日常生活が楽しいことばかりという人はいません。母のように時間があると、つい考え事をしてしまう気持ちもわかります。忙しくしていれば考え込む時間が減るので、何か予定が入ると救いになりますが、実際に出かけていくと対人関係が上手くいく日ばかりではなく、余計な考え事が増えて、疲れることもあります。時間を有効に使えていると思えると充実感が得られますが、無駄に過ごしていると思うと後悔を感じます。

成人を迎えたばかりの娘を見ていると、子ども時代を終え、自分の意志でできることが大幅に増え、未来に向けたエネルギーで満たされているように見えます。時間に対して娘は能動的に動いていますが、バイトの希望したシフトに入れなかったりすると電話がかかってきます。一人で過ごしたくもないし、出かけるとお金を使うしと愚痴をこぼします。感じていることは、楽しんでいるように見える大学生も高齢の母も大差ないようです。

若い人は目一杯予定を入れることも平気で、年

を重ねるといろいろな事におっくうになっていく感覚もわかります。年をとってもエネルギッシュに生きている人に出会いますし、若者でもエネルギーが出てこない方もいます。年齢だけで語れるわけではありませんが、そのエネルギーを持続するためには、コツがいるようです。

楽しみは、日々の些細なものから見つけられると探す苦労が減ります。それをみつけるためには、まず一人で過ごす時間の中で楽しめることが第一条件となります。毎日誰かと一緒にいることは難しいですし、一人で過ごす時間も大事です。一人は寂しいを前提にしていないか再考したらいいのでしょう。皆で過ごせば必ず楽しい時間になるわけではないという経験は、誰もがしています。一人になってホッとする経験も同様です。一人でいると寂しいと思い込んだり、周りからどう見えるか心配したりしていると一人の時間を楽しめません。また、自分の周りが敵だらけだと、自分の周りを見渡す余裕は生まれません。まずは、自分の周りにいる家族や仲間と離れていても、声をかければ受け入れてもらえる感覚を持てれば、一人で過ごす時間を肯定的に捉えられます。そのプラスのイメージの中からなら、楽しめることが見えてくるのではないでしょうか。一人を楽しめるのは、その人の力だといえます。

楽しさをイメージすると明るく華やかなものが浮かんでくる。でも、そんな楽しみばかりで埋め尽くせるわけでもない。日常の中にある地味な楽しみは気づきにくいけど、けっこう長続きする気がします。

人は気持ちにムラがあるものです。いつも元気でいられるわけではありません。ストレスが溜まると身体の弱い所に出ると言われますが、気持ちも同じでしょう。子どもの頃から癖づいた考え方が顔を覗かせます。私は、自分一人では何もできないダメな奴という考えが出てくることがあります。子どもの頃によく親から言われた言葉です。元気な時は感じませんが、疲れたりすると出てきます。これは、これからもずっと続くだろうと思います。それが出てきたら、自分の調子がよろしくないサインです。そして、自分の周りを見渡してみて、これがストレスになっているのかなと考えを整理して、落ち着くようにしています。

子どもが親と一緒に楽しむ体験は、他者や自分を信頼する入口です。親でなくても、信頼できる大人と心地よい体験は自分の中に刻まれます。同じように悲しい、辛い、傷ついた経験も刻まれます。どちらの体験も経て私たちは大人になっていきますが、どちらの思いが自分の中により強力に残っているでしょうか。困ったら、寂しくなったら慰めてと行けば受け入れてもらえるイメージを持てると人は強くなれるように見えます。

「一年生になったら友達１００人できるかな」という歌がありますが、明るく友達は多い方が良いと刷り込むことに成功しています。友達とトラブルばかり起きる子が、フォロワー数を増やすことに必死になっていました。数に慰められていましたが、その子はどこまで数を求め続けるのでしょうか。

インスタ映えという言葉も良く聞きます。切り取られた画像は、楽しい気な雰囲気が伝わってきます。華やかな感じをまとっている方が楽しそうな気がしますが、あえて華やかでない楽しみを探してみようかなと思います。子育ても一段落して、寿命も延びたこれからの人生、一人遊びを楽しむことができたら、老化していくことも悪くないと思えそうです。

周辺からの記憶 34

2020 年コロナ禍と共に迎えた十年目

村本邦子（立命館大学）

2022 年 2 月 19 日、11 年に及んだプロジェクトを締めるシンポジウム「被災と復興の証人～11 年の足跡とこれから」を ZOOM で開催した。

第一部では、5 チーム 17 名からなる今年度の院生メンバーによるプロジェクト報告「11 年目の証人たち」と、現地関係者 4 名による「証人を受け入れて」、第二部では、プロジェクトを率いてきた教員、私を含む 5 名による「証人になるとはいかなることだったか」に続いて、過去にプロジェクトに関わってくれた教員・院生 10 名による「フォトボイス」、第三部は、現地関係者や修了生 6 名による「明日に繋ぐ～それぞれの継承」と、さまざまな立場にある関係者多くの人々が少しずつ声を発し、フロアからの声も含め、多様な声が響き渡るようなシンポジウムとなった。

そのうえ、院生が過去の写真をフォトムービーにしたものを作成してくれ、前半・後半と休憩中に流した。フォトボイスと合わせ、11 年のつながりが見え、長い年月の積み重ねを実感し、感慨深いものがあった。ZOOM ゆえのハプニングや不足もあったが、それでも、プロジェクトを締めるにあたって、時間空間を超えてこれだけ多くの人々の声を共に聴くことができたことは本当によかったと思っている。

プロジェクトはこれでいったん締めくくるが、福島を中心に今後もささやかな活動を継続していくことを宣言した。コロナ禍のなかで迎えた 10 年目、11 年目だったが、プロジェクトを閉じた途端、今度はロシアのウクライナ侵攻である。災厄は尽きない。せめて過去に学び、賢明に生きていきたいものだ。

2020 年 1 月 コロナ禍の始まり

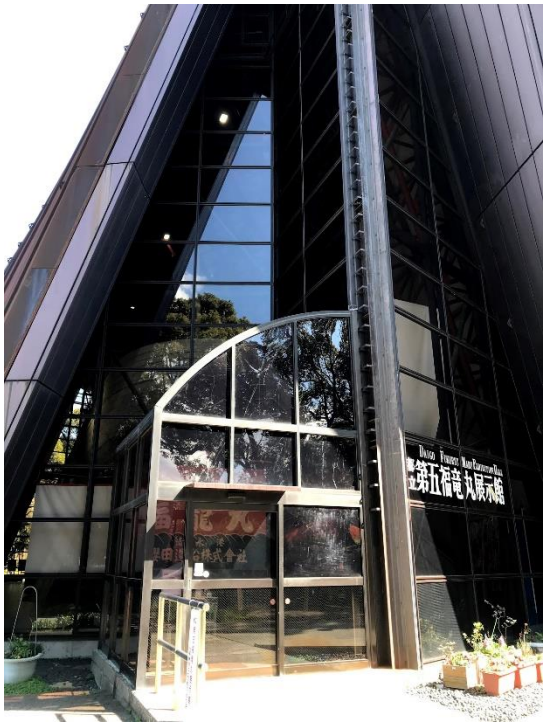
第五福竜丸展示館

2020 年 3 月、コロナ禍の中、オーストラリアから帰国した後、3 月 10 日、11 日と予定していた東京出張を決行した。大きな目的だった FoE Japan の「国際シンポジウム 3･11 から 9 年どう伝える？原発事故のこと」は中止となり、登壇予定者のメッセージや資料は HP に掲載された。もうひとつの目的は、国書刊行会に編集者を訪ね、東北の証人十年をまとめる本の相談をすることだった。話は順調に運び、古くからの友人を訪ね、翌日は、別の友人とともに夢の島にある第五福竜丸展示館へ行った。

第五福竜丸は和歌山県で建造され、初めはカツオ漁船として活躍し、後にマグロ漁船に改造され遠洋漁業に出ていた。1954 年 3 月 1 日、アメリカ軍がマーシャル諸島ビキニ環礁で水爆実験を行い、第五福竜丸は放射性降下物で被爆した。乗組員たちは放射線による症状を呈し、無線長だった久保山愛吉は「原水爆の犠牲者は私を最後にしてほしい」という言葉を残し、半年後に亡くなっている。

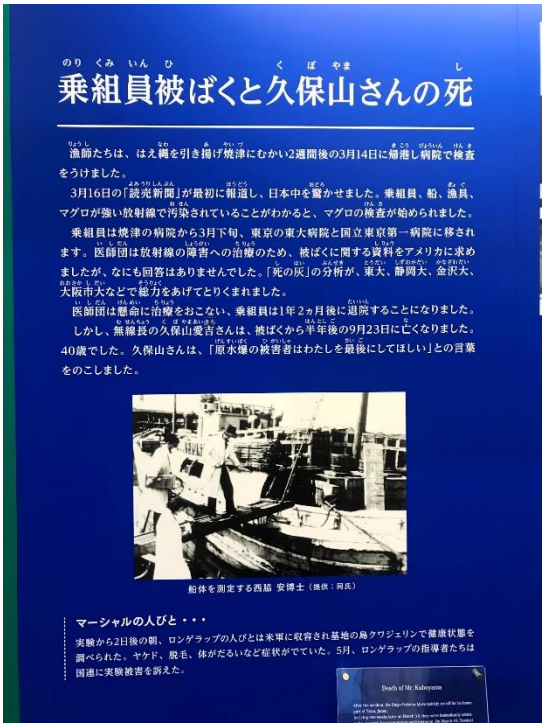
被爆後、第五福竜丸は、練習船に改造されて東京水産大学で使われていたが、1967 年に廃船となった。船体はスクラップ業者などを経て夢の島に捨てられたが、地元江東区民から保存の声が上がり、全国で保存のための募金や署名活動が行われた。1973 年、船体の保存管理を目的として財団法人第五福竜丸保存平和協会が設立され、1976 年、東京都が原水爆による惨事が二度と引き起こされることのないようにと展示館が建築された。

館内には、中央に大きな第五福竜の船体が配置され、それを取り囲むように、水爆実験被災の被害、乗組員の病



水爆ブラボー

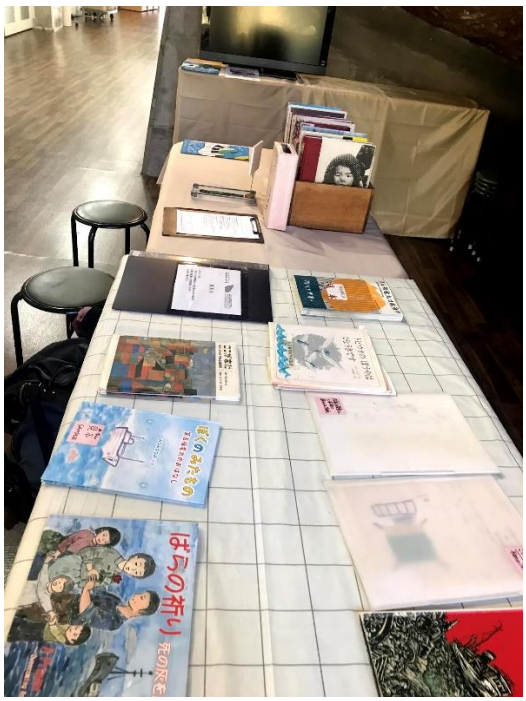
第五福龍丸
大築
焼津


乗組員被ばくと久保山さんの死
漁師たちは、はえ縄を引き揚げ焼津にむかい2週間後の3月14日に帰港し病院で検査をうけました。
3月16日の「読売新聞」が最初に報道し、日本中を驚かせました。乗組員、船、漁具、マグロが強い放射線で汚染されていることがわかると、マグロの検査が始められました。
乗組員は焼津の病院から3月下旬、東京の東大病院と国立東京第一病院に移されます。医師団は放射線の障害への治療のため、被ばくに関する資料をアメリカに求めましたが、なにも回答はありませんでした。「死の灰」の分析が、東大、静岡大、金沢大、大阪市大などで総力をあげてとりくまれました。
医師団は懸命に治療をおこない、乗組員は1年2ヵ月後に退院することになりました。
しかし、無線長の久保山愛吉さんは、被ばくから半年後の9月23日に亡くなりました。40歳でした。久保山さんは、「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」との言葉をのこしました。
船体を測定する西脇 安博士（提供：同氏）
マーシャルの人びと・・・
実験から2日後の朝、ロンゲラップの人びとは米軍に収容され基地の島クワジェリンで健康状態を調べられた。ヤケド、脱毛、体がだるいなど症状がでていた。5月、ロンゲラップの指導者たちは国連に実験被害を訴えた。
Death of Mr. Kuboyama

写真展
ビキニの海は忘れない
漁師たちの証言とポートレート
第五福竜丸展示館
2019年11月23日（土）—2020年3月10日（火）

状、マグロ騒動、放射能雨、原水爆反対運動、太平洋の核汚染状況、日米政府による事件の決着、マーシャル諸島の核被害、世界の核実験被害、核実験・核開発年表が展示され、「死の灰」の実物や乗組員が使っていた日用品、入院中の乗組員に宛てられた手紙、ガイガーカウンター、集められた原水爆反対署名などの資料が並べられている。展示館前広場には久保山愛吉記念碑、福竜丸のエンジン、マグロ塚石碑がある。

ネット上では、東京オリンピックに向けて展示館が閉館すると言われていたが、確認してみるとそれは事実ではなく、夢の島の工事期間閉館するということだった。福島に関する展示はなかったが、充実した展示と誠実な学芸員が印象に残った。



2020年4月初めての緊急事態宣言

2020年3月13日に成立した新型コロナウィルス対策の特別措置法に基づき、4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言が出た。前日から慌ただしく連絡が飛び交い、7日、朱雀で職員研修をした後、1日繰り上げて教授会が開催され、授業もなくなることになった。4月16日、対象は全国に拡大され、13の都道府県が「特定警戒都道府県」と位置づけられた。むつかから今年度の開催はどうだろうかという打診があり、様子を見る他ない。

立命館大学は全キャンパス入構禁止、授業もすべて休講となった。外出自粛で、買い物と散歩以外、自宅から出れなくなり、私は人生稀にみる暇人となった。考えてみれば、私の人生は不要不急のものばかりだ。個人的には不要不急こそ人生だと思っている。もともと“living with virus”を主義としているが、今回ばかりは、自分は元気でも無症状者としてリスクの高い人に感染させるかもしれないとのがネックである。

私は土地に縛りつけられ、大阪では4月7日から5月21日まで続いた緊急事態宣言下、30数年暮らしてきた大阪の町を毎日歩き回り、淀川・大川沿いに多くの災害記念碑、慰霊碑、地蔵、観音、神社等を発見し、自らの足元にもあった大阪の「土地の力」に気づくことになった。東北の「土地の力」にずっと感銘を受けてきたが、当然と言えば当然、歴史ある大阪にも「土地の力」がある。遠い東北を介して、ようやく足元にあるものに気づくなんて、青い鳥みたいだ。

将棊島粗朶水制跡

水防碑
災害は
忘れたころに
やってくる

八軒家の歴史

千人つか
千人塚由来記

大阪「土地の力」

天神橋筋商店街と大阪天満宮

私が勤める女性ライフサイクル研究所は、天神橋商店街にある。天神橋 1 丁目から 6 丁目まで南北 2.6 キロ、600 店舗が軒を連ねる日本一長いアーケード商店街である。天満宮の門前町として発展し、大阪三大市場のひとつ天満青物市場も近くにあったことから、江戸時代から庶民の盛り場として大阪きっての賑わいを見せた。

日曜の午後、天神橋筋商店街の様子を見がてら歩いていくと、逞しく商売を続ける人々、会話と買い物を楽しむ人々がいることに驚かされた。店は閉まっていても、その前に行商が来て並んでいるのだ。向かいの店の脇には、神輿とともに大阪天満宮の「コロナウィルス退散祈願」の大きなお札が祀られていた。不謹慎かもしれないが、思わず笑ってしまう。

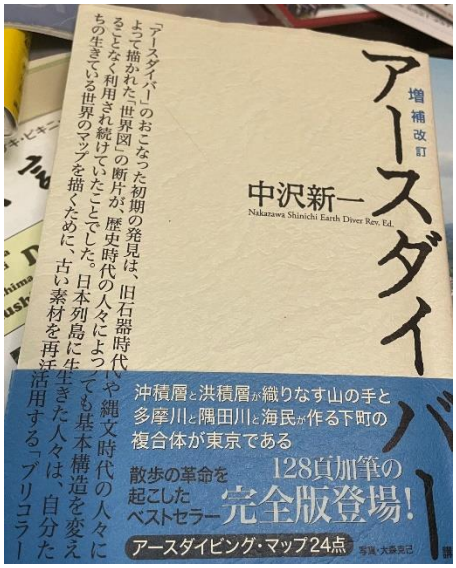
4 月 20 日の毎日放送では、梅田の人出はマイナス 86.9%であるのに対し、2 キロ離れた天神橋商店街は人が多いと報じられ、通行人は「思ったより多いなと思いました。食べ物が無くなったから、ちょっと買いに行こうかなと思って」「今日はどうしても散髪に行きたかったので出てきましたけど、買い物終わったらすぐに帰ります。極力今まで外に出ないようにしていたんですけど、ずっとそういったわけにもいかないのでね」と言っていた。

それにしても、あの大きなお札。考えてみると、たしかに天神祭りは疫病退散祈願が由来だったはず。650 年（奈良時代）、孝徳天皇が大将軍社を祀る。949 年（平安時代）、大将軍社の前に一夜にして七本の松が生え、夜毎にその梢を光らせたところから、村上天皇が社を建て、菅原道真を祀った。天神信仰は、951 年に天変地異や疫病退散の祈願で始まり、夏枯れを払拭し、罪穢れを払う祭りだったそうだ。2020 年の天神祭は、大阪天満宮の神事諸祭儀である宵宮祭、鉾流神事、行宮天神祭、本宮祭は神職のみによって斎行し、天神祭渡御行事保存協賛会が主催する陸渡御、船渡御、奉納花火を含む神賑諸行事を取り止め、本宮祭をインターネットでライブ配信することになったようだ。

大阪天満宮は、江戸時代の記録に残るだけで 7 度の火災に遭い、現在の本殿は、大塩平八郎の乱による 1837 年の大火で全焼後、1843 年に再建されたものだそうだ。大阪市内を歩き回ると、大火の記念碑や地蔵があり、「地震・雷・火事・おやじ」と言われたように、火事が大きな災害だったことをあらためて知る。

アースダイバーと「土地の力」

映画『天気の子』のパンフレットで中沢新一さんの「アースダイバー」という言葉を知り、東北で気づいてきた「土地の力」を考えるヒントになるのではないかと思っていたが、ずっとそのままになっていた。ふと思い出して、『増補版アースダイバー』（講談社、2019）、『大阪アースダイバー』（講談社、2012）を注文し、読んでみた。これが何ともおもしろい。アースダイバーとは何か、どこを読んでも明確な定義は見つからないが、その着想は、アメリカ先住民であるアルゴンキンの神話にあるらしい。



初めの世界には陸地がなく、地上は一面の水に覆われていた。そこで勇敢な動物たちが次々と水に潜って陸地をつくる材料を探してくる困難な任務に挑んだ。ビーバーやカモメをはじめ、みんなが挑戦しては失敗したが、最後にカイツブリが勢いよく水に潜っていった。水はとても深く苦しかったが、カイツブリはやっとの思いで水底にたどり着き、ひと握りの泥をつかんで、一気に浮上した。こうして私たちの住む陸地が作られた。

一神教の神様が頭のなかでプログラミングしてスマートに宇宙を創造したのに対し、アメリカ先住民や環太平洋圏の人々は、神様も動物も、みんな自分の手を汚し、体中ずぶぬれになってようやく世界を創り上げたと考える。泥がぐにゅぐにゅして、ちっとも形が定まらないように、人間の心も同じようなつくりをしている。これを無意識と呼ぶ。思考と夢見がひとつに混ざり合って心をつくり、その心が集まって社会を作っている。そんな得体のしれないところを持っている私たちの社会は、アースダイバー型の特徴をもっているという。

アースダイバー型の社会では、夢と現実が自由に行き来できるような回路がいたるところにあり、時間の系列を無視して、遠い過去と現代が同じ空間に一緒に放置されている。地質学の研究にも依拠すると、地層には、堅い土でできた大地である洪積層と、川や海が運んできた砂が堆積してできた一段低い低地である沖積層という砂地がある。

そうやって東京を歩くと、水辺に突き出た岬や半島状の突起部に神社や寺院がある。縄文人は岬のような地形に強い霊性を感じており、記憶が失われた後も、そういう場所は開発の波を受けず時間の進行の遅い「無の場所」としてとどまる。洪積層台地が水辺に突き出した岬にはたいてい古墳が作られ、後にお寺や広い墓地ができたが、そのような土地を買い占めた大資本によって都会有数のホテルが建てられたりも

している。こうして、アースダイバー地図をもって歩くと、東京という都市が轟かせている「大地の歌」が聞こえてくる。

これはまさに、私が言わんとしていた「土地の力」ではないか。中沢さんも、一ヶ所だけ「土地の力」という言葉を使っていた。

「英語はアメリカ大陸に移植されてから、最初の入植者たちを取り囲むニューヨーク州の近辺にいたアルゴンキン諸族の言葉の影響を受け、アメリカ英語に変化していった。これが土地の力というものである。」（『増補版アースダイバー』29頁）。

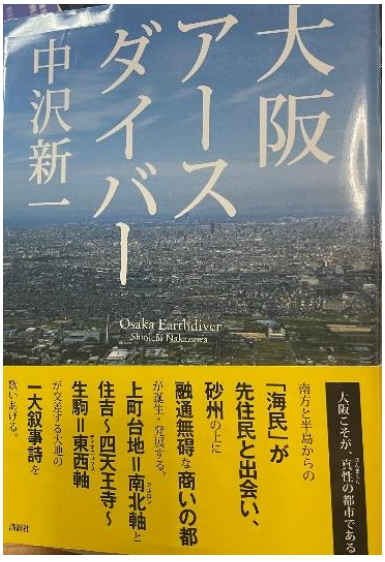
つまり、地形や自然環境と人間の文化が交錯するところに「土地の力」が生まれるのである。

大阪アースダイバー

さて、こうなってくると大阪アースダイバーである。中沢新一さんの解説を紹介する。

東京の中心部は堅い洪積層の上に作られているのに対して、大阪の中心には堅固な土台がほとんどない。生駒山の裾野から広がる大阪平野は、このあたりが開け出した二千年前には大きな河内湖の底にあった。さらに遡って五千年以上前には、河内湖は海への広い開口を持つ巨大な潟で、縄文人が岸辺近くにムラを作って住んでいた。そこは生駒山の自然と河内潟のもたらす幸に恵まれた豊かな土地だったが、人が住む事のできる土地は限られていた。やがて、淀川と大和川がこのような土地を肥沃な平野に作りかえていった。今日の大阪の中心部をなす土地の大部分は、水中から生成し、東京のような大地ではなく、くらげのような柔らかいからだつきをした無定形な土砂の上に都市を生み、発展を遂げたのである。

大阪の街並みは中心部に限って言えば、整然と南北（筋）と東西（通り）に走っている。このふたつの軸線は、近世の都市計画によって決定されたのでなく、アースダイバー的な古代的理由によって決められたのではないか。古墳時代、現在の平野部の大部分は河内湖で、南北に延びる上町台地と北の砂洲によって大阪湾と隔てられていた。大阪の中心部の街並みの骨格をなす南北－東西のふたつの軸を決めたものは、上町台地と河内湖がつくるプロト大阪（原大阪）の地形である。大化の改新の後、孝徳天皇は上町大地の突端に近い高台に難波宮を建設した。中央の朱雀大路はまっすぐ南に延び難波大道に続いていた。この道は上町大地の上を北から南にまっすぐに伸びていた。これを「アポロン軸」と呼ぶ。それは威力に満ちた王の生命力が力強く放射されている様子を眼に見える形で表している。

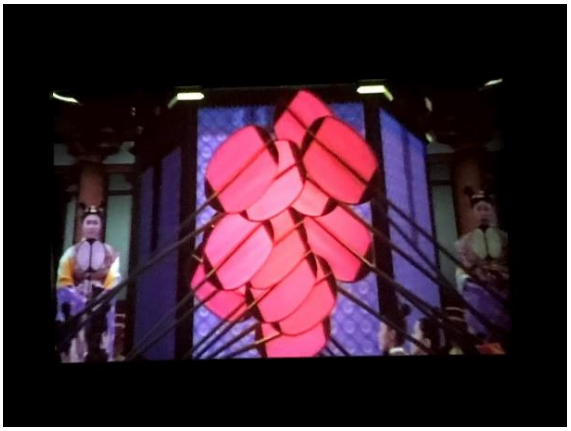


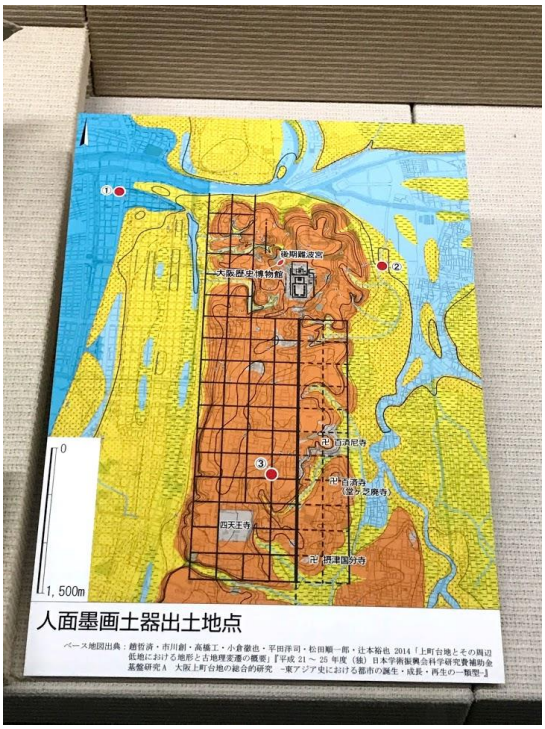
そこに何本かの東西に向かう道が作られ、もっとも重要なのが大津道である。東西の軸線は実際の道路ではっきりと目に見える南北軸と違って、上町大地のどこからでも生駒山に向かった時に感じる磁力のような力である。国家よりはるか昔から生き続けている人類の生と死の円環の思想はディオニュソスと呼ぶ。南北軸は権力がつくる現実世界を、東西軸は想像力を巻き込んだ生死円環をなす野生の思考を据えている。東西軸が大阪をユニークな都市にした。

私はますます精力的に大阪の街を歩き回り、あちこちの旧跡や記念碑、神社仏閣を訪ねたり、ドライブして周辺の古墳群なども見て回った。

大阪歴史博物館～疫病退散の祈り

大阪歴史博物館で「疫病退散の祈り」展をやっているという記事を見かけ、9月にはそこへも足を運んだ。エレベーターで10階に上がると、原寸大に復元した難波宮の大極殿で、直径70センチあるという朱色の柱が並び、官人たちの等身大の人形が並んでいる。広いガラスの向こうには難波宮跡が見下ろせるようになっている。また、時間が来ると、そこにスクリーンが降り、宮廷の儀式の様子が映し出されるしくみになっていた。当時の地図と歴史上の地形変化も示されており、まさに大阪アースダイバーの気分だった。

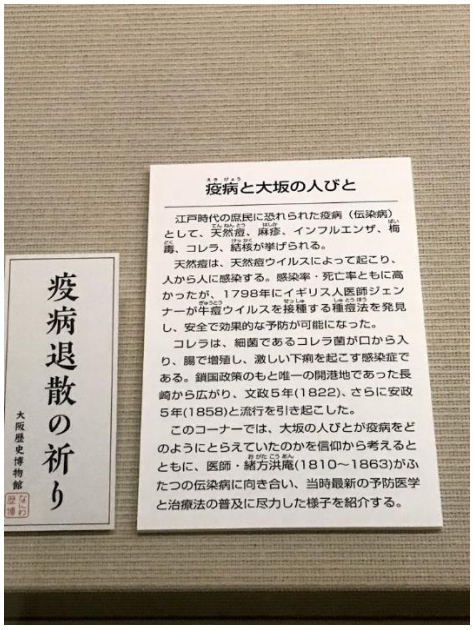




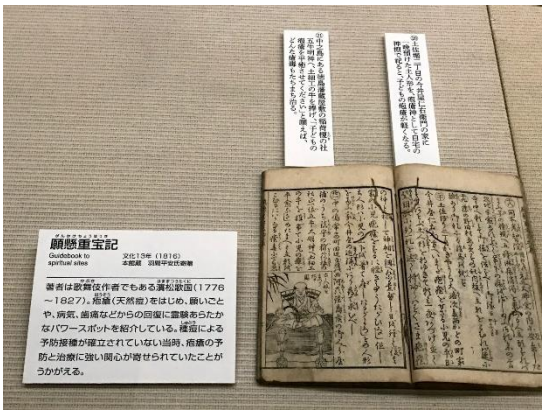
「疫病退散の祈り」展は、常設展の関連の展示にマークと解説がついているという形だった。10 階では、関連展示として「人面墨画土器」があった。古代の都城や官衙（かんが）周辺の川や溝で見つかる祭祀用の土器で、外面に複数の人面が描かれ、この顔は疫神だという説がある。当時の人々は病気の原因を疫神やケガレに求め、土器を川や溝に流すことで病気を祓おうとしたと考えられている。奈良時代には疫病が流行し、人口の多い都市部に大きな被害をもたらした。ここにある土器は奈良時代の難波京の周辺部と中心で見つかったもので、1,300 年前の人々の病気への恐れを示す資料であるという。

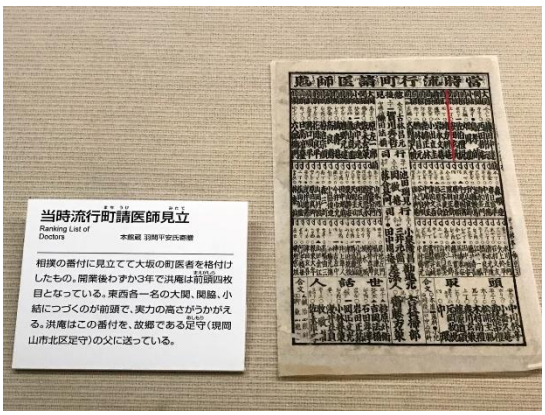
9 階「大坂の幕末・維新」のコーナーには「疫病と民間信仰」が展示され、「疫病と大坂の人びと」の解説があった。江戸時代の庶民に恐れられた疫病として、天然痘、麻疹、インフルエンザ、梅毒、コレラ、結核があったこと、天然痘は 1798 年にイギリス人医師ジェンナーが種痘法を発見したことで予防できるようになったこと、コレラは、鎖国政策のもと唯一の開港地であった長崎から広がり、1822 年（文政 5 年）と 1858 年（安政 5 年）に流行を

引き起こした。そして、ここでは、緒方洪庵（1810-1863）がこれらふたつの伝染病に向き合い、当時最新の予防医学と治療法の普及に尽力した様子が紹介されていた。



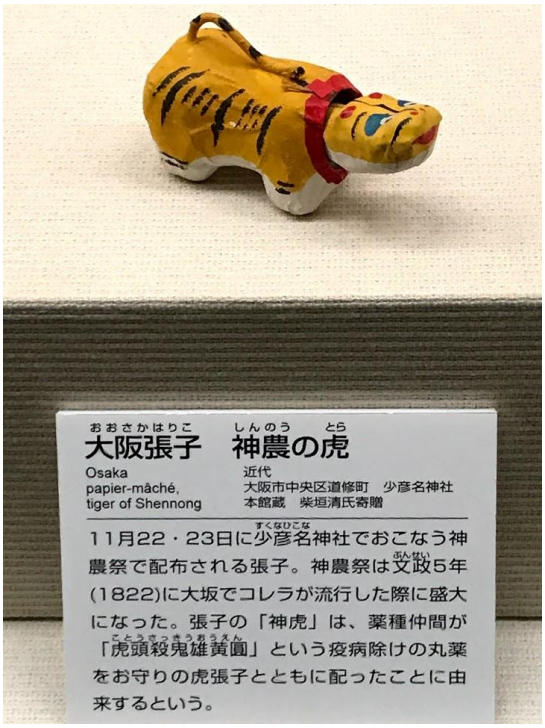
幕末、堺に近接する湊村瘡神宮（かさかみぐう）のお札の展示があった。このお札には中国の神である神農が描かれ、人身でありながら牛首でツノがあり、国内でも医学・薬学の神として信仰を集めたという。面白いものとしては、歌舞伎作者である濱松歌国（1776-1827）による『願懸重宝記』という綴本で、疱瘡をはじめ、願い事や病気などの回復に霊験あらたかなパワースポットを紹介したものや、相撲の番付に見立てて大坂の町医者の番付をした「当時流行町請医師見立て」があった。緒方洪庵は、開業わずか３年で、前頭四枚目となっていた。洪庵がコレラ大流行に対し、新たな治療法を医者仲間に知らせるために蘭書を訳した『虎狼痢治準』や緒方洪庵の除痘館も展示されていた。





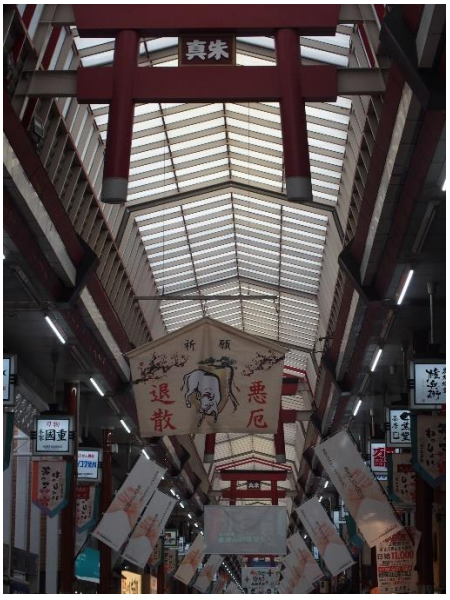
7階の「都市の民間信仰」のコーナーには、「郷土玩具による疫病除けの祈り」の展示があり、郷土玩具が集められていた。天然痘は疱瘡神という疫病神が引き起こし、疱瘡神は赤色を好む、もしくは嫌うため、子どもに赤物玩具を与えることで疱瘡神を誘引、もしくは威嚇して病魔を遠ざけようとしたという。穢れやタブーは避けると同時に引き寄せるという矛盾したふたつの方向性を持つ。トラウマが再体験とともに麻痺・回避の反応を呼び起こすことと関係するのだとうか。大坂張子として、赤い達磨（猩々）が並び、続いて虎の張子も並んでいた。

「虎狼痢」は「コレラ」の漢字として使われていたようだ。虎や狼のように強く怖しいものと捉えられていたのだろう。朝鮮では虎が絶対的な力の象徴で、悪を追い払う守り神とされていたことから虎を描いた虎図もある。それから、「大阪張子・神農の虎」。1822年（文政5年）、大阪でコレラが流行した際に神農祭りが盛んとなり、「虎頭殺鬼雄黄圓」という疫病除けの丸薬を神虎とともに配ったことに由来して、大阪市にある少彦名神社の神農祭では張子の「神虎」が今も配られるという。



そして、ギフトショップで面白い本を見つけた。『大阪の神さん仏さん』（釈徹宗・高島幸次、2014、140B）だ。この本によれば、篤い信仰心とクールな合理主義をあ

わせ持った体質が大阪人のプロトタイプであり、この基質は、大阪の地が育んだコンプレックス（複合心性）に起因する。大阪は四方八方から流入してくるものが交差する場であり、物心両面さまざまなものが集積することで生成してきた。大阪人は、一人が複数の共同体に所属するメンタリティを大切にして、したたかでタフである。異質なものが二重三重に工作する精神性を持っているのだという。なるほど、疫病に対して、大阪人たちは、民間信仰のような呪いと緒方洪庵に代表されるような科学の二重性でもって対応していたのだ。ますます興味が湧いてきた。



大阪くらしの今昔館
～江戸時代の疫病退散

10 月、天神橋筋商店街のスタート地点に位置する大阪市立すまいのミュージアムの中にある「大阪くらしの今昔館」で「江戸時代の疫病退散」をやっていると知り、こちらも足を運んでみた。

天災や流行り病など、目に見えない災難に直面したとき、江戸時代の人々は、その原因を怨霊の祟りと考え、怨霊や神の姿を絵や人形に表し、身の回りの置くことで疫病と戦い、命をつなげてきた。大阪の天神祭りや京都の祇園祭は、疫病を鎮めるための祭礼だったという説明から始まり、疫病退散を願って、入口に魔除札を貼り、店の間や床の間に造り物や掛軸を飾った様子を再現してあった。

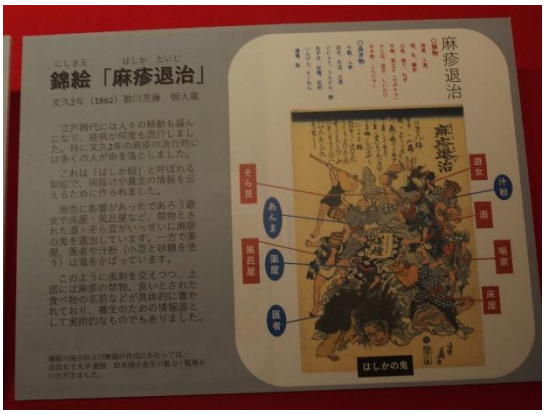
鍾馗（しょうき）は中国から疫病をはらう神として伝わり、五月の端午の節句には、疱瘡除けのため、 幟に鍾馗の絵を描いて戸外にたてたり、五月人形として座敷に飾ったりした。神農は既述したように、中国医薬の祖である。この２つの掛軸は江戸時代の大坂で制作されたものという。

コロナ禍において、江戸時代、熊本に表れた妖怪アマビエにちなんだアマビエの札がネット上から生まれ、今やお寺や神社でさえ配られるようになったことは面白いと思っていたが、ここでは、平安時代の比叡山の高僧「元三大師（がんざんだいし）」が鬼の姿になって疫病を退散したという言い伝えから、江戸時代の人々が家の入口に貼ったという「元三大師降魔札」のことを知った。

映像では、麻疹絵と言われる錦絵で魔除けや養生を伝えていたこと、麻疹の流行で影響を受けた物や人が力を合わせて麻疹の鬼を退治している錦絵を紹介していた。そのなかには、酒やそら豆とともに遊女や噺屋が含まれている。薬屋、医者、汁屋は逆に鬼をかばっている。風刺を交えつつ、麻疹の禁物と良いものを知らせていた。

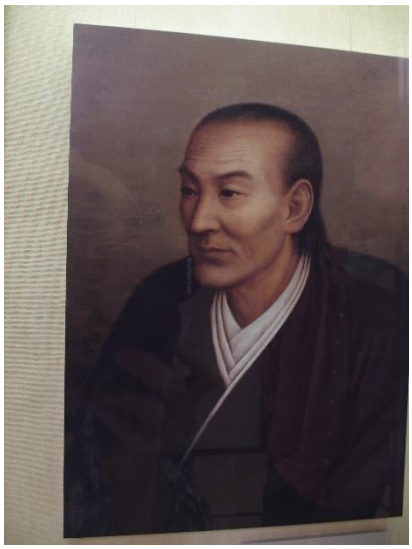
そして、ここでも、赤物や虎などの郷土玩具が集められていた。これらは日本各地にあったようで、会津の「赤べこ」や三春の「めで鯛」、甲州の「信玄だるま」、土佐の「起き上がり」など郷土玩具に赤が多いのは、子どもを疫病から守る意味があったとする。虎の説明もあった。コレラは下痢など激しい症状が出、一日千里を走るとされる虎のイメージと重なり、虎の文字を使って、「虎狼痢」「虎烈剌」「虎列拉」「虎列剌」などと記されたのだそうだ。

また、大阪の大火、地震、津波などの災害や大阪大空襲の展示もあった。本当に昔の人たちは多くの災厄を乗り越えてきたのだと、あらためて溜息が出る。



緒方洪庵、適塾

さらに興味を持った私は、大阪市中央区北浜にある適塾・緒方洪庵旧宅に行ってみることにした。緒方洪庵は 17 歳の時に中天遊の私塾「思々斎塾」に入門、4 年間、蘭学・医学を学んだ後、長崎へ行き、出島のオランダ人医師ニーマンに医学を学ぶ。1838 年大阪で開業し、同時に適塾を始めた。1849 年に日本にもたらされて間もない牛痘種痘法を大坂から西日本各地に広め、1858 年のコレラ大流行に際して、コレラ治療法が記された蘭書をいち早く翻訳し、『虎狼痢治準』としてまとめ出版した。



ここで見た展示で面白かったのは、中天遊による大黒天像である。中天遊（1783-1835）は大坂の医師・蘭学者で、洪庵は 17 歳の時から 4 年間中天遊に学んだ。大黒天を信仰していたという。信仰と科学の二重性がここにも見えるのも興味深い。主な門下生についての展示もあったが、適塾には全国各地から人が集まり、福沢諭吉大村益次郎ほかはじめ 24 年で千年を超える塾生がここで学んだという。24 年というのは、1862 年、洪庵は、幕府の西洋医学所頭取として出仕の要請を受け、江戸に出仕したからである。

それから『緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く』（緒方洪庵記念財団・除痘館記資料室編、思文閣、2015）と手塚治虫の漫画『陽だまりの樹～除痘館』を買い求めた。当時、人々がいかに種痘を怖れ、洪庵らが苦労して人々を啓蒙していったかがわかる。

その後、適塾・緒方洪庵旧宅から一筋南にある除痘館跡に建つ緒方ビル内にある一般財団法人緒方洪庵記念財団「除痘館記念資料室」を訪れた。手塚治虫の曽祖父にあたる手塚良庵（良仙）は適塾に学び、後に江戸に種痘所を設立するのに尽力した蘭方医であった。手塚治虫はそのことを『陽だまりの樹』に描き残していたのである。いろんな人々がつながっているものだ。当時の私塾の力を改めて思う。

ここで面白かったのは、ビルの入り口にある「除痘館跡」の記念碑とともに掲げられている「牛痘児」の錦絵だった。牛痘種痘をすれば牛になる、牛の角が生えてくる、赤い色が天然痘を避ける、疱瘡の神は住吉大社を祀るべし、牛痘種痘は詭術で危言妄説、万里を隔てた野蛮な国の獣臭い苗を求めて、日本の貴人に植えるとは実に嘆かわしい･･･など様々な誹謗中傷があり、医者たちは苦労した。『陽だまりの樹』にもそんな様子が描かれている。

上述したように、江戸中期から後期にかけて、家庭医学書を始め、はしか・疱瘡・コレラなど疫病の養生法、治療法を解説した錦絵が数多く出されていた。江戸の小児科医だった桑田立斉が、人々が錦絵を好むことから、これを啓蒙に使うことを思いつき、牛痘児の版画を刷って配った。白い馬に乗った牛痘児が疱瘡神をやっつけているという図である。これが全国各地で翻刻された。大坂発信のものではないが、科学と呪術を組み合わせたものとして興味深い。

なお、1869（明治 2）年、洪庵の息子惟準を院長とした大阪仮病院と、オランダ人医師ボードウィンを迎えて惟準はじめ適塾の元塾生らを中心として大阪医学校が設立され、さまざまな変遷を経て、現在の大阪大学医学部へと続いている。

十年目のプロジェクト

大学では、手探りで ZOOM が使われるようになり、連休明けからはオンライン授業が始まった。少しずつ慣れてくると、案外便利なツールであることもわかってきた。司法臨床の集中講義ではロールプレイ演習さえ ZOOM でやった。共に身を置き空気を共有しながら行うものには代えがたいものはあるけれど、工夫を重ねながらやっていくと、対面で行うのと違った利点があることもわかってきた。

それで、プロジェクトもリモートでやれることをやってみようと思えた。危機への柔軟な適応をレジリエンスという。ないものを嘆くのでなく、あるものを最大限に活かしてやれることをやるというのがプロジェクトで学んできたことではなかったか。大阪の豊かな水、植物、鳥、豊かな自然に触れ、コロナ禍において、こんなに地元のことを学ぶことができるのもプロジェクトのお陰である。

とは言え、最終年をオンラインで終えるのは残念すぎるので、今年はオンラインでつなぎ、最終年を 1 年延期して来年度に持ち越すことにした。

つづく

精神科医の思うこと㉔

美容整形

松村　奈奈子

まだオミクロンが来る前の頃、法事で弟家族との集まりがありました。久しぶりに親族と話すのは面白いもんです。そんな会のあと、大学生の姪っ子から「美容整形したい」「いい先生紹介して」と言われました。実は１年ほど前に義妹から「美容整形したいと言い出して」「言い出したらきかなくて」と軽く相談を受けていたので、「いやー、とうとうマジでするんかぁ」とおもわず言ってしまいました。「未成年の美容整形」、実は精神科医としても診察で何回か相談を受けたこともあり、思う事もあるので今回のテーマは美容整形。

私、小さい頃から母親に「あんたはキレイじゃないので、愛嬌よくしとかんとあかんで」「器量が悪いし、勉強がんばらんといいとこ無いで」とよく言われてきました。いやー、今考えると結構ヒドイ発言ですが、自分でも美人じゃないのはヨクヨクわかっていました。そんな母親の助言(？)もあってか、愛嬌はまあまあだし、勉強もちょっぴり頑張ったとは思っています。こんな腫れぼったい一重瞼で鼻も低く“美人じゃない”私ですが、１０代の頃に美容整形したいと思った事は一度もありません。友達とワイワイ楽しく遊んでいたし、そこそこ満足な生活でした。この顔にあった仕事を探し、この顔を好いてくれる人と過ごせばいいと思ってました。もちろん、キレイな女子がチヤホヤされるのを何度も見てきましたが“仕方ないよねー”てな感じで、妬む気持ちもそんなにおこりませんでした。運動能力や学力なんかも、外観と同じ様に生まれ持った個人の差がある世界です。“人はいろいろだよねー”と思ってました。そして、子どもの頃から周りの大人を見ても、美人が必ずイイ男と幸せになっているかといえばそうでもないし、外観が幸せに直結するとは思っていませんでした。

さらに、後に大学生になって海外を旅行すると「美醜の価値観は様々だなぁ」としみじみ感じました。美容整形の盛んな国もあれば、ほとんどの女性がノーメイクだったり、

コンタクトレンズではなくメガネ女子が主流の国もあったりと、逆に日本人の女性に対する価値観はどうなんかなぁと考えさせられる事も多いです。

だから、その頃の私は今の自分を上手く愛せない人が、美容整形するのかなぁなんて思ってました。

で、精神科医になって 20 数年。たまーにですが、精神科外来に「ウチの娘が美容整形をしたいと言っている、どうしたらいいですか？」と受診される親子ペアを見かけます。たいがいは 10 代半ばの娘と母親のペアです。「この子が整形を許可してくれないなら学校行かないと言ってるんです」「反対すると、怒って怒鳴るんです」と母親の話からは『先生が美容整形を止めて下さい』ってな意図がありありと伝わります。いえいえ、それは私の仕事ではないからねー。ただ、親としての役割は頑張ってはたして欲しいとは思います。

まずは、子どもと二人で話します。たいがい、母親への不満は多弁ですが、学校でギクシャクしている様子で、学校での様子や対人関係をきくと言葉は少なくなります。学校や対人関係で上手くいかない事を、外観のせいにしたいのかなぁなんて推測は容易です。「美容整形しても、学校での人間関係は大きく変わらないと、先生は思う」「友達関係の問題なら、診察で話し合う事はできる」「自分の稼いだお金で美容整形をするのは自由だと思う。ただ、それを待てないで反対する親のお金を使って美容整形するのは幼い行動過ぎないか」などなどやんわり私の思いを子どもには伝えます。その後、母親を診察室に招き入れて、母娘に対して「現代はほぼ安全な美容手術ですが、100%安全な手術などありません。親がお金を出した手術でトラブルが起こった時、そのことを後悔しない決断を両親で決めるべきと思います」「美容整形するかしないかは、家族で話し合って決める事なので」なんて事を話して診察は終わります。母娘ともに、何となくもやもやした表情で帰ります。

実は金銭的に難しい母子家庭やイジメや長期不登校など本当に精神科治療の必要なシビアな状態の家族は「美容整形」の問題で受診しません。家庭に余裕があって、母娘で一緒にならんで待合室で座って待てるレベルの母娘は、こんな感じでいいんだと思っています。

近頃の美容外科のサイトをみると、もう未成年は「顧客ターゲット」になっているなぁと思います。サイト内にはよくわかるように「未成年は親の同意書と同席が必要」と明記されています。中高生の子どもと母親が美容外科に行き施術した話も、ちらほら聞くようになりました。動画サイトでも美容外科の動画が多くアップされ、美容外科の宣伝も兼ねたけっこうリアルな手術動画から、「こんな美容整形しましたー」的な施術を受けた人のビフォー・アフター動画も簡単に検索できます。美容外科が身近な国に、日本がなっていってるんでしょうね。

そんな動画からは「今の自分をもっと好きになるために、整形しよう」というメッセージを強く感じます。いやー、ほんまにそうなん？と、おばちゃんの私は思ってしまいます。自分の個性を理解し、多様性を受け入れていくのが、自分を好きになる事なのかなぁと思うんですけどね。精神的に成熟していく事とは、逆行しているんじゃないかと。

で、ウチの姪っ子。そこそこカワイイぃんですが、遺伝のおかげで私と同じ「はれぼったい一重」なんです。もちろん、そこが彼女の悩みです。

優秀な皮膚科の後輩が、数年前に美容外科に目覚めて転身しました。ランチをしながら、興味津々にいろいろ聞いてみた事があります。「いやー、いろいろあるけど楽しいですよ」「先生もきれいな二重にできますよ」と笑って話します。器用な彼女にとっては、美容外科は腕の見せ所なんだろうなぁと思います。

2022 年 4 月からは 18 歳から成人になります。姪っ子、美容資金もばっちり貯めたと言います。いやー、どうしたもんだか。

馬渡の眼 8
「あたりまえ」

馬渡 徳子

父の七回忌法要の折、父の療養中、その病気の特性から、さまざまな事件を起こすことを、逆に面白がって、最期まで支えて下さった幼馴染のご住職が引退をされておられたことを知ることとなる。

そのバトンを受け継がれたご住職より、オペラ歌手のような声にて、昨今の世相を反映した以下のお話を拝聴した。

「あたりまえ」の対義語は、何か?
私たちは、誰も応えられなかった。
「ありがたい」とのこと。

私たちは、皆、黙って頷いた。
そうだな。「今こうしてあること、そのことに、改めて眼を向けてみると、沢山のことに感謝の気持ちを素直にもてるんだな」ということを、日々忘れがちだなと気付いた。

父を看取った後の石川県でのワークショップで、団さんよりマガジンへの投稿を勧めて頂き、丁度一周忌の節目に、父と先代のご住職のエピソードを記載した回がある。

ご住職が 3.11 の東日本大震災の翌日に、お寺の掲示板に書かれた

「生きてるだけでだいたいオッケー by マギー史郎」

との文脈に、翌日から、何故か父が花を添えるようになり、そこが通学路でもあったことから、父にその行為が叶わなくなった時からは、地元の小学生にその行為が引き継がれたこと。父は、障がいのある孫の通学に六年間付き添っており、その行為が、やがて**「通学時の見守り隊」**と発展し、表彰を受け、葬儀の際には、一番正面に飾らせて頂いた。

以下は、葬儀の際の先代ご住職の言葉である。

「一番印象深い光景は、障がいのあるお孫さんに付き添って、毎日通学される姿です。私たちは、障がいのある児童が、特別支援学校ではなく、普通学校に行くんだから、『付き添うのが、**あたりまえ**でしょう』と思ってないでしょうか。とんでもない。お孫さんの卒業式の日、幼馴染の彼に「六年間、本当にお疲れ様でした。」と声をかけますと、「いえいえ、こうして子どもらと話もできるし、ご近所さんやお店の方、おまわりさん、先生方にも毎日ご挨拶ができる。おかげさまで、こうして足を鍛えることもできました。『**ありがたい**』六年間でした。と応えられました。私は、彼の尊い姿に、合掌し、心を込めて深く頭を垂れました。」というエピソードをご紹介下さったのである。

確か、ご住職は、当時、副住職でらしたはず。このエピソードを覚えていて下さったのだろうかと察すると、胸が熱くなった。

先代のご住職、そして天国のお父さん。

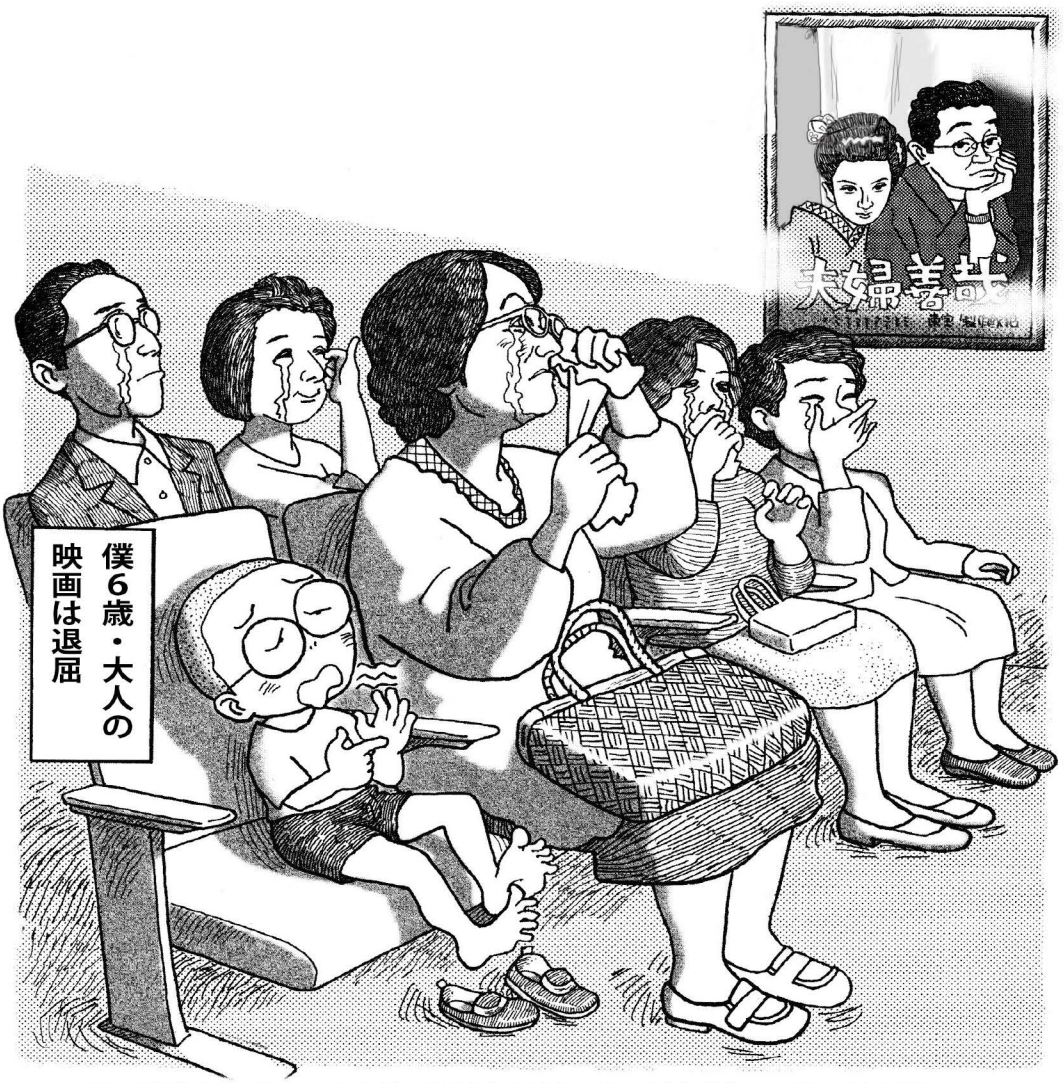
二年前から、世界は、コロナウィルスで、「あたりまえ」とか「ふつう」という概念が、随分と揺さぶられてきました。

この時代を生きたことに、深謝して、「耐える」ではなく、「変えて」いく価値を伝えていきたいと思います。

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

我が映画観賞黄金時代



※珍しく母が映画に誘ってくれたが、森重久弥と淡島千景の「夫婦善哉」、六歳には無理だった

昭和 30 年代 (1955 年 ~1964 年)、僕の故郷東成区今里は東西南北から 5 本の道路が集まり、信号機が未発達の頃には車は交差点に進入すると円を描くように交差点を回りながら、進みたい方向の道路に分かれて行く方式だったため、今里ロータリーと呼ばれました。

記録によれば、昭和 30 年に信号機がつけられロータリー方式はなくなりましたが、幼少時に見た独特な交差点の光景が記憶に残っています。

そして交差点をなんばから生駒方面に横断する千日前通りに入り口があり南方向へのびる新橋通商店街には、東映・大映・松竹・日活の系列映画館がありました。

特にロータリー交差点にあった堂々たる東宝映画館でギュウギュウの人混みの隙間からかろうじて立ち見で見た「ゴジラの逆襲」(同 2 作目・1955 年)、その迫力には本当に興奮しました。

今里ロータリー北方向緑橋方面には洋画系のロマン座があり、5~6 歳だった私は父親に連れられ、カーク・ダグラス主演の「ユリシーズ」(1955 年 3 月公開) を見ています。(誰も成功しない強弓の弓幹 (ゆがら) に弦 (つる) をヒョイッとかけてしまう英雄の物語)。

さらに今里ロータリーから 1.5km 南の猪飼野にあったパレス座では、喜劇王チャップリンが繰り出すノンストップのパントマイムギャグに悲鳴のような笑い声と涙とハナでもう無茶苦茶、笑いすぎて息ができない苦しさをはじめて味わいました。

そういえば、当時の映画館では、たとえば 2 本立ての場合、上映の合間に内外の主な出来事や政治ニュース・スポーツ・芸能ニュースが小気味よいアナウンサーの声とともに流されていた。

誰もが月に 1~2 回は映画館に通っていた時代で、映画観賞は当時まだ存在しなかった週刊誌のように世の中の動向を目と耳で知ることができる唯一の情報施設でもありました。

やぶにらみ日記 (473)

東成区の昭和

(15) 写生

やぶにらみ日記 (474)

東成区の昭和

(16) 写生

やぶにらみ日記 (475)

東成区の昭和

（17）写生

やぶにらみ日記 (476)

東成区の昭和

（18）写生

やぶにらみ日記 (477)

東成区の昭和

（19）写生

やぶにらみ日記 (478)

東成区の昭和

（20）写生

やぶにらみ日記 (479)

東成区の昭和

（21）写生

やぶにらみ日記 (480)

東成区の昭和

（22）写生

やぶにらみ日記 (481)

東成区の昭和

(23) 写生

やぶにらみ日記 (482)

東成区の昭和

(24) 写生

やぶにらみ日記 （483）

東成区の昭和

（25）写生

やぶにらみ日記 （484）

東成区の昭和

（26）写生

やぶにらみ日記 （485）

東成区の昭和

（27）写生

やぶにらみ日記 （486）

東成区の昭和

（28）写生

心理コーディネーターになるために Vol.6

山下桂永子

☆2 月の宣告

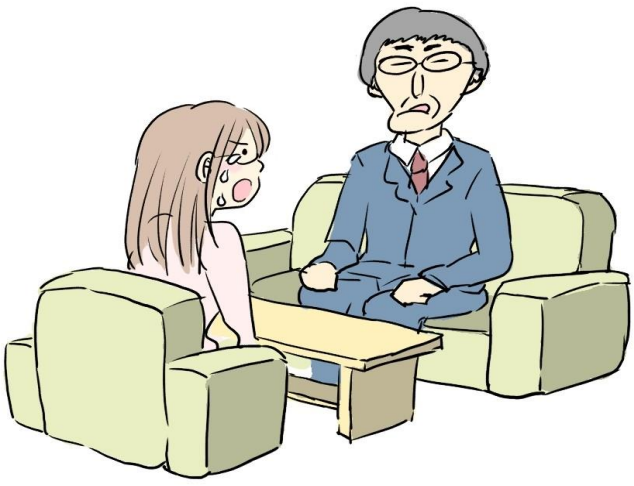
職場で泣いた。悔しくて涙が止まらなくなった。私が心理指導員として某市の教育センターで働くようになって 1 年弱、前年度同様に相談員の仕事をこなしつつ、教育相談全般の業務に関する取りまとめをするようになっていた矢先のことである。

昨年度、私に教育相談の取りまとめをして欲しいと予算を取ってきてくださった所長は異動になり、新しく赴任した所長になっていた。そのころの教育センターは、次々と新しい事業が舞い込み、指導主事の方々は大忙し。新しい所長もそれまでは学校現場の教員であったという立場からの行政の仕事に、慣れない業務をこなしながらなかなかお忙しそうにされていたこともあり、教育相談の取りまとめについての話はあまりできないまま 1 年弱が経っていた。その 1 年目の所長から応接室に呼ばれ、来年度の教育相談の相談員の予算削減について知らされたのである。

当時私以外に 7 人ほどいた非常勤の相談員のうち 2 人の契約を更新しない、残りの相談員についても週 4 日の方が週 2 日になると告げられた。2 月の初めのことである。この時期にそんなことを言われても困る、それでは来年度の教育相談は立ち行かなくなる、など何かしら言ったと思うが、正直あまりのことに呆然として記憶は曖昧である。応接室から出てきて自席に戻ると涙が止まらなくなった。

☆泣いて吠えた応接室

その後も何度か所長とは話し合ったが、言い合いになって終わることもしばしばで、私からの意見はただの文句としてしか受け止められなかったように思う。私としては、「自分が辞めてもいいので他の相談員の雇用を確保してほしい」、と言ったりもしたが、所長としてはすでに議会で決定している



予算を覆せるわけもない。所長からは「今更あなたが辞めたところでどうしようもない」「教育相談はあくまで 50 以上ある教育センターの事業のひとつでしかない。」「そもそも単年契約なのだから文句を言うのはおかしい」など、時にきつい口調で言い返されるばかりであった。

その度に自席に戻っては、必死に冷静になろうとするものの、目の奥底から怒りと涙がこみあげてとまらない。声を殺して泣くしかなかった。それに気づいた周りの相談員の先生方がそっと後で労ってくださったり、話を聴いてくださったりもしていた。

☆怒りと悔しさは自分へのもの

そのころの私は怒りと悔しさで職場でも、家でもよく泣いていたと思う。何に対しての怒りと悔しさかと言えば、「これまで安い賃金で雇ってきたくせに、この時期に来年度の仕事はないとか平気（かどうかはわからないが）で言えるなんて、長年ここでやってきた相談員の生活をなんだと思ってるんだ！」とか「予算が増えたから（特に当時は電子黒板や PC などが現場に大量に取り入れられていた時）相談員をクビにするってなんでそんなことになるの！あの新しい電子黒板つぶしたろか！」とかいうことは真っ先にあった。しかし今になって思えば、一番の怒りと悔しさはたぶん教育相談、そして心理の仕事が何をやっているのかを理解してもらえず、それを伝える力が自分には足りないと感じていたからだろうと思う。

当時の私は、教育センター以外にも、東北大震災の支援派遣やその他事故や災害などで、緊急支援のスクールカウンセラーとして活動していたことで、心理職としての自分の無力さや限界などを強く意識していた時期でもあった。自分に何ができるのかという不安がある一方で、手ごたえも少しずつ感じていたその時に、教育センター相談員としての活動が理解されず、自分ではなく、同僚の雇用を失うということが起きたのだ。自分の無力さへの怒りと悔しさだった。

それでも自分の無力さで、自分が仕事を失うならば、まだ仕方ないと思えたかもしれない。しかし、仕事を失ったのは私ではなく、これまで一緒にやってきた同僚である。給料が安くても、誠実に仕事に向かい、支えあってきて、この 1 年は、私が心理指導員としてやろうとしていたことにも理解してくれて支えてくれた同僚たちが職を失う。当の本人たちは仕方がないねと言っていたりもしたが、私はどうにも納得がいかなかった。私が残って同僚が職を失うことは、私が私を許せなかった。これまで心理職としてやってきたこと、これからやっていこうとしていたことが、全て否定されたような気もちにもなって、悔しくて悔しくてたまらなかった。

☆助けを求めて知ったこと

とにかくこのまま泣き寝入りするわけにはいかない。なんとか相談員の枠を確保し、来年度も今年と同じメンバーの体制で教育相談を続けていける方法はないのかと、いろいろな人に相談した。中にはかつて教育委員会に携わっておられた経験のある先生もいて、とても誠実に話を聴いて下さり、現状の把握や整理、これからの方針を検討することを大いに助けていただいた。

その中でいろいろと気づかされたことがある。その 1 つが、予算を誰が取ってくるのか、ということである。教育センターの予算を組んで、議会に提出していくのは、教育委員会であり、指導主事（これは自治体によって違うのかもしれないが）である。市の他の部署や課はそれぞれ行政職のプロがいて、その行政職が中心に予算を組む。しかし指導主事は学校の先生がなるので、行政職のプロではない。つまり、行政職のプロではない指導主事が行政サービスである教育相談の予算を取ってくるのは至難の業であるということである。

それを教育センターの 50 ある事業のうちの1つとして、特に何か問題が出ているわけでもない、教育相談のこともまだよくわからない 1 年目の所長が手際よく、今年度同様の予算を取ってこれるわけはないのだ。事業が増えて教育センター全体の予算が膨らんでいる中、予算削減を前提としている行政のプロから見れば、何をしているのかわからない（トップすら把握していない）教育相談は格好の的であっただろう。今となっては、当時の所長には、（許してはいないけれど）少し同情はしている。

私がこの先、どれだけ教育センターの教育相談の機能を充実させ、こどもたち、保護者や現場の先生に喜んでもらったとしても、指導主事に、そして市の行政にその意義を理解してもらわなければ、こんな風にあっさりと予算を削減され、否定されてしまう。そのことを涙して、歯噛みしながら思い知ったわけである。

でもだからといってそれを「はいそういうものですよね。」と諦めるのは簡単である。私自身も単年契約の非常勤であるし、この仕事を辞めようと思えばいつでもできる。どうすべきか年度末まで散々思い悩んだ。

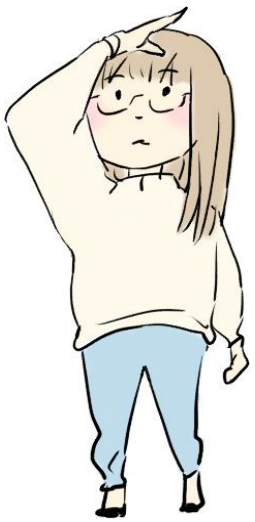
☆ 1 年前の言葉

実はこの年度末よりも 1 年以上前に、私が心理指導員になるかならないかのころ、この対人援助マガジンの編集長である団先生から言われた言葉がある。記憶が正確ではないが「自分が変えたらええねん、自分のできる範囲で変えると相手も変わる」というような言葉だったと思う。

その時はあまり深く考えることはなかったが、1 年経ってこの言葉は、自分の仕事への意識をまるで変化させる言葉になっていた。自分が働く環境は自分の手で整えていく必要がある。元々ある枠組みの中で言われたことをやるのではなく、自分で考えて心理職としてここにいて、役に立つ、そして自分が変わることで組織を変えていく、そういう覚悟が問われている言葉なのだと感じた。

☆辞めるか、変えるか

その末に、「辞めるのはいやだ」と思った。10 年働いてきた愛着もある。給料が安いだけの理由ならとっくに辞めている。「この仕事は好きだけど、給料面を考えると長く続けていけない」という心理職の人たちをこれまで多く見送ってきた。それでも数年の間に入れ替わる指導主事や心理職とは違って、私を含め、長く勤めている心理職以外の相談員の先生方と作り上げてきたものを切り捨てて、自分から辞めるのは嫌だった。それならば辞めるか、辞めないかじゃない、この状況を変えるか、変えないかだ。

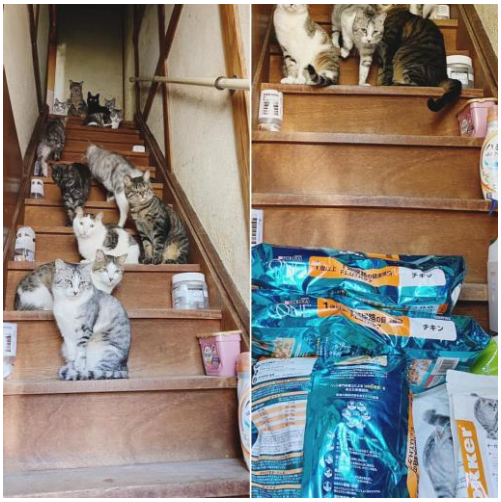


安い給料にしがみつくような雇われ根性を捨て、自分がこの仕事を続けていけるようなシステムを自分で作ろう。そして心理職が長く続けていけるチームを作ろう。そうでなければこの仕事を続けていくことはできない。変えるかしかない。予算がないからと急に減らされることのないようなシステムにしていかないといけない。そのために必要なことを考えて、言葉を尽くして理解してもらわなければならない。

変えよう。まずは自分の働き方を。そして目には見えにくい教育相談のことに対して説明できるようになり、言葉を尽くして伝えていこう。そう考えて新年度を迎えることにした。

人もねこも一緒に支援プロジェクトで大切にしていること

トントン。「こんにちはー！ねこの小池ですー」そう言って今日も家庭訪問をします。人もねこも一緒に支援プロジェクトで大切にしていることは、支援家庭と関わり続けることです。全頭の不妊手術が終わった後のお家にも、２～５ヵ月に１回のペースで家庭訪問をしています。そこで、キャットフードのお裾分けをしたり、前回の訪問から今回の訪問までの間に亡くなった猫の名前を聞き取ります。あとは、飼い主さんと一緒にただただ「可愛いですねー」と猫たちを愛でます（笑）。



増えすぎてしまった猫たち全頭に不妊手術をすることで、お家の環境改善に向けた大きなひと山を越えますが、収束への道のりは長く険しいものです。亡くなっていく子を看取るのは、何度経験しても辛いものですし、近所の方や、あまり深く知らない方から苦言を言われることもあります。そういった時に、飼い主さんの心が折れてしまわないように、ゆるくながく繋がり続けて、「ずっと応援してますよ、頑張っているの見てますよ！」のメッセージが届けばいいなと思っています。

プロジェクト発足当初は月１回の家庭訪問を目指していたのですが、現在は２～５ヵ月に１回の家庭訪問に変わってきています。その背景には、安定してきたケースが増えたことも理由の一つですが、対応ケースが増えすぎたことも大きな理由です。去年くらいまでは、「家庭訪問日」と一日休みを取れば全部のお家を回ることができたのですが、最近はそうもいかなくなってきました。現在関わっている多頭飼育家庭は１０件。京都市３件、川西市１件、豊中市２件、堺市１件、東大阪市１件、加古郡１件、大阪市１件と、かなり広範囲になり、最短ルート出回っても 300km の移動が必要になるので、朝から動いても１

日では回りきれなくなりました。高速代やガソリン代もなかなかの出費になります（汗）。自分たちも無理しすぎないように、飼い主さんたちとずっと関わっていけるように、無理なのない範囲で、飼い主さんの安定具合に合わせて訪問頻度を調節しています。

多頭飼育崩壊ケースのその後

人もねこも一緒に支援プロジェクトが発足して約4年半。マガジンでは、積極的介入期が終わった直後の事例報告を何度か掲載してきましたが、数年後については書いたことが無かったので、今回は、関わって5年目になるケースの現在を共有したいと思います。

■ケースA

2017年12月発行の第31号対人援助学マガジンに多頭飼育崩壊支援の事例紹介として掲載したケースです。詳しくはマガジンを遡って読んでいただければと思いますが、概要を簡単に説明すると、ペットの不可の市営住宅で、保護した猫を飼い始めたところから室内で繁殖を繰り返し、７８匹にまで増えてしまっていたケースです（31号のマガジンは77匹となっていますが、手術直前の出産や去勢済みの猫さんの出現などあり、最終78匹で確定しました）。飼い主さんは家族4人暮らしで生活保護を受給しています。生活支援担当のケースワーカーさんより協力要請をいただき、連携機関としては、①生活保護のケースワーカーさん、②人もねこも一緒に支援プロジェクト、③子ども若者支援室のカウンセラーさん、の3機関での介入でした。

2017年の6月から関わりが始まり、8月下旬に全頭に不妊手術が完了しました。手術後は全頭を飼い主さん宅に戻しました。このマガジンを書いている現在が、2022年の2月なので、介入開始から約4年半が経っています。

現在、猫の頭数は34匹。当初より44匹減少しています。その内訳は4匹の子猫は里親に譲渡し、残りの40匹は死亡頭数です。猫エイズをみんなが持っているうえに、2,3匹から78匹にまで増えてしまっているため、体が生まれつき弱く、若い猫さんの方が早く亡くなる傾向にありました。

お家の中の変化と言えば、家の中の大掃除を市のゴミ屋敷担当部署の方々と一緒に実施しました。壊れて放置されていた冷蔵庫や洗濯機を捨て、物置と化していたお風呂場を復活させることができました。その他には、当初は引きこもり状態と言われていたお兄さんが、ケースワーカーさんたちの力添えをうけて就労支援施設に通うようになりました。

ケースＡの個体管理表

死亡日	タグN	名前	性別	生まれ	毛色	手術	特記事項
2018/6/22	1	はく	オス	2011	シャム	不可	脳性マヒ疑い
	2	オスカー	オス	2015	キジトラ	2017/8/28	尿ケア食
2017/10/11	3	にゃんまる	オス	2016	グレー	2017/8/28	
	4	のり	オス	2016	白黒	2017/8/28	
	5	サム	オス	2014	白灰	2017/8/28	尿ケア食
2017/11/12	6	ひちのすけ	オス	2017	グレー	2017/8/28	
里子	7	まろくん	オス	2017	グレー	2017/8/28	
	8	れん	オス	2015	グレー	2017/8/28	
	9	とむ	オス	2011	白黒	2017/8/28	尿ケア食
	10	まいける	オス	2014	白黒	2017/8/28	尿ケア食
2020/4/11	11	ふさのすけ	オス	2014	グレー	2017/8/28	尿ケア食
2019/2/9	12	じじ	オス	2016	黒	2017/8/28	
2019/4/5	13	だいご	オス	2015	白灰	2017/8/28	
	14	みーのすけ	オス	2016	シャム	2017/8/28	
2017/8/31	15	ゆう	オス	2014	シャム	2017/8/28	脳性マヒ疑い
	16	けんしろう	オス	2016	白灰	2017/8/28	
2020/10/1	17	たろう	オス	2015	グレー	2017/8/28	尿ケア食
2017/11/12	18	ろき	オス	2014	白灰	2017/8/28	尿ケア食
2020/1/14	19	とらのすけ	オス	2011	キジトラ	2017/8/28	尿ケア食
	20	だいすけ	オス	2012	白灰	2017/8/28	尿ケア食・脳性マヒ疑い
2017/12/30	21	なんじろう	オス	2012	キジトラ	2017/8/28	尿ケア食
2018/11/30	22	そらた	オス	2013	グレー	2017/8/28	腎臓ケア食
	23	げんき	オス	2012	黒	2017/8/28	
	24	くまごろう	オス	2014	黒	2017/8/28	
	25	こてつ	オス	2011	黒	2017/8/28	尿ケア食
2017/10/28	26	しんのすけ	オス	2011	グレー	2017/8/28	内臓弱い
	27	たく	オス	2013	グレー	2017/8/28	
2017/9/8	28	そうた	オス	2014	グレー	2017/8/28	
	29	レオン	オス	2015	シャム	2017/8/28	尿ケア食
2020/6/13	30	だいじろう	オス	2013	白灰	2017/8/28	尿ケア食
	31	さんじ	オス	2014	白灰	2017/8/28	尿ケア食
2019/2/10	32	ひかり	オス	2014	白	2017/8/28	尿ケア食
2018/9/24	33	くろべえ	オス	2013	黒	2017/8/28	
2020/8/20	34	まめすけ	オス	2014	黒	2017/8/28	
2017/11/6	35	きんた	オス	2013	グレー	2017/8/28	尿ケア食
	36	こるね	オス	2014	白灰	2017/8/28	尿ケア食
2021/3/29	37	りき	オス	2007	グレー	2017/8/28	尿ケア食
	38	るい	オス	2014	黒	2017/8/28	尿ケア・脳マヒ疑い

里子	4
死亡	40
生存	34

2022/2/28 時点

	39	はる	オス	2012	白灰	2017/8/28	尿ケア食
2019/2/16	40	ちょこ	メス	2013	黒	2017/8/28	
	41	るな	メス	2011	グレー	2017/8/28	腎臓ケア食
	42	ひな	メス	2011	グレー	2017/8/28	
2019/2/11	43	えりか	メス	2014	グレー	2017/8/28	
	44	もも	メス	2010	キジトラ	2017/8/28	
里子	45	にこ	メス	2017	シャム	2017/8/28	
2019/2/12	46	るる	メス	2016	サバトラ	2017/8/28	
	47	ねね	メス	2015	シャム	2017/8/28	
2018/5/30	48	ひめ	メス	2014	キジ白	2017/8/28	
2021/8/18	49	のえる	メス	2014	白黒	2017/8/28	尿ケア食
里子	50	こはる	メス	2017	キジトラ	2017/8/28	
	51	らん	メス	2015	グレー	2017/8/28	
2018/8/3	52	みるきー	メス	2013	サバ白	2017/8/28	
2020/6/19	53	みる	メス	2013	サバ白	2017/8/28	
	54	さくら	メス	2012	グレー	2017/8/28	
2019/2/7	55	ゆい	メス	2017	グレー	2017/8/28	
2021/7/27	56	やちよ	メス	2015	白灰	2017/8/28	
2019/2/9	57	ななみ	メス	2015	白灰	2017/8/28	
	58	なな	メス	2011	黒	2017/8/28	
2017/9/28	59	めぐ	メス	2014	白黒	2017/8/28	
	60	なっちゃん	メス	2013	黒	2017/8/28	
	61	ここ	メス	2011	グレー	2017/8/28	脳性マヒ疑い
里子	62	ぺこ	メス	2017	白灰	2017/8/28	
2020/5/30	63	はいじ	メス	2014	キジトラ	2017/8/28	
	64	こみつ	メス	2015	黒	2017/8/28	
2019/2/19	65	えるざ	メス	2015	シャム	2017/8/28	
	66	さつき	メス	2013	白黒	2017/8/28	
	67	めい	メス	2013	白黒	2017/8/28	てんかん発作あり
2020/3/28	68	ぴぴ	メス	2014	白灰	2017/8/28	
2017/12/25	69	みみ	メス	2012	白灰	不可	口呼吸
	70	るーしー	メス	2012	シャム	2017/8/28	
	71	くろこ	メス	2012	黒	2017/8/28	
	72	ひまり	メス	2012	グレー	2017/8/28	
2019/2/5	73	かれん	メス	2013	グレー	2017/8/28	
2017/10/8	74	こまち	メス	2012	シャム	2017/8/28	
2019/2/11	75	あん	メス	2015	黒	2017/8/28	
	76	さもん	オス	2015	黒	2017/8/28	
2021/7/29	77	あいちゃん	メス	2013	黒	2017/8/28	
2018/8/20	78	てん	オス	2017	黒	未手術	一斉手術前日生まれ

ネガティブな事件でいうと、「子猫を里親に出したくない事件」がありました。全頭に不妊手術を実施する前日に生まれた１匹の子猫がいました。もちろん生後１日では避妊手術はできません。飼い主さん家族と相談をして、この子猫が離乳したら里親募集をして譲渡しましょう。という約束になりました。そして、２ヵ月ほど経過し、子猫が完全に離乳をした頃に「そろそろ子猫の里親募集用の写真を撮りに行きたいと思うのですが・・」と電話を入れたところ、飼い主さん家族から「家族で話し合った結果、この子は里親に出さずにうちで育てようと思います」という驚きの返事がきました。それだけならまだしも、さらに話は続きます。「この子は家で育てますけど、元気な１歳くらいの成猫を里親にだしてくれませんかね？」と言われたのでした。

え・・、７８匹の家にいるのにまだ増やしたいのですか？というか、可愛い子猫は手放したくないけど、成猫はどうでもいいんでしょうか？怒りがこみ上げ、電話口でキレてしまいそうになる自分を抑え「ちょっと、それは難しいと思うので、もう一度ご家族で話し合ってもらえますか？私もちょっと考えます。」と言

って電話を切りました。

いやいやいや、言ってる意味が分かりません。このモヤモヤとイライラを体に溜めておくのは不健康なので、臨床心理士のスタッフの元へ話を聞いてもらいに行きました。

「かくかくしかじかありまして、子猫は可愛いから手放したくなくて、成猫はかわいくないから里親に出してほしいなんて、酷すぎる。今めっちゃイライラしてるんです。」と話したところ、「家族の関係性ってどういう感じですか？」と聞かれました。「関係性？うーん、猫のことをやる時はみんなしっかり協力してくれるかな。でもよくケンカもしてるかな。」と返すと、心理士のスタッフは「あくまで一つの見解ですが、猫が家族の鎹（かすがい）としての役割を担っていると考えた場合、基準になるのは“可愛い・可愛くない”ではなくて、“依存度”になるかなと思います。例えば、病気の猫は通院の手間があったり、餌を変えたりと手がかかりますよね。手がかかると、人同士の会話や結束が生まれる。猫も人に依存しているし、人もそんな猫に依存している。という関係性がるかもしれません。そう考えると、生まれたての子猫は手がかかるし、依存度が高い。それに対して、元気な成猫は手がかからないので依存度が低い。そういう風に解釈することもできるんじゃないかと思います。」という意見をくれました。なるほど・・そう考えるとイライラが半分くらい収まりました。でもまだ、半分はイライラモヤモヤが残っているので、連携機関の子ども若者支援室のカウンセラーさんにも連絡をとりました。

「かくかくしかじかありまして、めっちゃイライラしてたのが半分くらいにはなったんですけどどう思いますか？」と聞くと、カウンセラーさんは「最近の面談を通して感じたことなのですが、今飼い主さん家族が初めて猫の“死”と向き合っているような気がします。手術をする前の方が毎月の死亡頭数は多かったんですが、それを上回る出産があったので、これまではあまり死ぬということに向き合わずに済んできたんです。でも、今回全頭の不妊手術が終わって、生まれるということが一切なくなった状態で、時々亡くなる子がいます。それで、初めて猫の死と向き合って、自分たちが手術をしたから死んでしまったんじゃないかと、かなり揺れている様子があります。その中で、唯一成長過程にいる子猫さんは家族にとって光のような存在なのかもしれません。」という意見をくれました。

さすがの私のイライラも２人の心理士さんの冷静な意見のおかげで収まりました。そして、相談の結果、子猫は里親に出さすお家に残す代わりに、子猫の手術費用はもう助成を使えないので、捻出する方法として就労の相談につなげていくということになりました。

これが子猫を里親にだしたくない事件です。この事件から学んだことは、ケアギバーズケアの重要性です。ケアギバーズケアとは、ケアを提供する人のケアをする体制のことだそうです。心理士や福祉士といった心の専門家であっても、傷つきやすい一個人であることに変わりはなく、支援を提供する人をケアする体制をつくることはとても重要であるという考え方です。今回、意図せずですが私の人もねこも一緒に支援プロジェクトのスタッフには臨床心理士が２人も在籍してくれており、すぐに相談できる体制がありました。加えて、支援対象の家族に関わっているカウンセラーさんとも気軽に話をできる関係があり

ました。今回、２人の冷静なサポートがなければ、私はイライラを飼い主さんにぶつけて喧嘩になり、最悪支援が途切れてしまっていたかもしれません。飼い主さんに怒りをぶつけることなく、私が精神的に病んだりすることなく、支援を継続することができた要因は、意図せずもケアギバーズケアの体制ができていたことだと感じました。

全国では、多頭飼育崩壊ケースに民間のボランティアさんが介入する事例が多くあります。多頭飼育崩壊の現場は、猫の生活環境が劣悪なところばかりです。そこに猫が大好きなボランティアさんが介入するんですから、ボランティアさんの精神的なダメージは相当なはずです。それでも毅然として対応しなければいけない、しんどいというのは甘えだ、と自分を奮い立たせるのではなく、しんどくなって当たりまえなんだという前提で、自分の心を、ボランティア仲間の心を守る方法を考えていくことも必要だと思いました。

関わりつづけること。 考え続けること。

多頭飼育崩壊ケースでも基本は飼い主さん宅に全頭返す方針で、多頭飼育ケースに関わってきました。全頭を保護してスピード解決！ということにはなりませんが、その代わりに並行して沢山のケースに関わることができていると思います。

最近は、京都市動物愛護センターと協働し、地域包括支援センターや社会福祉協議会さん向けに多頭飼育崩壊につての講座を４回ほど実施したり、大阪市の動物愛護推進員さんむけの研修で多頭飼育崩壊の理解とその支援について講師を担当させていただいたりしました。そのおかげで、最近は多頭飼育ではあるけれど、崩壊前の段階で相談をいただける機会も増えてきました。これは、予防の観点から考えてもとてもうれしい事です。

これからも地道に自分にできることを積み重ねて、このままで良いのか考え、記録を共有していきたいと思います。

人も ねこも
一緒に支援プロジェクト

おわり

小池英梨子
活動：NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表
仕事：猫専門のお手伝い屋さん「ねこから目線。」として開業。
ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から
35

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

今年の冬は雪が多く、また寒さもいつまでも続き、早く春が来てほしいと思う今日この頃。発刊のころには梅が咲いているだろう。最近認知が怪しくなってきたが、できる限りこの話を続けて行けたらと思う。

今回は「す」「せ」のところから以下の９つ。

- **寸にして之を度(はか)れば丈(じょう)に至りて必ず差(たが)う**
- **生ある者は死あり**
- **臍下丹田(せいかたんでん)**
- **枘鑿相容れず(ぜいさく)**
- **西施にも醜(しゅう)なる所有り(せいし)**
- **精神一到何事か成らざらん(せいしんいっとうなにごと)**
- **清濁併せ呑む(せいだくあわ)**
- **急いては事を仕損じる**

＜寸にして之を度れば
丈に至りて必ず差う＞

ことを行う場合、煩雑であればあるほど過失を生じやすいことの例え。物を測るには、それにふさわしい尺度があり、大きなものを一寸ずつ図っていくと、一丈になった時には誤差がたまって大きな差が出るということから。　**出典　淮南子**

母親の面談を行っていると、小さいことに気を配り過ぎて、結局全てが上手く行かなくなって嘆いている方に出会う。子育てというのは複雑なものである。一人しかいなくても、自分とは異なる個体であり、様々な動きや反応がある。その一つ一つに細かく細かく対応するのは苦しい。また複数の子どもがいれば、同じ兄弟であっても一人一人性格も発達も異なる。それぞれの子どもに、こまごまと対応していくことなど実

は無理な話なのである。手が回らないこと、気が回らないことは人間である以上当たり前のように起こりうる。それを防いで完ぺきに完ぺきにと、細かいところまで気を配って子育てをしているうちに、母親が目指していた子育てとは全く異なったことになってしまうことはままある。

子どもを育てるときに、まっすぐに育てようと思っていても、ほんの少しずれが出来れば、その先の子育ては、そして子どもの様子は、はじめ考えていた子育ての未来とはかなり隔たりができる。子育ては失敗の連続。上手くやろうとしなくても何とかなるものである。完ぺきをめざせば目指すほど誤差が大きくなる。子育ての結果を大まかに見ていれば、誤差はその範囲内に収まるので誤差とはならない。細かく見れば見るほど誤差を大きく感じてしまうし、実際大きくなってしまうのだ。そんなことを伝えるためにこのことわざを使うことがある。子育ては適当、程々、好い加減。

＜生ある者は死あり＞

生きているものは、いつかは必ず死ぬ時が来る。生命は永遠のものではないということ。「生あるものは必ず滅す」ともいう。出典には「生ある者は必ず死あり、始めあれば必ず終わりあるは、自然の道なり」とある。盛者必衰、生者必滅も類義。

出典　楊子法言（ようしほうげん）

これは当たり前の事なのだが、時々、永遠に生きていると思っているのではと感じる人に出会う。特に家族関係でいえば、嫁姑問題などである。人は年を取れば、妙に頑固になって物わかりが悪くなる人もいるし、認知の問題が起これば、嫁に対してあらぬ疑いをかけるなどということも起こる。性格的な問題を持っている老人も時々みかける。舅姑は、嫁にとってあまりうれしい存在ではないことが多い。しかし、舅姑はほとんどが嫁よりかなり年上であろう。人生 100 年時代に突入するかという今の時代、中々舅姑の死というのは想像できないのかもしれない。しかし、そういった確執も未来永劫続くわけではなく、いつかは終わりが来て、自分たちの時代が来る。結婚当初から同居という家もあるだろうし、もちろん舅姑が元気なうちは距離をとって過ごすこともできる。どちらかが倒れたから、あるいは亡くなったから同居することになったという方も多いだろう。最近の舅姑はどちらかというと遠慮がちな方も増えている。互いにある程度の距離を取り、間に境界をしっかり引き、いずれは亡くなっていくと考えることで耐えられる日々も増えるのではないか？そんな思いを伝えるためにこのことわざを使う。

＜臍下丹田＞

臍の下三寸（約９センチメートル）の所にある体のツボの事。ここに力を入れて意識を集中すると、健康を保ち勇気が湧いてくるとされる。多く「臍下丹田に力を入れる」の形で用いられ、物事に動じない、どっしりと落ち着くという意。

育てられ方の問題もあるのかもしれないが、とにかく自信のない人が多い。「自信を持つこと＝驕（おご）る　だから謙虚であれねばい

けない、つまり自信を持たない」となっているのではと思ってしまう。「謙虚であること」と「自信がないこと」は、まったく別物である。しかし自信がないために、多々ある情報に惑わされたり、あちこちふらふらする。芯がないのである。そういう保護者に育てられる子どもは大変である。どうしたらよいかわからなくなるだろう。

ふらふらした保護者と出会う度に「地に足がついている感覚はある？」「芯がしっかり立っている感覚はある？」と聞いてみると、口をそろえて「ありません」と答える。子育てをするのに、保護者がふらふらしていたのでは、子どもは迷ってしまう。特に思春期の揺らぎの大きい時期に、保護者がふらふらしたら、思春期の揺らぎはもっと大きくなってしまう。そんな保護者にこの言葉を伝えて、丹田の位置を確認する。どんと構えなさいと。不安が強いからふらふらするということもあるので、「大丈夫だから」というだけで落ち着く保護者も多い。

どんと構えられない保護者のもとで、子どもが不安になっているのは当然である。保護者がどんと構えることで子どもも「ああ、大丈夫なんだな」と思えるのである。最近は保護者だけではなく、子どもたちにもこのことわざを伝え、丹田を意識させることも増えた。自信が揺らぎそうになったら、今一度丹田を意識して、背筋を伸ばし、呼吸を整えてみよう。それだけで物事の見え方も違ってくるものだ。

＜枘鑿相容れず＞

*意見や物事が食い違って合わないことのたとえ。性質の違ったものは協調できないということ。四角なほぞは、丸い穴にはぴたりと入らないということから。**枘**は木を組み合わせるときに、一方の材木の端に作る突起物。ほぞ。**鑿**はほぞを入れる穴。*

出典　楚辞由来ともされるが、史記が出典ともされる。

子どもたちでも保護者でも、だれでもあの人とは性が合わないと思うことはあるだろう。相性というのは確かにあるかもしれない。ただ、相手が丸い穴なのに、自分の四角いほぞを入れようとしたって無理な話である。相手の丸い穴に合わせて、自分の角を落とすことが必要になる。

大人も子どもも人間関係を上手く保つには、相手が変わればよいと思っている人が多い。夫婦でも同様である。相手と良い関係を保とうと思うなら、自分の角を落としてみること、自分を変えてみることである。自分を変えるのは人を変えるより何倍も簡単なのだから。相性が悪いからと絶縁してしまうという今の分かりやすいが極端な人間関係に対し、こんな諺を使ってみている。昔から悩みは一緒なのである。

＜西施にも醜なる所有り＞

完全無欠な人間などいないという例え。その反対に、まったく取り柄のない人もいないということ。有名な美人である西施でも、よく見ればどこかに欠点があるものだということから。西施は春秋時代の越の美人。　　**出典　　淮南子**

どんな美人でもどこかに欠点がある。性格が悪いこともあるし、美人薄命で不健康

だったりすることもある。美人で頭も良くて運動能力も高くて、性格も良くて、と何拍子もそろった人はそういるものではない。自分と比べて、あの人は凄い凄いとうらやんでいる人に出会うと、こんな諺を出して、美人にも欠点があるし、反対に全くとりえのない人もいないということを伝えている。自分の欠点は直ぐに見つかるが、良い面というのは中々見つけられないものだ。

<精神一到何事か成らざらん>

精神を集中して努力すれば、どんなに難しいことでもできないことはないという教え。精神力の大切なことをいったことば。「石に立つ矢」、「一念岩をも徹す」なども同義語。 **出典　朱子語類**

この言葉は良く知られていると思う。精神力がいかに大切か。集中すれば何とかなる。もちろんそれでも上手く行かないこともあるだろうが、冬季オリンピックを見ながら、改めて思う。

今はやりの「鬼滅の刃」の漫画でも、「全集中」という言葉が出てくるが、要は精神集中の事である。集中というのは中々続かないもので、すぐ気が散ってしまう。これは筆者自身も苦手なところである。

そこで自分自身への戒めとしてもこの言葉を使っている。最近の子には「全集中」の方がわかりやすいが・・・。

英語では・・・
It is dogged that does it.
（努力すれば事は成る）
Nothing is impossible to a willing heart.
（意欲的な心の持ち主に可能はない）

<清濁併せ呑む>

善人も悪人も差別しないで来るがままに受け入れる。度量の大きいことの例え。包容力が大きいこと。大海は清い流れも濁った流れも同じように迎え入れることから。

子どもたちと話していると、「あの人はああだから嫌だ、この人はこうだから嫌だ」と、嫌なところを探しては、拒否していく子がいる。あるいは、やけに正義感だけが強く、間違ったこと、ちょっとした誤りに対し、これでもかというほど非難する子どもや大人にであう。何が正しくて何が間違っているか、あるいは自分の物差しは本当に正しいのか？そんなことを話しながら、この諺を伝えて、人は心を広く持っている人、度量が大きい方が誰とでもうまくやっていけることを説く。

英語では・・・・
Take the rough with the smooth.（すべすべした物と一緒にざらざらした物も受け入れよ）

<急いては事を仕損じる>

物事はあまりあせるとやり方が雑になったり、注意力が散漫になったりして、かえって失敗しやすいということ。気がはやるときほど落ち着いて考えて行動すべきであるといういましめ。「急いては事を遂つ」ともいう。

この諺は有名なのであえて説明することもないだろうが、せっかちな人、落ち着きのない人、あせっている人に会うとこの諺を伝えるようにしている。車の事故、あせっているときにおこるものである。

よく相談に来た人に言うのだが、1 秒遅れたらその仕事にどんな問題が起こるのか考えてみてと。一呼吸置いたところでそんな大きな問題は起こらない。100m 走などの競技なら別だが、大抵の仕事はそこまで焦る必要などないのだ。一旦立ち止まり、一呼吸してから、考えてから取り組んだ方がミスも少ないし、結局その方が速いと言うことも真なのだ。「慌てない慌てない、一休み一休み」

英語では・・・
Haste makes waste.（性急は無駄を生む）
The more haste the less speed. （急げば急ぐほどうまくいかない）

出典説明：

淮南子・・・内編二十一巻

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦の孫である**淮南**

楚辞・・・十七巻

中国戦国時代末期の楚の歌謡を基盤とし、愛国詩人屈原（くつげん）とその門人たちの作品、および漢時代の模倣作を集めた所。前漢の劉向（りゅうきょう）が編集した十六巻に、後漢の王逸（おういつ）が自分の作品を加えて十七巻としたものが現存する。長編叙事詩が多く、屈原の「離騒（りそう）」はその代表作。

史記・・・百三十巻

中国古代の史書。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏・殷・周・秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本記（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

楊子法言・・・十三巻

前漢の楊雄（ようゆう）撰の思想書。『論語』の体裁にならって、問答体の形をとりながら学問や修身・孝行などの道を論じている。『法言』ともいう。

朱子語類・・・百四十巻

南宋の思想家朱子（朱熹の尊称）の語録。1270 年、南宋の黎靖徳（れいせいとく）が、朱子とその門人たちとの問答を三十五項目に分類して収録したもの。朱子と朱子学派の思想を研究する重要な資料。日本には、鎌倉時代末期に伝来した。

うたとかたりの対人援助学

第 21 回　「２つの世界をつなぐコーダ」

鵜野　祐介

「ドライブ・マイ・カー」と手話語り

先日（2022 年２月上旬）、濱口竜介監督「ドライブ・マイ・カー」を観に行った。まだご覧になっておられない方のために、あらすじを紹介することは差し控えるが、終盤近く、チェーホフの「ワーニャ伯父さん」が舞台で上演される場面がある。この芝居の最後のシーンでソーニャ役の韓国人女優が以下のようなセリフを手話（おそらく韓国手話）で語る。映画での台本と同じではないかもしれないが、ちくま文庫版（松下裕訳）『チェーホフ全集 11』より引用する。

しかたがないわ、生きてかなければね！（間）
わたしたちは、ワーニャおじさん、生きて行きましょうよ。長い長い日々を、いつまでもつづく夜を生きて行きましょうよ。運命の試練にじっと耐えて行きましょうよ。いまも、年とってからも、休むことなく人びとのために働きましょうよ。そして時が来たら、おとなしく死んで行きましょうね。あの世へ行ったら、苦しかったことを、涙を流したことを、苦い思いをしたことを申しあげましょうね、神さまはわたしたちをあわれんでくださるわ、わたしたちは、おじさん、明るい、すばらしい、うるわしい生活を見るのよ、わたしたちは心から喜んで、いまの不しあわせをなつかしく、ほほえましく振りかえるのよ、そうして休みましょうね。ほんとにわたしは、おじさん、心から、いちずにそう思ってるのよ……。（ひざまずいて、おじの手に頭をのせながら、疲れきった声で）休みましょうね！

娘と妻を亡くし、後悔の念にさいなまれながら日々を送る主人公の演出家・俳優と、やはり突然に母親を災害で亡くした、彼の専属ドライバーを務める女性の心境が、ソーニャのこの長い独白に重ね合わされる。

何故このセリフが韓国手話で語られるのかは観てのお愉しみということにして、ここでは、韓国人女優パク・ユリムの手話語りが、他の何ものにも代えがたい輝きを放ち、観る者の心と身体に浸みわたる〈声〉を持っていたことを記すにとどめたい。

「コーダ　あいのうた」と手話うた・身体うた

数日後、同じ映画館でシアン・ヘダー監督「コーダ　あいのうた（原題　”CODA”）」を観た。

舞台は米国マサチューセッツ州グロスター。父フランク、母ジャッキー、そして兄レオとの４人家族の中で唯一耳が聞こえる高校生のルビー・ロッシは、家族のために通訳となり、家業の漁業を手伝う日々を送っていた。新学期のある日、所属する合唱クラブの顧問ベルナルドは彼女の歌の才能に気づき、都会の名門音楽大学への受験を強く勧めるが、両親は家業の方が大事だと反対する ――。

聞えない・聞こえにくい親を持つ子どものことを「コーダ（CODA: Children of Deaf Adult/s）」と呼ぶ。この映画の主人公ルビーも「コーダ」である。こちらもネタバレになるので、その後のあらすじは省略することにして、この作品のクライマックス、音楽大学の実技試験の場面でルビーが歌う「Both Sides, Now」（邦題「青春の光と影」）の歌詞を紹介する。

Both Sides, Now （Written By Joni Mitchell）

Rows and flows of angel hair
And ice cream castles in the air
And feather canyons everywhere
I've looked at clouds that way
　流れるように美しい天使の髪や
　アイスクリームのお城がフワフワと浮かんでいて
　羽毛に覆われたような谷がどこまでも続いている
　わたしは、そんな風に雲を見ていた

But now they only block the sun
They rain and they snow on everyone
So many things I would have done
But clouds got in my way
　だけど、雲は太陽を遮り
　人々に雨や雪を降らせ
　わたしがやろうと思っていたたくさんのことも
　雲によって閉ざされた

I've looked at clouds from both sides now
From up and down, and still somehow
It's cloud illusions I recall
I really don't know clouds at all
　わたしは今、その両側から雲を眺めてみる
　上から見たり、下から見たり、でもどういうわけか
　それは幻の雲の記憶で
　わたしには雲のことは何もわからない
……（https://nikkidoku.exblog.jp/19751284/）

３人の試験官以外誰もいない試験会場のホールの２階席にろう者の両親と兄が紛れ込み、その姿を認めたルビーは手話の〈声〉でこの歌を彼らに届ける。

この「手話うた」の場面と並ぶ、映画のもう一つのクライマックスは、高校の音楽祭でルビーの歌声に他の観客が聞き惚れ、大歓声を挙げる様子を目にした父親がその夜、同じ歌をもう一度自分のために歌ってほしいとルビーに頼み、彼女の喉に両手を当てて〈声〉を聞こうとする「身体うた」の場面だろう。〈声〉は決して口から耳へと届けられるだけのものではない。身体を使って、身体を通して、身体から身体へと届けられるものだ。そう実感できる場面である。

「コーダの世界」

「Both Sides, Now」は、当時まだ 20 代半ばのジョニ・ミッチェルが作詞作曲し 1967 年に発表して大ヒットさせた楽曲で、雲の見え方や感じ方が、これを見る角度や状況によって違ってくるように、あらゆる物事には内と外、表と裏、光と影があり、その両側（both sides）を見ることや、今自分が見えている世界の向う側に、もう一つ別の世界があるかもしれないと想像することの大切さを歌ったと解釈される。

この歌が映画の主題歌として使われたのは何故かと考えてみると、先ほど述べたように、〈声〉には「口から耳へと届けられるもの」という側面だけでなく、「身体から身体へと届けられるもの」という側面もあるということを伝えるためではないだろうか。そしてまた、前者が主に聞こえる人（聴者）の世界における〈声〉、後者が主に聞こえない人（ろう者）の世界における〈声〉であるなら、コーダはその両側に気づいている、２つの世界をつなぐ存在であるというメッセージが込められているようにも思われる。

澁谷智子『コーダの世界　手話の文化と声の文化』（医学書院 2009）は文字通り「コーダの世界」を知るための恰好の入門書である。

「コーダ」という言葉が最初につくられたのは 1983 年のアメリカだ。聞こえない両親を持つアメリカ人コーダがつくったニュースレターをきっかけに、英語圏でコーダの集まりがどんどん開かれるようになっていった。

日本では、「コーダ」の言葉は、1995 年前後、「ろう文化」思想と一緒になって紹介された。そのため「コーダ」は、「手話が堪能」で「ろう文化」を受け継いでいるとい

う、バイリンガルなイメージが強くアピールされた。……

ただ結論から先に言えば、「コーダ」かどうかという基準は、あくまでも「聞こえない親を持つ」ということだけにあり、手話が得意かどうかは関係ない。……どうやら、厳密な定義よりも大事なのは、「コーダ」としての経験とつながりであるらしい。お互いに、聞こえない親を持つゆえの気持ちが響き合えば、難聴の親のケースだろうが育ての親のケースだろうが、「コーダ」ということになるようだ(同書 23-24)。

以上の定義を踏まえて、「ろう文化」と「聴文化」の両方の世界を体験するコーダたちの「カルチャーショック」が具体的に紹介され、分析される。そのことは、澁谷の言う通り、「ろう者の世界で想定される行動様式と聴者の世界で想定される行動様式がどう違うのかを知る貴重な手がかり」となり、また「手話話者の感覚のなかにある『ろう文化』の中身を、日本語という言葉で記述していく作業を通して、聞こえる多数派が普段見過ごしている『聴文化』の姿形も、よりくっきりと見えてくる」(28) と思われる。

コーダのカルチャーショック　その1

無意識のうちに「ろう文化」の規範を身に付けているコーダは、職場や学校などで感覚の違いに戸惑うことがあるという。一例を挙げよう (32-33)。

市役所勤務のあるコーダ女性は、かなり長い年月、トイレに行く時に「トイレ行ってきます」と断って出ていたため、職場の人に、最初は変わった子だなあと思われていた。「会議に行く」とは言うけど、「トイレに行く」とは言わないと、後で知った。

一方、彼女の方でも、「なんでみんな言わないんだろう？　言ってくれないと、訊かれたときに説明できないじゃない」と思っていた。そして、誰かがいないときに「〇〇さんは？」と尋ねられると、「あ、たぶんトイレ行ってます」と答えていた。やはり後になって、職場の人に、そういうときは「普通は『席をはずしています』と言う」と言われ、そういう違いがあることに気づいたそうだ。

このエピソードから著者の澁谷は、「察すること」や「暗黙の了解」を重視する「聴文化」と、曖昧な部分をなくし透明度を高くしておくことが高い価値を持つ「ろう文化」という、それぞれの特徴を引き出す。「ろう文化」では、わからないこと、知りたいこと、確認したいことがあったら、すぐに訊いてかまわない。他人の話を途中で止めてはいけないのではないかと過度に気を遣わなくてもよい。そして、訊けば明快な答えが返ってくる。そういう文化である。

その上で澁谷は、「察すること」や「暗黙の了解」を前提とした音声日本語のコミュニケーションは、ろう者やコーダだけでなく、外国人などにとってもわかりにくいものなのではないかと指摘する。

コーダのカルチャーショック　その2

もう一つの例 (40-42)。コーダと聴者では、同じように街を歩いていても、見えているものが違うし、気になるものも違う。エレベーターに乗る時、「普通の人は、エレベーターの中でドアの上の数字を見ているじゃないですか。でも私は、エレベーターに乗っている人がこっちを見ていなかったら、頭のてっぺんから爪先まで、なめまわすように見たくなる」。

また、聴者の夫と電車に乗っている時、その車両に風変わりな人がいて、その人から目が離せなくなり、夫から「見るな、見るな」と小声で合図されたという別のコーダ女性は、「聞こえる人は、“何かおかしいな”って思ったら、目をそらす。でも、私は、“何かおかしいな”って思ったら、目がついいってしまう。なんで見なくていいの？って思う」と説明する。

聴者も本当のところは違和感のあるものを見た時に、それを心ゆくまで眺めたいという思いは持っている。だが、見る対象が人だったり、他人の持ち物や空間であったりする場合、エチケットとしてその思いを抑制し無関心を装う「儀礼的無関心」が作用する。「聴者の場合には、見ていることを見られる恐れが、ろう者やコーダよりも強くあるのかもしれない」(42)。

架け橋としての生きづらさ

ろう文化と聴文化、ろう者の世界と聴者の世界、これら二つの文化、二つの世界を知っているということは、ただちにコーダが両方の間を上手に行き来できることを意味するわけではない。むしろ、外国人と日本人との間に生まれた子どもや、在日外国人の子ども、帰国子女（帰国生）にも共通するように、二つの世界のどちらにも馴染めず、違和感を覚え、生きづらさを抱えながら日々を過ごすことの方が多く、また「コーダならではの世界」も持っている。

例えば、「大人じみた子ども」がコーダには多いと言われるが、そうなる要因として、幼い時からろう者の親の通訳をさせられることや、親が聞こえないことを理由に周囲の大人から「大変ね」「かわいそう」「がんばるのよ」と言われること、ろう者の経済的不利さや不安定さについて早い時期から気づかされることなどがある。そして、「いい子」であることを周囲から期待され、また自分自身でも努力し、さらにそれに対する反発も強くなる十代、特に思春期のコーダたちは「混乱とイライラのなかにある」（223）という。

こうした思春期のコーダも共感できる、年齢の近いコーダ同士が集まりつながる場が、近年生まれつつあると澁谷は言う。「コーダ同士のつながりが何かの形を生み出していく機運は十分に高まっている。その意味で、コーダパワーの今後にぜひ期待したい」（226）。

『ろうの両親から生まれたぼくが聴こえる世界と聴こえない世界を行き来して考えた 30 のこと』

1983 年宮城県生まれのコーダ・五十嵐大が著したこのエッセイ（幻冬舎 2021）は、自身の生い立ちから今日までの、「聴こえない母と聴こえるぼくとの人生」を綴ったもの。

20 歳の時のこと。成人式に着るスーツを買いに、母親と仙台まで出かけ、買い物を済ませてイタリアンレストランで昼食をとり、小一時間手話でおしゃべりをして、それから電車に乗って約 30 分、仙台から最寄り駅まで手話で話し続ける。電車を降りた瞬間、母親が立ち止まり、「ありがとうね」と手を動かす。「なにが？」と訊くと、母親は次のように手話で語った。

――電車のなかで、大勢の人たちが見ている前で、手話を使って話してくれて、本当にうれしかった。今日はとても楽しかったの。だから、ありがとうね。

そして母は、さっさと歩きだしていった。でも、ぼくはその後ろ姿を追いかけられなかった。ぼくは駅のホームに突っ立ったまま、号泣した。周りの人たちが不審そうにぼくを振り返る。そんなことを気にする余裕もなく、ひたすらに泣いた。……

手話を使うことも母の耳が聴こえないことも、ずっと恥ずかしいと思っていた。だから、ぼくは手話を使わなくなり、母と外出もしなくなった。それが彼女をこんなに追い詰めていただなんて、想像もしなかった。でも、母はそのことでぼくを責めたりしなかった。むしろ、こうやって「ありがとう」と頭を下げるのだ。その気持ちを思うと、涙が止まらない（107-108）。

コーダが問いかける「〈声〉とは何か」

本書の末尾近くに、聴こえない親を持つ聴こえる子どもの会「J-CODA」の会長・中津真美の言葉が紹介されている。「コーダは揺れるものなんです。親を否定する気持ちと、それでも支えたいと肯定する気持ち。どっちもあっていいんですよ」（195）。

日本国内には２万２千人のコーダが存在すると推定されるそうだ（138）。コーダが主人公の丸山正樹のミステリー『デフ・ヴォイス　法廷の手話通訳士』（文春文庫 2015）、韓国のイギル・ボラのエッセイ『きらめく拍手の音　手で話す人々とともに生きる』（矢澤浩子訳、リトルモア 2020）もおススメの本である。

この機会に、ろう者の世界と聴者の世界の狭間に生まれ育ち、二つの世界の架け橋として生きるコーダたちのことを知ってほしい。それはきっと、うたやかたりにとって必要不可欠のツールである〈声〉とは何かを問い直す手がかりを与えてくれるはずだから。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第21回

黒田長宏

＜2021年11月6日＞

25日締め切りではあるが、慣例通りに早く47号を提出した。これが私の性格である。なんでも早く終わらせたい。だが、人生は早く終わらせたくない。まだ実子も諦めきれない。そんな54歳。婚活は就学や就職よりも難しいと思う。

＜11月17日＞

某マッチングアプリを開いてショック。2カ月もメル友になってくれていた人が消えていた。

＜12 月 16 日＞

47号が発行されたとのメールが来た。冬らしい寒さになってきた。看護師のNさんが明後日で私の勤務させていただいている場所から巣立つらしい。私自身、Nさんを妖精と思っていたのだが、N さんの最終日を、若い事務員さんに聞いてしまったら、明後日らしく、私も出勤日だった。なんだか、来週にでも聞けば良かったかなと思った。だけどだけどこの期に及んで告白をする気はない。できないのかも知れない。Nさんには、婚難救助隊の私の名刺を渡してはあるが、なんの反応もないのだから、攻めないと脈もないだろう。しかし攻める気力がないのだ。異性一人を得るためにはある種の狂気のような力強さが必要なのだろうか。54歳という私の年齢を、私自身が疲れさせていると思っているのか。しかし、みのさんとか、〇〇のドンファンとか、それって気力なのか、なんなのか。夜に飲み屋を梯子などする気などなれない。どういう違いがあるのか。そんなことはどうでも良かった。なんだか寂しい気がする。婚難救助隊も登録者数最高73名から71名に減ってしまった。だけど 71 名今日時点で登録していただいていることに感謝すべきだ。マッチングアプリも久しぶりに一つ増やそうかと思ったが、とりあえず断念した。格安 SIM で電話とモバイルインターネットのコストダウンをしたところだ。もっと早くすべきだった。もっと早く格安 SIM の電話にすべきだった。もっと早く告白すべきだった。でも出来なかった。異性への

告白よりも電話会社を変更するほうが心理的に負担がない。

＜12 月 29 日＞

昨日、マッチングアプリで東京都の港区という行ったら大変そうなイメージの人とマッチングできたtと思ったら、文章が送信できない。操作しているうちにいなくなってしまった。また持ち上げて落とされた感じだ。今年はあと 2 日。

＜2022 年 1 月1日＞

元日だからというわけではないが、久しぶりに某マッチングアプリの写真を新しく変えたりした。

年齢はしかし変えられない・・・。

＜1 月6日＞

関東でも南部のほうは少しの雪でも混乱するが、雪が少し積もった。明日の凍結が心配だ。今日は休日だが、Nさんが 3 日に最後の出勤ということで、偶然と言っていいのか建物内で 2 度も遭遇した。2 度目は階段である。「やめるんですか」とようやく口に出しているうちに階段を駆け上がってしまっていた。看護師長まで昇り詰めても辞めるのだが、結局ご縁は作れなかかった。と雪の中を思い出していた。マッチングアプリのほうも反応がない。格差とはこんな風にマスメディアその他が関心を持たないところにある。実存的な苦悩だからどうしようもない。と思いながらも、ユーチューバーとして結婚難問題への嘆きをアピールしていれば、総合格闘技がプロレス化しようと、シバターなら許されてしまう。そんなものだ。

＜2月2日＞

今回も私自身の進展は無かった。今回も面白い展開の文章を提供できなかったと思う。それだけ結婚できない状況に陥った人間は結婚できないのだ。それだけはこうして証明し続けていると思う。

社会では、北京冬季オリンピックが始まり、石原慎太郎氏が死去し、東京都のコロナ感染者数が2万人を超えたなど、様々なことが起きている。しかし私自身の婚活はどこまでも停滞している。

YouTube の婚難救助隊のパフォーマンスの登録者数は74名。一体、どういう意図で登録してくださっているのかはわからない。しかし登録者数が増えてくれることが、結婚難時代を覆すための私のライフワークだと思いたい。

〔PBLの風と土　第20回〕

変容的関係での学習環境で学びと成長を

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねてきており、コロナ禍を経た連載4年目にはフィールドに赴くことが抑えられた影響を過去の受講生の語りを手がかりに検討しました。

1. 大学も地域も一括りで扱わない

11年目の3月11日は、昨年に続いてコロナ禍の中で迎えることとなった。遡ること10年前、1年目の3月11日を控えた2月には、立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて国際ボランティア学会第13回大会の実行委員長として、高度情報化・少子高齢社会における地域の開発哲学を抜本から見直さなければならないという関心から「震災・ボランティア・コミュニティデザイン」をテーマに一般公開でのトークセッションを企画した。縁あって、2022年2月の国際ボランティア学会第23回大会もまた実行委員長の役目を得て、「ポストCOVID-19における越境的支援のかたち～越境知としてのボランティア学～」というテーマのもと、実行委員会企画として本誌編集長の団士郎先生を招聘し「物語を届ける」と題した講演をいただいた。団先生の講演は、2011年の秋から立命館大学大学院応用人間研究科（現：人間科学研究科）により、大学院生のサービス・ラーニングの一貫としても位置づけて東日本大震災で被災された地域や避難先で催してきた50回以上のマンガ展と団先生による冊子「木陰の物語」を10万冊以上が届けられてきた活動が紹介され、被災という共通体験がもたらす「大きな物語」に対して個々の家族の「小さな物語」が回復されていく過程とその意義が語られた。

図らずも前回の本連載では「SOFARモデル」（Bringle et al., 2009）を改めて解題し、サービス・ラーニングにおける活動（サービス）と学習（ラーニング）の双方の充実のためにもは、大学と地域とを往復する中で「相互作用において親密性・公平性・誠実性があるか」を内省することが重要であることを確認した。繰り返すまでもなく、S・O・F・A・Rの5項目は学生（Students）・受入団体（Organization）・教員（Faculty）・職員（Administrator）・住民（Residents）の頭文字だが、前回は触れなかったものの、この5つの要素は、省察的学習におけるDEALモデルを構築したことで知られるSarah Ash先生とPatti Clayton先生によるサービス・ラーニングの3主体（students、faculty/staff、community members）を、大学側とコミュニティ側の関係として捉えて拡張したものである（例えば、Ash and Clayton, 2009）[1]。先ほどの団先生の「大きな物語」と「小さな物語」との対比は、サービス・ラーニングの活動の現場となるコミュニティにおいて、大学側を受け入れるコミュニティ側の結び目が各地域の受入団体とすれば、受入団体だけに依存することなく、住民との相互関係もまた欠かせないことを改めて実感できる好例と捉えられる。一方で、こうしたサービス・ラーニングの理論的・方法論的観点をもとにすれば、地域参加型のPBLでは（Project-BasedかProblem-Basedかにかかわらず）受入団体との良好な関係だけでなく、住民の方々とも関係をつくり、深めていくことができるかは、活動の質と共に学習の質もまた左右するところとなろう。

そこで今回は前回の結語で記したとおり、学びのコミュニティにおける関係者間の相互作用

について、より踏み込んで整理する。前回では変容的（transformational）な関係こそが鍵である、という結果のみ記したものの、変容的でない状況とはどのようなものか、また変容的な関係のもとではどのような活動と学習が展開しうるのかについて、いくつかの先行研究に触れながら見ていくこととする。実はこの変容的な関係とは、本連載第11回「自らの未知なる環境に身を置いてみよう」ではミネソタ大学のアンドリュー・フルコ先生の講演の記録において「学びの場における2つの対極的な関係性として、何かを求める側と与える側の立場が固定的であるために生じる『transactional』な学びと、学びのコミュニティの構成員が互いに相まみえることで価値の調整・共有・創造がもたらされる『transformational』な学び」との区別を記し、第12回「手続きや内容より関係構築にこそ重点を」ではフルコ先生の講演時のスライドも紹介しつつtransactionalを「交流的(否定的には手続き的）」と、transformationalを「変容的（肯定的には価値転換的）」と紹介した。こうした観点に加えて、前回は予告として個人における活動の習慣化に迫る理論として当初提案された健康指導の範囲を超えて援用されつつある行動変容ステージモデル（TTM: Transtheoretical model）にも触れていく。

なお、SOFARモデル（Bringle et al., 2009）の検討、またSOFARモデルを用いた大学と地域の関係構築に関する研究（Clayton et al. 2010）において、関係性を分析する際に用いられている尺度が図1の「自己内コミュニティ包含（ICS）尺度」である。文字通り、個人と集団の関係性についての尺度であるが、これをサービス・ラーニングの各主体と対象との関係に援用して用いたと捉えられる。この図1に示された、いわゆる6つのベン図をもとに、果たして活動と学習の質を高める上で担い手に求められる姿勢について確認していく。まずは、連載第19回の最後に簡潔に記すのみに留まった点、関係を意味する「E-T-T」の視点から紐解いていこう。

2. 交流か変容よりも搾取への注意を

地域参加型の学習プログラムにおける「E-T-T」の関係とは、前回示したとおり、誠実な関係構築を通じて親密性・公平性・誠実性が高まって行けば、その関係が搾取的（exploitive）から交流的（transactional）な関係に、さらには変容的（transformational）な関係へ進歩（progress）していくというモデルであるが、人間関係は静的なものではないゆえに、時には逆方向に後退（regress）することさえある、と示している（Bringle et al., 2009, p.8）。こうした連続性こそ、筆者が専門とする社会心理学において重視する観点の一つだが、このような概念構築の背景にはロバート・ブリングル先生もまた社会心理学者であることが反映していると見立てている[2]。実際、大学と地域のパートナーシップに関するそれまでの研究（例えば、Enos and Morton, 2003)では、交流的関係と変容的関係とが明確に区別され、「交流的関係では深い変化や持続的な関係が期待できない」のに対し「変容的関係では双方が成長し変化していく」と対置されると共に、交流的関係と変容的関係とのあいだでは特段の優劣の関係はなく、むしろ交流的関係は「変容的関係に向けてパートナーシップを育てていく上での初期段階（an early stage of a relationship in which growth toward transformational partnerships）」としても位置づけられる、と示されている（Bringle et al., 2009, p.7）。ここにBringle先生らは搾取的関係を追加した。

表1はEnos and Morton（2003）による交流的関係と変容的関係の対比を示したものである。これを見ても、変容的関係の方がより成熟した連

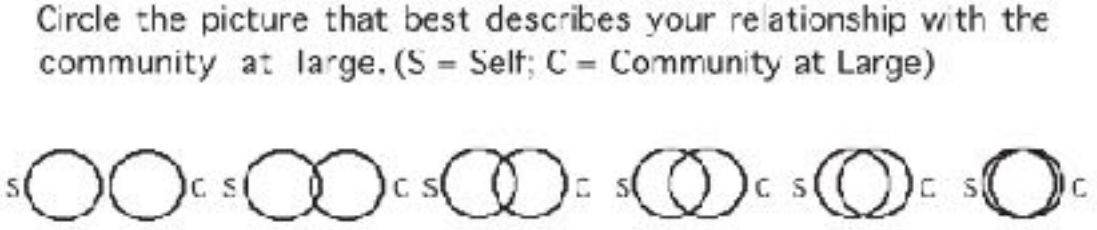


図1：自己内コミュニティ包含尺度（Inclusion of Community in the Self (ICS) scale）（Mashek et al., 2007, p.263）

表1：交流的関係と変容的関係
（Enos and Morton, 2003, p.25、訳は筆者による）

基準　Criteria	交流的 Transactional	変容的 Transformative
人間関係の基本 Basis of relationship	交流を基軸としつつ功利主義的 Exchange-based and utilitarian	功利主義を越えた目的に焦点 Focus on ends beyond utilitarian
最終目標 End goal	交流の満足度 Satisfaction with exchange	志の相互向上 Mutual increase in aspirations
目的 Purpose	当面の必要性の充足 Satisfaction of immediate needs	より広範な意味創出のニーズ喚起 Arouses needs to create larger meaning
パートナーの役割 Roles played by partners	管理者 Managers	リーダー Leaders
既存の目標の指示 Support of existing institutional goals	各機関の目標を受容 Accepts institutional goals	各機関の目標を吟味 Examines institutional goals
団体間の境界 Boundaries	個々の関心のもと一体となり活動 Works with in systems to satisfy interests of partners	私利私欲を越えより広範な意味創出 Transcends self-interests to create larger meaning
団体間の境界 Partner identity	個々の機関での自己認識の維持 Maintains institutional identity	共同体での集団的な自己認識に変化 Changes group identity in larger definition of community
関与の対象 Scope of commitment	限られた時間・資源・人材での交流 Limited time, resources, personnel to specific exchanges	無制限に交流可能性に各者が参画 Engages whole institutions in potentially unlimited exchanges

携・協力に基づくパートナーシップであることは明確である。ここにBringleら（2009）が搾取的関係という観点を導入しているのは、実践的研究を通じて「交流的関係よりも低い水準で作用している関係がある」（p.7）ことに関心が向けられたためであり、そうした自体がもたらされる背景を「搾取的な関係が続くのは、慢性的な依存関係が原因で、一方の人が自立する能力を身につけることができず、少なくとも一方の人の利益になるような力の差が維持されているから」（pp.9-10）と分析している。事実、Bringle and Hatcher (2002) では「地域社会や大学から長期に渡る依存や搾取を受けないようにする必要がある（Prolonged dependency and exploitation by either the community or the campus need to be guarded against」（p.511）と指摘している。

このようにして、搾取的関係への後退を避けるための研究もなされている。それがClaytonら（2010）による「TRES」と呼ばれる「変革的関係評価尺度」を利用した、サービス・ラーニングにおける大学側・地域側での変容的関係への自己評価の取り組みである。TRESでは10の課題（成果、共通の目標、意思決定、資源、対立管理、アイデンティティへの重要性、相互作用の程度、力関係、重要なこと、満足度、よりよい変化）について具体的な設問を設定し、取り組み姿勢を確認できるようにしている。表2が公開されている調査票そのものであるが、前述の10の課題のうち9番目と10番目は1つの質問として、9つの質問群で成り立っている。9の質問群の訳出は別の機会に改めるとして、今回はこうした質問群を用いて、どのようにより成熟した関係構築の手がかりとするかについて、確認する機会としたい。

これは必ずしも「TRES」に限らないが、変容的関係への発展あるいは維持のためには自己評価の相互比較を行うことが契機となる。少なくとも「TRES」では、各質問を通じて改めてプログラムの運営にあたって、現状について「×」をつけ、理想的な状態について「○」をつけることで各々の姿勢を確認した上で、図1として紹介した「自己内コミュニティ包含尺度」のベン図のうち最もあてはまるものを選択するよう促してしているという。いわゆる関係の「見える化」への工夫である。その結果「親密と評価された関係ほどより変容的（rated as being closer were also de-

表2：変革的関係評価尺度（TRES）の設問
（Clayton et al., 2010, pp.9-10）

Transformational Relationship Evaluation Scale (TRES)

Analysis of Partnership

Mark with an X *the alternative that best characterizes the actual nature of the partnership from your point of view (as it is now, if this is a current partnership, or as it was at the time of the course, if this is a previous partnership).*

Mark with a circle *the alternative that best characterizes the desired nature of the partnership from your point of view (note that this might be the same alternative you marked with a X or it might be different)*

1. Outcomes of the service-learning partnership
   a. _____ There are more costs than benefits for both of us in this partnership#
   b. _____ One of us benefits but at a cost to the other#
   c. _____ Neither of us benefits to a significant degree from this partnership, but neither experiences a significant cost either#
   d. _____ One of us benefits much more than the other, although not at a significant cost to either of us##
   e. _____ We benefit equally (in terms of getting something we value) from the partnership*
   f. _____ We benefit equally (in terms of getting something we value) and one of us grows through the partnership**
   g. _____ We benefit equally (in terms of getting something we value) and both grow through the partnership
   h. _____ We benefit equally (in terms of getting something we value) and both grow and the relationship itself grows
   i. _____ We benefit equally (in terms of getting something we value) and both grow, the relationship itself grows, and the systems (e.g., organizations) that we are part of become more capable of generating growth because of our partnership

2. Relationship among goals in service-learning the partnership: To what extent would you say that you and your community partner do or do not have / did or did not have common goals in your service-learning collaboration?
   a. _____ Generally our goals are at odds#
   b. _____ Generally our goals are not connected, although not at odds*
   c. _____ Our goals converge at some points*
   d. _____ We have common goals

3. Decision-making: When decisions have been made about the service-learning activities, to what degree have you and your community partner collaborated?
   a. _____ Decisions about this project are made in isolation and without any consideration of the other partner#
   b. _____ Decisions about this project are made in isolation but with some consideration of the other partner##
   c. _____ Decisions about this project are made in isolation and with significant consideration of the other partner#
   d. _____ Decisions about this project are made in consultation with the other partner*
   e. _____ Decisions about this project are made collaboratively and are generally driven by the interests of one or the other of us**
   f. _____ Decisions about this project are made collaboratively and are generally reached through a consensus process that reflects our shared commitment to our shared goals

4. Resources: In this service-learning partnership
   a. _____ One of us has contributed most or all of the resources to the work, and the other has contributed very little or no resources#
   b. _____ One of us has contributed more resources than the other, but the other has contributed some resources*
   c. _____ Both of us have contributed significant resources to the work

5. Conflict management: If (or when) conflicts arise about the work of this service-learning partnership
   a. _____ Both of us would actively avoid dealing with the conflict#
   b. _____ One of us would attempt to deal with the conflict while the other would avoid it##
   c. _____ We would both deal with the conflict, but it would be uncomfortable for us*
   d. _____ We would both deal with the conflict openly, with the shared expectation of resolving the issue

6. Role of this partnership in work and identity formation: This service-learning partnership
   a. _____ Has on balance hindered work for both of us#
   b. _____ Has on balance hindered work for one of us#
   c. _____ Has helped one of us to do our work but has no impact on the other's work##
   d. _____ Has helped both of us to do our work*
   e. _____ Has helped both of us do our work and has helped define "who I am" for one of us, but not the other**
   f. _____ Has helped both of us do our work and has helped define "who I am" for both of us
   g. _____ Has helped both of us do our work and has helped define "who I am" for both us and has enhanced the ability of one of us to contribute in significant ways through our work
   h. _____ Has helped both of us do our work, has helped define "who I am" for both of us, and has enhanced the ability of both of us to contribute in significant ways through our work

7. Power: In this service-learning partnership
   a. _____ One of us has most or all of the power, and the other has very little or any power#
   b. _____ One of us has somewhat more power than the other*
   c. _____ The power is equally shared in this partnership

8. What matters in this service-learning partnership
   a. _____ Nothing of significance to either of us really matters#
   b. _____ What one of us gets from this relationship matters##
   c. _____ What both of us get from this relationship matters*
   d. _____ What both of us get and the extent to which one of us grows matters**
   e. _____ What both of us get and the extent to which both of us grow matters
   f. _____ What both of us get, the extent to which both of us grow, and the capacity of our partnership to nurture growth around us matters

9. Satisfaction and change: As a result of the service-learning partnership
   a. _____ Both of us are dissatisfied and both of us have been changed for the worse#
   b. _____ Both of us are dissatisfied and one of us has been changed for the worse#
   c. _____ Both of us are dissatisfied but neither of us is changed for the worse#
   d. _____ Only one of us is dissatisfied and neither is changed for the worse##
   e. _____ Both of us are satisfied and neither of us is changed for the better or the worse*
   f. _____ Both of us are satisfied and one of us is changed for the better**
   g. _____ Both of us are satisfied and both of us are changed for the better
   h. _____ Both of us are satisfied and are changed for the better and the relationship itself is changed for the better
   i. _____ Both of us are satisfied and are changed for the better, the relationship itself is changed for the better, and the world around us is changed for the better

Notes: Raw TRES scores were calculated by summing scores on individual items, where alternative "a" receives a score of "1," alternative "b" a score of "2," and so on, and then dividing by the number of response options to calculate the mean.
Conceptual TRES scores were calculated by giving scores of "1" for an item indicated above as # = exploitative for at least one; a score of "2" for items marked as ## = beneficial for one but not both; "3" for * = beneficial for both and therefore mutually transactional; "4" for ** = beneficial for both and transformational for one; and a score of "5" for an item left blank in the table above = mutually-transformational.

scribed as being more transformational）」（Clayton et al., 2010, p.18）と報告されていることから、大学と地域とのあいだで交流的関係から始めた活動を搾取的な関係ではなく変容的関係へと成熟を図る上では、両者が融合して具体的な活動のパートナーとしての一体感を持てるようになることが肝要であると位置づけられる。

3. 変容的関係に基づく学習環境での学び

こうしてサービス・ラーニングのプログラムにおいて、大学側と地域側とが自己評価を行うことで搾取的関係の回避を通じて交流的関係から変容的関係をもたらすことができれば、自ずと学習者にとって充実した活動と学習がもたらされることになる。Claytonら（2010）によれば、TRESの開発前提には、教職員と受入団体とのあいだで図2に示すような自己点検の指標を用いて「意図的であれ無意識であれ、片方もしくは双方が優位に立つ状況や損害を被るなどの一方的な関係（unilateral that, intentionally or unintentionally, they take advantage of or harm one or both parties）」（p.8）とならないよう、交流的関係と変容的関係の連続性への関心を喚起してきたとある[3]。言い換えれば、大学側・地域側の双方でプログラムの管理・運営に携わる者どうしが変容的関係に基づくサービス・ラーニングのプログラムを展開してこそ、学習者もまたシチズンシップが涵養され、学習者に学びと成長がもたらされる、と捉えられる。では、SOFARモデルやTRESがプログラム推進にあたっての効果的なパートナーシップをもたらす上での変容的関係への手がかりとすれば、そうしたプログラムにおいて学習者に求められる姿勢は何か、ということもまた重要な観点となる。

ここで参考になるのが、TTMと略記される行動変容ステージモデル（Transtheoretical model）である。提唱者のジェームズ・プロチェスカ先生へのインタビューによれば「心理療法の体系は400以上」ある中で「多くのサイコセラピストはクライアントの問題をこの中のある特定の型にあてはめようと」する問題に対し「精神分析の深い洞察、行動主義の強力なテクニック、認知療法の経験的な方法論、実存分析の自由な哲学と人間性心理学の思いやりのある関係」などの比較研究から「いくつかの基本的原則にまとめ」たものであるという（Prochaskaら, 2010, p.119）。そして、当初は禁煙プログラムに適用してきたモデルであるものの、さらには「動機づけの低い人を大勢を対象にする場合、とくに有効」と言えるだけの実証・実践が重ねられ、(1)準備ステージ（Stage of Changes：効果的なストレスマネジメント行動を実践する準備状態）、(2)意思決定のバランス（Decisional Ballance：実践する時の恩恵と負担・損失）、(3)自己効力感（Self-efficiency：自信と実践が難しい状態でも継続できる効力感）、(4)変容のプロセス（Process of Change：行動を促進する10の認知的、感情的、行動的活動）という4つの要素を関連づけて構成したモデルがTTMである（プロチェスカら, 2006, p,61）。そして、変容プロセスとして示された10の活動に対して、「行動を始めようと思っていない時期」（前熟考期）、「6ヶ月以内に何らかの行動を起こそうと考えているのに、実際にまだその準備はできていない状態」（熟考期）、「そろそろ今にもアクションを起こそうという時期」（準備期）、「適切な基準値を示す」ことで「明らかに行動を起こす時期」（行動期）、これらを経て「とにかく6ヶ月間、逆戻りしない努力が必要」な状態（維持期）に至る、という（プロチャスカら、2006, pp.369-371）。

図2：TRESの開発の初期段階で用いたという関係性の自己点検の暫定指標（Clayton et al., 2010, p.8、訳は筆者）

「変容のプロセス」（プロチェスカら, 2006, pp.63-64）

①意識の高揚（Consciousness Raising）
②感情的な体験（Dramatic Relief）
③環境の再評価（Environmental Reevaluation）
④自己の再評価（Self-Revaluation）
⑤自己の開放（Self-Liberation）
⑥強化マネジメント（Reinforcement Management）
⑦援助的関係（Helping Relationship）
⑧拮抗条件づけ（Counter-Conditioning）
⑨刺激コントロール（Stimulus Control）
⑩社会の開放（Social Liberation）

これらの表現や解説をもとに、勘の良い人は想像が及ぶだろうが、このモデルは集団的な営みではあるが、そこに参加する個人を対象にしたものである。否定的な捉え方をすれば、人の動きについて刺激に対する反応と捉えていることから、機械論的なパラダイムに基づいているとも指摘できる。ただ、あくまで集団的な営みにおける相互作用の結実として行動変容がもたらされると受け止めてみれば、サービス・ラーニングの学習者における行動変容のモデルとしても援用は可能であろう。その場合、TTMを生活習慣の改善ではなく、学習習慣の改善・維持として適用する、ということになる。

既に秋吉・河井（2016）では、TTMが概念を拡張する元としたものの1つであるKAP（Knowledge、Attitude、Practice）モデルも参照しつつ、健康教育において専門家による「指導型」から対象者の「学習援助型」へと発展した点に着目し、「TTMにおける変容プロセスと、体験学習におけるリフレクション・プロセスにおける各プロセスの含意は類似している」（p.90）として、図3のとおり「より体験学習のプロセスに沿った表現に翻案した」（p.91）上で、「実践過程に密着したリフレクション・プロセスと実践原則の解明」（p.89）の分析枠組みを構築している。その上で、インドでの体験実習科目を事例に、2013年度と2014 年度の各12名の調査計画書・報告書・ふりかえりカード合計約500枚のシートが分析された。その結果、経験学習型教育実践において「教育実践の現場における経験と、教育実践に先行した個人的な経験とを関

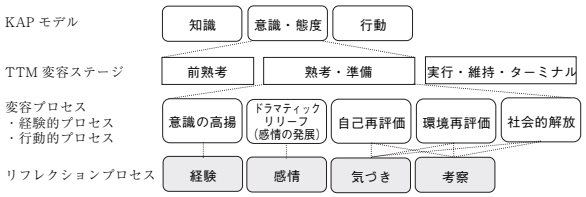


図3：大学生のリフレクション・プロセスの分析枠組み（秋吉・河井, 2016, p.89）

連づけていくこと」（p.105）と「現場での知識を持ち過去に多くの学生の学びを目撃している授業者でも、自らの想定が一面的・固定的になる場合があるということ」（p.106）という2つの実践原則を導出した。その際、「サービス・ラーニング科目におけるリフレクション・プロセスでは、 事前学習で得た【知識】が実践での【経験】とそこでわき上がった【感情】を経て【気づき】をもたらし、【考察】に至る」（p.87）という具合に、効果的な学習援助の過程を確認すると共に、それが「社会課題の解決に向けた学生自身の行動変容につながる」（p.89）とした。

4. 関係の評価でプロセスのデザインに

今回はサービス・ラーニングにおける二重の変容を取り扱った。1つは大学と地域がよりよいパートナーシップを構築していくという変容的関係に向けた関係性の変容についてである。もう1つは変容的関係に基づく学習環境における学習者の変容である。前者は大学側と地域側が搾取的関係を回避すべく互いの思惑の融合が図られることで、後者は学習者のプログラム参加前からの体験の言語化を援助することで実現するとまとめることができる。

特に変容的関係に関する議論では、大学と地域の関係を評価する研究と捉える場合があろう。しかし、評価は評価のためにあるものではなく、よりよい環境の創造に向けて行われてしかるべしである。事実、今回検討したとおり、地域参加学習において大学と地域の関係性をよりよくすることで、学習者が充実した体験を重ねていく可能性が高まる。ゆえに教育者には、学習者に対し、プログラム参加前の経験と結び合わせつつ現場で重ねた実体験について内省を促すことが求められる。

秋吉・河井（2016）は、TTMをもとに知識・経験・感情・気づき・考察という分析枠組みのもとで経験学習型教育実践の2つの原則を明らかにしつつも、今

後の課題をいくつか列挙しており、その1つに「【気づき】についての類型化を試みる研究」(p.106) と述べている。【気づき】という表現は名詞であるために静的なものとして捉えられそうだが、実際は学習者が何か「気づく」という動的な営みである。学習者が何に、どのように気づくか、そのパターンは極めて多彩であることは想像に難くない。転じて、教育者が学習者に気づかせるという恣意的な働きかけは、学習者の変容を阻害する可能性もある。

今回、改めて変容的関係への移行や維持が、学習者の行動変容につながりうる可能性を確認できた。ただ、筆者はこれらの理論的観点の整理と先行して、方法論的として松下（2012）で日本語に訳された上で紹介されているAAC&U（アメリカ大学・カレッジ協会）のVALUEルーブリック集の中から「市民参加」のルーブリックを用いて、(1)コミュニティと文化の多様性、(2)知識の分析、(3)市民的アイデンティティとコミットメント、(4)市民的コミュニケーション、(5)市民的行動と省察、(6)市民的な文脈/組織の6項目から、授業開始前後でのスキルや態度の変容について気づきを促してきた。連載6年目に入る次回以降は、筆者が担当しているサービス・ラーニング科目での教育実践を事例を紹介しながら、関係する理論的観点の整理と共に、参加型学習のスキルセットの構築を図っていく。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

秋吉恵・河井亨. 2016. 大学生のリフレクション・プロセスの探究：サービス・ラーニング科目を事例に. 名古屋高等教育研究, 16, 87-109.

Ash, S. L., and Clayton, P. H. 2009. Learning through Critical Reflection: A Tutorial for Students in Service-Learning (Instructor Version). Raleigh, NC. PHC Ventures.

Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.

Bringle, R. G. and Hatcher, J. A. 2002. Campus-Community Partnerships: The Terms of Engagement. Journal of Social Issues, 58(3), 503-516.

Clayton, P. H., Bringle, R. G., Senor, B., Huq, J., Morrison, M. 2010. Differentiating and Assessing Relationships in Service-Learning and Civic Engagement: Exploitative, Transactional, or Transformational. Michigan Journal of Community Service Learning, 16, 5-22.

Enos, S., & Morton, K. 2003. Developing a theory and practice of campus community partnerships. in Jacoby, B. and Associates. Building Partnerships for Service-Learning. (pp.20-40), San Francisco, CA: Jossey-Bass.

Mashek, D., Cannaday, L. W., & Tangney, J. P. 2007. Inclusion of community in self scale: A single-item pictorial measure of community connectedness. Journal of Community Psychology, 35(2), 257–275.

松下佳代. 2012. パフォーマンス評価による学習の質の評価：学習評価の構図の分析にもとづいて. 京都大学高等教育研究, (18), 75-114.

プロチャスカ J. O.・山田冨美雄. 2003. インタビュー 生活習慣病改善に効果的な「変化ステージモデル」とは何か--考案者のプロチャスカ先生に聞く. 公衆衛生, 67(5), 369-375.

プロチャスカ, J. M.・プロチャスカ, J. O.・エバース, K.・津田彰・津田茂子. 2006. 多理論統合モデルに基づくインターネットを介した新しいストレスマネジメントプログラム. 現代のエスプリ, 469, 58-71.

プロチャスカ J. O.・プロチャスカ J. M.・渡邊昌. 2010. 鼎談 生活習慣を変えるには? Pro-Changeプログラムによる心理学的アプローチ. 医と食, 2(3), 118-123.

【注】

[1] 具体的には、キャンパスを「管理者、教員、学生に区別することで、視点、アジェンダ、文化、資源、権力、目標などの類似した異質性を認める（The differentiation of campus into Administrators, Faculty, and Students acknowledges similar heterogeneity across perspectives, agenda, cultures, resources, power, and goals）」、コミュニティを「異なる文化、目標、資源、役割、権力を持っていることが多いことを認めているから」「組織」と「住民」に分けた（The differentiation of community into Organizations and Residents acknowledges that persons in these two groups often have different cultures, goals, resources, roles, and power）と記している。（Bringle et al, 2009, p.6）

[2] 実際、次のような記述がある。「SOFARは、すべての（ほとんどの）人間関係の基礎は個人の相互作用にあり、これらの相互作用の発展は搾取的なものから変容的なものまで連続しているという社会心理学的な見解に基づいて、個人の視点からパートナーシップを検討する。」（Bringle et al., 2009, p.15、訳は筆者による）

[3] この図解の出典は「Clayton, P., & Scott, J. 2008. Assessing campus-community partnerships. Invited workshop presented at the Civic Engagement Institute. Paper presented at the 10th Annual North Carolina Campus Compact Service-Learning Conference, Elon, NC.」と記されているもの2、会議資料ということもあって、本稿執筆時点では入手できなかった。そのため、本文に記したとおり、Clayton et al. (2010) のp.8の図解を底本として訳出した。

（続）こりの正体

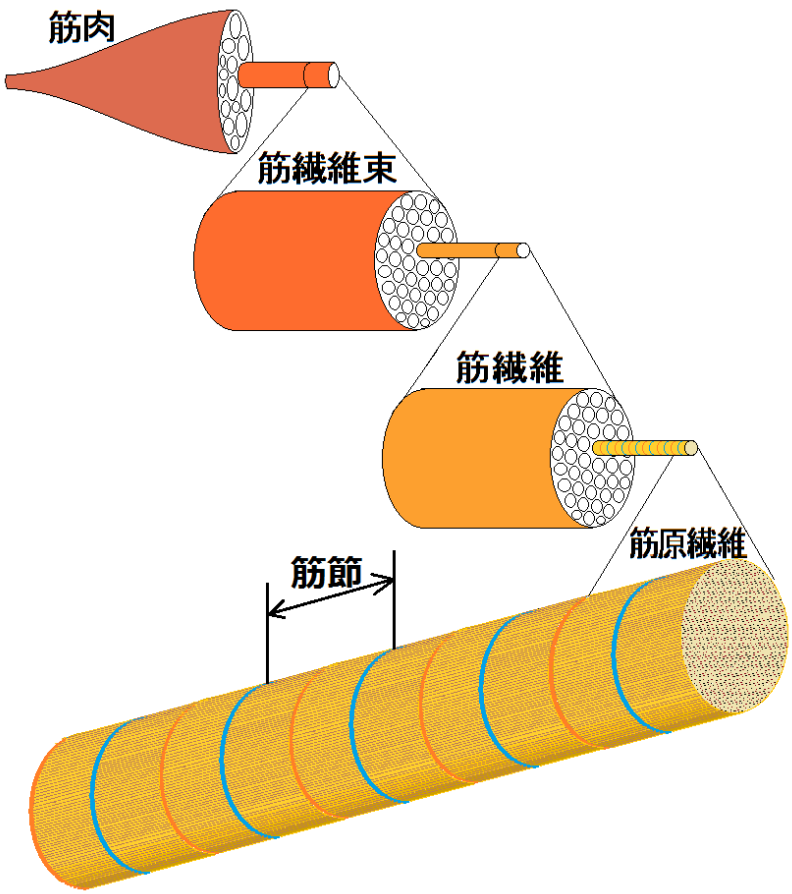
ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。
（今回、心理ネタはありません）
ここに来られる患者さんの中には、「〇〇がこった」とおっしゃる方が少なくありません。
そのような訴えをされる患者さんの筋肉を調べてみると、筋肉が縮みすぎている場合と、伸びすぎている場合があります。

人は、筋肉が縮みすぎたときにも、伸びすぎたときにも、こっていると感じますが、筋肉が縮みすぎてこっているのか、伸びすぎてこっているのかは識別できません。
どうして識別できないかは、４４号の「接骨院に心理学を入れてみた１５」をお読みください。

４６号で、筋肉が縮みすぎているこりは、筋原繊維の中の細い繊維同士が吸着を起こし、離れなくなってこり固まったものだと書きました。

今回は筋肉が伸びすぎている場合の、こりの正体を書いてみます。

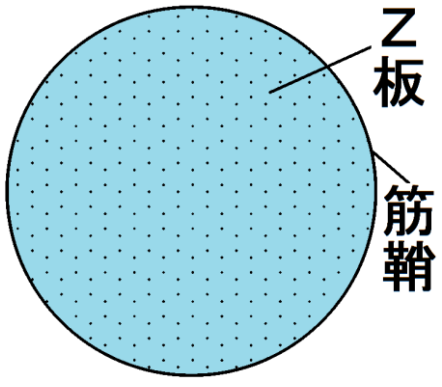
筋肉の中には筋繊維の束（筋繊維束）があり、筋繊維束の中に筋細胞（筋繊維）があり、筋細胞の中に筋原線維があります。



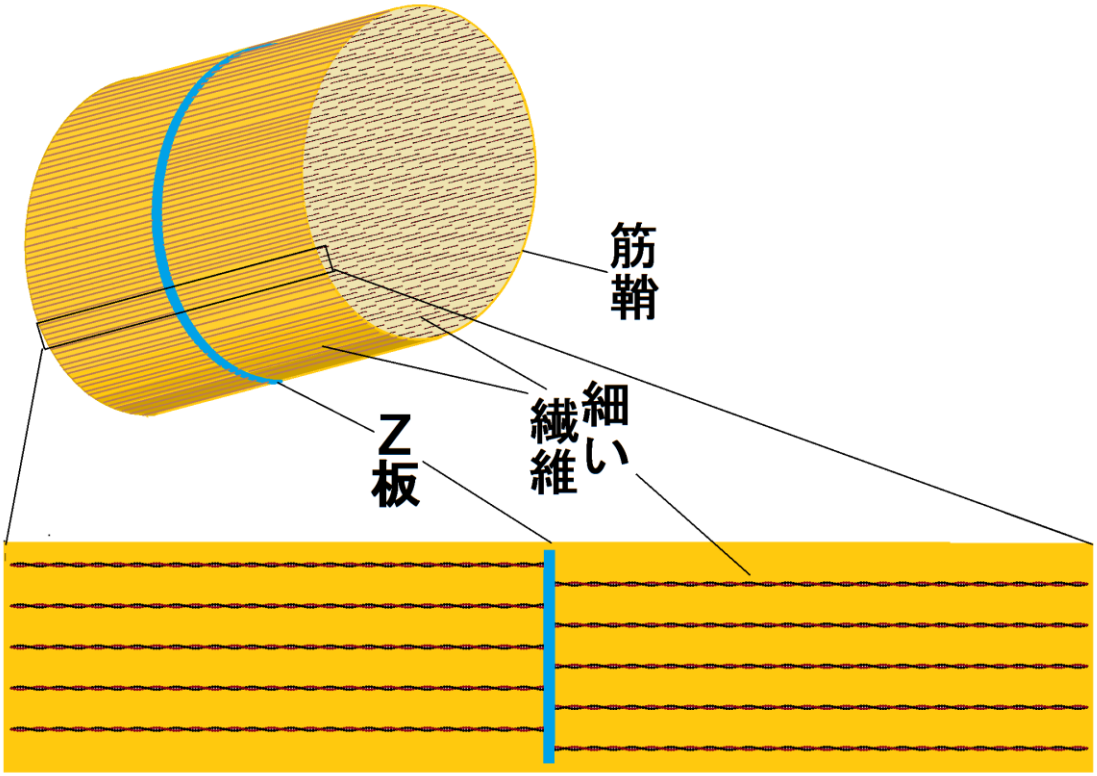
筋原線維にはＺ板で仕切られた筋節と呼ばれる節が無数にあります。

正常な筋節の長さは、２マイクロメートルから３.５マイクロメートル。筋節はこの範囲で伸び縮みしています。

Z 板の両面には、長さ１マイクロメートルの細い繊維がブラシのように整然と直立しています。



細い繊維の根元を線でつなぐと、正六角形を並べたハニカム模様になります。

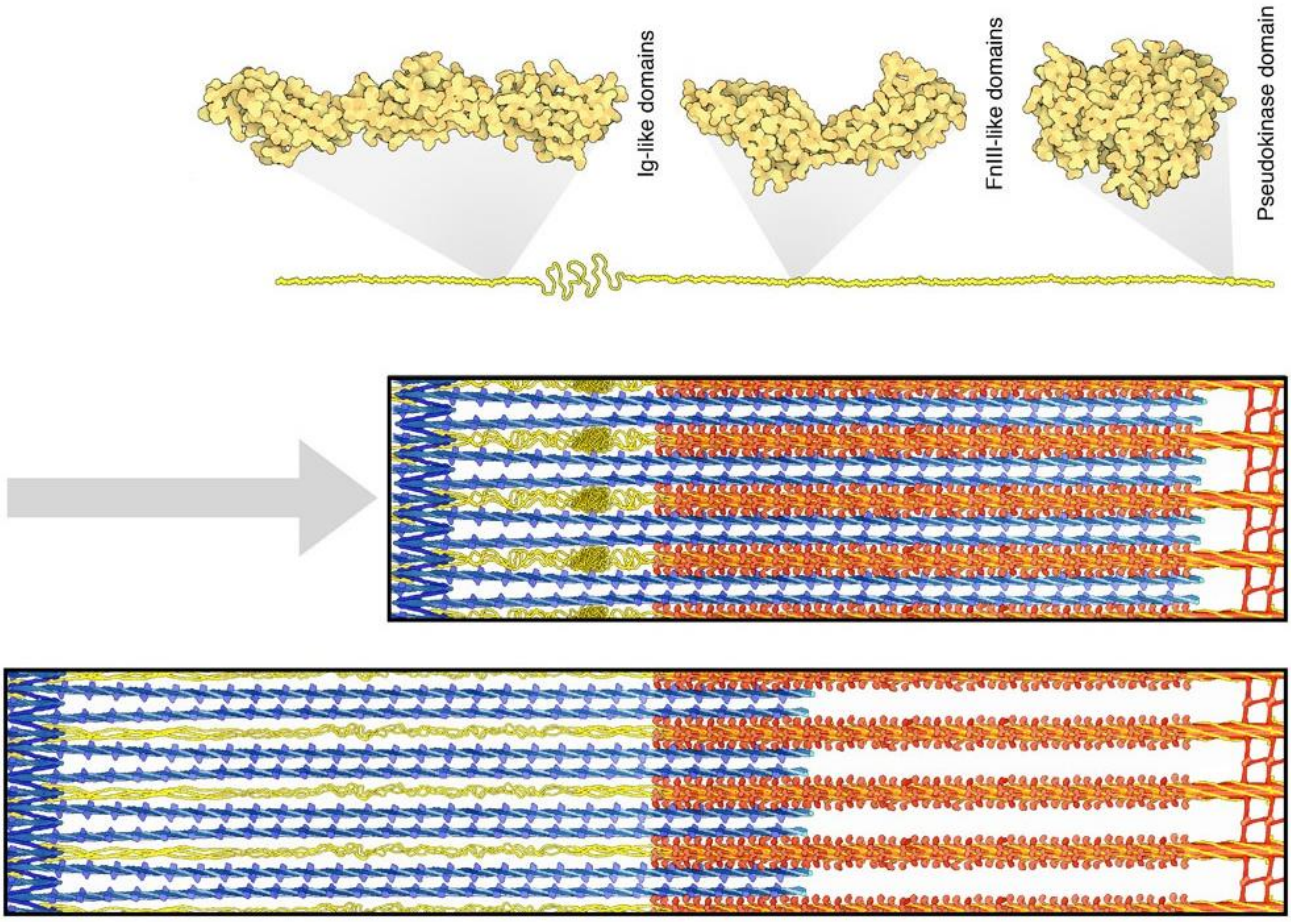


細い繊維は、六角形の頂点にあたる位置に直立しています。上の図では、太い繊維が省略されていますので、これから太い繊維について説明します。

Z 板の六角形の内側にあたる部分に、コネクチン（別名タイチン）という繊維がついています。
（１９７５年、日本の研究者・丸山工作が Z 板同士をつなぐタンパク質をコネクチンと命名しました。遅れて１９７９年にアメリカの研究者・ワンがタイチンと命名しました。二つの名前がありますが、同じものです）

コネクチンは細い繊維の間を伸びていき、向かい側の Z 板から伸びてきたコネクチンと、筋節の中央（M 帯）でつながります。２本のコネクチンの長さは、筋節の長さと同じですが、４倍に伸ばせるくらい柔軟性のある繊維です。

コネクチンは、複雑で描きにくいので、PDBj 入門というサイトから図を引用させていただきます（こちらのサイトではタイチンという名前が使われています）。
https://numon.pdbj.org/mom/185?l=ja



クリーム色の部分がコネクチンです。
青い部分が細い繊維、オレンジ色の部分が太い繊維です。
コネクチンは、太い繊維の芯になっています。

図は筋節の半分を表しています。
上段はコネクチン単独の図、中段は筋節が縮んだときの図、
下段は筋節が伸びたときの図です。
細い繊維と太い繊維は伸び縮みせず、コネクチンだけが伸び縮みしているのがわかります。何回もねじったゴムを縮めると、らせん状にうずまいて太くなる部分ができますが、これと同じように、コネクチンを縮めると、太くなる部分ができます。

左の青い帯状の部分が Z 板、右側のオレンジ色の網目が M 帯と呼ばれる部分です。
M 帯をはさんで、反転した図を右側に足すと、ひとつの筋節になります。

M 帯から、Z 板のほうへ向かって、ミオシンという分子がらせん状にずれながらコネクチンに貼りついて、太い繊維ができます。

ミオシン分子の頭部には、ミオシンヘッドというたんぱく質２個が、双葉の形でついています。
ミオシンヘッド以外の部分は尾部と呼びます。
以下、私の図解では、ミオシンは緑色で現します。長さは０.１６マイクロメートル程度です。

拡大したミオシン分子（左端がミオシンヘッド）

M 帯でつながった２本のコネクチンに、２００本～４００本のミオシン分子が貼りつきます。
太い繊維の長さは１.６マイクロメートル。
太い繊維からはミオシンヘッドが突き出ているため、たくさんの出っ張りがあるように見えます。
太い繊維の中央は、ミオシンヘッドの飛び出しのない、尾部だけの部分があります。この部分はＨ帯と呼ばれます。
H 帯の長さは、０．２５マイクロメートルです。

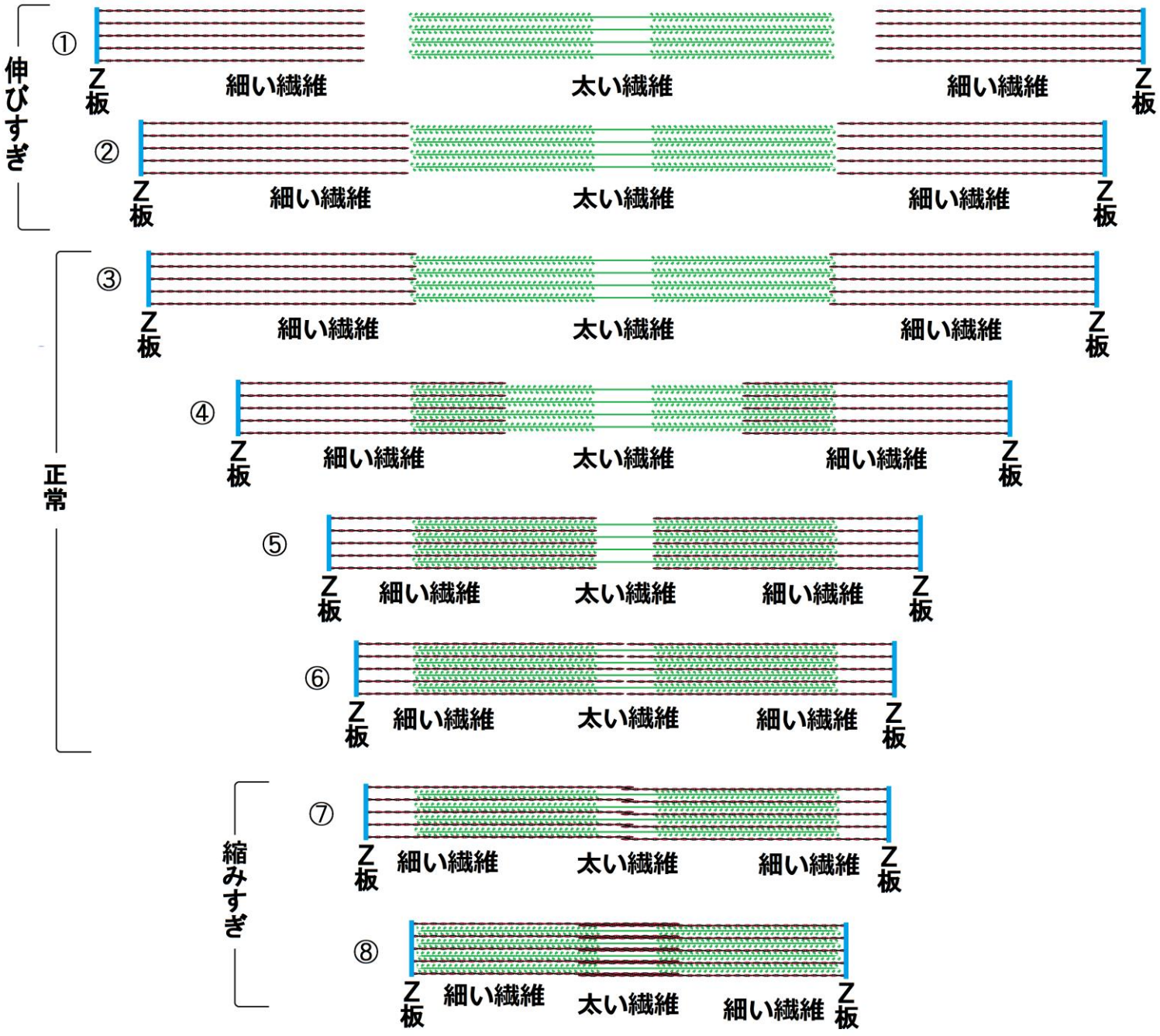
太い繊維

ミオシンヘッドは、細い繊維の上をシャクトリムシように進んでいくことができます。
その結果、太い繊維と細い繊維が引き合って、Z 板とＺ板の間隔（筋節）が縮まることで、筋肉は収縮します。

太い繊維と細い繊維が引き合うためには、互いに重なり合わなければなりません。

もし、筋節が３.６マイクロメートル以上に伸ばされてしまったら、太い繊維と細い繊維は重ならないので、引き合うことができなくなります。

下の図は、様々な長さの筋節の中で、太い繊維と細い繊維がどうなっているかを示しています（コネクチンは省略）。②が３．６マイクロメートルで伸びすぎ筋節。①は４マイクロメートルで、ひどく伸びすぎた筋節。
①、②ともに筋節の縮む力（張力）は０％です。



筋肉は、伸びすぎてしまうと縮みにくくなり、伸びっぱなしになってしまいます。
コネクチンや筋鞘、筋細胞膜、筋膜などに多少の弾力はありますが、伸びすぎた筋肉を元に戻すのに十分な弾力はないようです。

先の図の③から⑥が正常な伸び縮みです。

③　3.5 マイクロメートル　　張力約５％
④　2.925 マイクロメートル　張力 50%
⑤　2.25 マイクロメートル　　張力 100%
⑥　2 マイクロメートル　　張力 100%

⑦⑧が縮みすぎ。細い繊維同士がくっついた状態です。

⑦　1.9 マイクロメートル　　張力約 90%
⑧　1.6 マイクロメートル　　張力約 80%

さらに、1.25 マイクロメートルまで筋節を縮めると、張力は０％になります。
筋肉は伸びすぎても、縮みすぎても張力（収縮する力）がなくなります。

⑤から⑥まで、すなわち筋節の長さが２マイクロメートルから２．２５マイクロメートルの間が、１００％の最大張力を発揮できます。
この長さを至的筋節長と呼びます。

至的筋節長では、太い繊維のミオシンヘッドが飛び出している部分が、すべて細い繊維に重なることができるので、最大張力となります。

０.２５マイクロメートルの間隔があるのは、ミオシンヘッドのないＨ帯が０.２５マイクロメートルあるためです。

筋肉が伸びすぎてしまうと、筋膜や、筋膜に分布している神経も伸びすぎてしまい、痛みを感じたり不愉快を感じたりします。

力が入りにくくなって、脱力感やだるさを感じ、作業効率が低下します。
太い繊維と細い繊維が引き合うことができず、筋繊維が伸びっぱなしになり、痛みや不快感、脱力を生じる状態・・・
これが、伸びすぎた場合のこりの正体です。

当院では、姿勢・肢位を変えて筋肉を縮めたり、伸びすぎたところをさすって縮めたりして、伸びすぎたこりを解消しています。

いったん、太い繊維と細い繊維が重なって引き合うようになるだけで、今度はたとえ筋肉を伸ばしたとしても伸びすぎなくなるケースも少なくありません。

伸びすぎが解消しない場合は、たいてい他に縮みっぱなしになっている筋肉があるので、まずそちらを十分に伸ばします。
そうすればたいていの伸びすぎたこりが解消します。

（どうしても伸びすぎが解消しない場合は、テーピングや装具を用いて、一定期間伸びすぎないように固定するケースもあります。）

現代社会を『関係性』という観点から考える

⑲　「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

連載 14 では**『「開く」ことと「閉じる」こと』**について書かせていただきました。その後、連載 15 では**『つながりが支えるこころ』**と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となってしまい社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、**『「見える」ことと「見えない」こと』**という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて前回の連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えるというタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。つまり、**「地域域社会」で生きるということ、**について考えてきたともいえます。

一方で、現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えますし、昨年 12 月に大阪のクリニックで発生した大規模な放火事件は、被疑者も死亡し、いわゆる拡大自殺的な側面を持っていると考えられます。

1 「29 人と 19 人」この数字が示すもの

（平成 30 年版犯罪白書より）

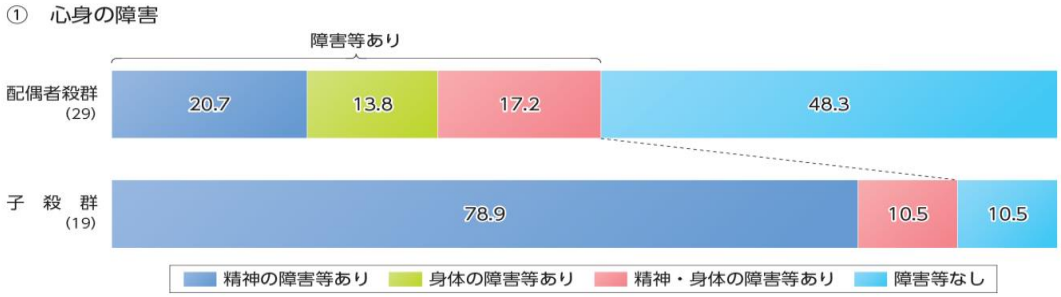
法務総合研究所が毎年発行する「犯罪白書」では、ルーティン部分に加えて特集が掲載されます。少し古い話で恐縮ですが、平成 30 年版犯罪白書の特集は「進む高齢化と犯罪」でした。法務総合研究所によって行われた特別調査の結果が特集部分に掲載されていますが、その 1 つに「29 人と 19 人」という数字が出てきます。ここではこの「29 人と 19 人」という数字が示すものについて考えたいと思います。（以下参考及び文献出典　平成 30 年版犯罪白書（法務総合研究所）

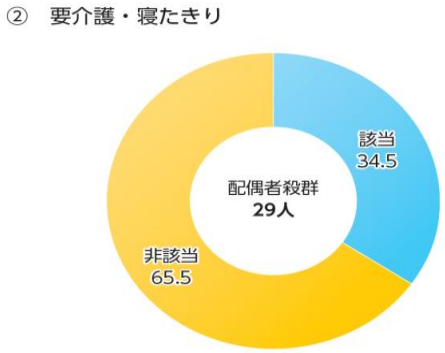
平成 30 年犯罪白書　特集「進む高齢化と犯罪」

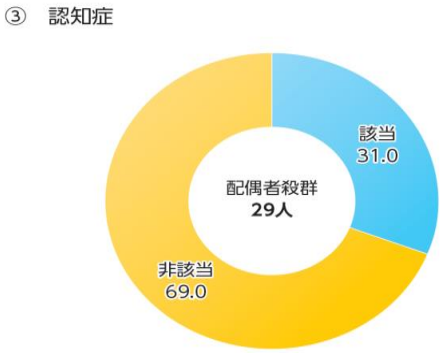
特別調査Ⅱ　殺人

調査：殺人事犯者と被害者との関係別構成比を比較したところ、高齢群では、親族殺が約 7 割だった（非高齢群では 4 割）。**そして「29 人と 19 人」とは、上記調査対象となった高齢群（殺人事犯者）のうち「配偶者殺群＝29 人」「子殺し群＝19 人」**

ということを示している。



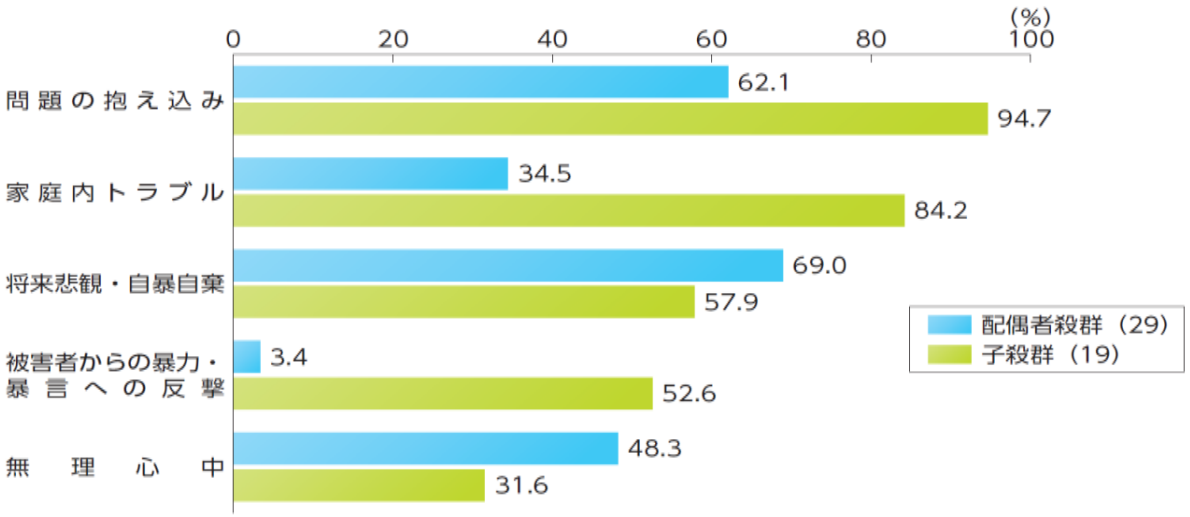




高齢・配偶者殺群の特徴：被害者が精神・身体の障害等を有する割合が約 5 割、要介護・寝たきり／認知症の状態にある割合が約 3 割であった。

高齢・子殺群の特徴：被害者が精神の障害等を有する割合が約 9 割。動機・背景は、約 9 割に問題の抱え込みがあり、過半数に被害者（子）からの暴力・暴言への反撃がある。

高齢殺人事犯者の犯行動機・背景（配偶者殺・子殺別）



課題と対策（平成 30 年版犯罪白書に掲載されたもの）

要介護・寝たきり、認知症を含む精神・身体に障害を有する配偶者に対する殺人の防止⇒実情を共有することなどにより地域の福祉・医療の協力を要請

子に精神の障害があり、問題を抱え込む高齢者に係る高齢者に係る家庭内殺人（子殺し、親殺し）の防止⇒少年鑑別所の地域援助等専門的知見を有する機関の活用

2「望まない孤立」を防ぐために

上記 1 で記載したように、高齢者による介護殺人を防ぐためには、関係機関との連携の必要性が必要となってきます。つまり、関係機関が介入することで、当事者の問題の抱え込みを防ぎながら、介護する側とされる側双方に適切な対応を行うことが重要であると考えられます。

しかし、私の経験上、関係機関の介入それ自体が難しい時もあります。関係機関が介入するには、「地域包括支援センター」等のしかるべき相談機関につながり、そこで自分の家庭で起きている物事を相談しなければなりませんが、それをよしとしない雰囲気が今もなおあります。

「だって家族だからあたりまえ」という気持ちで関係機関の介入など想定すらできないケースもあれば、当事者はとても苦しくて何らかの支援を求めていても、介護に関わっていない親族が関係機関の介入をよしとせず、当事者のみに任せることを強く希望する（というよりも圧力をかける）ようなケースもあります。特に家族介護の場合、誰がケアを担うのかということはその家族の中における役割意識や力関係で決まってくることもあります。「長男の嫁だから当たり前」「世話になったのだから当たり前」という様々な理由で、ケアを担う者が親族間で決定されてしまうことも往々にしてあります。

その典型的な例とも考えられるのが、2019 年 10 月に兵庫県で発生した、孫にあたる 22 歳の幼稚園教諭が惹起した祖母の殺害事件でした。複雑な成育歴を持ち児童養護施設での生活も経験しているこの 22 歳の女性は、「祖母に短期大学の学費を出してもらったのだから当たり前」という親族の強い意向により、幼稚園教諭として稼働しながら祖母の介護を任されていました。しかし祖母の状態は、ケアに対する抵抗が強いという難しい状態であり、22 歳で介護の経験も浅く、社会人としてのスタートを切ったばかりの女性 1 人の手には余るものでした。勤務先の幼稚園に話しても十分な理解を得られなかったようです。しかしこのような厳しい状況であるにも関わらず、実際に介護に関わっていない親族が外部に支援を求めることを許さず、結果的に女性が祖母を殺害するという事態に至っています。裁判ではこうした事情も考慮されたのか、女性に対しては懲役 3 年執行猶予 5 年の執行猶予判決が言い渡され、社会内で生活しながら更生する道が示されました。しかし、女性の実父や叔母などの親族はこの判決を「甘い」と判断し、釈放された女性に対する支援はなされなかったようです。何とか公的な支援が入り住まい等は確保できましたが、女性は再び孤立に陥りかけました。そこに手を差し伸べたのは親族ではなく、女性の同級生の家族や、大きく報道されたこの事件の加害者である女性に対して気持ちを寄せる全国の見知らぬ人々だったといいます（毎日新聞等の報道）。この事件を契機に、若くして親族の介護を担う「ヤングケアラー」をどうやって支援していくかということが社会の課題として改めて認識され、「ヤングケアラー」やその支援に関する書籍の発行や研修が多く行われるようになっていること自体については、私自身は喜ばしいことであると考えていますが、一方でこれが一時のムーブメントで終わらないことを願っています。また、「ヤングケアラー」は家庭の問題として外部に出されないことも少なくなく、公的機関につながることなく埋もれてしまいやすいということを考える必要があると考えています。

私自身も、業務や自身の親族の介護で関係機関との協議の場に臨むことが少なくありませんが、あるケア会議で、その地域を管轄する地域包括支援センターのスタッフの方から

「その問題は、うち（当該地域包括支援センター）に対して情報・相談は入っておりません」

「本当にそのような問題は起きているのでし

ょうか（うちが知らないのなら、ないはず)」「うち(地域包括支援センター)のことを知らない住民なんて、今どきいない（はず)」という発言がなされたのを実際に聞いたことがあります。確かに、当該地域包括支援センターの運営母体は、その地域をカバーする大きな病院でした。確かにその病院（法人）の知名度は高く、そのことに対する誇りを持って仕事をされているのでしょう。ただ、この会議の直前には、東京都内のある区において、ひきこもりの息子を元政府高官の方が殺害する事件が発生しており、主治医以外の誰にも相談できなかったことが報じられていました。当該自治体で実施された地域包括支援センターの認知度に対するアンケート調査において、地域包括支援センターを「知らない」と答えた割合は、高齢者一般で 33.7%（要支援認定者は 15.7%、要介護認定者は 22.7%と「知らない」の割合は低い)、「これから高齢者」の世代では「45.0%」であり（当該自治体資料)、実際に介護等に直面する世代が「あたりまえ」に知っている機関ではないと私は考えています。それを「運営母体が有名な病院だから知っていて当然」「うち（地域包括支援センター）に情報がはいっていないのだから、そのような問題は存在しない」と言い切る姿勢については正直驚きましたし、「運営母体の規模や著名度はさておくとして、高齢者や介護に縁が薄い世代や世帯にとっては『包括』って何？というのが現実ではないか。みんなが知っているはず、うちに相談がないということは地域課題がないはずという考え方では、地域課題を見落とすことになりかねないか懸念を感じる。」といった意見を伝えましたが、あまりピンとこられていないようでした。「なんでそんなことをいわれないといけないの」という反応でした。これはチームを組む相手としてはかなりしんどいなと感じたのが正直なところです。

私自身、更生保護官署職員という、決して知名度が高いとはいえない（刑務所等に比較して圧倒して職員が少ないので、なかなか仕事のイメージが湧きづらいのでしょう）仕事を続けており、業務内容を聞かれることも慣れていますので、最初の段階で自分の機関やその役割をパンフレットなど用いて説明し、刑事司法の手続等で分かりづらい点があれば何度でも説明をします。「そんなん分かってあたりまえ」と思うことは傲慢だとすら思っています。

3 国による孤独・孤立対策　内閣官房に孤独・孤立に取り組むセクション設置

国による孤独・孤立対策についても進められています。内閣官房には孤独・孤立対策に取り組むセクションが設けられ、緊急フォーラム等が開催され、HP には各種メッセージ、「緊急支援策のご案内」等パンフレットが掲載されています。このパンフレットは随時更新されていますが、R3.5.24 付「緊急支援策のご案内」パンフレットを見る限りでは、支援についてはかなり幅広の情報が掲載されていると感じました。当事者への直接支援だけではなく、孤立対策に取り組む各種民間団体に対する国としての支援策が打ち出されています（参照：内閣官房HP)。

孤独・孤立対策に取り組む NPO 等への各支援策→支援対象団体　内容

生活支援等・自殺防止対策

支援対象団体：自殺防止対策や生活困窮者支援を行う NPO 法人（補助率 10/10）

内容：自殺防止対策を行う NPO 法人への助成（15 億円)→相談体制強化、相談員等の養成、自殺防止対策の情報発信の強化、生活困窮者等に対する支援に関する活動を行う NPO 法人等への助成（2 億円）→コロナ対応として緊急性がある事業であって、生活困窮者やひきこもり状態にある者に対して、電話・SNS 相談、居場所づくり、学習の支援、生活上の支援、住まいの確保などに関する活動を広域的に行う NPO 法人等に対し当該活動費に対する助

成を行う。

フードバンク支援・子ども食堂等への食材提供に係る補助

支援対象団体：子ども食堂等向けの食品の受入れ・提供を拡大する NPO 法人、学校給食、子ども食堂に食材を提供する NPO 法人、子ども食堂等の取組を行う団体　内容：フードバンクへの支援（4 億円）。新たに従来の予算の補助対象（スタートアップ団体）のみならず、全団体を補助対象に補助率 10/10 で支援。子ども食堂への 1 取組当たりの補助金の下限を半減（100 万円→50 万円）、実施施設数の要件を半減（20 施設以上→10 施設以上）。政府備蓄米の子ども食堂への無償交付の上限引き上げ（1 団体当たりの交付数量の上限を引き上げ年間 60 キロ→90 キロ）

子供の居場所づくり

支援対象団体：地方自治体の委託を受け、子ども食堂、学習支援等の子供の居場所づくり等の活動を行う団体（NPO 法人に委託している地方自治体に対する緊急支援）

内容：既存の支援事業：①実施調査・計画策定（補助率 1/2、補助基準額 300 万円）、②子供等支援事業（子供たちと「支援」を結び付ける事業、連携体制の整備、研修の実施（補助率 1/2、補助基準額 1500 万円～300 万円））、緊急支援事業（つながりの場づくり緊急支援事業）：（補助率 3/4、委託団体当たり 125 万円→子ども食堂、学習支援といった子どもの居場所づくりなどを NPO 等に委託し子どもを行政等の必要な支援につなげる事業（委託費が総事業費の 8 割以上の場合に限る）

女性に寄り添った相談支援

支援対象団体：地方自治体の委託を受けて、コロナ禍で不安を抱える女性に寄り添った相談支援等を行う団体（NPO 法人に委託している地方自治体に対する緊急支援）内容：地域女性活躍支援交付金について時限的に地方自治体がコロナ禍で不安を抱える女性に寄り添った相談支援等を NPO 等に委託した場合に国の補助率を引き上げる、追加措置部分としてつながりサポート型（孤独・孤立で不安を抱える女性が、社会との絆・つながりを回復することができるよう NPO 等の知見を活用（総事業に占める委託の割合が 3/4 以上）した決め細かい支援

住まいの支援

支援対象団体：公営住宅や建替予定等を UR 賃貸住宅の空き住戸を新型コロナにより住まいに困窮する者にシェアリング等の形で転貸し、就労等を見据えた自立支援を行う団体、孤独・孤立対策として、入居後の見守り等の支援活動を行う NPO 等の居住支援法人

概要①：公営住宅や建て替え予定等の UR 賃貸住宅の空き住戸を、NPO 法人等に対して定期借家等により低廉な家賃で貸与、当該 NPO 法人等が新型コロナにより住まいに困窮する者にシェアリング等の形で転貸することで、就労等を見据えた自立支援を行う仕組みを新設。

報告者注：公営住宅については本来入居者の入居を阻害しない範囲で、空き住居を活用、目的外使用に当たり大臣承認手続きを簡素化（地方整備局等への事後報告で可）（4 月 1 日施行）。UR 賃貸住宅については、UR が居住支援法人等を公募し、一定期間、低廉な家賃で空き住戸を貸与、居住支援法人等が、住まいの提供や就労等を見据えた居住者の自立支援等を実施（4 月以降に実施）。こちらも UR 賃貸住宅の本来の入居希望者への供給や UR 全体の経営に支障が生じない、かつ、現入居者に著しい影響のない範囲で行うとなっている。

概要②：NPO 法人等が実施する住宅確保要配慮社に対する支援活動の補助事業につき、入居後の見守り等の支援活動を行う場合に、補助上限額を 200 万円引上げ。居住支援法人への支援（居住支援協議会等活動支援事業）（5 億円）→居住支援法人が行う次の活動に対する補助：①入居前支援、②入居中支援、③死亡・退去時の支援、④セミナー・勉強会等の開催

（①は必須、②～④は任意）

補助上限額 1000 万円（補助率 10/10）交付決定額の範囲で実績に応じて補助金を交付→孤独・孤立対策として見守り等を実施する場合は補助上限額 1、200 万円（外国人向け居住支援も）

4 R3.12.28 孤独・孤立対策推進会議決定「孤独・孤立の重点対策」概要

項目 3 に関連し、令和 3 年 12 月 28 日には、標記重点対策も決定されました。概要は以下のとおりです（内閣官房HPで「孤独・孤立の重点対策」を検索すると、詳細を確認できます）・

①孤独・孤立対策の現状

新型コロナ感染拡大前：職場・家庭・地域で人々が関わり合い支え合う機会の減少→「生きづらさ」や孤独を感じざるを得ない状況を生む社会へ変化

新型コロナ感新型コロナ感染拡大後：交流・見守りの場、相談支援を受ける機会の喪失など→社会に内在していた孤独・孤立の問題が顕在化・深刻化

②孤独・孤立対策の基本理念

⑴孤独・孤立双方への社会全体の対応
⑵当事者や家族等の立場に立った施策の推進
⑶人と人との「つながり」を実感できるための施策の推進

③孤独・孤立対策の基本方針

＊基本方針の柱ごとに具体的施策（現状、課題、目標、対策）を掲載）

⑴孤独・孤立に至っても支援を求める声を上げやすい社会とする
⑵状況に合わせた切れ目のない相談支援につなげる
⑶見守り・交流の場や居場所づくりを確保し、人と人との「つながり」を実感できる地域づくりを行う
⑷孤独・孤立対策に取り組む NPO 等の活動をきめ細かく支援し、官・民・NPO 等の連携を強化する

④孤独・孤立対策の施策の推進

具体的施策（法務省関連部分を三浦が抜粋）

⑴孤独・孤立に至っても支援を求める声を上げやすい社会とする：在留外国人に対する基礎調査、関係者ヒヤリングの実施、民間ボランティアである保護司等による刑務所出所者等への支援等、在留外国人に対する情報提供、人権相談、人権啓発活動の充実、保護観察対象者等の特性に応じた指導及び支援の充実強化、医療観察対象者の社会復帰を促進するための地域処遇などの充実強化、新型コロナウイルス感染症の影響による特例措置など

⑵状況に合わせた切れ目のない相談支援につなげる：人権相談、無戸籍者問題解消事業、FRESC ヘルプデスクの運用、

⑶見守り・交流の場や居場所づくりを確保し、人と人との「つながり」を実感できる地域づくりを行う

刑務所出所者等の就労・住居・相談先の確保、刑務所出所者等に対する福祉的支援等の実施、保護観察対象者等の特性に応じた指導及び支援の充実強化、民間ボランティアである保護司等による刑務所出所者等への支援等、

⑷孤独・孤立対策に取り組む NPO 等の活動をきめ細かく支援し、官・民・NPO 等の連携を強化する

地方公共団体における再犯防止の取組の推進、少年鑑別所（法務少年支援センター）による地域相談活動、医療観察対象者の社会復帰を促進するための地域処遇等の充実強化、離婚及びこれに関連する制度の検討、刑務所出所者等の就労・住居・相談先の確保、民間ボランティアである保護司等による刑務所出所者等への支援等

5「自分は誰かとつながっている」という感覚

上記 3、4 で記載したように、孤独・孤立対策に対しては内閣官房や各種省庁もその解決に乗り出しています。これまで善意の寄附等で進められてきた子ども食堂等への支援など

も含まれており、それ自体は望ましいことと考えられます。

しかし、一番大切なのは、１人１人が自身の中で誰かを排除・差別する気持ちがないか、社会は信じるに値する存在だと思うことができているかどうかを、コロナ禍で経済・社会が混乱し、その混乱が社会の中でも弱い部分により強くダメージを与えることを自覚できているかどうかをふりかえることではないでしょうか。

相談できずに抱え込むことによって、課題はより複雑化しなかなか解きほぐせない糸玉のような問題へと変わっていきます。その結果、身内や時には全く関係のない他者を巻き込んだ大きな事件に発展することもあります。「どうして相談しないのか」と責めることは簡単ですし、例えば鉄道への飛び込み自殺、他者を巻き込んでの拡大自殺等が発生するたびに、「死ぬなら一人で死ね」といった論調の意見が出ることもあります。しかし、インターネット上、しかも匿名で「死ぬなら一人で死ね」といった論調で当事者を叩くだけで解決することはまずなく、無責任な自己責任論が拡大していくだけでしょう。そしてそういった社会に対して、もし自分が何らかの理由で躓きを経験したときに、「助けて」といえるでしょうか。諦めが先に立つのではないでしょうか。

「相談する」ことは、相手に対する信頼や、「この社会は生きるに値する」「相談すれば応えてくれる」という社会に対する信頼があってこそ成り立つものだと私は考えます。また、「相談」は自分の困っていることを相手に開示するため、そのことで「弱みを握られる」といった懸念や、「相談してもどうせ無駄」という諦観があれば、相談することは難しいでしょう。

薬物依存症回復施設の運営を行い、ともに依存症からの回復について活動していた女性施設長から私は次のような言葉を聞いたことがあります。

「相談とは、何を相談するかではなく、誰に相談するかによって相談の質が異なってくる」

これは、相談相手が相談内容に値するかしっかりと見極めること、そして相談相手との関係性について重視することだと私は理解しています。

課題や困難が全くない人生はないでしょう。仮に実在するとすれば、それは自らが解決すべき課題を他者にすべて任せている（あるいは誰かが先回りして解決している）ということが想定され、これは人が人として成長していく過程では望ましいこととは思えません。

また、一見安定しているように見える人でも、内面では様々な葛藤を抱えています。そのことに対して思いを致さず、他者の表面的な幸せだけを見て相手を羨望し時にインターネット上などで誹謗中傷することも、あってはならないことだと考えます。

新型コロナウイルス感染拡大により、社会の格差・分断が一層拡大したと論じる見方もあります。しかしその一方で、私は自身が活動の端に加えていただいている子ども・若者支援が一層その活動を強化し、感染予防のための配慮を行ったパントリー等を実施していることを身をもって体験しています。

コロナ禍における国民に対する金銭的な給付については、対象の選定やその方法について様々に議論がなされました。国民一人一人に一律十万円の給付金が支給された際、それを自身のためではなく、誰かのための役立てようとした多くの人が存在することも実際に見てきました。私自身が子どもや若年女性を支援する活動の端に繋がっていたからです。そして、そうした体験をすることで、人間の善意やつながりの力を信じて生きることができています。

しかし「助け合い」「寄附行為」に全く関心を持たないある方から「そんなことをしても経済は回らない（から私にちょうだいよ）」とかなり強い口調で言われたという人もいます。

そう言った方は「経済を回す」ために温泉に繰り出す日々を送りながら、コロナ禍で go to が中止されると一転して「誰かにコロナを写される」と引きこもり、御家族に様々物資の送付を要求し、少しでも気に入らないと時間を問わず家族に激しい文句を入れてくる生活を続けておられました。実際にカードで支払いをしている御家族への言葉は一切なく、「望めば商品が無料で届くって便利な世の中ねえ」「ア○ゾンって、アラジンの魔法のランプと一緒ねえ」という言葉を繰り返されていたといいます（当然御家族が代金を支払っていることは御承知でした)。また、同種の商品を 1 週間のうちに何度も要求されていましたが、その品々は「一番お気に入り」のもの以外は消えていたといいます。リサイクルショップで現金化するため、縁の薄い方に対して自分への遺産分けを強く依頼された経緯もある方のようでしたので、その方独自の「賢い方法」で処分されていたのかもしれません。まさに「便利な世の中」を実感されていましたが、その一方でそうした暮らしは確実にその方の心身を蝕み、特に持病である精神疾患が悪化し、警察介入の結果非同意入院に至っています。多くの家族・親族が関わりを断つ中、最後まで支援の場に踏みとどまった御家族に対してすら、不満をぶつける日々を送るうち、見えないはずものが見え、聞こえるはずのない音が聞こえるようになっていったその方も確かにお辛かったでしょう。しかし多くの犠牲を払い心身の健康を損ねながらも「周囲に迷惑をかけてはいけない」という一念で支援の場に踏みとどまられた御家族にとっては、本当にやりきれない思いがあったと思います（了解を得てこちらに記しています)。

しかし一方でその方は、一見好き放題の暮らしをしているように見えても、実際のところは、どれほど深い孤独の中にいたのか想像に難くありません。様々な要求（やそれに家族が対応することで自分の優位性を実感すること）やその結果手にしたモノやカネは寂しさを一時的に埋める手段になり得たのかもしれませんし、介護保険を通じてケアをする人の出入りもありました。そこでもスタッフへのクレームを繰り返す人と認識されていたため、支援者との関係性も深まってはいなかったと考えられます。

振り返って我が身のことを考えると、介護等を通じて多くの方にお支えをいただき、疾病を抱えつつも仕事と家庭、家族介護をなんとか両立させています。そこでいただいた御恩を忘れず、かつてお世話になった先輩方から諭された「恩を送る」ような気持ちで、当事者団体の活動に参加したり、今まさに介護に直面している方の見守りに関わっています。コロナ禍で例会が開けないときでも、メール等で連絡を取り合い励まし合うことが、厳しいコロナ禍の介護を支えていただいていると感謝しています。また、細々と続けているボランティア活動等も、リアルで出会える機会こそ減りましたが、そこに参加することで自分が社会とつながっているということを実感できます。何よりも制限の多い中で少しでも「良質の仕事」ができるよう心掛けるという公僕として当然のことが、コロナ禍の混乱の中で自分を保つことができる大きな要素であると実感しています。

勿論こうしたつながりを当然「そこにあるもの」と思ってしまうと、いつの間にか感謝の念を忘れてしまいます。つながりの存在に感謝し、関係性については常にメンテナンスを行っていくことが重要であると考えています。

平成 30 年版犯罪白書
内閣官房 HP（孤独・孤立対策）

ブルーグレーの肖像

新章・ACという名の元に

天川　浩

第7回　新章

前回まで6回にわたってHSPについて述べてきてきました。書いてみてわかってきたことがありました。

この連載は自伝ではないのですが、自分を当事者の視点からできるだけ俯瞰で見た状況を記述していくことを旨としています。そうした時にHSPという視点だけでは、その状況を描き出すのに不完全だということに気づいてきました。

現在の地球上に生きる人間の苦悩は極めて複合的で、一つの側面だけでは説明ができなくなっているのです。

私はこの現在の日本には、あきらかに福祉は必要ではないのですが、生活に困窮してしまう人が確実に存在していると確信しています。

いわゆる「生きづらさを抱える」人々です。彼らは知的・身体的に何ら問題を抱えていません。教育も形としては義務教育、高等教育をしっかり修了したことになっています。

しかし、社会に出て、著しく適応が困難な状態に置かれ、自分でも予期していなかった生活状況におかれ、最悪なケースでは自ら命を絶ってしまう場合もあります。

彼らは健康ではなかったのでしょうか？

身体的に全く問題はありません。

彼らは知的に問題を抱えていたのでしょうか？

いいえ、豊かな感受性を持ち、知識も豊富で能力も高いレベルの人達もいます。

では、なぜ命を絶つくらい追いつめられていたのでしょうか？

そこがものすごくグレーなのです。

特に、この日本においては…。

どうしてこんなにグレーになってしまうのでしょうか？

私は未だにわかりません。どうして彼らは何の支援も受けずに、何の相談もせずに、孤独に命を絶ってしまったのか？どうして彼らは福祉に到達できなかったのか？どうして彼らは孤独に至ったのか？どうして彼らの周囲には彼らの死を予感し止めるものがいなかったのか？どうして彼らは生活に行き詰まりを感じていたのか？

私はこのマガジンへの執筆を機会に、たくさんの「？」クエスチョンマークを抱えることになりました。福祉に携わる人はこんなにたくさんいるのに、福祉業界はいつも人手が足りないほどの忙しさで稼働しているのに、毎年、新しい施策が実施されて救われる人がいるはずなのに、何故セーフ

ティーネットの網の目から零れ落ちて命を絶つ人間がでてくるのですか？

それに答えるのはとても難しいと思うし、わかっているのに解決できないゾーンなのだということも知っています。

しかし、その部分を解決できないと、おそらく本当にこれから世界は大変なことになっていくような気がしているのです。

ひとつには複雑になってしまった「核家族化のあとの機能不全家族」の増加が原因であると感じます。

機能不全家族…。

もう一度私は、この言葉を一から調べてみました。

【機能不全家族】

英：disfunctional family

家庭内に対立や不法行為、身体的虐待、性的虐待、心理的虐待、ネグレクト等が恒常的に存在する家庭を指す。その状態を家庭崩壊、もしくは家族崩壊とも言われる。

「子育て」「団欒」「地域との関わり」一般的に家庭に存在すべきとされる機能が、健全に機能していない家庭の問題を指す。

機能不全家族となる要因としては、家族構成員のアルコール依存、虐待（子供への暴言や威圧的態度も含まれる）、共依存などが挙げられる。更に、このような機能不全的な家庭となっている場合は、その家庭を構成する親、または祖父母などが、機能不全家族で育った可能性もある。

アルコール依存症、ギャンブル依存症、薬物依存症、親の自殺、親の死亡、親の浮気、両親の離婚、親の再婚、親から見捨てられる行為（ネグレクト）、精神的な児童虐待、肉体的な児童虐待、性的な児童虐待（児童性的虐待）、兄弟姉妹間での処遇格差、家庭不和、家庭内の暴力、借金などがある。

機能不全家族の研究家のスティーブン・ファーマー氏（Farmer, S.: "Adult Children of Abusive Parents", pgs. 19-34. Ballantine Books, 1989,）

によると、機能不全家族に育ったものはその家庭内での経験のため、一定の傾向、行動パターンが見受けられる。

これがいわゆる「アダルト・チルドレン」といわれる人々である。

その兆候とは、拒絶、矛盾、家族への無共感、家族間の境界線の欠如、親子逆転、社会からの孤立、曖昧なメッセージ、極端な論争・対立、などが挙げられる。(ウィキペディアより)

彼らは、自分の心の叫びとして、これらを他者に無意識に送っているのだ。しかし、かれらには絶対的な庇護者が存在せず、なぜ理不尽な攻撃に晒されているのかもわからず、その心の傷を誰にも語ることもなく大人になってしまう。

満たされて育った者でも、生きていくのが大変な世の中である。幼少から心に大きな傷を負って、尚且つ、社会で生活していくことに適応しなければならない。

これは簡単な問題でしょうか？

その人達は、本当に、生来だらしなかった

り、弱かったりするのでしょうか？

そして、それらは彼ら自身の責任なのでしょうか？

しかし、現状では、そういったレッテルを貼られ、偏見に晒されてしまう。

何故なら、彼らは自分の受けた経験を、語ることがほとんどないからである。

語る場面さえも用意されていない。全て自分の中だけで抱え込んで、一人で苦しんでいるのだ。

ある人は、アダルトチルドレンの特徴が顕著に現れていても、そのことを認めようとしません。

何故でしょうか？

簡単な質問です。アダルトチルドレンは社会的に良いイメージがないからです。良いイメージがないものを自らにあてはめ、認めてしまうことを恐れているのです。

「アダルトチルドレン」その言葉の悪いイメージや様々な誤った情報が一人歩きして認知され、一種の社会悪のように捉えられていることが大きな原因になっています。

その誤った情報の一つとしてアダルトチルドレンの意味を「大人になりきれていない大人」「子供っぽい大人」などと認識している人が、まだたくさんいるということがあります。

子供っぽい、大人になれない、そんなイメージが膨れ上がり、だらしない、ルールを守れない、などの悪いイメージに変化し、多くの人に認識されている。

これでは簡単に「私はアダルトチルドレンです」と認められないでしょう。

アダルトチルドレンを生み出すのは、その生まれ育った家庭かも知れませんが、それを悪化させているのは、社会全体なのかもしれません。

多くの人がアダルトチルドレンについて正しく知ることで、彼らが安心して、自らの苦悩と向き合い、癒され、生きる力を取り戻すことにつながるのではないかと思う。

ではアダルトチルドレンについて、どうやって知識を得たらいいのだろうか？

アダルトチルドレンで検索すれば、たくさんの情報を得ることができる。

しかし人間は興味のないことや、自らの利益に関係のないことは調べる機会を得ないからである。

それは万人に共通のことなので、それをとやかく言う必要は全くない。

しかし、自分がアダルトチルドレンなのではないか、と疑問を持ち克服しようとする場合はどうだろうか？

これは容易に情報を得ることができるだろう。自覚あるものは、なんとしても必ず結論にたどり着こうとするものである。その時、このネット社会は、そういった人間の大きな助けとなるだろう。

では…自らアダルトチルドレンの特徴を

顕著に備えているにもかかわらず、自らの状態に疑問を持たない人間がいるとすれば、その場合はどうだろうか？

そこにはただ闇が広がるだけである。

足元を照らす灯りを持たぬものが、鬱蒼とした暗闇の森の小道を手探りで手足に傷を作りながら進むようなものである。

背中には何かしら大きな重い荷物を抱えているが、その重量も大きさも、自分にはわからない。得体の知れない大荷物を抱えて、何の灯りもなく、いつ明けるとも知れない夜の闇を、ただただ傷だらけで進んで行く。出口などは見えない。

それが、潜在的なアダルトチルドレンの現状のようなものである。

確かなガイダンスもない。教えてくれる人もいない。比べる人間もいない。何もかもがない…ない…ない。しかし、言い知れぬ不安と確かに何かに対する恐れを抱きながら、苦しんでいる。

そんな人が、今の世の中にたくさんいる。それだけは確実なのです。

知る術もなく、伝えられることもなく、何をどう助けてもらえば良いかもわからない。

私は、この新章で、潜在的なアダルトチルドレンにスポットライトを当てていきたいと思っています。

そして、一人でも多くの人間の目に止まればいいか、と思います。

それを足がかりに、その人の人生が上向きになっていけばという思いだけで、書いて行こうと思います。

私は技術や理論を語れないが、自らの経験と多くの人との交流で得た体験がありま す。

それで、潜在的に苦しむ人が一人でも減れば良い。

では、次回からは、あなたの知らない世界をお伝えできればと思います。

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法〇～

＜隠された答案用紙＞

杉江　太朗

～専門家による専門的な診断～

私の職場は、子どもの福祉を専門的に扱う行政機関である。その業務に対社会、対家族に対して調査するということがある。調査をする目的は、子ども自身のことや、子どもが置かれている環境、子どもが属する社会、家族を知ることである。

例えば児童相談所運営指針では、社会診断、心理診断、行動診断、医学診断などと分類されている。それぞれの診断を総合して、援助方針を決定すると書かれている。それぞれの中身については、厚生労働省のホームページなど見て頂けたら良いと思う。そういった解説をすることがここでの目的ではない。

しかし、「診断」と聞いたときに一番に思い浮かべるのは、医療のことではないだろうか。医者に「（医学）診断の結果は〇〇です。」と言われるという状況は想像がしやすいと思う。一方で、医者でもない人間に「（社会）診断の結果は△△です。」と言われて、「なるほど。そうだったのか。」と反応する方がどの程度いるだろうか。おそらくいないだろう。子どもを理解しようとするとき、子どものことを親と共有しようとするときに、そうした言葉は何ら意味を為さない。また、専門書だけを読んで、診断技法を深めることが子どもを理解することに繋がるかと言われればそうではないだろう。近年、トラウマやアタッチメントなど子どもを理解するための専門的な知見が広がりつつある。しかしそのことを学習するだけで、目の前にいる子どものことが理解でき、良い援助に結びつくという保証はない。

今回は、私が出会った方々で、子どもを真の意味で子どものことを理解しようとアプローチされた方について紹介しようと思う。彼らの実践は、どの専門書にも技法として掲載されていない。誰にでも通用するものではなく、その場限りの技法である。しかし、どれだけ専門書を読んだとしても、子どもを理解するに当たって、その一手に勝るものはなかったのではないだろうか。

～隠された答案用紙～

施設入所中のＡの家に担当のＢが家庭訪問した。目的はＡの親から家で生活していた頃のエピソードを聞いたり、実際

の生活環境を見たりするためである。指針に沿った表現をすると、「子どものアセスメントを行い、今後の支援に活かすため」とでも言うのだろう。

B は専門的な言葉を頼りにせず、実践の中で、子どもを理解することに長けていた。今回の訪問も、難しいことを意図していたのではなく、Aのことを知りたい一心で行われたものであった。B は一通り親から話を聞いた後に、A の部屋や A が過ごした場所などを親に順に案内してもらい、それにまつわるエピソードを聞いてまわった。B は、最後に A の部屋にもう一度行きたいと言い、親に退室してもらえないかと頼んだ。A が普段どのように過ごしていたのか、A の気持ちになってみたいと思ったそうだ。

B は A の部屋で一人になり、机に向かったり、床に寝たり、窓を開けて外を眺めたりした。

A は家で過ごしていたとき、床に布団を敷いて寝ていた。B は、Aが寝ているときにどんなことを思っていたのかと思い、床に寝転がった。そのときに押し入れの上にある天井に近い物置スペースが気になった。そのことを A の親に伝えると、親はその場で椅子に乗り、物置の中を確認し始めた。その奥からは、Aが隠したと思われる大量の答案用紙やプリントが見つかった。

Aの親は、Aがそこに答案用紙やプリントを隠していたことを初めて知ったのである。Aの親は、涙を流しながら、Bに対して、Aのことを知ろうといていなかった、隠していたことにも気付いていなかった、本当に私は、何をしていたんだろうと話したらしい。Bはその言動を見て、Aの親もこれから変わっていくだろうと確信したそうだ。

～見つかった答案用紙がもたらすもの～

このエピソードは、子どもが結果の悪い答案用紙を親に見せることが出来ず、しまい込んでいたという話ではあるが、その場にいた大人（当の子ども本人はその場にはいない）の気持ちの変化や気付きという点ではそれだけの話で終わらなかった。

Aのことを知ろうとしたからこそ、Bは、A の部屋で実際にAが体験したように過ごし、その場に寝転がった。その結果、その物置が気になり、そのことをAの親に伝えた。Aの親もそのことを聞いたからといって、その場で確認する必要はなかったはずである。Bも中を見るように指示をしたわけではない。しかし、Aの親はその場でその物置を確認し始めた。そのときのことを後からAの親に聞いたところ、Bが何を言うのかと不思議な気持ちにはなったが、そういえばその棚には何があるのだろうかと気になったそうである。そして、Aの親が隠された答案用紙を見つけ、Aのことを全く知らなかったと過去の自身の関わりを振り返るきっかき

になったのである。

そして、このことは、答案用紙を隠していたＡの当時の気持ちやだけでなく、もっと以前からの自分たちのＡに対する関わりや思いを振り返り、整理することに繋がっていった。

実際に、Ａは自身の感情を語ることが苦手で、特に親に対しては、自身のネガティブな感情を押し殺すように見えていた。一方で、親は本児に少しでも良い会社に勤めて欲しいと思い、過剰に期待をかける部分があった。このことを、例えば、「親の過剰な期待に沿えない自分を認めることが出来ず、短絡的に答案用紙を隠すと言う方法でその場を逃れ、その行動が継続していったと推察される」など専門家風に伝えたところで、何の意味もないだろう。そのことを言われて、涙を流す親がいるだろうか。どんな証拠があって、そんなことを言うのかと反発を買うのがオチである。

～その子なりの答案用紙を見つける～

子どもを理解するためには、「家庭訪問を行い、子どもの部屋に寝転がる」とか「物置の中に答案用紙が隠されていないか確認する」なんてことは、マニュアルには書かれていない。寝転がり療法や、答案用紙発見理論なんてものも聞いたことはない。

この方法は、Ｂがこのタイミング、この場限りでしか出来なかった方法である。そして、おそらく、Ｂは特別なことをしたとも思っていないはずである。普段のように、Ａのことを知りたいと思い、Ａの目線からは何が映っているのか、そんなことに興味を持ちながら関わっている日々の一コマであろう。

マニュアルには書かれていないが、子どもを知るための方法は多様にあることをＢのこの話から学んだ。しかし、これは、子どもを知ろうとするＢの主体的な関わりが導いたものであり、誰もが子どもの部屋に寝転べば良いというものではない。

子どもの目線で物事を見ろと言われることがあるが、本当の意味で（物理的な意味で）子どもの目線で見たことのある人がどのくらいいるのだろうか。同じものを見ていても目線の高さが変わるだけで、見えている部分や光景は異なってくる。

子どもの生活を知ろうとしたときに、例えば、子どもの通学路を歩く、子どもの家の周りを見て回る、子どもの部屋を見せてもらう、家庭訪問に行ったときに少し足を曲げて子どもの目線で見てみる。たったそれだけのことでも、普段の面接や情報収集では得られないナマの情報を得ることが出来るかもしれない。子どもの生活空間には、その子どもなりの答案用紙、つまりは、子どもを知るためのきっかけやヒントが散りばめられている。そのヒントに気付けるかどうかは、Ｂのように子どもに興味を持ち、想像を働かせるかどうかが作用するのだろう。

と言いながらも、それだけの余裕が、援助職者の方にどのくらいあるのだろうか。情報を集めたり、調査をしたりする前に、判断や決断を迫られることが多いのではないかと思う。また、子どもの情報も答案用紙を隠していたかどうかは後回しで、というか誰の目にも止まらず、問題行動があるか、発達課題があるかなどが優先されてしまう。もちろん大切な情報なのではあるが、私自身は、その子どもなりの「答案用紙」を見つけられるかどうかが重要な気がしてならない。目まぐるしい日々が過ぎてはいるが、そういった情報に目が向けられるような余裕を持って関わりたいと思っている。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

お隣りさん　―16 歳―

♪♪♪

松岡園子

「しょうがない奴やなぁ」

　隣のおっちゃんに言われた言葉が、ゆりの心を凍らせた。ダメな人間だと言われたような気がして、頭がぐらんぐらんする。

「シャッターぐらい、自分で閉め」

　はい、と愛想笑いをして、ガレージから家の前に移動させた原付のエンジンをかけた。上がったシャッターの引っかけ穴を目がけて棒を持ち上げる。いつもは 1 回で穴にフックを引っかけることができるのに、今日は腕に力が入らない。背中におっちゃんの視線を感じる。早く、早くここから立ち去りたい。

「あんまり、お母ちゃん使ったらあかんで」

　耳のあたりが熱くなる。わかってる、いや、わかってないかもしれない。

　夏子が回復してきたことは、おっちゃんも知っているだろう。

　母・夏子は、ゆりが物心ついた頃から、神戸にある家の一室で英語塾を開いていた。ひとりで 40 人余りの生徒をかかえ、毎日のように誰かが出入りしている家だった。夏子がゆりの相手をできない代わりに、祖父と祖母が父母役をしてくれた。お兄さんやお姉さんの笑い声、夏子がホワイトボードに文字を書いていくトントンという音、ゆりと話す時には使わない、低音でするするとした言葉。そうした日常の音と一緒にゆりは、教室とふすま 1 枚隔てて隣り合っている子供部屋のある家で育ってきた。

　その家から音が消え、教室に誰も来なくなり、夏子の独り言が耳に届くようになったのは、祖父と祖母が亡くなって、ゆりが小学校を卒業した頃だった。独り言を話すばかりで何もできなくなった夏子と 2 人だけでの生活は無理だと考えた親戚が、ゆりと夏子を奈良県の家に引き取った。しかし、ゆりは児童養護施設への入所が決まっていた。夏子と離れることに

納得のできなかったゆりは、児童養護施設を何度か抜け出し、夏子と一緒に暮らすことを切望した。

そして話し合いの末、神戸の家に夏子と 2 人で戻ってきた。親戚には見放されるような形になってしまったが、ゆりには夏子や育った家から離れて暮らすということなど、到底考えることができなかった。

家事も自分の身のまわりのことも十分にできない夏子との生活は、大変なことも多かったが、地元の友達やその家族、近所の人などに助けてもらいながら、中学校 3 年間をなんとか乗り切った。そして、中学を卒業してからの進路は、働きながら定時制高校へ通う道を選んだ。16 歳の誕生日がきてすぐに原付の免許を取り、もらったお給料を貯めて、中古の原付を買った。それで通勤や通学をするようになってからは、電車とバスを使っていた時よりも、はるかに体の疲れが少なくなった。

やっとシャッターの穴にフックが引っかかった。勢いよく自分の方へ引き下ろす。シャッターが勢いよく地面にたたきつけられ、ガレージとの視界がさえぎられる。おっちゃんはまだいるんだろうか。原付のハンドルに手をかけると同時に、恐るおそる後ろを見てみる。もうおっちゃんはそこにはいなかった。隣からビール瓶の触れ合う音がする。おっちゃんは、もうお店の方に行ったのか。ゆりが仕事場へ向かう時間までは余裕があるはずなのに、ヘルメットをかぶろうとする手が焦っている。

「これ持って行き」

おっちゃんのいる方に背を向けて立っていたゆりがゆっくり振り向くと、オレンジ色の缶が 2 本、おっちゃんの手の中で並んでいた。

「1 本、お母ちゃんに持って行ってやり」

受け取った手のひらに、覚えのある冷たさを感じる。

「ありがとう」

小さい頃から知っている酒屋の冗談好きなおっちゃんだ。ゆりより 1 つ年下の春香ちゃんのお父さんでもある。よく遊んでもらったし、このオレンジジュースも、お店の冷蔵ケースから取り出したばかりのものをよくもらった。最近は顔を合わせた時に挨拶するぐらいだけど、その挨拶でさえジェスチャー付きで冗談ばかり言って、笑わせてくれる。

「いつもシャッター閉めてくれてありがとうって言うんやで」

やっぱり、とゆりは思った。今までに見たことのない眼差しが突きささる。左胸の奥から大きな脈動を感じる。おっちゃんは店先で仕事をしながらいつも見ていたんだ。ゆりのいないガレージで 1 人シャッターを閉めている夏子と、それを見ているおっちゃんの姿が目に浮かぶ。ゆりが働くようになり、夏子も病院や福祉作業所に通うようになって、少しずつできることが増えてきた。だからそうしてしまったのだろうか。

「閉めといて！」

そう言いながら慌ただしく仕事場に向かう自分の姿、防寒着をはおった夏子が白い息を

吐きながら棒を持ち上げ、シャッターの穴を探っている姿が目の奥で繰り返される。調子の悪い時に夏子に代わってあれこれ気をまわしてきたせいか、ゆりが次にすることを伝え、夏子がそれに従うという形ができあがってしまっていたのかもしれない。

「自分でできることはお母ちゃん使ったったら、かわいそうや」

輪郭のはっきりしなかった形が、その言葉によって一瞬で姿を現した。なんて返したらよいのかが思い浮かばない。微笑んでうなずいたつもりだけど、鼻の奥がつんとして、まともにおっちゃんの目を見ることができない。

「さ、はよ仕事いかな、遅刻するでぇ。さぁさぁさぁ！」

またいつものおっちゃんの目になった。腕時計の針は、7時を少しまわっている。

「おっはようさーん、お元気でっか？」

通りかかった人にそうして声をかけるおっちゃんの声が、冬の朝の空気を温めていく。ゆりは小走りで家の玄関へ向かい、夏子の部屋に駆け込んだ。鏡台に向かって髪をとかしている鏡の中の夏子と目が合う。

「お母ちゃん、これ、隣のおっちゃんがくれた」

ジュースの缶を、こたつのテーブルに置く。次に言う言葉をどうしよう、でも、もう行かないと時間がない。

「あの、今日から自分でシャッター閉めるから」

夏子がゆりの方を振り返る。『いつもありがとう』が出てこない。たった8文字の言葉が意味を持つと言えない。視線を落とした先に、右手に握ったもう1つの缶が目に入る。缶に描かれたオレンジの絵に重なって、おっちゃんのまっすぐな目が映る。

「今までありがとう、じゃ、行ってきます」

早口になってしまって聞こえたかどうかわからない。夏子の反応を確認することなく部屋から走り出た。

勢いよく玄関のドアを開けると、庭に植えてある梅の木に目がいった。枝に降りた霜に朝日が当たり、光っているように見える。こんなに綺麗なのに、今までよく見たことがなかったような気がする。ひとすじ指でさらってみると、固まっていた霜が雫になって指先で光る大きな粒になった。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。

第１６回　「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

――　「ハマヒルガオ」家族の諦めきれない命（３）　――

一宮茂子

これまでのあらすじ

対人援助マガジンの第 46 号と第 47 号で紹介しましたように、レシピエントである長男は、中学生ごろに原発性硬化性胆管炎という難病を発症しました。その治療法は移植以外に選択肢がありません。またこの難病は移植治療を受ければ終わりではなく再発する可能性がありました。結局、長男は再発して、2 回の生体肝移植術を受けました。ドナーは、1 回目は父親、2 回目は母親です。こうして家族が次々とドナーになりましたが、再度、再発の兆候が見られたのです。その期間に胆管狭窄、十二指腸潰瘍などの合併症を患い、手術を受けました。この家族は、長男の命が危うくなるとハマヒルガオのように家族がヒシと寄りそって、苦難に耐えています。今回はその後の長男の経過と家族のありようを見ていきます。

1．事例紹介

前回の対人援助マガジン第 46 号の内容から数年経過した状況となりますので家族の年齢が上がります。母親である愛子さん（仮名：60 歳代）は、長男（30 歳代）と妹である長女（20 歳代）の 3 人家族です。初回の移植手術でドナーになった父親（60 歳代）は移植後、別居して愛人と暮らしています。その後の父親は家族を顧みることなく疎遠になっていきました。そのため愛子さんはこのような夫には一切頼らないと決意しました。愛子さんは家のローンもあり苦しい経済状態の生活が続いていたため、以前に勤めていた小さな会社に経理の事務職として再就職しました。その後、社長の代替わりを機会に 60 歳でクビになりました。そこで新たな技術を身につけて再就職したのが施設のヘルパーでした。長女は高卒後、大学へ進学し卒業後は会社に就職しました。長女が就職したことで愛子さん家族の経済事情は楽になったと思われます。一方、長男は 2 回の移植を受けましたが、約 5 年後に難病の再発が見られました。医師からは 1 日、1 日を大事にして生活するようにと言われたそうです。その後、医師に勧められて脳死移植登録をしました。そして実際に脳死移植を受けるまでの期間、長男と愛子さんは今まで経験したことがないほどの苦悩にさいなまれることになったのです。

2．脳死肝移植

レシピエントの立ち位置から見た日本における脳死肝移植（以下、脳死移植と略）の特

徴は、海外と同様に、(1)脳死ドナー自体が少ないこと。そのため(2)いつ受けられるのか移植時期が不明であること。さらに移植まで(3)レシピエントの命が持つのか不安であることがあげられます。日本では生体移植が多くなされてきたのは、このようなことが起因していると思われます。

2-1　脳死移植登録をした長男の本音

脳死移植を受けるには、脳死移植登録が必要です。その登録には定められた移植施設で、脳死移植を受けるまでは年 1 回の検査が必要です。長男は Y 大学病院へ毎年入院して脳死移植に必要な検査を受けていました。この当時の長男の心情は、「脳死移植登録はしたけれど、実際には受けない気持ちで…お守りみたいにしようと思っていた」との語りから、軽い気持ちで脳死移植登録をしていたことがわかります。これまで 2 回の生体肝移植の経験で移植後の「しんどさ」を経験した長男は、難病が再発して 3 回目の移植が必要な状態になったとしても、脳死移植は「お守り」という概念で捉えていたのです。この時点では早急に脳死移植を必要とするほど体調が悪いわけではなかったため悠長に捉えていたのかもしれません。しかし、肝臓の難病は再発していたため、いつかは移植が必要になることは明白でした。さらに医師からは「3 回目の移植は難しい」とも聞いていて、脳死移植をすれば本当によくなるのか、という不安もあったのです。

2-2　脳死移植登録がもたらした母親の本音

長男が脳死移植登録したことで、母親である愛子さんは長男とは別の心情であったことを以下のように語っています。

> 愛子さん：「息子の命は諦めきれないと思う反面、生きていて欲しいという自分の願望を息子におしつけてはいないか、という迷いもある…あの子があんなに頑張って生きようとしている。だから私も頑張らなければと思う。息子は家族の生きる希望…（当時）33 歳と言えば…男盛り、仕事もバリバリやっている年頃。それなのに息子は終わりのない闘病生活が 20 年ちかく続いている…今回も脳死移植の登録申請のための入院。息子が入院したと言うことは、まだ生きる気力があるのでは？」

愛子さんにとっては、まさに「息子が命」と公言していました。長男はなにものにも代えがたい宝だったのです。それゆえに家族から「生きる」「生きている」ことを期待されている長男には精神的なプレッシャーになるのではないかと思えました。愛子さん家族は、難病の長男が家族の核となっていて、母親も妹も常に長男を支えているように見えます。たとえば長男が入院すると、付きそう必要がなくてもベッドの周囲に母親と妹が座っていて、長男を見守っている、という光景がよく見られました。はた目から見ると、それは絆が強い家族に見えるようで、どの病院に入院しても「家族の絆が強いね」と医療者や他者

からよく言われたそうです。「私たちはただ座っているだけなのに」と愛子さん家族は当たり前のこととして受けとめていましたが、それほどいつも目にする光景だったのです。

私はこのように家族がヒシと寄りそっている姿が、晩春から初夏にかけて咲く「ハマヒルガオ」の花や葉が、クビまで砂に埋もれても群生して生きている景色に、この事例を重ねて、まさに「ハナヒルガオ」のような家族だと思いました。

医療者のひとりである私の立ち位置から見た長男は、病気の治療や休養のため社会活動経験が全くありません。長男にできることと言えば、病状がこれ以上悪化しないように、手洗いやうがい、マスクをして感染予防につとめること。規則正しい生活をおくり、栄養バランスのよい食事をとり、手足の曲げ伸ばしなどの軽い運動を続け、低空飛行であっても安定した状態が続くように心掛けることだったのです。母親がいうように確かに男盛りの年齢ですが、身長 164cm、体重 50kg 前後の小柄な体格であるためか、どちらかというと年齢より幼いようにも見え、母子の共生関係が続いているように思えました。

2-3　妹の兄にたいする濃い愛情

愛子さんは長男が脳死移植を受ける前に、長男には絶対内緒にと前置きしてから、妹の兄である長男にたいする愛情を語ってくれました。脳死移植登録の話が進んでいるときの情報として、妹は脳死移植をしても、現実 2 割の移植肝臓が働かないことがあるとの情報を得ていたようです。その時は、妹である私がドナーになって兄に肝臓を提供して移植してもらうつもりでいるとのこと。脳死移植が間に合わないときもそのつもりでいるとのことでした。愛子さんは 3 回目の移植があるとは思わなかったため、この話がでたときはビックリしたと語っています。

結果論ですが、そのような事態にはなりませんでした。関西地方の Y 大学病院の移植外科の医師達のほとんどが男性です。そのため「嫁入り前の娘は傷つけたくない」という男性医師のジェンダー規範から、妹がドナーになる話は一度もありませんでした。その代替治療として医師は長男に脳死移植を勧めたのです。

3．突然クビになった母親

長男が脳死移植登録をしたころ、母親である愛子さんはこれまで勤めていた小さな会社で 65 歳くらいまで働けると思っていました。しかし、社長が代替わりをしたため「60 歳でクビになった」そうです。けれどもこのような困難に愛子さんは屈しませんでした。なぜなら長男が頑張って生きているのだから、自分も頑張らねばと思っているからです。

定年退職後の愛子さんは、失業保険が 6 ヶ月もらえたため、これから 10 年間、生きるすべとして何らかの資格をとり新たな仕事につきたいと思っていました。それがヘルパー2 級の資格だったのです。

その夢は実現して、ヘルパーの訓練生として 3 ヶ月間、委託老人ホームで実習を受けました。ヘルパーの資格を取ったからといってすぐに就職できる保証はありません。しかし、

ここでも長男が頑張って生きていることが愛子さんの心の支えとなっていたのです。60 歳をすぎた新人ヘルパーを雇う施設はほとんどないと思われますが、施設長はあえて社会経験豊富な愛子さんを採用したそうです。ただし「非正規雇用」としての採用でした。

職場での勤務実態は、通常月に 3〜4 回の夜勤があり、1 回の夜勤時間は 16 時間ですが、時間通りに業務が終わるわけではなく、勤務前後も入れると 18 時間以上の勤務になることもあるそうです。60 歳をすぎてこの勤務状態は厳しいと思いますが、愛子さんは家族のため頑張って働いていました。

4．脳死移植登録のための検査入院

長男は 2 回目の生体移植から約 5 年経過したころ、原発性硬化性胆管炎が再発したため Y 大学病院で 3 回目の移植治療をうけることになりました。今回は医師の勧めによる脳死移植です。この移植にたいして、長男自身から拒否する意向は見受けられませんでした。かといって積極的な意思表示もなかったように思います。生きるには移植治療しか選択肢がないため、長男も家族も暗黙裏に同意したように見えます。今回はそのための検査入院です。またこの入院期間中に胆管拡張の治療も受けています。

脳死移植をめぐって愛子さんのインタビューで何度も出てきたフレーズがあります。それは「息子の命は諦めきれない」という強い思いがあること。そのため「息子に生きていて欲しいという自分の願望を息子に押しつけていないか」という愛子さんなりの戸惑いがあること。「移植すれば終わりではなく、息子は違った苦しみをかかえている。それなのに息子に生きていて欲しいと思うのは残酷ではないか」という矛盾のなかで母親もまた気持ちが揺らいでいたのです。

今回は脳死移植登録のための検査入院です。母親は「もし息子が生きる希望を失っていたのなら、今回の入院は脳死移植が目的のひとつなので、入院を断ることもできた…反対の意思表示もせず入院したということは、生きようという意思の表れではないか。息子にはまだ生きる力があるのではないか、と思う」と自らの問いに自ら答えて納得しようとしていたのです。

あるとき私は上記のような母親の気持ちを長男に直接聴く機会がありました。長男がいうには「そりゃ、しんどいですよ」と、家族の思いを重荷に受けとめていたのです。ただし、長男は家族の気持ちをよく理解しているため、そのようなネガティブなことは一切家族に言いません。なぜならば長男が生きていることが、父親がいない家族の中で、母親や妹が今までも、これからも生きていくうえで心の支えとなっていることを理解しているからです。こうして今回の検査入院期間中に、長男は脳死移植の登録をすませて倫理委員会の承認もえました。あとは脳死移植の待機期間となり在宅療養をしながら、その順番を待つことになりました。その待機期間中に長男は、骨折というあらたな病気を患ったのです。

5．左大腿骨頸部骨折による歩行障害

脳死移植登録をしてから 3 年後、長男はある日の夕方、バイクに乗って買い物に出かけようとしました。このとき母親も妹も家にいて、長男が買い物に出かけることを知っていたため止めましたが 2 人とも疲れていました。長男は団地の駐車場でバイクを止めるとき、力をいれてストッパーをかけようとしたら、体力がなくて倒れてしまいました。そのうえにバイクが横倒しで倒れてきて、バイクの下敷きになったのです。

近医で診てもらった結果、左大腿骨頸部骨折であることがわかりました。長男は身長 164cm、体重 50kg 前後と小柄で華奢な体格です。そのうえ難病を患い、長年にわたる療養生活が続いています。さらに骨密度が低いため、ボルトを入れて固定するような手術はしない方がよいとの医師の見解により、在宅療養で経過観察をすることになりました。

日常生活で問題なのは、日中は母も妹も会社に出勤しているため、万が一のとき誰もいなくて助けを呼べないことでした。長男は左脚を骨折しましたが、家のなかは両松葉杖を使えばなんとか移動できるとのこと。骨折して 1 年を経過したころは、無理をしなければ痛みはない状態になり、歩行器での移動が可能になりました。一番大変なのは排泄だそうで、団地のトイレは障害者用トイレのように広くないため、自分なりに工夫しながら対応していたそうです。

骨折部が自然治癒するのは 1 年くらいかかると医師から説明を受けていました。その後の長男はこのような状態になってしまったことを自己責任ととらえていて「歩けなくてもいい」と語っていますが、肝機能さえよければ手術で歩行可能になると思われます。長男は骨折当初から鎮痛剤を服用していました。さらに時期は不明ですが、腰椎の圧迫骨折もありました。母親から見た長男は、日常生活が不自由なうえ、左脚の骨折と腰椎の圧迫骨折があるにもかかわらず、本人から痛みの訴えはほとんどないということでした。長男は家族に心配をかけまいと我慢しているのではないかと思われました。

6．突然の脳死移植の電話連絡がもたらしたもの

脳死移植を選択したことで、母親や長男は「希望がつながったという意味で命が先に伸びた」とポジティブに捉えていました。しかし、脳死移植は脳死ドナーが現れないと移植できません。誰かの死を待ってスタンバイするということ事態が後ろめたく感じることもあるのではないかと思われます。しかし、人の心は自分の都合がいいように変化するものだと、この事例は教えてくれました。そして、脳死移植の連絡を実際にうけたとき、長男はさまざまな思いが一気に吹き出して心をかき乱されたのです。

6-1　突然かかってきた脳死移植の電話

脳死移植登録をしてから 3 年 4 ヶ月が過ぎました。ある日、夜中の午前 3 時ごろに突然脳死移植の電話連絡がありました。それは移植コーディネーターからで「脳死ドナーが現

れましたが、どうされますか？」という意思確認の連絡でした。長男も愛子さんも初めてのことで「ビックリした。電話がくるとは思わなかった」と語るほどに予期せぬ電話に驚いたのです。しかし冷静に考えると脳死移植登録をしているためありえる話です。当時の長男は「左脚を骨折して 4 ヶ月になり（手術もできず）…歩くのに苦しんでいる状態なので…精神的に耐えられない」として、結局は「なるべくコンディションのいい状態のときに手術をしてもらえたらありがたい」と答えて断ったそうです。そもそも長男は、脳死移植登録は「お守り」だと思って登録したこともあり、脳死移植を受けるレシピエントとしての心の準備が全くできていなかったのです。このときのドナーは 70 歳代の男性でした。長男や母親はドナー年齢が高齢であったことも断った理由のひとつだったそうです。

それから 4 日後、日中の 13 時ごろに脳死移植の電話連絡がありました。このときのドナーは 50 歳代の男性であり、長男は二番手の候補だったそうです。「こんなに早く 2 回目の電話があって、またビックリした」と長男は語っています。脚の骨折は前回の脳死移植の電話を受けて 4 日目ですが、骨折が短期間でよくなるはずもなく、長男は断ったそうです。またドナーが 50 歳代でも高齢と受けとめていて、できれば自分と同年齢くらいのドナーを希望したことを語っていました。長男は「お守り」替わりとしての脳死移植登録であったはずです。しかし時間がたつとドナーは自分と同じくらいの年齢を希望するように心が変化してきました。ということは脳死移植を受ける意思があると言うことなのでしょうか。それとも、断るいいわけのひとつだったのでしょうか、その当時は深く掘りさげて聞き取りができておらず不明です。

6-2　医師の返答でパニック状態に

すると電話をかけてきた医師は「脳死移植の意思がないのなら、脳死登録をやめたほうがよいのではないか？」と長男が思いもしなかった返答を受けたのです。そのため長男は、2 回断ったことで「お守り」がわりの脳死移植が受けられなくなるかもしれないと捉えて困惑したのです。その結果、長男は「息子が命」とはばからず公言している母親、頑張って働いている母親を失望させるのではないかと思い、これでよかったのかと不安になりパニック状態となったのです。そして「このような内容は家族には話しづらくて、どこに相談すればいいのかもわからなくて…もうどうしていいかわからなくて」と混乱状態となり、「家族のことをよく知っている人（筆者）なら話せると思った」と泣きながら私に電話をかけてきて心情を吐露したのです。

6-3　長男の本当の気持ち

この電話を受けた私は、まず家族以外の第三者に電話をかけてきたことに意味があると思いました。ひとりで問題を抱え込んでいては解決策を見いだすのが難しくなると思うからです。このときの電話内容から長男の心情を以下のように捉えることができました。

6-3-1　他者に心情を吐露することで自分の本心がわかった

長男は、脳死移植は「もういいかなあぁ」という気持ちで断ったけれど、自ら希望を断ってしまったことを後悔しています。ここでは「移植すればよかったかなぁ」という気持ちが「もういいかなあぁ」という気持ちより何%か上回っていると思います。

私の電話をうけて、長男が母親に話したとき「70%は脳死移植を受けようかという気持ちがある。生にたいする執着がある」と、初めて言語化して本心を語ったそうです。最初は「お守り」にするはずの脳死移植は、時間の経過と共に長男の心は変化して70%は移植を受ける方向に変わっていったのです。

一方、医師から 3 回目の移植は難しいと言われていて、長男自身も「移植をすればよくなるのかという不安はある…体力的にもガタガタ…」と受けとめてもいました。要するにさまざまな思いがあるため、するのか、しないのか、決めよと言われても、直ぐには決められないし、この段階では心の準備ができていなかったことがわかりました。

6-3-2　自責の念

さらに「移植を断った」ことが「母を裏切ったことになる」と意味づけて、この時点でも頑張っている母親に対する自責の念があることがわかりました。本当は母親を裏切りたくない、という本心が隠れていたのです。

6-3-3　揺れる心

「脳死移植登録をやめたほうがいいんじゃないか」という医師の言葉に、長男は生き延びる手段が目の前にありながら、それを自ら放棄するということに迷いが感じられました。その証拠に長男は「移植をやりたくない、ことはない」と二重否定の語りから、気持ちが揺れ動いていることがわかります。これまでの長男は脳死移植を考えていたようでも現実味がなくて深く考えていなかったのです。長男はこのように悩んで悩んで心の振り子が止まったところが決心のしどころになると思われました。

6-3-4　困難な脳死移植の決断

当時の長男は左脚の大腿骨頸部骨折のため自由に動けない状態でした。このときの一番の悩みが肝臓のことよりも左脚の骨折だったのです。そのため長男は「強引に移植治療を進められなかったし…かかってきた電話の話にのるかといったら、なかなか難しかったと思う…だから電話で二番手（候補）と言われたらホットする」と語っていたのです。

移植をするか、しないか、決断するには、たとえどちらを選択したとしても自己納得する必要があります。移植をしなければ、いつか死が訪れます。移植をしても死は訪れますが、少しでも命がながらえる可能性はあります。臓器の移植に関する法律の一部を

改正したことにより［厚生労働省健康局 2010］、脳死移植の数が増えている、という現実がありました。そのニュースを見たり聞いたりするたびに、自分もしとけばよかったと後悔しないでしょうか。「母を裏切った」と思っていることに耐えられるでしょうか。「妹も移植して欲しいと思っていると思う」ことに耐えられるでしょうか。「死」を目前にしてこれでよかったと後悔しないでしょうか。「体はガタガタ」と言っていますが、この時点では 36 歳、若いです。諦めるのは簡単です。自己納得できるように今できることを考えてほしいと長男に伝えました。

6-4　脳死移植を受ける段取り

さらに、十分に悩んでいいけれど、次の電話がいつかかってくるかわからない状況なので、なるべく早く意思決定をする必要があること。もし脳死移植を受けるのなら母や妹は仕事や休暇などの段取りを整えておく必要があること。それには家族間の情報共有、職場への連絡網、職場の勤務対応の段取り、入院の準備、Y 大学病院までの移動手段や交通手段の確認、宿泊ホテルの一覧や電話番号の準備などが必要であることなど、こまごましたことですが、最低限必要なこととして愛子さんに伝えました。

7．脳死移植の待機期間中に次々と余病を発症

初回の脳死移植の電話があってから、約 2 ヶ月間に合計 5 回の電話連絡があったそうです。最初の電話以外は 2 番手のレシピエント候補でした。長男は肝機能の悪化にともない全身状態が徐々に悪化していきました。長男は脳死移植待機期間の思いを以下のように語っています。

> 長男：「脳死移植を待っているのは言いがたい気持ちになる。3 回目の移植は『難しい』と医師から言われているため怖い気持ちもある…（移植まで）もうすこし時間がかかりそうだから安心できる気持ちと、はやく移植して自分がスッキリしたい気持ちがある。だから移植は 2 番手候補といわれると安心する」

長男は医師から 3 回目の移植は難しいと言われていることと、脳死移植をしても成功するとは限らないという思いもあって複雑な心情を吐露していたのです。

7-1　全身状態の悪化にともなう入退院の繰り返し

長男は地元の T 大学病院の外来で通院治療を受けていましたが、肝機能状態の悪化にともない全身状態も徐々に悪化してきました。初回に脳死移植の連絡を受けて約 6 ヶ月後にタール便（下血といって上部消化器官からの大量出血時に見られる真っ黒い便のこと）がありました。その時は医師に電話連絡すると、来院を勧められましたが結果として行けませんでした。そのため処方薬のパリエット（消化管潰瘍の治療薬）を倍量服用するように指示をもらって服用した結果、下血は治まり落ち着きました。肝機能が悪化したときの自

覚症状は「体が重い」ということ以外はなかったと語っています。当時はアンモニア値が高かったため緊急入院となりました。このときは血液製剤と抗生物質の点滴治療をうけました。こうして体調悪化時に入院して治療をうけ、よくなれば退院して在宅療養というサイクルで脳死移植まで命をつなぐことになったのです。

7-2　早く脳死移植を

初回の脳死移植の電話連絡があったときは、心の準備ができておらず、ビックリして断ったのが、約 10 ヶ月前の話です。その時は現在とは比べものにならないほど体力も気力もあり、肝機能もまずまずの状態でした。その後の脳死移植の電話連絡はいつも 2 番手候補でした。当初はドナーが 70 歳代とか 50 歳代だと年齢が高いと受けとめて気乗りせず断った経緯がありました。しかし、現在はその電話すらもかかってこなくなりました。その時の心情は「やはり不安になる…もう終わっちゃったのかなぁ」との語りから、待つことに疲れて不安が大きくなっていることがうかがえます。

地元の T 大学病院に入院中の長男は母親にあてて次のようにメールしています。「肝臓が限界にきているのかなぁ。せっかく（移植した）お母さんの肝臓が、ドンドン悪くなってゴメン。輸血しても検査値の立ち上がりが悪くなった。脳死移植を早くしてくれと主治医から移植コーディネーターに電話をしてくれた」と。そしてメールの最後には母親に「体を大事にしてくれ」と気遣っていたのです。

この時期の母親の立ち位置から見た長男は、「気持ち的には、移植をするということで日々の生活を送っている。長男は脳死移植に向けて、少しでもコンディションを整えるように、先生方は治療を施してくれている。長男の体力が持ち直さない状態が続くと、私も長男もパーとなっちゃう（途方にくれる）と思う」と。しかし電話連絡を待つ以外に方法はなく、もどかしい思いを語っていました。

その後、母親と長男から電話があり、T 大学病院を退院したとの連絡を受けました。入院期間は 18 日間でした。

さらに関西地方の Y 大学病院では、長男は脳死移植待機患者のトップにある、と説明を受けたことから母親は 1 ヶ月間の休職をとって脳死移植に備えて長男の体調の変化を見落とさないように自宅待機しているとの連絡がありました。いよいよ脳死移植が間近に迫っていると思われたエピソードでした。

7-3　夜間の不安発作？

脳死移植の電話連絡を断って約 1 年経過したころ、長男は夜間 1 時頃から 1 時半頃にかけて、突然の動悸、息苦しさで目が覚め、恐怖、不安のような、なんともいえない感情があふれ出すようになったそうです。母親は主治医に電話連絡をしようと勧めましたが、本人は躊躇して、私に電話がかかってきました。1 時間くらい長男と話をすると、これらの症状は治まったのです。原因は、だいたい見当がつきます。それは脳死移植登録をして 3 年以上経ち、初めて脳死移植の電話連絡を受けたときに断り、その後は脳死移植の連絡は

あっても 2 番手候補であり、いつしかその電話連絡もこなくなりました。いつまで待てば脳死移植の順番がくるのか待機期間が不明であり、その期間に肝機能は悪化して、腹水、胸水、発熱で体調が増悪すれば緊急入院、落ち着けば退院して在宅療養というサイクルの状況から抜け出せず、鬱積された気持ちが爆発しているような状況で不安になるのではないだろうか、と私には思えました。そして、このような状態のときは、電話で話を聞いてもらえるだけで癒やされると長男は語っていました。だから医師への電話よりも、自分の話を聴いてもらえる人に電話をすれば落ち着くと自分でもわかっていたのだと思いました。

しかし、次回外来受診時は、このようなことがあったことを医師にかならず報告するように伝えました。

7-4　体調管理と脳死移植情報の収集

その後の長男の肝機能はビリルビン値が 120 台ですが（正常値は 0.2～1.2mg/dl）、皮膚の痒みはなくても腹水が持続し、外来受診時にアルブミンと利尿剤の点滴を受けていました。また左脚を骨折して 1 年半になりますが、自宅でリハビリをして筋力をすこしでもつけたら、術後の回復も違うのではないかと自ら考えて続けていました。またこのころより歩行器で移動しているという情報もえました。母親は長男が入院中に知り合った患者・家族の会に電話して移植後の情報を収集していました。移植経験者から聞く情報は、メディアや書籍、文献、Web 情報から得た知識よりも価値があると私は思っています。

８．ついにきた脳死移植の電話連絡

脳死移植登録をしてから 4 年半、脳死移植の電話連絡を断って 1 年 3 ヶ月を経て、ついに脳死移植の電話連絡がありました。そのときの長男は、母親になにも言わないで「はい、お願いします」と即答したそうです。長男が脳死移植の電話連絡をいかに待ち焦がれていたかがうかがえます。

ドナーは 60 歳代の男性で、体格がよくて、心臓の病気で脳死状態になりましたが、肝臓自体はいいと連絡を受けたとのこと。ドナーは四国に在住ですが外国籍だったそうです。長男の体重は約 50kg のため、移植肝臓は分割移植（肝臓は右葉と左葉に分けられるため 1 人のドナーの肝臓を分割して 2 人のレシピエントに移植）となりました。分割移植のもうひとりのレシピエントは男性でした。

脳死移植術は関西地方の Y 大学病院で受けるため、当日は自宅のある関東地方から関西地方まで移動しなければなりません。夜間の脳死移植の電話連絡はドキドキしていたけれども、今回の電話連絡は日中であり、天気もいい。それでもドキドキしながら Y 大学病院へ向かっていると母親から電話連絡を受けました。長男は「ビリルビン値が上昇して…心配だった」と母親は語っていますが、その声はいつになく明るいように思いました。

9．脳死移植後の状態

手術当日、午前 7 時に手術室へ行って、翌日午前 1:43 に手術が終了。午前 3:45 に ICU へ収容されました。ここまで約 21 時間。移植が無事終わって肝臓は動いているため、今のところ問題はないでしょう、と母親は医師より説明をうけました。

母親は「ホントにありがたいと思う…ホッとしました」と安堵した様子です。「長男は顔色が悪くて、ビリルビン値は 30 以上。寝ているときはしんどそうで、限界かなあと思って心配していた。ギリギリのところで（間に合って）よかった」と、母親は満足した様子でした。

10． 移植後のターミナルケア

脳死移植から 4 年ほど経過したころ、長男は肝機能のデータが悪く地元の T 大学病院へ緊急入院となりました。検査の結果、門脈に血栓が詰まっていたことがわかりました。ただし詰まったのは最近ではないため、点滴治療では血栓が溶けにくいうえに、肝臓内に 6 ㌢大の膿がたまっている状態であることがわかりました。

入院して 1 週間後、長男は体重計に登ろうとしただけで右手を骨折しました。そして、体調がよくなって退院するのではなく「家に帰りたい」という本人の希望で退院しました。「家に帰りたい」という語りから、このころの長男は治療に疲れて心の安寧を求めていたと思われます。

在宅療養になったある日の夜間に腹痛があり、訪問看護師が来訪して看た結果、病院での治療を勧められ再度 T 大学病院へ緊急入院しました。翌日は意識がしっかりしていたため母親は長男の髭を剃ったり、歯茎の出血を拭き取ったり、シャーベットを口にもっていくと美味しそうに舐めたりしたそうです。

11． 再度肝不全になったときの対応

移植した肝臓が肝不全（肝臓が働かなくなる）になると、また移植をしなければ命はもちません。移植した肝臓がいつまでも働き続けることは無理な話です。移植回数が多いほど肝臓が働く期間は短くなるようです。母親によると肝不全になったときの対応について、主治医と長男と母親で話し合いをしたそうです。

長男としての本音は 6-2 で紹介しましたように、「自分としてはこれ以上頑張れない、ということを家族になかなかいえなかった」経緯がありました。ですが今回は「これ以上頑張れない」と自ら言語化して意思表示したそうです。家族には残酷な話かもしれませんが、長男にとって唯一苦しみから解放される選択肢は「死」だったのです。

12． 永眠

長男の死期がせまったある日の朝、病院から電話があり、母親は駆けつけました。長男

は肝性脳症（肝臓の機能低下により血中のアンモニア値が増えて意識障害をもたらす状態）で意識レベルが低下し、母親が来るのを待っていたように静かに呼吸が止まったそうです。しかしハートモニターはかすかに動いていました。長男の表情は安らかで、きれいで、安心したような顔だったそうです。長男は家族の期待に応えて 25 年以上の闘病生活を送り永眠しました。享年 41 歳でした。

おわりに

医療や技術の発展や進歩により、それまで助からなかった命が救えるようになりました。そのこと自体は喜ばしいことですが、それにともなってあらたな苦しみや痛みが生じていました。この事例では難病を患った長男は人生の 3 分の 2 は闘病生活であり、移植という大きな手術を 3 回も受ける苦痛を味わいました。その期間に父親は別居して疎遠になりましたが、家族をつなぎ止めて支えていたのは長男でした。長年にわたる闘病生活は長男に忍耐をあたえ、家長的存在として逆に家族を励ましていたのです。長男もまた家族の期待に応えて闘病生活を送るという相互支援が見られました。そして最終的にあらゆる苦しみから長男を解放したのは「死」だったのです。安らかに眠ってください。

オンライン文献

一宮茂子，2021.9,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――「ヒシと寄り添い苦難に耐える『ハマヒルガオ』家族(1)」『対人援助学マガジン46号』（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/37.pdf, 2022.2.25確認）.

一宮茂子，2021.12,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――何度も大手術に耐えた「ハマヒルガオ」家族の絆(2) 」『対人援助学マガジン47号』（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol47/43.pdf, 2022.2.25確認）

厚生労働省健康局，2010,「臓器の移植に関する法律の一部を改正する法律の施行について」,（http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000007c8d.html，2022.2.24確認）.

資料

表　レシピエントの病歴

年齢	病歴	病状・治療
中学時代	自己免疫性肝炎	薬物療法
高校時代		移植治療を勧められたが
		漢方療法を選択
20歳	原発性硬化性胆管炎	食道静脈瘤破裂し吐血
		再度移植治療を勧められる
21歳	生体肝移植術（1回目）	ドナーは父親
22歳	胆管狭窄	肝内胆管空腸吻合術
		その後、胆管拡張術を繰り返す
27歳	原発性硬化性胆管炎の再発	
28歳	十二指腸潰瘍	下血、肝機能低下
28歳	生体肝移植術（2回目）	ドナーは母親
30歳	胃の噴門部切除術	腹痛、吐血、ショック状態
	十二指腸クリッピング術	
31歳	痔瘻の手術	
32歳	原発性硬化性胆管炎再発の疑い	脳死移植登録のため検査入院
35歳	左大腿骨頸部骨折	骨密度が低く手術は不可能
	腰椎圧迫骨折	車椅子と両松葉杖で移動
36歳	4ヶ月間で脳死移植の連絡5回	脳死移植を受けるか否か、心が揺らぐ
	大量のタール便	入院治療　薬物療法
	血液検査値の悪化	入院治療　血液製剤と抗生物質の点滴
	不安発作	第三者に話を聴いてもらうと落ち着く
37歳	脳死肝移植術（3回目）	ドナーは60歳代男性
41歳		永眠

こころ日記「ぼちぼち」その②

子どもの死

以前､「自分が受け持つ子どもの死に出会ったことがあるか？」と尋ねられたことがありました。若いころだったので、そんなこともあるもしれないなと聞き流していました。

何年も担任をし、私の前を通りすぎていった子どもたちは、本当にたくさんの数です。学校現場での子どもの安全は第一ですが､日々の生活では喧嘩や事故もあります。校外学習、宿泊などの行事は、一分一秒たりとも気の抜けない時間でした。１年間、無事に学校生活を終えることができたこと、年度末には安堵感に浸ったものです。

ベテラン教員の域に入ったころのことでした。想像さえしなかった生徒の死に遭遇しました。

夏休みも終わり、１年生の学校生活も慣れてきたころ、連休明けのある朝、イサミの訃報の知らせが入ったのです。突然のことで「えっ？」としか声に出なかったのを覚えています。先週末には、教室で私の授業を受け、いつものように友と遊び戯れる姿が浮かびました。学校生活の中では、どちらかというと明るさしか感じられない生徒でした。

なぜ？何があった？まさか自死？

教員は、ドラマのようなエピソードなんかより、実はもっとリアルな体験や経験をしています。事が起こっても、とりあえず冷静に受け止め、次への対応を考えることに全力を尽くすことが大切だと考えていました。

すぐに、管理職と担任、学年代表がイサミの病院へと向かいました。他の教員は、朝一番の知らせを受け、まず生徒への影響を考えました。このことをいつ知らせるのか、どのように伝えればいいのか。

職員の朝の打ち合わせの中で、そのことを議論している時間はありません。とりあえず普段どおり授業を行うこと。事情が分からないうちは、生徒への公表は避けようという結論になりました。

見えなかったもの

そのころ情報のツールとして、携帯電話が普及し始めていました。学校では禁止でしたが、中には隠して持ってくる子もいました。私たち教員は普段通りに教室に向かいましたが、生徒たちの不穏な動きをいち早くキャッチしました。休み時間の生徒の動きも妙でした。どうやら、生徒たちはメールでのやり取りの中で、イサミの死についての情報を共有していたようです。

ある生徒が近寄ってきて、
「先生、イサミまだ来てないけど、死んだん？」と言いました。

放課後の時間まで、生徒たちの質問に耐えられるのか？なぜなら、私たち自身もイサミがどのようにして、どうして死んだのか知らされていなかったからです。

放課後までの時間が、なんと長く感じられたことか。

しばらくして、イサミの家族との面談を終え帰ってきた教員を交えて、臨時会議が持たれました。イサミは、自ら命を絶ったとのこと…。

家族のことを思うと、悲しみよりも言葉にならないほどの悔しさが込み上げてきました。死を選ばなければならなかったのはなぜか？イサミに何があったのか？

しかし、次の日から、私たち教員には見えていなかったことを、次々と生徒たちから突き付けられることとなったのです。

あのとき…していたら…

イサミの両親は、最初は悲しみに打ちひしがれた様子でしたが、我が子がなぜ自死を選んだのか、イサミの学校生活での様子について知りたいと連絡がありました。しかし、私たちはむしろ家庭でのトラブルが元ではと疑っていたのですが。

早速私たちは、生徒たちへの聞き取り調査を始めました。生徒たちの中には、メンタル面で大変ショックを受けた生徒がいました。そんな中での聞き取りは、なかなか厳しいものとなりました。その間にうわさがうわさを呼び、情報が錯綜していました。

色々な生徒の声から、イサミは、いつも一緒に遊ぶとても仲がいい生徒たちから、実は嫌なことをされていたことがわかってきました。一人が打ち明ける勇気を持つと、ほかの生徒からも次々と新しい事実が…。

イサミの学年は、今までになくとても落ち着いた生徒集団でした。他学年からも、いい学年だね！やりやすい！と評判の学年でした。

イサミが見せる学校生活での様子は、とても朗らかで、ユーモアのある姿でした。不機嫌な表情を見たことがありません。

生徒たちは、入学後の４月からもうすでにイサミへのいたずらや嫌がらせが始まっていたのだと打ち明けてくれました。

友達からの執拗な言葉の暴力、お金の恐喝、窃盗への強要など、教員が知らないことばかりでした。

担任は、そういったことはなかったと断言しましたが、私たちフリーの立場の教員は、実は休み時間での見回り中の生徒の様子から、あるいは教室での様子から、疑う場面が多々あったのです。私たち以上に、生徒たちは、いじめの現場をちゃんと見ていたのです。

なぜ、見えなかったのか？あのときもう少し注意深く見ておけばよかった…。なぜイサミに声をかけなかったのか？と後悔しかありませんでした。

イサミの死から、私たちは毎日遅くまで事実を時系列に並べ、加害者の生徒を特定しました。が、加害者と言われた生徒たちは、自分たちは友達だった、だからいじめではないと主張しました。

この問題は、そう簡単に解決には至りませんでした。イサミの両親は、これらの事実を知り激怒し、加害者の親も怒りの矛先を学校に向けました。私たちは、ひたすら耐える毎日を過ごしました。

私たちが一番心を痛めたのが、生徒たちからの無言の抗議です。自分たちは、先生にイサミを助けてほしいというサインを出していたのに、何もしてくれなかった…。信頼を取り戻す言葉は、見つかりませんでした。それでも、毎日の授業は淡々と進めなければならなかったのです。

死んでしまったイサミからは、もう何も聞くことはできません。

今メディアの「いじめ」の報道を見るといつもイサミのことを思い出し、辛くなります。当事者にしかわからないことが、たくさんあると思うからです。

つづく

フリースクールでの SW 実践を考える②

高名　祐美

新しいチャレンジへの戸惑い

ＭＳＷという仕事を卒業し、新しいフィールドでソーシャルワークの仕事がしたいと挑戦した職場が「フリースクール」。そのフリースクールで、働き始めて 10 か月になる。フリースクールのこともよくわからないままに、飛び込んだ場所。不登校の子どもが過ごす場所、その程度の理解で、自分ができることをみつけようと漠然と思っていた。しかし、どうだろう、なんだかもやもやとしている。そんなことを文字にしてみようと思う。

最初は、生徒が 1 名もいなかった。私が採用されたのは、通っていた生徒がフリースクールを卒業した直後だった。次の利用者を待っていたが、希望はあってもなかなか実際の利用に結び付かない、通ってくる生徒はいない日々だった。

管理者が語るフリースクールのビジョンを聴きながら、自分の役割を模索する。子どもへのソーシャルワークはこれまでの経験のなかで数えるほど。学校に行けない、パワーレスな状態の「子ども」と向き合って、私に何ができるのだろうか。そんな戸惑いが常にあった。併設されている学童で、子どもと関わる日々。「子どもの世界」に少しずつ慣れてきたころ。相談から利用に結び付いて、フリースクールに通ってくる子どもがひとり・ふたりと増えてきた。そして私の勤務は週 1 回から 3 回となった。

ジェノグラム面接

利用希望の相談があったら、管理者から相談面接を依頼される。日時を設定し、お母さんに来所してもらう。そして私が面接をする。その際ジェノグラム面接を実施している。「〇〇さんのことをわかりたいので、〇〇さんの家族についてまず教えてくださいね。」と説明すると、協力的に話してくれる。ジェノグラムを一緒に描きながら、家族ひとりひとりのことを話してもらう。必ず聴くのは、子どもの名づけについてだ。どんな思いで、誰がつけたのか。不登校になっている子どもと兄弟姉妹の名前や生年月日、名づけの由来を聴いていく。日々の暮らしの様子、食事の時間や内容、両親の兄弟姉妹や祖父母のこと、仕事のことなど聴いていく。そうする

と、家族の暮らしぶりがみえてくる。そして子どもが不登校にいたった経緯を聴く。お母さんは、たまっていたものを吐き出すように、次から次へと語ってくれる。時に自分のかかわりを責めたり、他の家族との関係性を語ったり、学校とのつながりを語ったり。ジェノグラムを前に、たくさんのことがわかってくる。どんな家族構造の中で、不登校という課題を抱えた子どもが日々生活しているのか。少しずつ見えてくる。

利用に向けて

お母さんとの面接内容を整理して、記録にまとめる。ジェノグラムも情報を加えて仕上げていく。その内容を管理者・ほかのスタッフに伝えていく。そしていよいよ、当事者である子どもとの面接になる。初回はお母さんが同席する面接になることが多い。私の質問には、お母さんの顔をじっとみつめて助けを求めるようにしたりする。言葉がなかなか出てこないことも多い。言葉以外のノンバーバルメッセージを受け取ろうと、五感をとぎすます。この子の強みはなんだろう、今の暮らしをどう感じているのだろう、これからをどう考えているのだろうなど思いを巡らす。そして、フリースクールでどんなふうに一緒に過ごしていこうかと考える。

子どもと過ごす時間の工夫

私の勤務するフリースクールは、週２回９：００～１４：３０が定期利用である。しかし、朝起きられず、決まった時間に登校してこない。週２回の登校も、ままならない。

頑張って登校してきたら、今日の過ごし方を話し合い、その日の時間割を作成する。学習と好きなこと、やりたいことを組み込んでいく。一日の終わりには、今日の出来事とやってみた気持ちを書いてもらう。そして、次回取り組むことを話し合って決める。だいたいそんなふうに過ごしている。やりたいことがなかなか出てこない。しかし、時に「体をうごかしたい」とか「写真を撮りたい」「料理をしたい」と出てくる。その言葉を実現できるよう、管理者と話し合い、準備をする。子どもが真剣にたこ焼きづくりをしたり、パンケーキをきれいに焼いたり、体育館を走り回っている姿を見ることで、次への意欲が湧いてくる。得意なこと、持っている力をみつけ、自信につなげていければと思う。

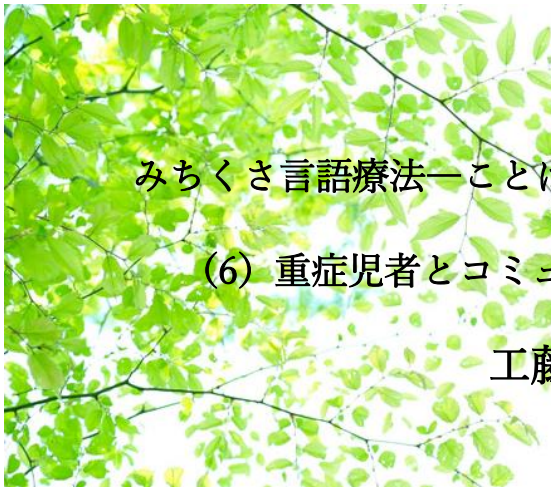
何かを変える

“多くの「不登校」や「ひきこもり」の人にとって、「克服しなければ始まらない」も、「克服すればその先はバラ色・・・」、これは共に誤解。実際には次の課題が現れるだけ。だからとりあえず前進すれば良い。変えればいい。”

団士郎先生のワークショップから学んだこの言葉は常に念頭においている。

子どもが学校に行けなくなっている、行かなくなっている。これからどうしていけばいいのか。カウンセリングを受けたり、病院に受診したり、友人に相談したり、ネットで情報を集めたり・・・。様々な方法を試して、それでも不登校という現実は克服できない状況で、相談に訪れる。なんとかしたい、このままでいいはずがない。しかし、現実の生活を変えることがなかなかできない。変われない。私は、家族の暮らしぶりをお聴きして、少しだけ前に進む方法を考えてみましょう、何ができそうですかとお母さんに伝える。今までやったことのない何かをみつけて試してみることができたら、少し前に進むことができるのだと思う。

写真が好きで風景を撮りたいと、カメラをネットオークションで買ったももちゃん。時間をかけて探し、お小遣いで買ったそのカメラを首からかけて登校してくる。雪景色や雪遊びをするほかの生徒を撮って、その画像をみせてくれる。「この空、ハートみたい」「この笑顔、可愛く撮れた」。その笑顔に私も元気をもらう。このフリースクールが、ももちゃんにとって心地よく安心して過ごせる場所であればと思う。



みちくさ言語療法―ことばの発達と障害の臨床より―

(6) 重症児者とコミュニケーション（その 2）

工藤芳幸

コミュニケーション支援を軸足に

びわこ学園での仕事を通して、私はコミュニケーションが全ての援助の基本であると確信していくようになった。どれほど身体の障害が重度であったとしても、なくてはならないのものがコミュニケーションである。自身の要求を伝え、暮らしをプロデュースしていくにはコミュニケーションが可能な状態にあることがどうしても必要である。ここで必要なのはコミュニケーションの「能力」だけではなく、コミュニケーションが可能な「状況」である。有効な伝達手段があるか（拡大・代替コミュニケーション手段も含む)、共通の言語（音声の他にも文字やシンボル等）があるか、コミュニケーションの時間や空間があるか、そして最も重要な声を聴き取る他者が存在するか。個体としての「能力」を伸ばすことに限定してしまうと、自ずから限界が生じることは目に見えている。

また、自分が何らかの重度の障害を負ったときに、果たして自分がそこで暮らしていたい場所になっているのか？ということ想像してみると、現状の施設空間はどうもそうではないように思えた。自分がやりたいことを自分で選べる環境とはいえないからである。こうしたコミュニケーションが可能な「状況」に具体的に関わるのが ST という仕事だと私は考えた。

ただし、コミュニケーションの視点から援助を考えるということは、徹底的に個から出発するということになる。スローガンを掲げるのは簡単なことかも知れないが、集団生活の場である施設でそれを目指すことは簡単なことではないと、当時、職場の ST だった八郎さんから言われたことがあった。おそらく八郎さん自身の経験から出てきた言葉だったのだろう。そのときは十分にその意味を理解できてはいなかったと思う。

―障がいの重さという“壁”にどう立ち向かうか、その“壁”に立ち向かうのは子ども自身である。そう岡崎は言う。そして子どもにそれを要求する以上、子どものいのちに向き合い、共にする構えが職員にいる。そこが理解の基礎だと岡崎は言うのである。（びわこ学園だより第 128 号　遠藤六朗氏による）

前回も引用した故・岡崎英彦先生（元・びわこ学園園長）の言葉である。敢えて岡崎先生がこのような言葉を残したのは、これが職員の間で十分に実現していたとはいえないからなのだろう。

当時の自分を振り返ると、この構えの部分が十分に育っていなかったように思えてなら

ない。しかし、知識や技術もまた不足していたことも確かであった。重度の障害がある方の発達やコミュニケーションを援助していくには、経験値だけではいかんともしがたい壁があるように思えてならなかった。私は施設の仕事を辞めて改めて学ぶことを選択した。

遷延性意識障害の方との出会い

大学院を経てSTの資格を取得し、私はまた別の重症心身障害児者施設に勤務した。児童指導員として病棟の生活空間にどっぷり浸かった立場から離れ、リハビリテーション科に所属して、病との外から通う立場での仕事になった。小さな違いかもしれないが、病棟とリハビリテーション科は別の部署なだけに、意見が衝突することがしばしばある。「リハビリの人はあれこれ言ってくるが、病棟には病棟の事情があるんだ」という類の意見のズレである。元々は病棟勤務の児童指導員だっただけに、こうした意見が出てくるのも理解できないわけではなかった。専門職と呼ばれる人たちが、非・専門職や異なる専門性を持った集団と関わるときにこうした意見の食い違いはたびたび起こる。以前と同様の重症児者施設でSTとしてのキャリアをスタートした私は、病棟勤務の職員ではなくリハビリテーション科の人間であることに最初は全く慣れず、別の島の住人になったような居心地の悪さも持ちながらも、入所の利用者や外来のケースを担当するようになった。

最初の新規担当ケースになった方はHさんというまだ若い方だった。交通事故による脳外傷で「遷延性意識障害」という診断名がついていた。遷延性意識障害とは一般に植物状態ともいわれるが、医学的には「疾病・外傷により種々の治療にもかかわらず、3か月以上にわたる①自力移動不能、②自力摂食不能、③糞便失禁状態、④意味のある発語不能，⑤簡単な従命以上の意思疎通不能、⑥追視あるいは認識不能の6項目を満たす状態にあるものをいう（脳神経外科学会1976）」。初めてお会いした時、ほとんど覚醒しておらず、身体は固くピンと伸びており、両肘を曲げて身体にピッタリくっつけた状態で、外からの声かけや視覚的な刺激に対して明確な反応も見られなかった。急性期の医療機関から転院してきたばかりでありSTについての情報は皆無だった。

これほどに重度の障害がある方にどのように関われば良いのだろうという思いも大きかったが、どれほど重度であっても何らかのコミュニケーションの窓口があるかもしれない。それを探し出す、あるいは引き出すことができればと試行錯誤が始まった。とはいえ、私には全く経験のないケースであり、大学院の恩師や臨床実習のSVにも助けを借りて、どのような評価をし、どのように関わることが求められるか助言を受けながらの関わりだった。とにかく目を開いて覚醒していることが稀なので、できるだけ毎日のように関わる時間を持つことにした。他職種から固くなった腕の筋肉をほぐすして関節が動くようにするための方法を指導してもらい、身体からもアプローチをしてみることにした。SV からの助言で、嗅覚刺激を毎回入れることにして、過去に嗅いだ記憶があるかも知れない珈琲や紅茶などを入れてはゆっくりと匂いを嗅いでもらった。口腔ケアや口腔への感覚刺激を入れながら味覚にも働きかけてみた。嚥下障害のために食べることは困難だが、ごく少量の唾液であれば嚥下可能だった。少しずつ志向性を感じる目の表情を見せるようになってきた。

（その3に続く）

かけだ詩⑧

そだちと臨床研究会　川畑（かわばた）　隆（たかし）

そのままの君がいい

X線写真の肺の影は
変化していません
これは昔の炎症の跡でしょう
毎回そういう診断
今回は久しぶりのＣＴで
再確認された

そしてはじめて
反対側の肺に４ミリの突起が見つかった
いつから君はそこにいるのかわからない
一か月後
４ミリのままの君がいた
君もやっぱりそのままがいい

ちなみに三か月後も六か月後もそのままの君がいた。君は２年間、ＣＴから追い続けられるらしい。

裸の確保

よろしく　よろしく
優しい気持ちを目がいっぱいに語り
その下ではマスクが壁を作っている
壁といっても膨らんだりしぼんだり
さえずる小鳥の下に小鳥たちが隠れている

隠れている小鳥たちも見たくて
ちょっとだけマスクを外すのを提案する
さえずっていた小鳥は代表者を解放され
他と一群になって明確な輪郭を描ききる
その一瞬の変化に驚いた

さえずる小鳥から想像したのは
まだ漠然としたあなただった
でも　あなたでしかないあなたという
とても具体的な輪郭のリアリティが
私の生きる世界を実感させた

マスクをするのがふつうの現実が引き続くと
マスクを外すのに勇気がいる
丸裸の自分をさらしてしまうようだ
眼を患ったときマスクに眼帯は避けた
裸を守る権利を意識した

東京ＭＥＲ

鈴木亮平が主演の連続ドラマ
Mobile Emergency Room は
一人の死者も出さないのが目的の
移動型治療チーム

医者としては無謀な動きだと
チーフはいつも批判される　しかし
目の前に死ぬかもしれない人がいる
まだ生きているその人を助けたい

そんな理想論だけでは立ち行かなくなる
失敗すればチームは解体だ
そうですよね　でも目の前に…
チーフは決断し　ドラマは熱を帯びる

しかしお定まりの枠にはまるのとは
ちょっと違う感覚が漂ってきた
ある施設の対人援助の力量をあげたい
そのことに力を貸してとの相談

相手にするのは施設という全体
でもそれを成り立たせているのは
一人ひとりの子どもと一人ひとりの大人
一人の大人の前にはまず一人の子どもがいる

その目の前の一人の子どもを理解せずして
どう進もうというのか
理解する力は枯渇したというのか
いや　眠っている部分がありはしないか

あきらめではない　反省でもない
自分たちの力を信じて前に進むこと
ありきたりの言い方で突き放さず
ありきたりではない道筋を作るしかない

所有物

子どもは親の所有物なんやから
なんぼ用事があるからゆうたって
車の中や家に長いこと
忘れ物したらあかんやないか

子どもは親の所有物なんやから
同居人が子どもを殴ったりしたら
私の子に何してくれんねん！
って怒って止めなあかんやんか

子どもは親の所有物やないなんて

たわけたことぬかしとんやないで
子どもは親の所有物なんやから
大事にしたろやないか
毒親にもならんと

毒親…一九〇〇年代の終わりに生まれた俗語で、毒になる親の略。子どもに悪影響を与えたり、子どもが厄介と感じるような親のこと。

むこうみず

向こうを見たら飲み込んだ
勢いは喉元を突破しそうだったが
ひるんだすきに向こうが見えた

向こうを見たら二部屋あった
おんなじ景色の続きの間と
戻る道ない離れの間

離れの間は見知らぬ不安に埋め尽くされ
続きの間には失望が惰性で座っていた
そして続きの間にまたひれ伏した
いつも向こうを見ることになる
もし見える向こうを見なければ
部屋の選択の余地はない

でも
向こうは本当に見えているのだろうか
見えていると思っているだけなのではないか

見えていないのなら
むこうみずが用意してくれるかもしれない
三つ目の部屋

尊重の実質

子どもの意見の尊重と
子どもの尊重とは同じではない
子どもの意見を尊重し採用することが
子どもを尊重していないことはあるし
子どもの意見を尊重しても採用しないことが
子どもを尊重していることもある
だって子どもは子どもなんだし
大人じゃないから
子どもの意見を尊重していないのに採用するのは
尊重のための尊重か

子どものことは置き去りにされている

親のいい顔

親のいい顔です

長年児童相談に携わってこられて
子どもが健全に育つために重要なことって
何でしょうか
そう問われてどうにかひねり出した答え

べつに笑顔だと言ったわけじゃない
児童相談はそんなに薄っぺらくない
生きづらい世の中で笑ってばかりなんか
いられない

でもいい顔
子どもから見てたくましい顔
頼れる顔
自分を任せられる顔

十六歳のにいちゃんも
親なんかいらないって顔をしてたって
あと四年で大人にならなくちゃならない
いまのこの俺がたった四年じゃ無理だってば

でもそんなオロオロなんて
恰好悪くて見せられない
うっとおしい不安には蓋をして知らんぷり
まあそんときまでには俺もどうにかするんちゃうか

それに
あと四年くらいは親もどうにか面倒みてくれるやろ
だいぶ面倒かけとるみたいやけど
あの顔つきやったらな

かつかつでもそう思わせてくれるような
親のいい顔です

父の死

四十一年前の十二月
父は一週間の昏睡をへて五十六歳で亡くなった
生きていたら九十七歳ということになる
昔の田舎のことで出生届が三年遅れたという説もあったから
本当は生誕百年なのかもしれない

若者の運転するバイクにはねあげられ

中央分離帯の突起に頭を打ちつけたらしい
母からの連絡を受けて脳外科病院に着くと
ＩＣＵでたくさんの管につながれていた
脳がグシャグシャの状態で
命をとりとめても植物人間の可能性が大きいと主治医は言った

二人の兄もかけつけ家族全員で交代に眠りながら
亡くなるまでをベッドサイドで過ごした
何の反応もしない状態の人間をみることはそんなになかった
ましてそれがあの父となると　現実が壁をこしらえた
そんな感覚は初めてだったから　どう心を持てばいいか慌てた

父の右だったか左だったか足のすねに窪んだ古い傷
勤務していた国鉄バスの営業所でバスにひかれた跡だと
よく見せられていた　それが目の前にある
父の身体なんて触った覚えがないし　今は触ることが怖い
でも思い切って触ってみた　温かかった　そして
ここに来てはじめてストレートな思いが身を貫いた
この温もりが永遠に続いてほしい　消えたらだめだ
そのときはじめて安楽死論議に意見をもった

でも父は息を引き取り冷たくなっていった
同じ病院に入院していた加害者の若者も駆けつけた
若者を許したが
葬式よりあとには一度も顔を見せなかった
許したときのやりとりを数年後に反芻した

母が警察官から父のことについて病院で聴取を受けた
持病を苦にしてバイクに自ら飛び込んだのではとの疑い
無慈悲とも思える聴取で疑いは濃くならずにすんだが
母の憔悴はみんなが辛かった

通夜と葬儀に向けてあわただしい　遺影の準備もそのひとつ
父はバスのダイヤを組む職人のような事務屋で
気の小さい人だった　そのくせ見栄っ張りなところがあった
母とぶつかると口を利かなくなるのが息子として辛かった
でも遺影の表情のなんと穏やかなことか
何か知らんけど　やっとラクになったね　優しい顔だった

親戚が集まり　明日の葬式を前に酒が入っている
聴きたくもない話から避難した部屋に母も来た
父の匂いが濃厚な背広を手に取ったとき号泣が私を襲った
そうよね　我慢してたよね　母も泣いた

その晩だったろうか
あれは父じゃないか　死んだはずなのに木の陰に父がいる
目が合った　走り出す私　目を逸らし慌てて逃げてゆく父
父に追いつけなかった落胆とともに目が覚めた

葬式では喪服がなく長兄のスーツを借りた　婚約中の妻も来た
次兄も私も地方公務員だったから　二人の知事からの花環は
見栄っ張りの父に少しの誇らしさをプレゼントしただろうか
気の小ささは私が引き継いでいると思う
そして、外見は私が一番よく似ているらしい　私もそう思う

父の亡くなった年齢を戸籍上で十歳越えた

⑧了　二〇二一年四月三十日

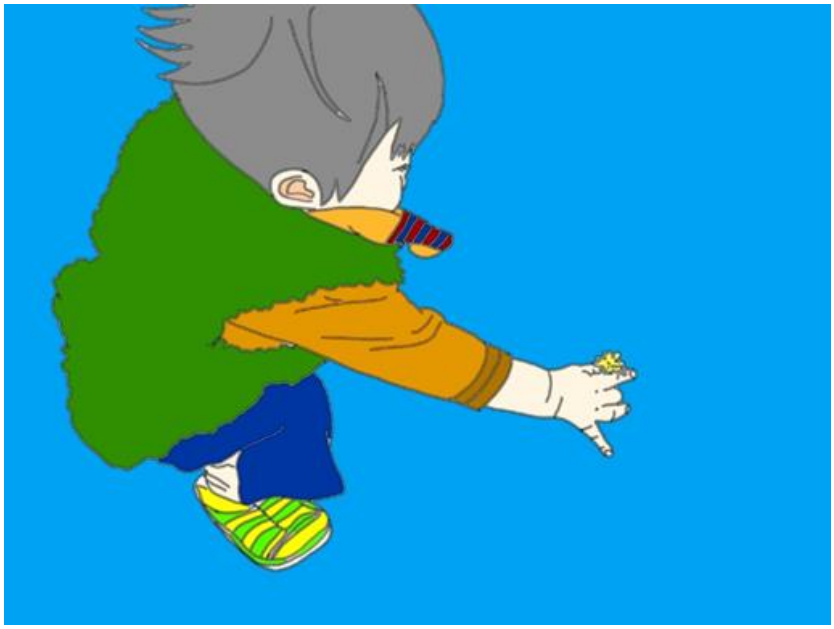
応援、母ちゃん！

～　自宅待機の７日間　～

8

たまむら　ふみ

玉村　文



はじめに

2022 年も新型コロナウィルス感染症の話題が尽きません。しかもひたひたと身近に迫ってきています。今回は、長男が濃厚接触者となり自宅待機となった 7 日間のことを書いています。

新型コロナウィルスによる休園等の状況（厚生労働省令和 4 年 2 月 3 日付）によると、全面休園している保育所等がある都道府県の数は 43、全面休園している保育所等の数は 777 ヶ所に登ります。休園にはならなくても学級閉鎖となったり、登園自粛を要請されて自宅保育をしている家庭もあります。

わたしの住んでいる地域全域で、保育園も幼稚園もともに休園したり、学級閉鎖になっていた時期にあたる、2022 年 1 月 27 日（木）の夜 21 時過ぎに、保育所から電話

がかかってきてきました。保育所から、長男が濃厚接触者にあたり 10 日間の自宅待機をするように伝えられました。何度も謝罪される話しぶりから、保育所の職員で陽性者が出たのだと察しました。マスクをしていない 2 歳児達、同じ学年の子ども達はみんな濃厚接触者になり、自宅待機をすることになりました。

当初は 10 日間の自宅待機をするよう要請されましたが、1 月 31 日（月）には「陰性であれば自宅待機は 7 日間に短縮される」という政府方針を受けて期間が変更されました。長男は 1 月 31 日（月）に PCR 検査を受け、2 月 2 日（火）に保育所から「陰性でした」という報告の連絡が入りました。そして、2 月 4 日（金）から保育園への登園が許可されました。

自宅待機中の過ごし方

自宅待機中は、不要不急の外出自粛のため、必要最低限の買い物や散歩以外は自宅の中で過ごすことになりました。当初は、2 歳児と 0 歳児の 2 人の子どもと家の中でどう過ごせるのか悩みました。どちらかの欲求を優先するともうひとりに弊害が起こってしまうこともあります。下の子が眠たいタイミングでは、上の子には静かに動画を見てもらうなど、2 人の生活リズムを考えた場のコントロールが求められました。

家族 4 人分の食事を毎日 3 食、用意し続ける必要もありました。上の子と一緒に遊びながらも、「次の食事にはあれを出して、昼寝中にはこれを作って」などと献立を考え続けていました。さらに、必要最低限しか買い出しにも行けないため、家にあるもので調理をするしかありません。買い出しには見通しや計算が必要でいつも以上に頭を使いました。

献立を考えて作り続けることは大変でしたが、その時間を遊びの時間に変化させることにも挑戦しました。上の子と一緒に料理をするのです。といっても 2 歳児なので難しいことはできませんし、何をしているのか本人の理解の及ぶ範囲で取り組むことにしました。いくつか簡単な料理のお手伝いをしてもらいました。その中でも印象的だったのは、眠る前にするお話（素話というそうです）で「桃太郎」のお話の中に出てくるきびだんご作りです。お団子を丸めて茹でることを体験してもらいました。「桃太郎」のお話とリンクしたようで、その後の「桃太郎」のお話の際には、きびだんごの作り方を語るようになりました。

自宅待機では、同居家族以外と直接会えません。しかし、ビデオ通話などを通じて交流を保つことはできます。子どもの祖父母やいとこなど離れて暮らす親族に積極的にビデオ通話をしていました。ちょうど同じタイミングで、祖父母やいとこも自宅待機になり同じような状況だったため、時間を選ばずおしゃべりができました。

自宅待機を経験した 7 日間は、書き出してみるとほとんど「普通の日常」です。少しだけ時間にゆとりがあるからこそできることをしたくらいで、特別なことはありませんでした。ですが、保健所からの要請で自宅待機をしたからこそ、自己選択のものではないからこそ、普通の日常生活を送りながらもその意味づけは日常とは異なり、

また気づいたことがありました。

自宅待機をして気づいたこと

① まるで炊婦のような 7 日間

在宅で仕事をしていた夫の分も含めて家族 4 人分の食事を考えて作り続けること、それ自体がハードでした。しかも気軽に買い物に出られないため、家にあるものでやりくりしなければなりません。頭の中は常に次の食事のことを考えていました。給食が出る保育所にはとても救われていることを改めて感じます。

② オンラインツールで密室育児に風穴を

同居家族以外と話ができることは、子どもにとってもわたしにとっても気分転換になりました。コロナ禍で普及したオンラインツールは、自宅から出にくい状況でも家族以外とかかわりがもてる重要なツールです。同じく自宅待機をして時間を持て余していた遠方に住む祖父母と毎日のようにビデオ通話をしました。暇つぶしというだけではなく、長時間オンラインでつないでおくことで普段の子どもの様子を見せることもでき、成長を感じてもらえる貴重な時間になりました。

③ 子どもの成長に驚く

これまで平日の日中を保育園で過ごしていた 2 歳の長男と一週間ずっと一緒にいることで、その成長に驚くことがありました。ちょうど「いやいや期」にあたり何かと自分の思いを表現してくるのですが、ある時、あまりに「いやいや」と言うので、「いやいやはお母さんのセリフ」と言うと「オレのセリフ！」と返されたことがありました。普段は自分の名前に「ちゃん」をつけて呼んでいるのに、この時は怒っていることを示すために「オレ」と使い分けていました。それに気づいて思わず笑ってしまいました。また、以前は危なっかしくて一緒に料理をするなんてできないと思いこんでいましたが、熱い鍋に触らないように白玉団子を茹でることができるようになっていました。認知面でも行動面でも、子どもの成長を感じられた期間でもありました。

④ 夫との交渉で感じたこと

自宅待機が決まった日に、夫とどのように分担して過ごすのか相談を持ちかけました。10 日間もわたし一人で子ども 2 人をみながら家事をすることへの負担感や、下の子の通院の予定が入っていることもあって、物理的にもワンオペ育児ができない日があったためです。夫との話し合いの最中に、「奥さん、育休中でしょ（だから仕事を休む必要はないでしょ）と上司に思われる」、「こんなに仕事を休んだらもう正社員じゃいられなくなるかもしれない」と訴えてきました。わたしは「世の中の働く母親達はそう思いながらもしぶとく働き続けてきたんだ」と思いました。そして、これまでの働く母親達が仕事を休むことで感じる負い目みたいなものを、父親もまた感じる時代に入ってきているのだなと思いました。もちろん、育休中でなければ、より分担を意

識した交渉をしたと思います。結果的に有給休暇を 1 日取得してもらい、下の子の通院をクリアできました。

⑤ 自宅待機をオープンにするのか

PCR 検査の陰性結果が出るまで、定期的にやりとりしているママ友との交流をストップしていました。他の病気の時は、特にこの冬に流行った下痢嘔吐を伴う胃腸風邪や手足口病などは、ママ友と積極的に情報交換をして、流行りの病気を把握していたのに今回は違います。この新型コロナウィルス感染症では、積極的に発信できない心理が働きました。自宅待機が終わってからママ友と連絡を取り合いましたが、休園を経験したママ友も同じようなことを感じていたことを知りました。もしも陽性であった場合の周囲の目が怖かったことと、万が一外出しているところに遭遇してしまうと自粛していないと思われるのではないかという「自粛警察」からの批判的な目が怖かったからです。

一方、情報をオープンにされているママ友もいました。子どもの同級生の A くんのママはバレエ教室を運営しています。そこでは、子どもが濃厚接触者になったことを生徒さん向けに伝えられ、バレエ教室は閉校されました。「なにかあった時の信用問題になるから」と。自宅とは別に借りている一軒家のスタジオは、閉校したあと A くん家族の気分転換のスペースとなったようです。A くんのパパはスタジオでリモートワークをし、A くんは走り回って運動していました。

自宅以外のスペースは、同居家族の密室性が少し緩められる場になっているように思えます。そんな条件が揃うことはなかなかないのですが、自宅以外に行けるところがない今回の自宅待機では、貸しスペースの必要性を感じました。

さいごに

2022 年の幕開けとともに 7 日間の「自宅待機」を経験しました。その中で気づいたことは、子育て中は特に他者の手が必要で、家族だけで密室に閉じこもることへのリスクでした。もちろん、オンラインの中での交流はできて、それが気分転換にもなり救われた面もありましたし、子どもの成長を感じられる期間でもありました。しかし、食事や遊びの面で物理的に他者の手が必要だと改めて感じられた日々でした。

この経験を記録として残しておきたいと思ってマガジンの原稿に書き始めたものの、なんだか筆が進みませんでした。なぜだろうと考えてみたところ、自宅待機では特別な何かをしたわけではなく、子どもとたんたんと生活をする、代わり映えのない日常を送った 7 日間だったからです。一方で、自己選択での自宅待機ではないからこそ、日常生活とはまた違う感情や気付きがありました。前号までのように書きたいことを書いて執筆を楽しむのではなく、記録を残すことを目的に書きました。そうすることで、日々に埋もれてしまいそうな非日常であり日常を特別な体験として意味づけようと試みました。

HITOKOMART No.8

小学校４年生の夏、市営プールからの帰り道で乗っていた自転車がふらついて道端の空き地に張られていた鉄条網に突っ込んでしまったことがある。
60年以上過ぎた今もその時の傷痕が左の腕に幾筋も残っている。
当時の男の子にとってはそういう物はちょっとしたケガ自慢の話のタネになるのだが、その日痛みをこらえて家に戻り、母に手当てをしてもらいながら、親から与えてもらった身体に大きな傷をつけてしまった申し訳なさに襲われたのを今も覚えている。

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

見 栄　250×250

肉球焼

A-3

かぐや猫

F-6号

CAT CARTOON

２００７年から２年半ほど犬と猫だけを題材にした１コマ漫画のを朝日新聞の大阪版で連載した。この原画展は連載中に京都大阪、東京の３カ所で開いた後、２冊の作品集にまとめている。

その水彩シリーズとは別にアクリル絵具でキャンバスに描いたものが幾つかある。犬や猫をかわいく描くだけのイラストレーションには全く興味も無いし制作意欲も沸かないのでいつも自分なりの１コマ漫画としてのアイデアを練り込んでいる。そう考えると犬と猫だけで２００点近くの一コマ漫画を描いてきた漫画家はそういないのではと思っている。

ヒラキ

F-6号

縫う

A-2

不確かなモノたちとの対話

家内が５９歳で亡くなってもう１４年目になる。今は一人暮らしの生活にすっかり慣れてしまったが、時折、誰もいないはずの自宅内で何かの気配を感じることがある。昼間はそういうことは無いが夜中に一階の部屋で寝ていると階段から誰かが降りてくるような気がしたり台所に誰かがいるような気配を感じることもある。

若干の不気味さはあるが恐怖感は無く、自分の背後霊に守られているという感覚がいつもあって、トラブルや危険な場面でも最終的には良い結果になるのはそういうことなのだと思っている。

霊魂や霊界の存在を証明するものはないがその感覚が普段の生活の中で少なからず支えになっている気がするのである。

幽体離脱　A-2

A-1 変形

wave

若い頃、テレビの国会中継を見るのがちょっとした楽しみだった時期がある。政治に関心があるというよりも与野党の議員たちのテレビ中継を意識してのわざとらしい自己アピール発言やパフォーマンス、わざと論点を微妙にずらしてとぼけた答弁を返す閣僚たちの姿を、下手な素人芝居を見ている気分で観察するのである。

当然、昔から議員たちの居眠りは見慣れた風景だったが、あらかじめ提出された質問に閣僚が用意した答弁用の書類を棒読みする舞台には緊張感はなく居眠りに誘われるのも仕方ないなあと思って見ていたものだ。

しかし最近はとんと興味が薄れている。世の中がコロナ中心のせいもあるが、魅力的な政治家が見つからないからだ。一見、熱く夢を語る政治家たちの姿に反射的に裏の部分を感じる事が多くなったからなのだろう。

スポンサー

バブル期のある時期、企業は世の中に提供する文化的な関わりの場にあえて企業名を伏せるというのが進歩的だとされた事があった。自社の名前やロゴをここぞとばかりに目立たせていかにも『金出してまっせ！』と表示する営業方法はダサいという考えだ。

この考え方は多くの共感を得たと思ったが、バブルの崩壊とともにそんな綺麗事はあまり語られなくなった。歴史あるスタジアムや美術館の名前に突然企業名が入り、それが資金難に苦しむ地方自治体を支えているのも複雑な気持ちで眺めている。

F-4号

「よいリハビリテーション」メタファーとキャリア教育[1]

The "Good Rehabilitation" Metaphor and Career Education

土元 哲平
Tsuchimoto, Teppei

はじめに：リハビリテーション系学生のキャリア発達

リハビリテーション学校（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成学校の総称）は、比較的自由に卒業後の進路を決定できる総合大学等と比べ、卒業後の進路が明確である。しかし、理学療法士養成校の学生のうち少なくない者たちが，十分な自己の職業観を省察することなく，近親者や高校教員の勧めにより進学を決めているという実態がある(藤澤, 2018)。こうした中で、学生達のキャリア発達をどのように豊かにしていくかが重要な課題である。原ほか (2020) は理学療法士養成校の学習支援に関する問題点の一つとして、「学業成績及び資質及び適性向上を主目標として実践される中で、多くは学習結果のみを重視する成果主義に傾きがちなこと」があるという。つまり、学生のキャリアの成功が、ある側面では「国家試験に合格したか否か」で判断されることになる。こうした状況は、リハビリテーション学校に限られたものではないだろう。

個人のキャリアや職業観は、試験の合格といった外的な指標によって評価できるものではない。D. E. スーパーは、キャリアを「生涯の過程を通じて，ある人によって演じられる諸役割(roles)の組み合わせと連続」(Super, 1980, p. 282) と定義している。学生のキャリアを理解するためには、国家試験合格のような外的な目標というよりもむしろ、学生が入学以前から育んできたリハビリテーション（職）に対する意味づけや経験を理解する必要がある。しかし、リハビリテーションを学ぶ学生が、どのように自らの目指すキャリアや職業を捉えているのか、その理解を深めるためにはどのような教育方法が有用なのかといった点は、これまで十分に検討されてこなかった。そこで本稿では、リハビリテーション系学生のキャリア発達を促すために筆者が実施したワークの分析・考察を行う。

方法

メタファーとは

本稿では、メタファーで自己の経験を表現するワークを分析・考察する。したがって、まずはメタファーとは何かについて説明する。メタファーとは、簡潔にいえば「たとえ」であり、「ガラスの心」といった例が挙げられる。メタファーの機能としては、あるもの（心）を別のあるもの（ガラス）**として** 理解することにある。つまり、メタファーを用いるためには、2 つのものが物理的、身体的に離れていること

[1] 本稿は、日本質的心理学会第 16 回大会発表（2019 年 9 月、於：明治学院大学）におけるポスター発表「メタファーによる自己表現と職業的アイデンティティ発達：リハビリテーション学生のワークから」（著者：土元哲平・サトウタツヤ）をもとに加筆修正を行ったものである。

が前提になる。例えば、「ガラスの窓」はメタファーにはなりづらいが、「心の窓」はメタファーとして捉えられる。窓とガラスは、物理的に近い関係にあるし、私たちがそのことを疑うことは稀である。一方で、私たちは、窓が心から作られていることはないと考えているので、「心の窓」という表現はメタファーであると理解できる。つまり、メタファーは、私たちが日常で用いられることばや、世界についての認識に深く関係している。メタファーは、人々が現実を理解する上で用いられる概念体系の本質的な基盤をなしており、日常的な行為の理解には、理論のような抽象的概念よりもメタファーによる理解が適しているとも言われている (Lakoff G. & Johnson, 1980; ガーゲン, 1998)。

厳密には、私たちの言葉はほとんどがメタファーから構成されている。例えば、「お腹がいっぱいだが、朝ご飯を食べた記憶がない」という語りがあったとすると、「お腹がいっぱい」は、お腹という身体の一部分を、容器や入れ物のような「蓄える（保存する）空間」として理解している。「記憶がない」という表現も同様である。付言すれば、記憶を「蓄える空間」のメタファーとして捉えることは、ソクラテスにまで遡ることができる。ソクラテスは、知識を保有（possessing）することを鳥小屋に鳥を持っていることに、知識を所持（having）することを自分の手に鳥を持っていることに喩えて、潜在的に覚えていることと実際に覚えていることとの違いを表現した(Draaisma, 2003)。ただし、興味深い点は、このメタファーは、単に「蓄える」ということだけではなくよりダイナミックなものを含んでいることである。鳥（知識）が逃げ出してしまう、餌を与えなければ弱ってしまう、鳥（知識）があまりにも多すぎると区別することが難しくなってしまう……というように、読み手が様々に「メタファーの世界」ともいうべきものを想像することができる。

実施したワークと分析方法

分析の対象となったのは、心理学の概論講義の受講生であった、リハビリテーション系学生 167 名であった。これらの受講生に対しメタファーを生成するワークを実施した。具体的には、心理学の概論講義の初回において、メタファーとはどのようなものかを説明した後に、30 分程度時間を設け、受講生自身に「よいリハビリテーション」のメタファーを考案するように促した。その際、「メタファーの作り方ガイド」を紹介した。

表 1　メタファーの作り方ガイド

1.	具体的な経験を思い出してみる。
2.	経験全体をイメージする（○○な感じ）
3.	似ているものに置き換える
4.	どう似ているかを考える
5.	細部を考える
＋α	イラストや図を描いてみる

「メタファーの作り方ガイド」は TAE ステップ(ジェンドリン, 2004)を参考に作成したものである。具体的には、まず「よいリハビリテーション」のフェルトセンス（意味感覚）に注意を向けるために、TAE ステップのステップ 6 前半(フェルトセンスの実例を感じる)を行った（手順 1)。そして、自分の感覚全体を一言で「○○な感じ」と表現する（仮マイセンテンス）一文を作るように促した（手順 2)。なお、マイセンテンスとは、個人のフェルトセンスを凝縮した一行詩風の短文であり、作った本人や共感する他者の意味感覚を呼び起こすことを通じて、思考や行動を方向づけるものである(TaeJapan, 2015)。(川喜田,

1967)その後、手順 3 から 5 において、自らのフェルトセンスを、似ているものと対応付け、メタファーとして精緻化するようにした。手順 5 でいう細部とは、上述したことばの使用群を指している。「よいリハビリテーションとはゲームである」というメタファーを考えたとしたら、ゲームの種類、登場するキャラクター、BGM、…といったものと、リハビリテーションとの関係を考えるというようなステップであった。これは、二次的メタファー(ガーゲン, 1998)の生成であるともいえる。

ワークは 2 人ペアで取り組むように指示し、創出するメタファーの数は制限しなかった。結果的には、1 人あたり 1 つから 3 つのメタファーを考案した受講生が多く、計 179 個のメタファーが生成された。このうち研究利用不可、判読不能のものを除き、計 168 個のメタファーを分析対象とした。具体的な分析手法としては、まず受講生の記述を丁寧に読み、データを文字起こしした。

その後、KJ 法(川喜田, 1967)を参考に、ボトムアップ的にカテゴリを生成した。ここでは、受講生の記述したメタファーの記述同士で意味が類似する記述をまとめ、その意味のまとまりを示す表札（ラベル）を付けた。これを小カテゴリとした。次に、その小カテゴリ同士で類似するものをまとめ、表札を付けた。これを大カテゴリとした。最後に、大カテゴリ同士の関係を空間配置した。

倫理的配慮

他人に語りづらいこと、個人情報等は記述しないよう指示をした。また、論文・研究・教育等への利用について説明し、掲載を希望しない場合は指定箇所に×印をつけるように受講生に指示をした。×印がついているものに関しては分析から除外した。

結果と考察

メタファーの具体例

メタファーの記述の具体例としては以下のようなものがあった。（それぞれの例について、【大カテゴリ/小カテゴリ】の順に記載している。）

- ブランコ→頑張って続ければその分，成果がでる所が同じかなと思ったし
  昔，自分がブランコに乗った時，お母さんが背中を押して助けてくれた様に自分も患者さんの手助けが出来たらと思うから。【回復への努力/努力】

- 「よいリハビリテーション」は「鯉のぼりのようなもの」である。
  風(PT)　鯉のぼり(患者)　例：下半身麻痺
  治療なし(無風)→ケガ，病気で体が動かない(垂れ下がっている)
  小回数の治療(弱風)→部分的に動かせるようになる(尾の部分が少しなびく)
  中回数の治療(中風)→補助があれば立てるようになる(全体が持ち上がってなびく)
  高回数の治療＝完治(強風)→歩けるようになる(しわなく，ピンと張ってなびく)
  PT は風であり，風の向き，強さ次第で鯉のぼりである患者を元気よく，美しく，見せることができる。【可能性/美しさ】

- 良いリハビリテーションとは，囲碁である。自分が出した一手(案)を相手がそれについて一番いい一手(案・行動)で返してくれる。そのときは自分も相手も自分のこと　お互いのことについて考えている。今，いっている所(問題)が終わる(解決する) と新しい場所(問題)にとりかか

る。自分が終わったつもりでも相手が次の一手でまだ残っている所を教えてくれる。すべて打ち終わるとその局面(リハビリテーション)の終了である。このような患者さまと療法士の応答である。【協力的関係/二者関係】

- 良いリハビリテーションとは　型にはまらない白の人間だと思う。サポートする相手は老若男女で誰にでも寄り添えて，少しブルーで暗い心をやわらかくできて，暗い色を明るくできる白色のものだと思います。【明るさ/明るさ】

KJ 法を用いた分析

以上のようなメタファーの意味に注目して、まず、KJ 法を用いてその意味の構造をカテゴリ化した（表2)。ここで興味深い点として、2 点挙げられる。第一に、同じメタファーの素材やモチーフであっても、人によって意味づけやその細部は様々であったという点である。例えば以下の 2 つは、いずれも「二人三脚」というモチーフを用いているが、それぞれ異なるリハビリテーションの側面が描かれている。

- 僕は指を手術し，リハビリを受けたことがある。手術後は指が腫れ，まったく動かなかった。もう一度動かすために，リハビリの先生と二人三脚で取り組んだ。
  それは，母と自分が産まれたての赤ちゃんのようだ。初めての手術を受け，何をどうすれば良いかわからず，言われるがままにリハビリに取り組んだ。母も子に，初めは言葉やご飯の食べ方などのように分かりやすく，見方を見してもらいながら行った。
  少しずつ動くようになり，自分でもやり方がわかってきたら，物事を覚え始め，ぎこちなく言葉を発したり，良い悪いわからず，思うがままに遊ぶように自分自身でリハビリを行うこともふえた。完治はしなかったが，治ったときは，言葉を発し，通じたときのように嬉しかった。【協力的関係/二者関係】

- 「二人三脚」
  私は実際にスポーツのケガで理学療法士の先生にリハビリを受けたことがあります。
  先生の「一緒に頑張っていきましょう！」から始まり，リハビリメニューを一緒にこなして成功を一緒に喜び，治療だけでなくスポーツが長い間できない私の，不安や焦りの気持ちを聞いてくださり，心のケアもしてくださりました。
  体育祭でよくする競技の“二人三脚”は，自分の力だけではゴールできないし，二人で協力して，失敗したら「次がんばろ！」「どんまい！」って励まし合って 1 つになって上達していくから，リハビリも患者さんとコミュニケーションをとって一緒にがんばっていくから「二人三脚」にたとえました。【協力的関係/二者関係】

第二に、類似するリハビリテーションの側面が、異なるメタファーの素材を用いて描かれていたということである。例えば、【吸収/吸収】に属する以下の 2 つのメタファーがあった。

- …自分が思うメタファーは日焼けだと思います。太陽の光を肌が吸収するというところで紫外線が肌にあたることで肌が次日焼けするとき強くなります。そこを PT とリンクさせると患者さんがかかえている不安や悩みを PT が聞いたり同じ目線にたつことで患者さんも不安を解消することもでき，自分も強くなると思います。【吸収/吸収】

- メロディーのような声掛け
  理由→試合前に怪我をして，その時に PT さんが「気持ちで勝てる」と言われて，その言葉が頭にすっと入ってきたから。簡単にできる(声掛けだけど)リハビリ。【吸収/吸収】

表 2. メタファーの意味のカテゴリ

大カテゴリ	小カテゴリ	生成されたメタファーの例
方法の適切さ	工夫	料理
	組み合わせ	料理
	適切さ	ギター、食事、お菓子作り、パズル、多面ディスプレイ、家を建てる、LED、焼肉、ガーデニング、お片付け
	なじむ	革靴
知識	知識	料理
相互理解	受け入れる	個性、キャッチボール
	相互関係	サトシとピカチュウ(ポケットモンスター)、 やかんとコップ
循環	循環	太陽光パネルと電気
創造	創造	白いキャンバス
	作る	建築家
ゴール	ゴール	航海、山頂
向上	向上	勝ちたい試合の試合前のチームの雰囲気、整形、植物、数字
	上昇	ひまわり
	上達	歌唱レッスン、ピアノを弾くこと
	成長	植物、マラソン選手
	前進	車
	育てる	花、園芸、農業、木
	飛躍、飛ぶ	たんぽぽ、跳び箱、チョウチョ
協力的関係	教える	学校
	コミュニケーション	部活
	支える、助ける	心のつえ、家の柱、騎馬戦、赤ずきん
	信頼	他者との信頼関係を築くこと、よろずや
	好き嫌い	食べ物と飲み物と人の関係
	他者の必要性	スポーツ、大工さん
	チーム・協力	バレーボール、サッカーの試合、団体戦、構造物、野球、サッカー、キャッチボール
	二者関係	キャッチボール、囲碁、さくらんぼ、二人三脚、シーソー、鳥、発明家とロボット
	平等さ	みんなの太陽、凸凹の平衡
	寄り添う	寄り添うこと
吸収	吸収	根、メロディーのような声かけ、日焼け
基礎	基礎	組体操、ドラム缶の底
感情や思い	笑顔	お笑い芸人、太陽のような笑顔
	感謝	ありがとう生産機、天気
	楽しさ	だんじりできれいにやりまわしが決まった時
	喜び	テストを一夜漬けして終わった後の長時間の睡眠
	リラックス	家、ベッド
可能性発見	可能性	着火剤、物事に成功した体の豆、 鯉のぼり
回復への努力	回復の地道さ	木の枝、屋上へと通じる階段、勉強、野菜作り
	継続性	食生活、薬
	努力	植物を育てること、スポーツ、階段、ブランコ、やりなげ
改善	治す	ボンド、雑草、壊れたシャーペン
	日常復帰	リフォーム、添え木
明るさ	明るさ	型にはまらない白の人間
	輝く	誰からも信頼されて輝いている人、輝いている太陽、太陽、懐中電灯、ダイヤ、月光、星、てらす光、希望の光
変化	変化	人生、木

カテゴリの空間配置

次に、上記の表 2 のカテゴリについて、空間配置を行った（図 1）。ここでは、生成されたカテゴリを、「主体性 - 関係性」「支援の適切さ - 状況の向上」という 2 つの次元で整理することを試みた。これは、「よいリハビリテーション」をメタファーによって描く際に、異なる描き方が見られたからである。第一に、リハビリテーションを行う主体（患者・療法士）について、“患者が主体的に回復、可能性、向上に向かっていく”側面を描くのか、“患者と療法士とのよい関係性”（協力的関係、相互理解、感情や思い）の側面を描くのか、という違いがあった。第二に、実際にリハビリテーションの対象となる障害、ケガ、病気等が、どのように変化（改善）したかという観点から、「支援の適切さ」や「状況の向上」が描かれた。

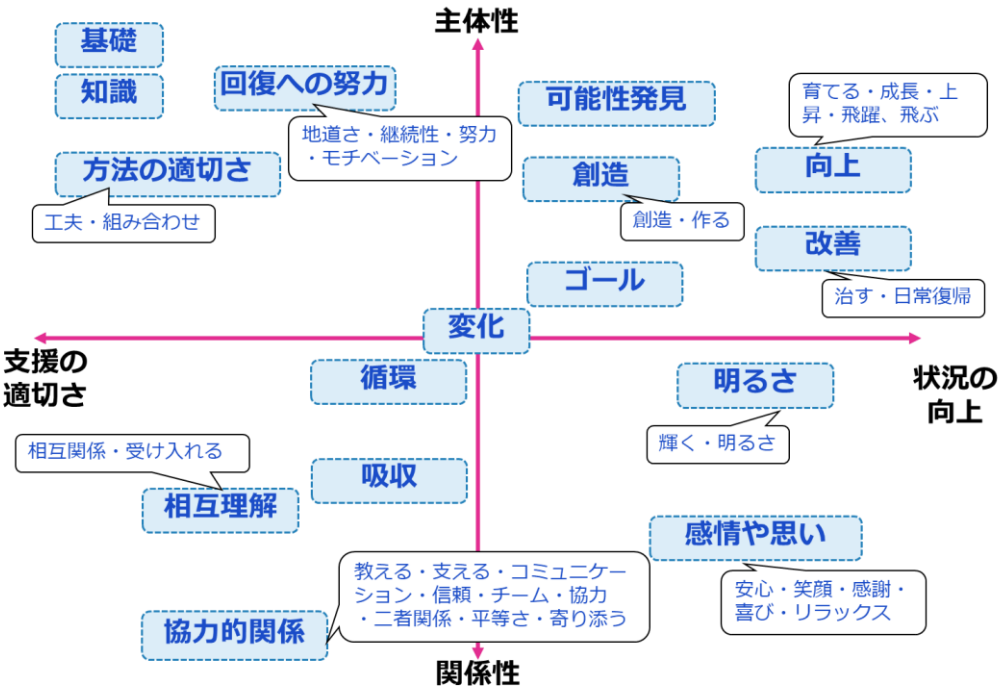


図 1. 生成されたメタファーの構造図

総合考察

本稿では、メタファーを用いたワークの分析を通して、リハビリテーション系学生の持つ「よいリハビリテーション」のあり様を明らかにした。メタファーを用いることで、彼らがどのように自らの目指すキャリアや職業を捉えているのかが明らかになった。

哲学者・臨床心理学者であるジェンドリンの論考 “Crossing and Dipping”(Gendlin, 1995)においては, メタファーの機能は、ある「状況」と「ことばの使用群」との**交差**であるとされる(岡村, 2015)。“ガラスの心”という語が持つ**使用群**には、例えば、透き通った、割れやすい、傷つきやすい･･･といったものがある。これらの使用群が、“ガラスの心”というイメージを喚起することになる。この使用群は、社会に比較的共通のものもあれば、個人によってユニークなものもある(土元ほか, 2020)。土元ほか (2020)は、自己の主観的感覚やことばを他者に伝える媒介として、メタファーを位置づけている（図 2）。その研究

では、オートエスノグラフィー[2]の試みとして、「成長の瞬間」（転機によって人が成長する瞬間）における「よいキャリア支援」という身体感覚を言語化・メタファー化する実践を行った。メタファーを用いた理由は、「よいキャリア支援」やそこで被支援者が感じた経験を、できる限り豊かなイメージとともに他者に伝えるためであった。土元ほか (2020) は、メタファーで自己の主観的感覚を他者に伝えることの意義について次のように述べている。

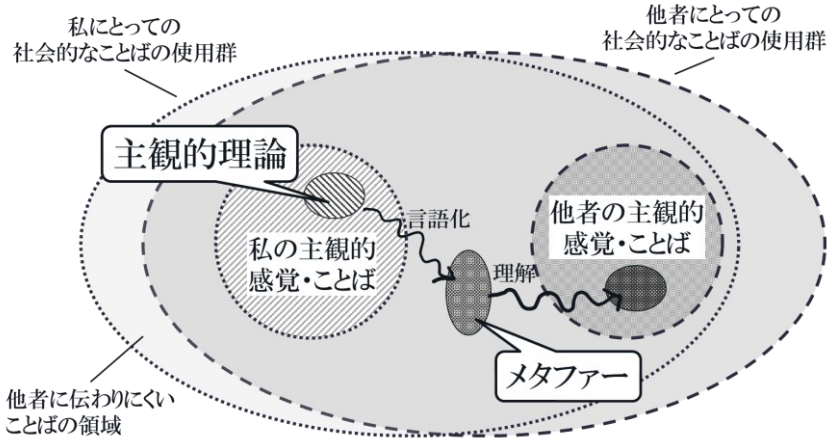


図 2. メタファーによる主観的感覚の理解過程

> 他者と身体感覚を共有できるようなメタファーとして感覚を表現していくことは、他者と共にキャリア支援の経験を交差させ、豊かにしていく上で重要である。……様々な経験をした他者が、自らのフェルトセンスをもとに類似するテーマで研究を行えば、キャリア支援における感覚は、いくつかの経験の「交差」によって、より多くの側面を描くことができ、豊かな意味を含むようになる。 ……身体経験に基づきながら、他者と協同的にキャリア支援のあり方を考えていくことが、主観的感覚に基づいたキャリア支援研究として新しい価値を生み出す可能性を秘めていると考えられる。(土元ほか, 2020)

つまり、自分自身の感覚を表現するメタファーを創造し、それを他者と交差することによって、「主観性」を大切にしながら他者が持つキャリアについての感覚を理解する可能性が開かれるのである。本稿で扱ったワークにおいては、多くの受講生が、メタファーとともに自らの受けてきたリハビリテーション経験を語っていた。メタファーを介すことで、直接的に「あなたのリハビリテーションに対する考え方を教えて下さい」と尋ねるよりも、より質的に豊かな語りが得られることが示唆される。さらに、ワーク時には、2 人組で経験を共有する時間を設けていたため、メタファーの生成過程においても、語りを通した他者の経験との交差がなされたと考えられる。以上から、本稿のワークは、受講生が他者と自分にとっての「よいリハビリテーション」観を交差しながら、自らの感覚を深めていく可能性を有していると考えられる。

さて、キャリアは必ずしも職業的側面のみを指すものではないが、自分が目指している職業をどのように理解するかは重要な点である。そこで、職業的アイデンティティについて考えてみたい。嶋津 (2017)

[2] オートエスノグラフィーについては、第 3 回連載を参照。

は、第二言語学習者のアイデンティティについて、1）社会や他者との関連において形成される、2）複合的で多面性を持ち、過去・現在・未来と常に変化するものである、3）自分自身に関する個人の感覚や意識である、という特徴を持つものとして捉えている。また、アイデンティティは「対人関係、場面や状況、話題などに応じて交渉されるものであり、**言語を通して**構築される多面的なものである」(嶋津, 2017, p. 3; 強調は筆者)。アイデンティティの構築には、個人の感覚やことば、そして他者が不可避的に関わっている。したがって、これまで自分が職業を表現する際に用いていたことばを、メタファーによって新しく表現することは、職業的アイデンティティのあり方を問い直したり、再構成することにも結び付く可能性がある。とりわけ、他者と協働でメタファーを考えることで、それぞれの感覚の交差が生じ、職業について語る際の新しい感覚やことばが生み出される可能性がある。

最後に、筆者は、メタファーには私たちが日常的に用いる「常套的な」(Lakoff G. & Johnson, 1980)ものがある一方で、「**生成的な**」(ガーゲン, 1998)ものもあると考えている。生成的能力とは、社会の前提そのものを疑い、現代の社会生活そのものを疑い、「当たり前」とされていることを疑い、そして、その結果、社会の中に新鮮な代替案を生み出す能力である(ガーゲン, 1998)。例えば、リハビリテーション職は、時としてネガティブな職業と捉えられることがあるが、「鯉のぼりのメタファー」は、リハビリテーションというものに含まれる美的な側面（患者さんを美しくみせる）を強調するものであり、新しい価値を生み出す生成的な力を秘めている。それでは、生成的なメタファーと常套的なメタファーとの境界はどこにあるのだろうか。この論点は、筆者自身も十分に言語化できていないところであるが、ジェンドリンがいうところの「フェルトセンスから語る」「エッジで思考する」(ジェンドリン, 2004) という考え方に鍵があると考えている。他者のことばをそのまま借りたり、表面的な言い回しを用いるのではなく、自分の身体感覚（フェルトセンス）に基づく新しいことばで語ることが、他者、ひいては社会に共有されている既存の価値観を問い直すことにつながるのではないかと考えている。

引用文献

Draaisma, D. (2003). 記憶の比喩: 心の概念に関する歴史 (P. Vincent・岡田圭二, 訳). ブレーン出版.

Gendlin, E. T. (1995). Crossing and dipping: Some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. *Minds and machines*, *5*(4), 547–560.

Lakoff G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.

Super, D. E. (1980). A Life-span, Life-space Approach to Career Development. *Journal of Vocational Behavior*, *16*(3), 282–298. https://doi.org/10.1016/0001-8791(80)90056-1

TaeJapan. (2015). TAE とは何か. http://www.taejapan.org/what_tae.html

ガーゲン K. J. (1998). もう一つの社会心理学──社会行動学の転換に向けて (杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀, 監訳). ナカニシヤ出版. (Gergen, K. (1994). Toward Transformation in Social Knowledge (2nd ed.). SAGE.).

ジェンドリン E. T. (2004).「TAE（辺縁で考える）」への序文(村里忠之・村川治彦, 訳). (Gendlin, E. T. (2004) Introduction to “Thinking At the Edge”. The Folio, 19, 1–8.). http://previous.focusing.org/jp/tae-intro.html

岡村心平. (2015). Gendlin におけるメタファー観の進展. 臨床心理専門職大学院 紀要, *5*, 9–18.

原賢治・丹羽敦・角田孝行. (2020). 理学療法士養成課程の初年次におけるキャリア発達支援の重要性. 日本リハビリテーション教育学会誌, *3*(4), 80–89.

川喜田二郎. (1967). *発想法*. 中公公論新社.
土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ. (2020). 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚――TAE ステップを用いた理論構築. 質的心理学研究, *19*, 46–67.
嶋津百代. (2017). アイデンティティについて語るためのことば: 外国語学習環境の日本語学習者によるディスカッションの考察. 関西大学外国語学部紀要, *17*, 1–16.
藤澤宏幸. (2018). 理学療法士養成校教員として学生のキャリア形成にいかに関わるか. 理学療法の歩み, *29*(1), 21–26.

謝辞

本講義に参加して下さった受講生の皆様に感謝いたします。

バックナンバー

- 土元哲平. (2021). へき地小規模校で学ぶ意義について考える：「オートエスノグラフィックな発達」概念を手がかりに（キャリアと文化の心理学（6））. 対人援助学マガジン. 47. pp. 273-275. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol47/51.pdf
- 土元哲平. （2021）. 職業指導からキャリア教育へ（キャリアと文化の心理学（5））. 対人援助学マガジン. 46. pp. 278-281. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/45.pdf
- 土元哲平. （2021）. 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達（キャリアと文化の心理学（4））. 対人援助学マガジン. 45. pp.318-322. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf
- 土元哲平. （2021）. オートエスノグラフィーの特徴と主流の方法論（キャリアと文化の心理学（3））. 対人援助学マガジン. 44. pp.261-263. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/51.pdf
- 土元哲平. （2020）. 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー（キャリアと文化の心理学（2））. 対人援助学マガジン. 43. pp.287-299. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/52.pdf
- 土元哲平・サトウタツヤ. （2020）. 教育・発達心理学とキャリア教育の接合（キャリアと文化の心理学（1））. 対人援助学マガジン. 42. pp.288-303. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol42/51.pdf

「幾度となく会い、語りあうことの意味」

（第６回）

退院支援研究会　　本間　毅

【はじめに】

「対人援助学会第 13 回大会」で、私は企画ワークショップ①「高齢者のエッセンシャルワーク経口摂取について」の進行役を務めた。これから、その「ほぼ逐語録」をここに掲載するが、参加者の「語り」はあらゆる点で完成されており、私はほとんど手を加える必要が無かった。全体の流れは、「終末期を病院で過ごした事例 1 のプレゼンテーション、それに対するディスカッション、入退院を繰り返しながらも気丈に独り暮らしを続ける事例２のプレゼンテーション、そのディスカッションと全体のまとめ」で、対象になったお二人は、80 代の男性である。事前に、学会 HP から「対人援助学マガジン第 45 号（p381~387)」に移り、対象者の詳細を確認していただければ、なお理解は深まるであろう。

対象者への研究に対する説明と同意は勿論、ワークショップの参加者達に発言を本号に掲載することに対し同意をいただいた。商業的利益相反事項に相当する個人や企業はなく、文責は全て筆者に帰することを明記する。

五十音順に発言された参加者の苗字を記載し、敬称は「さん」で統一した。話しの流れを妨げないよう、仕事や所属に関する情報の削除は行なっていない。

穴穂さん：学部生
大森さん：保育職
乙川さん：介護支援専門員
小山さん：福祉職
千葉さん：福祉職
中村さん：大学教員
丹羽さん：医師
日野さん：医師
本間さん：福祉職
村山さん：看護師　大学院生
蓮田さん：管理栄養士

他に、**榎本さん**と**道谷さん**、**川原さん**も参加された。（なお、本文括弧内に著者による補足と、参考にしていただくと理解がより深まる文献を記載しました）

【事例 1】

奥さんを自宅で看取ってから、既往のうつ病が悪化した 80 代男性の S さんは、何をしてよいか分らなくなり、自ら願い精神科病院に入院した。認知症と誤嚥性肺炎の診断が加わり、当院へ転院した際の嚥下造影検査で誤嚥リスクが高いことが分ったが 、本人は有形の食事を希望した。奥さんの葬儀の席で、「私は延命措置を希望しない。心肺蘇生も絶対しないで欲しい」と宣言し、家族も同意していた。改めて S さんと家族に再検査と経管栄養の導入を提案したが気持ちは変わらず、 S さんはひと月後に旅立った。口から食べる楽しみに言及される機会が増える一方で、様子を見ながら経口摂取は続けると指示した医師が、スタッフに「経口摂取は全面禁止」にして欲しい」と指示の変更を求められることがある。経口摂取の禁止は誤嚥予防策として有効で、誤嚥や窒息事故が起これば医療者に免責はないのは事実だが、クライエントの意向尊重と安全管理の折り合いを付けることはできないものだろうか。

千葉さん；本間先生、お久しぶりです。最後のグッケンビュールの話しは、ムッチャ面白いですね。現場の人って以外と数に拘るところがあって、数理的・論理的に話しを進めがちで、現場であればあるほど、そのことばっかり言うことがあって難しいなと思います。

本間；先ほどの企画シンポジウムで「偶有性 contingents」のお話しがありましたが、臨床は偶有性の塊みたいなところがありますよね。だからといって、「これは偶然だから」と単純に切り捨ててしまうと問題があって、ある程度は客観性を求める姿勢が必要になりますし、いずれにしても、それで全てが解決する訳では無いといつも思っています。

中村さん：このメルロ・ポンティを引用したり、涅槃図を持ってきたり、いろいろできる整形外科医に敬服しているわけですが、まあ精神科医ならある程度、理解できますが、私はいつも本間先生の話しぶりに感銘を受けながら拝見してきました。さっきの夕日を見ながら患者さんと語りあったという場面が印象的ですが、他に何かメルロ・ポンティだなとか、仏教的な思想だなと思えることなど、もう少し相互作用のエピソードはありましたか？

本間：いや、この方は本当に**認知症**で**うつ病**なのかなと思うことはよくありました。例

えば、朝に患者さんの部屋を訪れて、私が「おはようございます」とご挨拶をすると、鼻と口のところに酸素マスクを当てているのを「勧進帳の武蔵坊弁慶」のように額の上まで挙げて、「先生、おはようございます。昨夜はとてもよく眠られました。夢に家内が現れました」と言われることも何度かありました。先ほどの夕日の話しを是非、入れたいなと考えたのは、現在我々の周りで「ACP と意思決定支援をがっちり押さえておかないとダメですよ」と各職の卒後研修などが行なわれています。その講義を聞いて、何かこう、「スクリーニングシート」みたいなのがあって、箇条書きの先頭にあるボックスをチェックするとその人の ACP や意思を確認できます、みたいな話も出てきて、私は心配しているわけです。ACP や意思決定を主役は、クライエントご本人やご家族であるはずなのに、その方たちが使う言葉や言葉にならない表情、その人たちを取り巻く空気みたいなものを感じ取ろうとしないで、自分たちに馴染みがある言葉で適当に折り合いを付けてシートを完成させるというのは、少し乱暴な気がしますね。この分野の研究者や、専門の方がいらっしゃったら指導をお願いしたいです。とにかく、乱暴なことにならないよう注意すべきだと思います。仏教と夢も関連がありますね。(河合隼雄:『明恵　夢を生きる』. 講談社＋α文庫, 2012.)

中村さん：ありがとうございました。私が携わっている学部の大学院後期課程に歯科医がいまして、訪問診療で今日の話題の嚥下のことを実践していらっしゃる。先ほどのプレゼンテーションを聞かせてあげたいなと思いました。歯科医で訪問診療をしていると食べるためには歯科の治療が求められるようで、相当に難儀な思いをしながら、でも頑張っているようです。患者さんは、家族から見て「長くともに食卓を囲んできた人」なので、「一緒に食べる」と言うことが QOL 上も大事な課題になるのでしょうね。家族にとっても大事なことなので、家族からもヒアリングをしています。本間先生にもその歯科医を紹介できて交流が深まれば良いですね。

本間：実は、歯科の先生方は訪問診療の部門で嚥下についてとても頑張っています。それから、対人援助学会の会員で「主体性の回復」を研究している、品川方面で訪問リハビリテーション医をしている W 先生も患者さんの自宅で「嚥下内視鏡検査」をしているようです。リスク管理の一貫として、「こういう検査結果だから経口摂取は止めましょう」ではなくて、「この状態なので、何とか工夫すれば食べることができますよ」という方向で結論づける力量がある歯科医や、嚥下内視鏡が上手な W 先生のようなリハビリテーション医が活躍してくれると良いなと思います。

村山さん：私は神奈川在住で、中村先生のもとで後期博士課程の学習をしているところですが、「老人看護専門看護師」で認知症専門病院に勤務しています。事例 1 のような患者さんを私自身も沢山経験してきました。医療職、特にナースは自分たちが食事介助

をすることで、誤嚥の機会が増えて熱が出てしまうことを目の当たりにすると抵抗があって、医師に経口摂取を中止して欲しいと要望することもあります。また、ご家族がすごく悩まれて、私がスタッフと患者さんや家族の間に入ってカンファレンスで、少しでも食べられるように働きかけた経験もあります。「どうしても牛丼を食べたい」と言われる患者さんのご家族にお手製の牛丼を作ってもらい、それをミキサーで砕いてさらにまた固めて食べてもらったこともあります。今日のテーマを聞いて、まさに私が実践してきたことと同じだなと思いました。これをどう広めてゆくのが良いのかなとも考えています。それから ACP って簡単に言いますが、それを皆がどう考えていったら良いのかなと思いました。日本では、これまで死をタブー視する風潮がありましたが、年を重ねた先にあることを考えておくことは非常に大事だと思います。

本間：詳細が分らない段階で、軽々しくコメントすることは控えるべきですが、先日、訪問診療のチームが大変なことになってしまいましたね。私は、あそこに至るまでにいろいろ前兆があったのだろうと想像しています。医師やセラピスト、介護士が訪問したときに、息子さんが親御さんの加齢とその先にある死を十分に受け入れられていないのではないか、その時にこれは医学やリハビリテーションのこととは違うからとか、これは介護とは関係の無いことだからと、耳を塞いでしまうと問題を生じてしまいます。被害に遭われたチームは関係者の話やその実績を聞いても、絶対にそのような姿勢で臨んでいなかったことが良く分ります。チームが一丸となり、患者さんに取っては理想的な訪問診療をされていたのだろうと容易に想像できますが、私は同じ医師の立場からみると全てにおいて大変だったのだろうなとも思います。もっと詳細が明らかになってきたときに、改めて考察したいのですが、私はご両親の加齢や死を受容できない方は、さほど珍しくないと感じています。特に息子さんが、これは「とかく男性は、息子は」ということではなく、娘さんに比べると、この話題を進めてゆくとあるところから話しが進まなくなる傾向があるような気がします。私自身の経験ですが、「母はもうじき百歳になりますが、とても健康に配慮してきたし、医学がここまで進歩しているから母は死にませんよ」と、娘さんに真顔で言われたことがあります。穏やかな娘さんなので柔らかな表現でしたが、同じことが息子さんになると状況が異なることもあります。

乙川さん：多くの問題を考えさせられる事例だと思います。以前、私が住宅型有料施設の職員だったときに、入居者の経口摂取を継続する際に、誤嚥など何かあったときに誰が責任を取るのか問題になることがありました。自宅でという選択肢も考えられますが、問題が発生したときにご家族が果たしてどこまで対応できるのか悩むこともありました。その頃のことを考えると、行き場の選択肢が少ないので、医療や看護の手厚いケアが可能な有料施設に利用者が流れてきたのかと感じました。いろいろ話しあった結果として在宅介護を選択しても、覚悟が決まっていないと困難ばかり予想されて、最終的に

行き場がなくなって、在宅より病院や施設ということになるかも知れませんね。今、私が担当している方達のことを考えても、もっとチームの中で話し合う必要があると思います。

本間：我々はよく「自分の親ならどうする」と言いますが、医師である私なら、自分の勤務する病院で看るのと他の病院にお願いするのでも違いますし、自宅や施設でも対応は異なると思います。私の母はもと看護師で、父が要介護 5 になっても、自分の倍くらいの体格の父をひとりで風呂に入れたりしていました。経管栄養になったら、意思の疎通が困難だったこともあり、母の方が一番落胆していて、生き甲斐を喪失してしまったように見えました。コロナ禍の前は頻繁に病院や施設を訪れていらっしゃったご家族が、今は面会も自由にできない状況ですが、食事について言えば、コロナ禍以前も話題にあげないまでもいろいろと考えていらっしゃったのではないでしょうか。コロナ禍で直接面会ができなくなったことは確かですが、経口摂取だけでなく、ACP や意思決定についてもっと話しあうべきなのでしょう。

日野さん：私は脳外科医を 20 年、その後リハビリテーション科医を 10 年ほど経験し、現在は脳外科クリニックに勤務して「生活期のリハビリテーション」について模索しています。嚥下障害のある患者さんに口から食べさせることに抵抗があるスタッフもいると思いますが、私の場合は一緒にリハビリテーションに取り組んでいるスタッフとの間で、「できるだけ経口摂取を進めてあげたい」という方向性は一致しています。ただし、医療機関としての責任の問題がありますので、医療倫理の 4 原則（自律尊重原則、無危害原則、善行原則、正義原則）に則り何度も話し合いを重ねることが大事で、所属する施設の倫理委員会で検討を加え、その過程をスタッフの中で共有することは教育的な視点からも重要なプロセスだと考えます。ACP は「ご本人が考える自立尊重」を最重要課題にするのが望ましいと思います。でも、これはあくまでも私の個人的な考えなので、皆さんからもご意見をいただければ幸いです。

本間：日野先生のご見解は、「個人の人格的な自由をどこまで尊重できるか」という風に言い換えることができますね。医師の技量や経験も様々なので、話し合いの結論が異なってくるのは仕方がありません。事例 1 の患者さんの娘さんは、「これは父が好きな〇屋の水羊羹です。具合が良い日に食べさせて下さい」と大量の水羊羹を冷凍して持参されました。看護師や介護士が、「これは娘さんが持ってきてくれた〇屋の水羊羹ですよ」といって介助をすると、患者さんはにっこり笑って召し上がっていました。娘さんと患者さんの人格的な自由を尊重し、そしてその向こうにいる亡くなられた奥様にも思いを馳せる。療養型病棟とはいえ病院の毎日はとても慌ただしく流れます。その難しい環境の中でのエピソードです。

穴穂さん:私はR大学総合心理学部の4回生で、今後は大学院に進む予定です。私には、医療に関する基礎的な知識が不足していることは自覚しておりますが、そこでは、大学院でも「障害や疾患を持つ方々のQOL向上」について研究を続けようと考えています。対象者の方々がどのような時間を過ごしてゆきたいと思っていらっしゃるのか、それに対してどのような方法をもって、その過ごす時間の選択を引き出せるのか検討するつもりです。今日のお話から、自分の研究の意義についても改めて考えてみる機会をいただきました。

本間:私からアドバイスのようなものがひとつだけあります。私が過去に退院支援について(科学性を)考えたときに、まず統計的な処理を念頭に置いて、沢山の変数を想定して分析したら、退院難渋例を抽出できるのではないか考えた時期がありました。(過去の診療録の多くは、その変数となるべき項目の記録がなく、)私の場合はそのアプローチ自体が無駄な努力に終わりました。当研究会の世話人のひとりである、当時勤務していた病院の看護部長の若槻宏子さんに「ならば、患者さんの意見をよく聞きなさい」と助言してもらいました。倫理的な配慮と統計処理上の有用性が証明されている有用な評価用紙でも、送られた家族にとってはメリットより大変さの方が先行してしまうことが少なくありません。(何故ならば、病気や怪我はあくまでもその人たちとってはプライベートな問題だから)で、まずはしっかりと対話をする。例えば、昭和一桁生まれの女性は言葉少なで、聞かれる相手が医師だ、看護師だ、大学の研究者だということになりますと遠慮されることもあります。その時は言葉にならなかったけれど、こんな表情をされていた、その場面の空気はこんな感じだったと、とりあえず記録に残しておくことがとても大切だと思います。走り書きのメモが、実は後で大発見のきっかけになることもあります。いわゆるパラレルチャートに近い形で、客観的な事実の時系列の記録以外に、自分が思ったことや感じたことを包み隠さず書き記すことも必要になると考えています。

丹羽さん:私は新潟市で開業医をしている内科の丹羽と申します。以前は、病院で緩和ケアに携わっていました。今は、在宅でもその時の経験を踏まえて訪問診療や終末期の患者さんの診療をできるように努力しています。本間先生の退院支援に興味があって、病院では終末期の患者さんでも入院期間が決められている中で、退院や施設への入所を考えなければならない。医療者側は、(地域における)病院や病棟の役割など考えてしまうので、患者さんが置き去りになっているのではないかと思うことが少なくありませんでした。本間先生の書かれたものをみてみると、患者さんの背景や物語を理解したうえで、対話をしながら今後を決めてゆく、それは病院にとっても有益で(在院日数や在宅復帰率の適正化による)、それを強いるわけではなく自然によい方向へ持って行ける可

能性がある。今回の事例検討でも、患者さんとの対話を重ねることが患者さんの生き方をよい意味で変えることもあると感じ、時間がかかっても患者さんに話をしてもらうことが大事だと気付くことができました。

本間：臨床医は、患者さんにいつもの話しを始められると、あぁまた始まってしまったかと思うことがありますが、実は少し聞いてみると「なんだ、そういうことだったのか」、「話しを聞くのが一番の近道だった」と納得できることがあります。丹羽先生が同僚のスタッフと勉強するにあたって、私の小論文「退院支援の現象学」をテキストにされたと聞いてとても驚きました。現象学的な視点でいうと、科学的・客観的な考察や判断を一度止めて、エポケーと言う状態ですね、対話の中で参加者の心に浮かんできたイメージが似通っていて、「あぁ、そういうことなのか」とお互いに納得できると、次に話しが進むような気がします。患者さんが一所懸命に話されているのに、データーだけ繰り返し説明しても意味が無いどころか、逆効果になり「先生に話さなければよかった」と言われてしまうことさえあります。ここらで、少し休息にしましょうか。あ、中村先生、今から 5 分間は雑談の時間なので何でもお話し下さい。

中村さん：「雑談」と言われると困りますが、私が一番聞きたいことは、本間先生はグッケンビュール・クレイグを引用（山中康裕他訳：『老愚者考』. 新曜社, 、p85 2007.）されていますね。あの人はユング派の人ですが「wounded healer」つまり、「傷ついた癒やし人(傷付いたものだけが、治療や治癒の尺度を知りうる)」が大きなテーマなので、こういう内容を理路整然と話す本間先生の傷つきは、どのあたりにあるのかなと思いまして。プライベートなことなので詳細を述べて下さる必要はありませんが、あの文章を引用される背景が医師としての今のジレンマ、退院支援も ACP も全部ジレンマの中にあることと、患者さんに寄り添いながらクライエント志向型に解決策を導こうとしている医師の立場と、先日の事件も関連づけていろいろと思いを馳せられていることはよく伝わってきます。気をつけて自分自身のケアをすることも忘れないようにして下さい。もしもグッケンビュール・クレイグあたりで引用された背景についてひと言あればとお思い、伺った次第です。実は、私もこの一年は 90 歳になる母親が「要介護 4」になりまして、特養（特別養護老人ホーム）に入ってはいますが、「息子介護者」としていろいろと考えるところがあって、昭和一桁生まれの母親が息子に介護されるという、ある種の生活世界からみた拒否感みたいなものがありまして、これが悪い面でみると私のネガティブな印象になるけれども、本人からすると「支え」になるようですね。つまり、「息子になんかに介護されるか」という思いがとても強くて、自力で何とかしようとするエネルギーにもなっている感じがしています。「息子介護者」としてはつらい面もありますが、徐々になれてゆけば大丈夫なのでしょうが。そういう過程を経た一年間でした。認知症最初期に遭遇したものとして、意味の現象学的な考察はとても大切だなと思いまし

た。

本間：私の傷つき体験というか、研修が終了した頃から（現実的には6～7年目くらいの時期）同級生たちはどんどん立派な先生になっていき、「私は病気や怪我をしない」という話しを患者さんにしているのを聞いて、「それは嘘ではないか」と思いながらずっときていましたね。グッケンビュール・クレイグの本は「老愚者考」という、ご自分の先生であるユングは「人間は年をとると賢くなる（老賢者）」といっているけど、これには異議がある(前掲書　p75.p174)と。「老賢者」にならない人の方がむしろ多いのでは言っていますね。中村先生のご発言とも関連がありますが、私が対人援助学会にデビューしたのが2015年で、「自虐的世話役（masochistic caretaker)」という話しで、中村先生のお母様が感じられた気持ちというのはこのことと関連していますね。

中村さん：そうです。まさにモラル・マゾヒズム（moral masochism道徳的被虐性）そのものです。(川谷大治:「道徳の衣を着たマゾヒズム」『現代フロイト読本 2 』.みすず書房.p546-565,2008.)

本間：夏目漱石の『門』の最終章((新潮文庫,p256, 2020.)で、主人公に禅の公案がでます。解答を出せないまま物語は終わるのですが、公案の「父母未生以前の面目」とは何か。お母さんは、「今、赤ちゃんを産んで本当によいのだろうか？」と言う気持ちを持ちながら頑張って出産する。お子さんの方は「私は、本当にこの時期にこの両親の元に生まれてきてよかったのだろうか？」という、疑問と言うより恨み（ジョアン・ラファエル・ロフ　貞安元訳:「エディプス神話と阿闍世物語」『阿闍世コンプレックス』.創元社,p182,2005.)）に近い感情を持ち続けます。その感情が醸成されてゆくときに、良い環境の中にいれば問題は無いけど、妙な横やりが入ると問題が出てくる。これは『王舎城の悲劇』という浄土宗・浄土真宗の逸話（永原智行:『阿闍世のすべて　悪人成仏の思想史』.法藏館,2014.）の中にもありますが、非常に大きな問題だと思います。関連する『阿闍世コンプレックス』について論文にしてどこへ投稿しても、「不採用」が続いて、私はもうダメかなと思っていましたが「対人援助学マガジン第44号」に掲載してもらうことができました。とても有り難いことだと思っています。それでは、次の事例2に移ります。

【事例 2】

奥さんが亡くなってから独居を始めた 80 代の男性 A さん。認知機能が良く、飲酒・喫煙をせず血圧等の自己管理をしていたが、心不全が悪化して入退院を繰り返していた。入

院後、酸素吸入や利尿剤が奏功しすぐに室内歩行は可能になったが、今回は心不全の理解と健康管理について見直しを行なった 体重が一日で 2kg 増加したら心不全悪化を意味すると考えて必ず病院を受診し、水分と塩分をさらに厳密に測定、体調が悪い日は積極的に運動を休むよう指導、受診には娘さんが付き添うことにし家事援助サービスも計画した。この指導が､独り暮らしの患者さんに「より良い生活」をもたらしたのか検討し「好きな食べ物」の意味も考察する。

大森さん：私は、福岡市で保育士をしている大森と申します。仕事では高齢者と関わることはありませんが、プレゼンテーションを聞きながら両親・祖母・伯母のことを考えていました。伯母は 77 歳でまだ元気ですが､サツマイモ特に「芋ご飯」は食べたくないと言っていることを思い出しました。本間先生が病棟に貼りだした「思い出のひと皿」の写真を見て､とても素敵だなと思い､料理についてもっと考えなきゃいけないと思いました。

本間：「食物アレルギー」に関しては、保育関連の職場でも相当に気を遣っているのではありませんか？

大森さん：そうですね。アレルギーがある児は別のテーブルで食べることになっていますが､そうすると他の児はひとつのテーブルで 3～4 人が一緒になって食べているのに、ひとりで離れているのは可哀想だなと思いました。職員がその子のテーブルに着くようにしていますが､他の子たちと同じものが食べられないだけで､もしかしたら劣等感みたいな感情を持つこともあるかも知れませんね。

本間：認知機能が低下した高齢者でも、他の患者さんと食事の内容が違うことにはかなり違和感があるようです。皆さんがご飯を食べているのに自分だけお粥だと､すごく怒ってしまう方もいます。この点に関しては、管理栄養士とディスカッションの余地があると思います。お粥ではなかなか喫食量が増えない方がご飯になると食が進み､お握りになるとさらによく食べて下さることがあります。こうなると食欲は、嚥下の問題だけではありませんね。

大森さん：「この子は食べられない」という言葉も良くないと思うことがあります。児もある程度の年齢になると、「あなたにはアレルギーがあるから食べられない」という説明を理解してもらえますが､そういう言葉ではない言い方があると良いなと思います。

本間：先ほど ACP と意思決定支援のときに、医療用語でシートを作成して「これでよいですね」というのは乱暴なのではないかという話しがでましたが、保育の問題でもお子

さんたちが理解できて、自分も使える言葉で大森さん達が説明を行なう方がよいのではありませんか。小さなお子さんは納得がいかないと口を真一文字に結んで、食事を拒否することがありますね。大森さん、どうもありがとうございました。さて、私の強力な同僚、管理栄養士の蓮田さんをご紹介します。蓮田さんは、管理栄養士として科学的な思考と発言、迅速な行動力がある方で、私は若い管理栄養士に蓮田さんのバランス感覚が大切だと説いています。

蓮田さん：管理栄養士の蓮田です。私も最後まで口から食べると言うことを大事にしているつもりですが、病院では何かあったら誰が責任を取るのかと言うことは常に問題になっています。それから、患者さんが食べたいという食品を提供しても、食べられなかったら患者さんはさらにショックを受けてしまい可哀想なのではないかと悩むことも多いですね。

本間：医師、管理栄養士、言語聴覚士と実際に食事を介助してくれる看護師や介護士の視点が異なることもありますね。あるときは患者さんにより近接し、あるときはリスク管理の面から距離を置くと。なので、当たり前の話しですが、カンファレンスってとても大切だと思います。忙しいと短い時間内に何件もカンファレンスをせざるを得なくて、実質的なディスカッションができていないこともあります。私は、今の病棟で受け持ち患者さんが少ないこともあり、余談も含めてしっかり話し合えることが多いのは幸せだと感じています。穴穂さんに追加説明をしますが、この患者さんは先ほどの方とは異なり、比較的元気で認知機能のよい男性です。それでも 80 代後半になると全く病気知らずというわけにはいかなくて、中村先生がご指摘されたように患者さんだけでなく、治療者の側も「患者さん元型」を持たないと、せっかくの指導がこころに届かないことがあります。治療者にもその自覚が必要になると思います。

中村さん：今の話しで思いつくのは、ひとりの人の中にある「光と影」（河合隼雄:『影の現象学』. 講談社学術文庫, 2009.）のようなものかも知れません。私は DV や虐待の加害者側にクライエントがいるので、支援者も自分の中にある、「加害者元型」みたいなものを自覚することが大切だと思います。特に性的問題は「男性性」とも関わって侵入的になる性質があるので、こちらも何らかの形で喚起されることがある。先ほどお話しした私と母との問題にも関連が有り、自分の中では「怒り」のような感情が出てくることがあります。それをどう処理するのが良いのか。男性介護者、特に夫や息子が、時に被介護者に対し暴力的になってしまったり、医療者へ暴力的な言動を向けたりすることもあるので、いつも（こういう問題を）如何にして処理するべきか悩んでいる私は、本間先生の話しにはいつも考えさせられてしまいます。

本間：ご本人自身が問題意識を持っていないというか、むしろ怒ることで少しだけフラストレーションが解消されているような状況が、ずっと続いていると良くないですね。いろいろなサインをその方と接している人が感じて、ひょっとするとこれは自分だけではお手上げかも知れないので、専門家や知識や経験がある人にアドバイスをもらおうかなという発想が大事だと思います。新潟県の介護支援専門員への指導的立場にある小山さんはどうお考えでしょうか。

小山さん：私は新潟市地域包括支援センターで社会福祉士と主任介護支援専門員をしていまして、県内のケアマネさんの法定研修の講師や、社会福祉士会の認定ケアマネさんのスーパービジョンをしています。本間先生が新潟で退院支援研究会を発足させるにあたり、世話人のひとりとして一緒に活動をしています。その関係もあって、昨年対人援助学会に入会しました。私は自分が死ぬときはソフトクリームが食べたいなと思っています。飲み込みを心配しなくても良さそうですし。事例 1 のディスカッションに関する感想ですが、私たち支援者が良かれと思ってよけいなことをしている自分に気付かないとダメだと思ったことと、医師や看護師が科学的根拠に基づいて危ないよというのも分りますが、「でもさ」と福祉の分野側から異議を唱えたくなることがあります。そんな自分を感情が先行していると思うことがあるけど、そんな人がチームの中にひとりくらいいても良いような気がします。クライエントの立場に立って、少し想像を膨らませてみようよと言った方がよいのかな。退院の場面や退院前カンファレンスに立ち会うと、在宅生活に対する想像力が足りないような気がすることがあります。例えば、事例 2 の独り暮らしの男性が家に帰って、朝から晩までの生活を全て自分でやらなければならないということを、病院の中にいると十分に想像できなくなるのでしょうか。日本語には「同音異義語」というものがありますが、「想像」と「創造」が大事でイメージしながら造りあげることを叶えていけるように、叶わなくとも皆で話合う。この学会の会員や今日の参加者は、こういうことを大事にする方たちだと思いますが、「そこまでしなくても良い」とか、「面倒くさい」と思う専門職がいるのも、残念ながら現実なので、そういう人たちに、同じような結論になるかも知れないけど、話し合うというプロセス自体の大切さを伝えたいです。「理想論」とか、それから「小山さんは包括支援センターの人なので、終末期の人に関わる機会が少ないから分っていない」と言われることもありますが、そんな風に改めて思いました。

本間：小山さん、先ほど中村先生が指摘されたように、私も自分が両親の介護に直接携わっていなくとも、その時期に自分の母に対し猛烈に腹を立てたことがありました。それは、「元型」（河合隼雄：『ユング心理学入門』, 培風館, p95-101, 2011.）の問題だと思いますが、あるいはフロイトの言うエス（満岡義敬：「自我とエスを読む」『現代フロイト読本 2』. みすず書房, p527-546, 2008.）やイドというか、言葉にしたり具体的なイメージ

を形成したりできる領域の、さらに奥底にあるドロドロと煮えたぎっているような「情念のようなもの」が関係しているのか。そういったことへの気付きや対処方法など、現場にいる人たちに何かアドバイスのようなものはありますでしょうか。私は、中村先生のご意見は本当に身にしみて分ります。特に反抗されたりするわけでもないのに、自分の中にある「元気で几帳面だった母親」と、年を取って目の前にいる母親がオーバーラップしなくなるところがあります。そうなると自分の中の「エス」が悪さをしそうになるわけです。小山さん、現場の方がそのあたりを見分けられるようにするアドバイスはありますか？

小山さん：今日も午前中にケアマネさんにスーパービジョンをしていたのですが、そもそも、そのサインに気付いていない人と気付いている人、気付いているのに気付かないふりをしたい人もいて、だから難しい問題ですよね。そんな偉そうなことを言っている私自身も患者さんに感情をぶつけて怒ってしまうこともありますし。

中村さん：横やりを入れるようで申し訳ありませんが、今の論点設定も面白いと思います。この一年、母が特養に入るまで、私は伊勢志摩の出身で（仕事生活の拠点から）遠いのですが、介護や入所の段取りを取ったり、それから直接介護をしたりすることがありました。その時に、家を片付けなければいけない場面で一番抵抗されたのは、キッチンを片付けることで、特に冷蔵庫の中は母親なりの整理をしているつもりなので、勝手に中身の配置を変えたり、廃棄したりすると母の機嫌を損ねることが多かったです。食器を洗って棚に戻すのも母なりの段取りがあるので、そうやって「母をしてきた」ことへの介入だったのかなと思うと、片付けなければならないという分りやすい客観的な命題と、母息子として長く生きてきた主観的な世界のずれですよね、ここに男性介護者があまり気付かない面があるとすると迷い込んでしまうので、やはり食べることを中心にした母息子関係の長い歴史があって、息子は食べさせられてきた存在なので、でも母は、料理はちゃんとできることもあって、このアンバランスな関係の中で、食べると言うことが、非常に意味があることだなと、母との短い期間の体験でよく分りました。

本間：中村先生はご長男でいらっしゃいますか？

中村さん：長男です。で、弟夫婦が地元にいます。

本間：何故か、母親って弟のすることは何とか許容できるのに、兄ちゃんの方は許容できないことがありますね。

中村さん：そうです。弟があれこれやることは何とか許容できるのですが私のほうは。

そこでは、見事なほど昭和の家族の生活世界が繰り広げられていました。

本間：私は次男ですが、兄はリスク回避というか、もとから精神的に面倒くさいことは避けたい性分で、「金は出すけど、手と口は出さない」を貫きまして、そんな兄夫婦が介入してきたら結構、難しい問題が発生していた可能性があります。千葉さん、現場にいながら現場の人たちを指導する立場として、患者さんを家に帰して生活期の方達に見て頂くにしても、全てを看護師さんに委ねる訳にもいかないし、全てをケアマネさんに任せることもできない。何か今の話題に関する千葉さんのお考えや、後進の指導で気をつけていることがありますでしょうか。

千葉さん：本間先生の発信は、ホンマに全てを網羅していますね。福祉も、「その人として」とか、心理・生理・社会と多面的に近接しようとしても、そこに積み上げられている学問はやはり何らかの偏りがあって部分的な気がしています。対人援助学会という場所を作ると、ホンマに普段なかなか一緒に話す機会が少ない職種やポジションにいる方達と話しが共有できるので、有り難いなというか、この学会の意味がよく分ります。さらに若い方（学部生）もいて下さるのは有り難いとか、そんなこと思っていました。

本間：千葉さんが言われるように、次の世代、その次の世代の方たちがこのテーマに関心を持って下さるのは本当に有り難いことです。医師や介護支援専門員の資格を持っていないとできないことがありますが、哲学とか倫理、道徳もそうですかね、賢い子だと小学生になる前から自分なりの考えを持って、読書をしたり友人や先生と話しをしたりしながらどんどんレベルアップすることができます。この分野は資格や年齢、性別も関係無しで取り組める面白い学問だと思います。リハビリテーション医学会でも今後、このようなお話しができると良いですね。日本リハビリテーション医学会が今以上に良い学会になると嬉しいです。日野先生よろしくお願いします。ところで、私の家内もこのワークショップに参加しております。今は心理の勉強をしていますが、もとは社会福祉士です。何かひと言。

本間さん：本間です。皆さん、こんにちは。今日はいろいろな話しが聞けて良かったです。中村先生、ご無沙汰しております。久しぶりにお目にかかることができて嬉しいです。以上です。失礼しました。

本間：…。ところで、村山さんは病院の中で主にどういう立場でいらっしゃいますか。

村山さん：今は非常勤で、4 月から現場復帰をする予定です。多分、地域連携室に配属されると思いますが、以前は病棟の管理者で、老人看護専門看護師としてどちらかとい

うと、病院全体の動きの中で看護の指導をしたり、看護と他部署の間に入ったりすることが多かったです。先ほどの事例 2 の話しを聞きながら、自分が新人だった頃を思い出していました。脳血管障害のリハビリテーション病棟にいた時期で、脳血管障害を起こした糖尿病のある方に指導をしようと思ったときに、「好きなものを食べて死ねれば、それでよい。ほっといてくれ」とすごい勢いで言われて、確かにそうだなと思い、頭から指導しようとしていた私が間違っていたことに気付きました。若かりし頃の思い出ですね。そこから何十年も経ち、今回そのエピソードを思い出したことと、それこそ私も母の介護に一部関わっている中で、85 歳になった母に糖尿病があって、少し認知機能も低下しています。そんな母の「あれを食べたい、これを食べたい」という言葉を聞き、看護師として HbA1 c（糖尿病の検査データの 1 つ）が少し高いなと思いつつ、「食べたいものを食べられるなら、どうなってもよい」という母の気持ちを汲み、母が食べたいと言っているものを、娘として持参しています。人間にとって「食べる」と言うことは本当に大事で、それを制限されることはとても苦しいことで大変なことなのだと周囲が気付く必要があると考えています。

本間：村山さんのエピソードに出てきた患者さんがそこまで強烈に怒ってしまうのは、食事に関する指導のあまり嬉しくない思い出とか、自分の思いと指導で言われたことがあまりに違いすぎて怒る以外に方法がなかったのかもと思いました。人が怒るときにはそれなりの理由があるのだから、食品成分表を前に電卓でカロリーや塩分を計算する手を休めてその理由を聞いてみれば、「ああ、そういうことだったのか」と思うことがあると思いますね。

村山さん：その患者さんは社会的な地位がある方で、食べることで人とやりとりをして、ものごとを動かしていた人なので、食事を制限されることは（自分のそれまでの存在を否定されるほど）大変なことなのだと、後から聞いて納得できました。

本間：今は、どこの病院でも地域連携室はとても忙しくて、だからこそ地域連携室の仕事をされる方達にお願いしたいのが、患者さんのベッドサイドに行ってもらいたいということです。話題は何でも良いので話して欲しいと思います。退院支援研究会に所属する基幹病院の若手相談員で、ベッドサイドで気がついたら数時間経っていたという人がいて、素晴らしいなと思います。仕事の能率がよいかどうかと言う話しではなく、それを繰り返すことで仕事の要領が良くなり、精度も向上してゆくと思います。とにかくベッドサイドに行ってクライエントの話しをよく聞いて欲しい。今は難しいのですが、コロナ禍が落ち着いてくればベッドサイドで患者さんだけでなく家族の話も聞けるし、デイルームで食事の場面で話しを聞くこともできます。相談室での面談とは、かなり違うと思います。

中村さん：あとひとつだけ。私が悩んでいるのは、さっき言った事情で、意思決定をどう確認するかということです。今のところ体は元気ですが、特に延命治療やお金の管理など、施設を利用したいのかどうか、どこならよいのか、これまでもできるだけ慎重に事を運びたいなと思い実行してきましたが、今は施設にいる母とふた月に 2 回、15 分しか面会ができないので、そんな母と Zoom で会議をしながらしっくりこない時間を過ごしています。認知症があって体が元気な場合の意思決定について悩んでいます。（成本迅編：『認知症の人の医療選択と意思決定支援』. クリエイツかもがわ, 2016）

本間：2 年前の年次大会でもお話ししましたが、退院支援のことを考えてゆくと、最終的に意思決定支援をどうするかというところに行き着いてしまいます。ケースによって詳細は異なっても、根底を流れるバロック音楽の「通奏低音」みたいに鳴り響くわけです。最終的なこと、これは生物学的な死だけでなく、その先にある「喪の儀式」も全部含めて、例えばこの第 13 回大会も対人援助学会の創設者のひとりである望月先生のことを思いながら集まってきた方達が、このように話しあっている。そこら辺のことまで見据えた、具体的で統一感のある動きは難しいのかも知れませんが、「最終的なゴールを一緒に見据えましょう」という姿勢が重要なのだと思います。

中村さん：意思決定の場面で家族のエゴがでる場合もあるので、家族が大事、見守る人が大事と言いつつも、家族の事情がエゴとして現れる場合と、本当に共同主観的にいろいろ決定できる場合があってややこしい限りです。だからこそ、家族との相互作用も含めて、現象学的な意味分析をしたいなと考えています。さっきの望月先生のことですが、今日こういう会を開催することは望月先生のお連れ合いさんにも伝えました。できれば話しだけでも聞いておいてもらえれば、と思いましたが、それはあなた達の世界だから（それも、その人の心々だから）というやりとりもありました。

【結語】

事例の提示にご協力いただいた方々に心より御礼申し上げます。今回は「拙なるも速くあるべし」を第一としました。**「食べる」という行為は人間にとって最も大事なことで、それを何らかの形で制限するということには慎重でなければならない。そして ACP や意思決定支援もクライエントの言葉や、言葉にならなくとも、生きられてきた様々な経験を尊重すべきだ、**ということが本日の結論かと私は考えました。

川下の風景⑤
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【そして、彼は出て行った】

2022 年、相変わらず世界の変化は目まぐるしい。グローバル化によって、情報・物・人の流れも早く流れて、地球の裏で起こっている出来事が瞬時に手のひらに届く。常に情報と変化を知りつつ、アップデートを重ねて行くわけだから、どうも必要以上に目まぐるしい日常を送っている気がする。

身近な変化で言えば、2022 年は 2 年に 1 度の診療報酬改定の年。医療現場で働くわけではないので、点数の詳細を知る由もないが、介護業界で働く以上、無関心でいられない。医療の流れは、介護に影響を与えるし、双方の制度が車輪の両軸となって少子高齢化の社会保障制度を形作る。前回の改定から 2 年。この 2 年間はコロナ禍という大きな変化によって、医療現場確保の重要性が取りざたされた。それは、単に病院機能だけではなく、医師や看護師の働き方や処遇にまで及ぶ。コロナ禍が無ければ、もっと医療の「適正化」に踏み込んだ内容になっていただろう。

医療においても、介護においても、報酬改定では「適正化」という語句が頻繁に聞かれるようになった。つまり、必要なものに投資し、不要なものは縮小する。限られたπを、如何に有効に使うか、という「適正化」。その根底にあるのは、もちろん少子高齢化という将来像に対してだ。前述の通り、コロナ禍の影響もあり、2022 年診療報酬改定は大きく「適正化」に踏み込めなかった。次回改定は、2024 年。これは医療・介護同時改定の年に当たる。2025 年問題、つまり、団塊の世代が 75 歳に移行することで、医療・介護ニーズが増大するだろうという試算のもとで、2024 年同時改定は注目を浴びてきた。しかし、布石は更に先、2040 年にターゲットを絞り始めている。世界に類を見ない長寿社会、団塊の世代は 90 歳に到達する年。そんな先の変化も見据えて日々の仕事に勤しむ必要があるとは…両手では収まりきらない情報と目まぐるしさに追われている。

【ヤングケアラー】

数年前には社会に浸透していなかった言葉が、急速に注目を浴びて社会問題化され、診療報酬改定においても課題として挙げられる。昔からそういう問題はあるだろうが、こういう社会の取り上げられ方は、流行の歌を聞かされているようで心配になる。

エレベーターも無い、古い団地の玄関扉を開くと、いきなり布団とテレビが目の前に飛び込む。部屋ではなく、廊下だ。廊下に布団を敷き、布団の上にテレビとゲーム機を置き、そこで少年は寝起きをしている。ダイニングを除いて、3 つある部屋のうち、2 つは段ボールとタンスに占拠され、足の踏み場もない。収まりきらない段ボールは、ダイニングにもあふれ、少年が寝起き出来る居住空間は、必然的に廊下に追いやられる形だった。家族は、父と母の 3 人暮らし。一番奥の部屋にベッドとテレビ。たくさんの衣類、装飾品、化粧品の数々。ベッドで母が休み、その隣の床で父が寝起きをしている。積み上げられた段ボールの数々は、その大半が母の衣類や装飾品であり、玄関に積み上げられたハイヒールや派手な靴の数々も母の物で埋め尽くさ

れた家だった。
ガスコンロの上には、調理済みの鍋が置いてある。白菜、ニンジンを炊いた鍋物。炊飯器は蒸気を上げて米を炊いている。少年が食べているのは、カップ焼きそば。自分がアルバイトした金で買って、自分で湯を沸かして食べる。廊下の布団の上で。ダイニングでは父と母が煙草をふかし、見えない少年に向かって、母は時折苛立ったように声を掛ける。

母の苛立ちの原因は、金が無いこと。金が無いし、食料も無ければ、必要な化粧品も購入できない。そんな逼迫した状況に苛立っている。背景には、父が脳梗塞を患ったことも関係する。金の稼ぎ手であり、買い物に行く父の役割。病気によって歩行もままならない父の状況に苛立ち、一気に介護者、家事の担い手、アルバイトを通じた金の稼ぎ手、という役割を少年は押し付けられている。

【そして、少年は出て行った】
脳梗塞の発症により、自宅での排泄もままならず、歩行も覚束ない状況になったため、父は介護サービスを受けることとなった。母は長く精神疾患も患い、通院を続けている。そんな母の生活を支え続けていたのは父であったが、状況は一気に変化した。少年がちゃんと学校に通えていたかどうかは分からない。義務教育の年齢ではないため、アルバイト中心の生活だったようだ。家族の為に働く、というよりも、自分で稼いだ金で食べる物や衣服、ゲームやスマートフォンなどの欲しいものをそろえてきた。父の病気によって、彼はその変化に対して決断をした。住み込みのアルバイトを見つけ、家を出る。出会って僅か数日。少年は必要な衣服や生活用品を旅行用のアタッシュケースに詰めて出て行った。「行ってきます」と両親に告げて。
母は水商売。父は土木業。互いに再婚同士。少年は母の連れ子と共に育った。整った顔立ちは両親に似ていて、年齢の割に幼さを感じる。末っ子らしい、愛くるしさ。彼が出て行ってから、一度だけ、自宅で再開する機会があった。手にした金を計画的に使えない母である。帰省した我が子に、両親は金を無心する。まるで、育ててやった恩を金で返せと言わんばかりに。その時、少年は古びた二つ折りの財布から、しわくちゃの千円札を取り出し、父に渡した。傍で見ている私からすれば、こんなろくでもない両親に、何故少年が金を渡さなければいけないのか、と思う。しかし、それを口にすることなく、その小柄な手から、渡される千円札の行方だけを眼で追った。

【適正化と、私たちの生活】
医療・介護の「適正化」の根拠になるのは科学的データである。つまり、大多数のデータから平均化された社会。こういう病気の人、障害のある人には、こういうアプローチが適切かつ、効果的と評価される社会。治療も介護も、金を掛けるからには、ますます効果を求められる。介護ビジネスで生きてる私は、そこに異議を挟む気はないし、そういう変化の制度と社会に生きている。しかし、仕事としての私の生活はそこに成り立っても、少年の生活は同じベースで成り立っていない。だから、流行歌のようにヤングケアラーとして彼を捉える気にはならない。少年は自らの意思で出ていき、困窮する両親に金を手渡した。変化に対して右往左往するだけでなく、自ら対処する彼の力強さ。幼さの残るその面影を今も時折思い出す。

2022.2.18　米津達也

miho Hatanaka,

娘が出産をした。例のマタニティ・ヨーガのプライベートグループの３人も皆出産し、すでに母親として生活をしている（第３話）。戸惑い、悩みつつも、子とともに日々の喜びのなかにいる彼女たちに、心から応援の気持ちを贈りたい。
今回は、娘の出産に纏わり想起する話と、二編の詩 ――娘が出産をした翌日と、娘の妊娠が知らされた翌日の―― を。

【第５話　お産に向かうひと　その二話】

　昨日、娘に女の子が産まれた。陣痛が始まってから長い経過の後の誕生であったので、心底ほっとした。遠方でもあり、私は自宅にいるまま、娘から時々送られてくるメッセージで様子を知る程度である。痛みがつき始めてから丸一日が過ぎた夜には少し陣痛も遠のき、疲れ果てて一人、産院で過ごす娘を思ってつらかった。翌日の昼近くになって、娘のパートナーから「女の子が産まれました。母子ともに安定しています」と連絡があり、程なくして子の写真が送られてきた時、我が子が産まれた時以上の安堵を感じた。不思議なものである、職業柄、今までが決していい加減な気持ちでいたわけではないのだが、娘という（言わば）「じぶんごと」としての感じ方があり、しかも自分自身のお産の時ともまた異なる感覚を抱いた。娘と、まだ見ぬ彼女の子。ふたりのいのちが安全であるのが何よりであることを思った。
　娘もまた、冬の産まれである。当時、実家の近くに暮らしていた私は未明からの陣

痛をやり過ごしつつ、昼になってから母に伴ってもらって近所の病院に歩いて入院した。そこはまた、私自身が産まれた場所でもあった。キリスト教系の病院で、陣痛室には聖書の言葉が書かれた一枚の額が掛けられていたと母から聞いていた。

『今のこの苦しみは、後にもたらされる栄光に比べると取るに足りない』

この言葉をみつめながら、母は陣痛の時を過ごしたそうである。助産師の学生の頃に「なるほどなぁ」と思って聞いたことを覚えているが、自分の出産のために入院した時にもまだ、なんとこの言葉はそこに掲げられていた。母から聞いていたこともあって言葉自体には特に大きな感慨もなかったが、逆に馴染むように、その時の自分の身に起こっていることに重ねて「信じよう」として過ごしていたように思う。それはすでに、私の“お産観”の一部として備わっていたのかもしれない。痛みは痛みとして感じながら、その大きな“しごと”を終えて、私は母親になった。

退院の日はみぞれが降っていた。家に落ち着いて、アラジンのブルーフレームヒーターの柔らかな炎が灯り、娘を横にふと、「祖母から母、母から私へと結び繋がれたいのちを、私がまたひとつ、ここでこの子に結んだんやなぁ…」という想いがわいて感慨深かった。冬の、しんとした静かな部屋で、娘はただ眠り、私はひとり、そんなことを考えていたのである。だから娘から、妊娠中の検査で「女の子を授かったみたい」と聴いた時には、「確かなことは、まぁ、顔を見てからね」という程度にしか思わなかったのに、後の検査で子宮が確認できたと聞いて、少なからず感動を覚えた。「まだ胎内にいるあなたも、私やあなたのおかあさんと同じ性なんやね」。

将来、この子が新しくいのちをつなぐかどうかはわからない。けれども、同じ“器”を体内に持つということの、生き物としての深いつながりを感じた。

さて。対面はまだである。しばらく手伝いに行くが、少し先の話になる。親しい友人から「孫はかわいい？」と尋ねられ即答できず、“ご期待”に反して「はて？」と考えた。写真を見て「かわいい」とは思うけれどもどうも実感が伴わない。ただ単にうれしいのとも違うし、どうかすると悲しいような気持ちさえある。…あぁ、そうか、「娘が母に」ということの実感がわいていないのだ、きっと。何にしてもものすごく不思議な感じである。産後初めて娘に会う時、私はどのような気持ちになるのだろう、娘との新しい関係も、始まるのだなぁと思う。こういった明確に言い表せられない気持ち、それこそ、マタニティ・ブルーズならぬ“グランマぁ・ブルーズ”とでもいう精神状態があるとするならば、研究をしたらおもしろいかも、などとも思う。

この数年の間に、何人かの親しい者のいのちを送った。そして今、新しいいのちを迎えた。娘が産まれた頃には存命であった祖母はとうに亡くなり、母も老いた。この世に、波が引いては寄せるように、“ここ”に新たないのちをひとつ置き、そして持ち去っていく。自然は、何ごともないように繰り返し、静かに平らかである。人の営みは連綿と続くということを思い、冬の星空を見上げると清んで美しい。その果てしなさに、どこかほっと安堵する私である。

【きのう　うまれてきたあなたへ】

きのう　うまれてきたあなたへ
きのう、うまれてきて　ありがとう

おなかの、
お外　の　せかい　にはおひさまがあって
あかるく
あたたかく
お外は広いですよ

あなたのおかあさんは
あなたをずっとおなかのなかで
守ってきて

そのおかあさんをおもうわたしは、
じぶんがそうであったことを
　まるでそのままのよう　に
おもいだします

くりかえす　いのち　のれきしのなかに
あなたのいのちがくわわったこと、を
そのことのおおきなよろこびを

わたしはそらにむかって
　ありがとう
といいたいです

【娘】

あなたの胎(はら)に

いのちが宿る。

かつてわたしに

“あなた”が宿ったように。

私は今、経を閉じようとしていて

あなたには今

新たな　役割　が担わされる。

いのちの

これまで永く続いて来、

これからも続いてゆくことの

ほんのちいさな　ひとつのこと。

ほんのちいさな　こと。

私はひとつの　役割　を終え

そして自分自身になって

また新しく生きはじめる。

Born

福祉教育への挑戦(5)

伝わらない…日々勉強

髙井裕二

「テストに出るか出ないか」という関心から

高等専修学校での授業、自分自身の福祉施設での経験などを織り交ぜて授業を展開している際に支援経過、エコマップやジェノグラムなどを板書して伝えることがあります。そんな時、決まって飛んでくる質問が、

「先生、それ(板書)ってノートに書いたほうがいい？テスト出すの？」

というテンプレートです。もちろん、先行して「書かなくてもいい」と伝えていますし、個人的な経験を平常試験で出しません。ただ、生徒にとっては「先生が話していることはテストに出るか、出ないか。出るとしたら、どんな出題をするのか」ということに集中していると感じる時があります。問題(評価)については、穴埋め問題中心の学校の定期試験問題とマークシートで解答する介護福祉士国家試験問題とのギャップをどのように考えるかという話もいずれ取り扱いたいと思います。

今回は、生徒に自分の意図することが伝わらないという自分の失敗談を言語化してみたいと思います。

演習として「点つなぎ」を取り入れたが・・・

レクリエーションに関する単元の時です。高齢者施設でも取り入れられている「点つなぎ」を体験してもらいながら、コロナ禍での工夫点、高齢者の身体状況を見ながら多くの高齢者が参加できるように配慮すべき点(利き手を十分に動かせない、文字が見えにくい場高齢者に対してどのようなサポートがあると良いか等)について考えてもらうように計画を立てました。「今日はこれをやってもらいます」と点つなぎのプリントを見せると反応は上々。小学校時代にやったことがあると話す生徒もいて、気持ちが高まっている様子。私から次のように投げかけます。

「ただ『やるだけ』だと、ただの遊びです。みなさんが介護施設でレクリエーションを担当すると考えて、高齢者が実施するにはどのような工夫が必要か考えてみましょう」

そう伝えて、プリントを配りました。結果的にどうなったかというと、ただ「点つなぎ」をしただけのような時間になってしまいました。生徒同士でどちらが先にできたか競

い合う、熱中するあまり次の番号が見つけられず教員の指示が聞こえないといった状態になりました。演習の時間が終わり、ふりかえりをする時間になっても点つなぎを続ける生徒もいたり、プリントをノートに貼るかどうかということに関心が移っている生徒もいたりして、全体での振り返りの時間も十分に行えたかというと、疑問が残ります。

ただ単に生徒にとって楽しい時間を提供してしまったようで、翌週になっても

「先生、今日は点つなぎしないの？」

と純粋に尋ねられた時に、自分の未熟さを改めて痛感しました。

教員としてのふりかえり

ここからは反省点について考えてみたいと思います。色々とあると思いますが、①生徒、クラスへのアセスメントが不十分であったこと、②指示の仕方が漠然とし過ぎていること、の 2 点について考えてみます。

まず①ですが、常勤で関わっている大学生と同レベルでこちらの意図を感じ取ることができると考えていたと思います。以前、書いたように中学校から明確に福祉を学びたいと考えて高等専修学校をせんたくした生徒ばかりではありません。中には福祉への関心が薄い生徒もいます。加えて、勤務校では夏休みを使って介護職員初任者研修の資格を取ることができますが、「取らない」という選択肢もあります。そのため、「介護施設でレクリエーション」ということが他人事になってしまう生徒がいても不思議ではなかったと思います(もちろん教科「福祉」の授業ですから、それを徹底することも可能です)。

そして②も指示を口頭だけでなく、視覚的にも伝える工夫があっても良いと感じています。例えば、板書で問いをかき、後で書き込みにきてもらうこともできるし、ワークシートを準備して、気づいたことを記入させ提出させることもできました。介護職員としてのイメージがつかない生徒に対しては、友達や身近な高齢者と一緒にするなど、お題を個別に設定できるように対応できれば、よりイメージがついたかもしれません。新型コロナウイルスの感染防止の観点からグループでの作業ができていませんが、気づいたことを全体で共有する前に 2、3 名でもグループ分かれてふりかえりを行うといった過程を踏むなど言語化のステップもあっても良かったと感じています。

ちなみに同じお題と方法で大学生に実施してみたら、想定していたような展開になりました。私に授業の腕があるのではなく、教科「福祉」を教えるピントがズレていて、大学生の学ぶ態度に助けられているだけだと思い知らされる出来事になりました。週に 1 回という生徒との限られた時間ではあることを言い訳にせず、限られた時間だからこそ、準備を丁寧に行っていきます。

タイトル名「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第 5 回：第 1 章–その 5–

「人の命，人生，生きる意味」の探究の麓

著　：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

なぜ，その本を手にとったのか？

対人援助学会 2020 年次大会における企画ワークショップ，「対人援助実践をリブートするこの 1 冊」においてご登壇頂いた小幡知史先生，二階堂哲先生の両名は，言わずもがな，対人援助実践に大変に熱心なお方です。お二人は，それぞれの領域で目にする当面の問題や課題に一生懸命取り組まれながらも，それに振り回されすぎないようにご努力されています。表現が不適切かもしれませんが，目の前の事象云々といった「些末なこと」より，簡単には抱えきれないその援助対象者の人生そのものを捉えようとされ，そして，その答えを見出すのに苦悩しながら，真摯に探究を続ける方であることを，私は知っております。

さて，そんなお二人が，前回，前々回の本誌でご紹介してくださった文献は，「行動分析学」と「仏教」に慣れ親しむ本でした。不思議なものです。この世には数えきれないほどの文献が存在しているのに，結局私たちは似たような本を手にとり，その本から何かを感じ，学ぼうとしていたのですから。

事実，お二人が私にそれらの本を紹介してくださる前に，私は誰にも勧められることなく，前々回に小幡先生がご紹介された「行動分析家の倫理〜責任ある実践へのガイドライン〜」を，前回に二階堂先生がご紹介された「はじめての応用行動分析」と「自由への旅マ インドフルネス瞑想 実践講義」を購入して，読了していたのです。ですので，今般のワークショップの企画が立ち上がり，お二人が「こういった本を取り上げたい」とおっしゃった時，私は開口一番，「ああ，この本ね。いいよねぇ」と自然とつぶやいたのでした。

もちろん，他者がこのエピソードを耳にされれば，「あなたたち 3 人の学歴だか教育履歴，つまり，学術的バックグラウンドは同じだろうから，そういった現象を起こしやすいはず。よって，不思議というほどのことではない」と，ご一笑されるかもしれません。しかし実際，小幡先生は心理学部ご出身，二階堂先生は教育学部ご出身，そして私，渡辺は，社会学部社会福祉学科出身ですので，同じような教育を受けてきたわけではないとい

えるのではないでしょうか。

ただ，私たち３人は，それぞれが異なる対人援助の臨床に携わりながら，その職場だけでの学びと実践では到底，納得，満足，安心ができなくて，他に答えを求めて彷徨うようになった点において，完全に一致しております。そしてその過程で結果的に，似たような学問や領域に興味関心をもったのかもしれません。

こうやって改めて企画ワークショップの内容に至る経緯を描写すると，類似性の法則よろしく，似た者同士がたまたま，そして自然と接近しあって，似たような興味から，隣接性の高い文献を選んでしまったのかもしれません。私自身が一笑してしまいます。

そういえば，今や世界的なコミックとして世代を超えて親しまれている集英社の「ジョジョの奇妙な冒険」の第４部で，「スタンド使いはスタンド使いにひかれ合う！」という有名なセリフが登場します。このセリフは，同じような能力をもった者同士がなぜか自然とかかわりあいをもってしまうという現象は至極当然であると述べています。

荒木飛呂彦の「ジョジョの奇妙な冒険」（集英社）から

「ジョジョの奇妙な冒険」に登場するスタンドのような能力は私たち３人にありませんが，「対人援助をなんとかしたい」と考える能力と，それの発動が，私たち３人を引き合わせたのかもしれません。冗談だか本気だかよくわからないお話ですが，そういえば私たち３人は 30-40 代でして，まさに「ジョジョの奇妙な冒険」の「ど真ん中」世代にあたりますし，ふと思い出しますと私，渡辺は，週刊少年ジャンプにおける「ジョジョの奇妙な冒険」の第１話をタイムリーに読んでいました。あれから 30 年以上たっていることにびっくりですが，不思議な，そして，奇妙な「縁」さえ感じるところです。

佐々木閑，大栗博司（2016），
「真理の探究　仏教と宇宙物理学の対話」幻冬舎

「縁」，といえば，今般の企画ワークショップで渡辺が紹介させていただいた本もまた，まさにその「縁」のあらわれかと思いました。私が手にとって本は，次の２冊でした。

１冊が，仏教学者である佐々木閑先生と，物理学者である大栗博司先生の対談をまとめるように構成された「真理の探究　仏教と宇宙物理学の対話」であり，もう１冊が，同じく佐々木閑先生の名著，「犀の角たち」を加筆修正の上，文庫化した「科学するブッダ　犀の角たち」でした。奇しくも，すなわち「奇妙」にも，これらのセレクションは，小幡先生が志向された援助の「科学性」と，二階堂先生が志向された援助と「仏教哲学の親和性」に応えるものとなっていたのです。

「奇妙な縁」だか，ゆるぎない何かによって，私たち３人は偶然とも必然とも言い表せないつながりにより，しかるべき勉強に着手していたのかもしれません。読者の皆様は，これまたご一笑されるのでしょうか？

援助実践で生まれた疑問と「科学と仏教哲学」

さて，まず，「真理の探究　仏教と宇宙物理学の対話」がどのような文献なのかについてご紹介させていただきます。

この本では，まさに各界を代表する研究者である二人の著者が，それぞれの基盤に基づいて「真理」を探求しています。すなわち，仏教学者である佐々木閑先生と物理学者である大栗博司先生が，宗教と科学の両側面から，私たちが現存するこの宇宙において働いている真理を捉えようとしているのです。

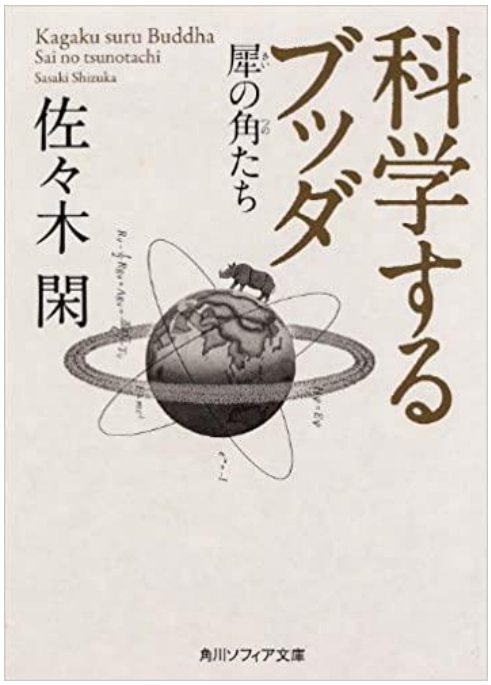
未熟な私では，気鋭の研究者である著者たちの意気込みを端的に，そして的確に説明することができません。そのような私の非力さをお詫びするとともに，以下，稚拙な私の理解で述べることをお許しください。

私は，著者たちがこの本で訴えたいことを，「自然法則と人間性を同時に，あるいは同一にとらえること」であると理解しました。それは「人間とは何か」，あるいは「人の命」や「生きる意味」に対する問いの答えを導いてくれるような冒険の過程でした。この，今申しあげた３つの問い，すなわち，「人間とは何か」，「人の命とは何か」，そして「生きる意味とは何か」とは，結局すべて似たような問いであるため，最終的には１つに

問いに集約されるかもしれません。

実は，この問いこそ，ありとあらゆる対人援助臨床において共通して援助者に課せられる理念的哲学的問題であると，私は考えております。私がこの問題にはじめて直面したのは，22 歳の秋でした。

その日，私は，最重度知的障害を有する援助者対象者の S 氏（以下，S）と一緒に，S の衣類の整理を行っていました。S は私の 4 つ年下でした。障害がゆえに，S と言語的な意思疎通はままなりませんし，また，S はご自身で衣類がたためません。よって，私が衣類整理するのを，ただ，そばで S に見てもらう，否，ただそばにいてもらう，という援助場面でした。



佐々木閑（2013），「科学するブッダ　犀の角たち」，KADOKAWA

たまたま便秘気味だったためか，S は大変に不機嫌な様子でした。私が衣類整理をはじめようと S に声をかけると，眉をひそめて唸り声をあげはじめました。そして私がタンスにトレーナーなどの衣類をいれはじめるとまもなく，いきなり，私の左側面から全力で頭突きをしてきたのでした。

虚を突かれた私のメガネは空を飛び，一瞬にしてフレームはゆがんでしまいました。激しい痛みに襲われつつも私は何が起こったのか理解できず，周囲を見渡すと，ただ，S は何事もなかったかのように佇んでおり，そして，私と S 以外は誰もそばにおらず，先と変わらぬ風景，つまり，衣類だけが私たち二人のそばにあるだけでした。

つまり，ただ，S が，たまたま私に頭突きをしただけでした。ただそれだけです。

きっと S は，たまたまそばに私がいたから，そうしたのでしょう。

きっと S は，たまたま心身の不良か何かがあったから，そうしたのでしょう。

ただそれだけのことにすぎないのでしょう。

そのような単純な出来事であることをなんとなく理解しつつも，私は，左こめかみ周辺に残る強い痛みと，フレームが歪んでしまったメガネが落ちないようにすることの難しさを感じながら，先に述べた問いと直面しました。

「…人間って何なんだ，人の命ってなんなんだ，生きる意味ってなんなんだ…。」

このような問いが生まれてきた理由は，うずくような痛みが，以下に記すいくつかの事実・現実を私に気づかせたからです。一瞬にして一斉に，私の頭の中で飛び回ったのでした。

1）私がSのために働いているのにもかかわらず，Sから攻撃されるという事実
2）本来であればSをそばにおかないほうが衣類整理しやすいのだが，そのような作業効率の追求は援助の質と合致しないという現実
3）Sにそばにいてもらいながら衣類整理するという援助は，理念的には間違いではないものの，その援助企図や効果が実は不明瞭であるという現実
4）そしておそらくSの障害は，今後一生回復しないであろうという現実
5）メガネの破損も私の怪我も，すべて私の責任とされる現実（当時はそれがある種の常識だったのです）
6）怪我を負い，メガネを破損してしまった私を労う人，励ます人，慰める人は皆無であり，また，このような出来事をある意味忘れなければ， Sの援助を気持ちよく展開することが今後難しくなるという現実
7）1）～6）を踏まえた上で，Sと自分，それぞれの命，人生，生きる意味の違いを，誰も，そして良くも悪くも，何も説明できないという事実
8）そして，そんな私の思いを，おそらくまったく理解していないSが目の前にただ，佇んでいるという事実。頭突きしたことなどまるで覚えていないかのように，普段通りの態度を示しているという事実。まるで，思い悩む私が馬鹿みたい，滑稽に見えてくるという現実。

実にお恥ずかしい告白ですが，私は，援助の難しさ，援助者の辛さを，自分より年下の最重度知的障害者の屈託のない表情を見ながら，発見したのでした。かといっても，手を休める暇はなかったので，私はトレーナーをたたみ，Tシャツをたたみ，ズボンをたたみ，タンスの中を整理し続けました。誰のための作業なのか，もしかしたら第一義はSのためではなく，実際に衣類を取り扱う援助者や，あるいは，このような援助を肯定する社会のために行っているのかもしれないという疑問をかみしめつつ。あるいは，なんのための作業なのか，もしかしたら援助者の着衣介助の効率性向上のためであったり，「人の衣類の取り扱いとは」という社会が作り出した観念の維持のために行っているのかもしれないという問題意識を吐露しそうになりながら。

その後，こういった問題意識だか疑問を，何かの拍子に職場の先輩に相談したら，「考えすぎ」と大笑いされ，答えを見つけ出せない私に対して「しゃーねーべよ（茨城弁で，しょうがない，仕方がない，という意味）」と結論付けていただきました。

“しゃーねー”

仕方のないこと。今すぐの対応が簡単ではないこと。

確かに，私のような若輩者が簡単に答えを見出せることではないのでしょうが，とはいっても，このような疑問をあたかも「なかったこと」として仕事をすることは，それこそ簡単ではありませんでした。命だ，人生だ，生きる意味がなんなのかということは，それはSにのみならず，自分自身にとっても共通する問題であるし，また，このような問題を

回避しながら援助実践を続けることは，結局，なぜ援助するのかという起点なり目的なり真実の理由を失うことになりかねないという思いがあったからです。

このような若かりし頃の私の問題意識は，必ずしも表層化したままではありませんが，私の対人援助実践のどこかに脈々と根付いていきました。そして，佐々木閑先生と大栗博司先生の知的な取り組みは，まさに私のその問題意識とリンクする内容だったのです。つまり，人の命，生きる意味を深く考え，古代から最先端の科学までを幅広く網羅しながら，また，人の立場から現世を生きる歓び（悦び）を見出しながら，人が人を支えること（援助）の尊さへの言及を展開されていたのでした。

さらに，佐々木閑先生の「科学するブッダ　犀の角たち」では，科学と仏教の深淵なるつながりが指摘され，過去 - 現在 - 未来をもつなげる視点や，人間の世界観に留まらない視点，そして，宇宙への探求と人間へのそれが同一であることが述べられております。それはとても未来志向の考察でした。そういった意味で，この本を読了した時，私は何か，希望のような思惟を得れたような気になったのでした。

そんな私の思いを，今般の企画ワークショップで皆様にお分けさせていただきました。私の稚拙な思いがほんの少しでも皆さまに届けば，望外な喜びになります。もっとも，今回の２冊を読むに際し，仏教哲学の基礎知識がある程度ないと，人によっては拒否反応（？）を起こすかもしれません。もしそうなるのであれば，渡辺の独りよがりになってしまったことをお詫び申し上げます。そもそも，私自身がまだまだ勉強不足で学んだことを具現化，実践化できずにもたもたしておりますので，人様に適切に文献を紹介できる立場にはほど遠いのが実情でした。

ただ，また，対人援助実践に行き詰ることがあれば，リブート（reboot，意味は再起動）のスイッチとして，これらの本を再読し，学びと探求を再開したいと思っております。それが今の私の本心なのです。

今回はこの辺で。

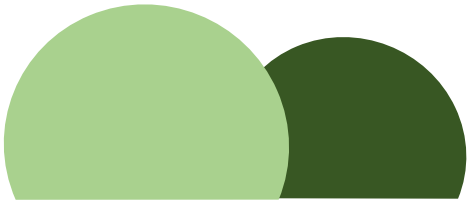
それではまた。

- つづく -

島根の中山間地から Work as Life

第４回
「ゆっくりでいいよ」

野中 浩一



結局は学歴？

誰が言ったかは忘れた。
3〜4 年前、私が働くフリースクールで聞いた生徒の言葉。

「私たちにはゆっくりでいいよって言うけど、スタッフさんは附属とか高専の話してるよね。結局は学歴なんだなって。」

フリースクールには 30〜40 代の職員が数名おり、わが子の受験や進路についての話がときおり出てくる。

その受験の話を耳聡く聞いた生徒（高校生）が、別の生徒に話した言葉だ。
私はそれを偶然耳に挟んだ。

わが家の受験

小 6 と中 3 の娘、ともに私の勧めで今年受験をした。
あの附属と高専だ。

島根県は受験の選択肢が少なく倍率が低い。

国公立で唯一受験がある附属小と附属中で 1.5 倍〜2 倍あるかないか（倍率非公表のため推定）。
高校に至ってはトップランクの進学校でも 0.9〜1.2 倍。
私が暮らす雲南市の公立高校は 0.7〜0.8 倍ほどである。

しかし当の地元受験生たちは気楽かといえば、そうでもない。
初めてのことだから心配は尽きない。

あの言葉を聞いてから、自分の中でときおり考える。
生徒だから「ゆっくりでいいよ」で、わが子だから「しっかり頑張って学歴つくれ」なのか？

少なくとも私はそういう感覚ではない気がしている。

皇女と呼んでください

「野中さん、あなたは平民ですよ。これから私を皇女と呼んでください。」
ある女子生徒に言われた。

一瞬面食らったが、その子の味わいある言いようも手伝い、すぐに面白みが勝った。

以前から、その子は「ゲイツの娘に生まれたかった」と私に話してくれていた。

素敵なご家族に恵まれ、
その子の激情の嵐に誰もが翻弄されることはあるものの、
家族仲も良く、経済的にも不自由なく、勉強もまずまずできる。

しかし常にカーストが意識され、今の自分では満足できないのかもしれない。

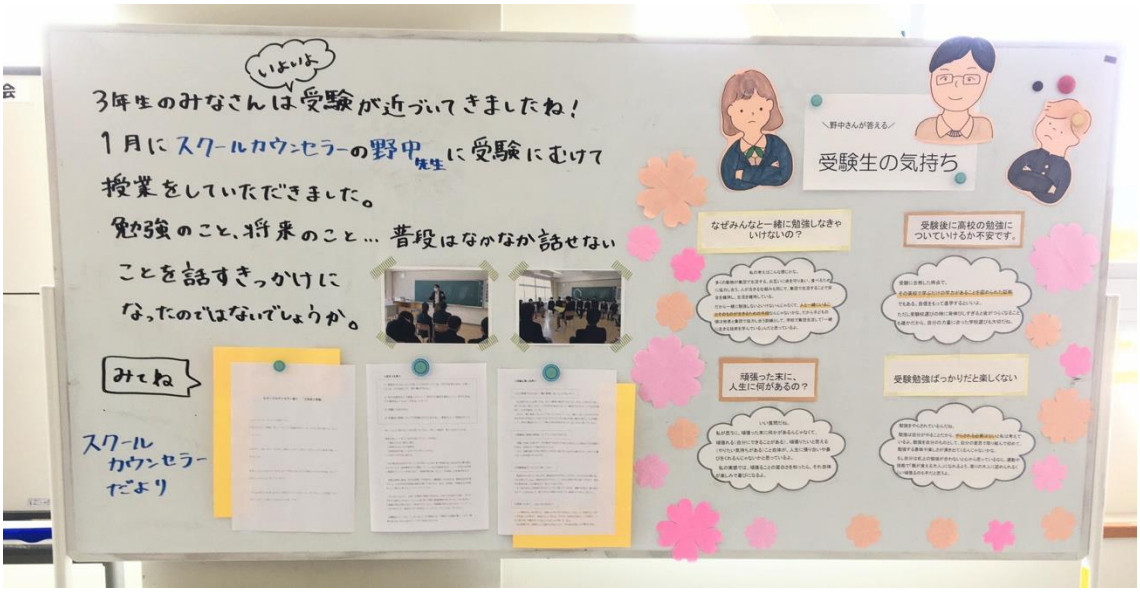
そしてその意識が「野中さん、あなたは平民ですよ」という言葉になり、
「私は平民だから全然いいけど、皇女とは呼びにくいわ。皇女の〇〇さんでいい？」という返事になり、
「う〜ん、そっか〜」というやりとりになる。

中学生と受験

1 月、私がスクールカウンセラーとして赴任している公立中学で、
「受験」をテーマに授業を担当させてもらった。

小グループでのやり取りと、
全体での振り返りと。

その時の様子を、養護の先生に素敵にまとめていただいた。



中 3 生からの質問の中に、
『なぜみんなと一緒に勉強しなきゃいけないの？』
という声があった。

私はそれにこう答えた。
『私の考えはこんな感じかな。多くの動物が集団で生活する。お互いに命を守りあい、食べるために協力し合う。人が生きる仕組みも同じで、集団で生活することで安全を維持し、生活を維持している。
　だから一緒に勉強しないといけないんじゃなくて、人と一緒にいることそのものが生きるための手段なんじゃないかな。だから子どもの頃は他者と集団で協力し合う訓練として、学校で集団生活して「一緒に生きる技術を学んでいる」んだと思っているよ。』

その時はそんなに悪くない答えのように思っていたけれど、
後から読み返すと、なんかちぐはぐな感じもある。

『なぜみんなと一緒に勉強しなきゃいけないの？』の言葉に含まれる成分は何だろう。

人とのやりとりの中で蓄積されたズレ感や違和感、集団への不安、一緒の苦しさ、そしてこんな思いをせずにはいられない自分へのやるせなさ。

そんなあれこれが詰まっているんじゃないか。
もっと違う言葉かけがあったんじゃないか。

塩梅についての雑感

「ゆっくりでいいよ」という声かけは悪くない。人を傷つけない柔らかな響きがある。しかしこの言葉を安易に多用するとき、その意味は変化してしまう。

「登校しなくてもいいよ」という一見すると不登校の子を受容しているような言葉。逆に「がんばれ」といった相手に面と向かって鼓舞する言葉。何かを良し、何かを悪しとしたときから、言葉の持つ意味が変質するのを感じることがある。カウンセリングにおける「傾聴」、不適応や不登校における「個別対応」もそうだ。この方法がいいといった単純さは物事を混迷させる。複雑な変化の中でバランスをとる試行錯誤の連続、その中で見える都度の塩梅があるのではないか。

五木寛之氏の著書の中で、「同治」と「対治」という言葉を知った。氏の言葉を引用すると、たとえば「高熱を発したときに氷で冷やして熱を下げるようなやり方を対治」「十分に温かくしてあげて、汗をたっぷりかかせ、そのことで熱を下げるようなやり方を同治」というのだそう。

相手と向き合ってアドバイスや励ましの言葉かけをする関わりもあれば、同じ目線に立ってただ一緒に寄り添ったり一緒に泣いたりする関わりもある。どちらが良い悪いではなく、相手の背景を理解し、状況を受け入れ、対話し、一緒に歩む中で、自然とその都度の関わりや言葉が発生する。その自然を阻害する他人事な打算や作為のなんと多いことだろう。

その日、その時の塩梅がある。

メリトクラシー（≒能力主義）社会のサバイバル

生きている中で、勝ち負けや立場の上下を決定づけられるイベントがある。それ以前に、そもそも最初から決まっている勝ち負けや立場の差異もある。人生は勝ち負けじゃないと言えば聞こえはいいが、そう言い切れる人はかなり恵まれているという見方もできる。

教育学者の本田（2005）は、日本の近代社会が『学歴をはじめとする手続き的で客観的な能力が求められてきたという意味で、メリトクラシー的であった』と述べ、さらに『今日では、コミュニケーション能力をはじめとする独創性や問題解決力などのような、より本質的で情動に根差した能力が求められるポスト近代社会（ハイパー・メリトクラシー）に移行しつつある』と述べた。能力により地位が配分される社会で、誰もに高度な力が求められる傾向がある。

社会学者の苅谷（2001）は、このようなポスト近代社会化において『自ら学び、自ら考える力など、個

人が主体的・自律的に行動するための基本となる資質や能力＝「生きる力」の育成に異を唱えることはむずかしい。だが、「自ら学び、自ら考える」個人、「主体的・自律的」に行動する資質を備えた個人に、だれもがなれるのか』と問題提起している。

高度化する現代、制度やシステムが張り巡らされた社会で、生活者である人が色々な場面で置き去りにされているように思える。立ち回りがわからず、かといってリタイヤもできず、行き場を失っている人がいる。

「APEX LEGENDS（エーペックス　レジェンズ)」というサバイバルシューティングゲームがある。中高生から大人まで、幅広い年代を虜にしているクロスプラットフォームのゲームだ。そのゲーム中では、次第に活動できるエリアが狭まり、60 人いるプレイヤーが撃ち合いながら徐々に脱落していく。現実社会においても、制度やシステムやネットワークや倫理観やあれこれが一定以上に積み重なったことで、このゲームの状況さながら、多くを求める能力主義が人を追い立て、それについて行けない人を順に侵食して脱落者を増やしているのではないか。また一方で、脱落することが表面的に自分を守る手段として定着しつつあるようにも感じられる。

Electronic Arts『APEX LEGENDS』公式サイトより画像引用

そうした脱落が多くなっている実感からだろうか。まずは安心して笑いあえる場所、「ゆっくりでいいよ」の言葉は、自分を立て直す休憩所という意味においては、まんざら悪くないように私には思えてくる。

引用・参考文献

Electronic Arts『APEX LEGENDS』公式サイト　https://www.ea.com/ja-jp/games/apex-legends
本田由紀（2005)『多元化する「能力」と日本社会 ―ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT 出版
五木寛之（2000)『他力』講談社
苅谷剛彦（2001)『階層化日本と教育危機－不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂

夫の腎臓と、笑うわたし

両角　晴香

今月、女性週刊誌の記者さんから夫婦間腎臓移植について取材していただいた。発行部数30万部というマスメディアということと、数日後にヤフトピに記事が転載されたことで、方々から「記事を読んだよ」と声をかけてもらった。

「夫婦で臓器をわけあえるのか」と驚く人もいるが、現代の移植医療において夫婦間での腎移植は珍しいことではなくなった。健康な人からの生体腎臓移植は夫婦間で行われるケースが全体の４割。親子間より多い。

なぜ夫婦間腎移植を選ぶ人が増えているのだろう。医師や移植コーディネーターさんに取材した当記事には、「この先一緒にいる時間が最も長い相手だから」と記してあった。私たち夫婦もまさしくそれが理由だった。夫との付き合いはかれこれ20年になるが、まさかドナーとレシピエント（臓器受容者）の関係になろうとは、想像していなかった。

夫から腎臓をもらって生きる私をみて驚く人は少なくない。理由はさまざまだ。「夫婦とはいえ仲が良いわけではないから私はあげられないしもらえない」という意見もあるし、「あげたくても子どもが小さいので物理的に無理」という人もいる。皆、いろんな事情を抱えており、臓器を提供する・しないで愛情の量がはかれるものではない。

あくまで“サンプル１”に過ぎないが、私たち夫婦がどのような経緯で腎移植を

することになったのか、もらった側の私の視点で振り返ってみたい。

中学一年生の時に先天的な慢性腎臓病が発覚した。「治る見込みはない」と医師に言われたことで、この先、そう長く生きられないんだろうと思うようになった。悲観していたというより、人生とはそういうものだと思っていた。だから好きなことはなんでもしたし、自分の人生に満足していた。

22歳で夫と出会い一目惚れした。ダメもとで告白したらまさかのOK。宝くじに当たったくらいラッキーだと思った。「自分は欠陥品」というレッテルを貼って生きてきた私にとって、好意を寄せた相手に女性として受け入れられたことは奇跡のようなものだった。

28歳で夫にプロポーズした。「子を授かれないかもしれないけど、それでも結婚してくれる？」。不躾なプロポーズをした。夫はやさしい人なので、かわいくない言い方をした方が冷静に判断できると思った。夫は「一緒に歳をとろう。老後に二人で温泉でも行けたらいいね」と言って、私をお嫁さんにしてくれた。

子は授かれないと思っていたが、結婚した翌年、29歳で妊娠した。命に変えても赤ちゃんの命を守ると覚悟していたので、産科の先生と今後の治療方針について揉めてしまった日もあった。けれど結局は、慢性腎臓病が原因で夫をお父さんにすることができなかった。息子を産み、まだ少しだけ息のあるからだを抱いた。翌朝、なんとか歩いて外に出て空を見上げると、大空が広がっていた。絶望の時でも、この世はこんなに美しいのだと驚いた。

35歳で母を癌で亡くした。悲しみより、お疲れ様でしたと母を労う気持ちが強かった。過酷な闘病生活を生き抜いた母はとても頑張ったと思う。翌朝、朝刊を見ると、ある女優さんが癌で他界したというニュースが大きくとりあげられていた。母と一日違い、ということもあって他人事とは思えなかった。

翌年、偶然にも女優さんの旦那さんに取材する機会に恵まれた。私は身勝手に同志のような気持ちになって母の話をした。とうに母の死を受け入れていたか

らだ。けれど、その人は「今でも妻を亡くした悲しみから立ち直れていない。とてもじゃないけど一年やそこらでは無理です」と言って下を向いた。改めてその人を見ると、ひどくやつれていた。女優さんは「私がいなくなっても誰とも再婚しないでね」とその人に伝えたという。それは、私以外の女性を愛さないでね、という願いも込められていたようだ。思わず夫の顔が浮かんだ。

以来、私は、「私が死んだら遠慮なく再婚して、できれば子どもに恵まれたらいいね」と繰り返し夫に伝えるようになった。何があっても私に遠慮せず自分の人生を歩んで欲しいと思ったからだ。ちょうどその頃、私は末期腎不全になり、「2020年の東京五輪まであなたの腎臓はもたないだろう」と医師に言われていた。

ある時、友人から、こっぴどく叱られたことがあった。夫に失礼だと言うのだ。
「あんたを選んで妻にしてくれた人に、私が死んだら他の女性にいけだって？一体何様なの」と、友人は本気で叱ってくれた。私は反省し、そういうことを口にするのをやめた。

夫は、ごく自然に、「僕の腎臓をあげる」と言ってくれた。「一緒に歳を重ねよう」と。最初のうちは気持ちだけ受け取ってお断りしていたが、夫婦にとってどの選択をするのがベストなのか、わからなくなった。そこで、両家の家族を巻き込んで家族会議を行った。あらゆる仮説をたて、みんなの気持ちをできるだけ尊重する答えを探した。別の日には患者会に参加して、腎臓を提供した人ともらった人の意見を聞いた。「私を見て。こんなに元気だよ」と言ってくれる先輩方の言葉を頼りに、現代の腎移植医療はこうも進歩しているのかと驚くばかりだった。

ただし、ドナーになるためには、厳しい検査をクリアしないといけないことも知った。無償の提供をしてくれるドナーさんが生涯元気でいてくれて、はじめて移植医療は成り立つ。その点、夫は健康そのものだった。夫の血液検査の結果を見た医師は、「いい旦那さんを持ったねえ！」と目を丸くした。

だからといって、健康な夫から腎臓をもらってもいいのだろうか。2年悩んだ末、前に進もうと決心した理由は二つあった。一つは腎移植をすれば、妊娠・出産が可能になるという話を医師から聞いたこと。もう一つは、1日でも長く夫婦で生きたいと思ったからだ。私たちは義理の両親に会いに行き、「息子さんの臓器をください」とお願いした。その数ヶ月後、2018年3月に私は38歳、夫は40歳で夫婦間腎移植手術を受けた。

夫の腎臓は、私が麻酔から目を覚ます前に私の体に生着した。「じゃんじゃんおしっこが出ていますよ！旦那さんからもらった腎臓からです」と看護師さんに言われ涙が出た。

移植腎は、永久に元気でいてくれるわけではない。腎移植臨床登録集計報告（2021）によると、生体腎移植の場合、5年生着率は93%、10年生着率は80%。数ヶ月前、約40年生着しているという方からお便りをいただき勇気をもらったが、夫からもらった移植腎がいつどうなるかは誰にもわからない。

来月、手術から丸 4 年経過する。一喜一憂しながら不妊治療を続けているが、今のところ思うような結果が出ていない。それでも夫婦の間には、やわらかな空気が流れる。最近、夫がこんなことを言った。「移植する前もしあわせだったけど、今はもっとしあわせになったね」。野菜とチキンをココナッツオイルと岩塩とハーブで焼いたシンプルな料理を熱々のまま口に運び、夫はハフハフいっている。「ごめん、熱かったね」とちょっと笑ってしまった。「老後に温泉にでも」なんてわがままは言わない。おだやかな日常を守り続けたい。

文/もろずみ・はるか　ライター・医療コラムニスト
広告制作会社を経て 2010 年に独立。中学 1 年生の時に慢性腎臓病を発症。18 年 3 月、夫の腎臓を移植する手術を受けた。
・連載(ウートピ) https://wotopi.jp/archives/cat_summary/kidney
・連載(yomiDr.) https://yomidr.yomiuri.co.jp/column/jinzou-morozumi/
・YouTube
https://www.youtube.com/channel/UCyAM15SCktBfsqTxk7HTbhA
・ラジオ https://885fm.jp

かぞくのはなし
きむら　あきこ

第二話　手元のジェノグラムその２

前回に引き続き、団士郎先生の「家族理解ワークショップ」でのジェノグラム面接演習で描かれた、「私のジェノグラム」を使って被援助者体験からの発見をお伝えしたいと思います。仕事や子育てに全力投球していた時期に、ついつい心の余裕をなくしてしまって、あれこれ子どもに要求してしまっていたことがあったなぁ、と自分自身を思い出しました。

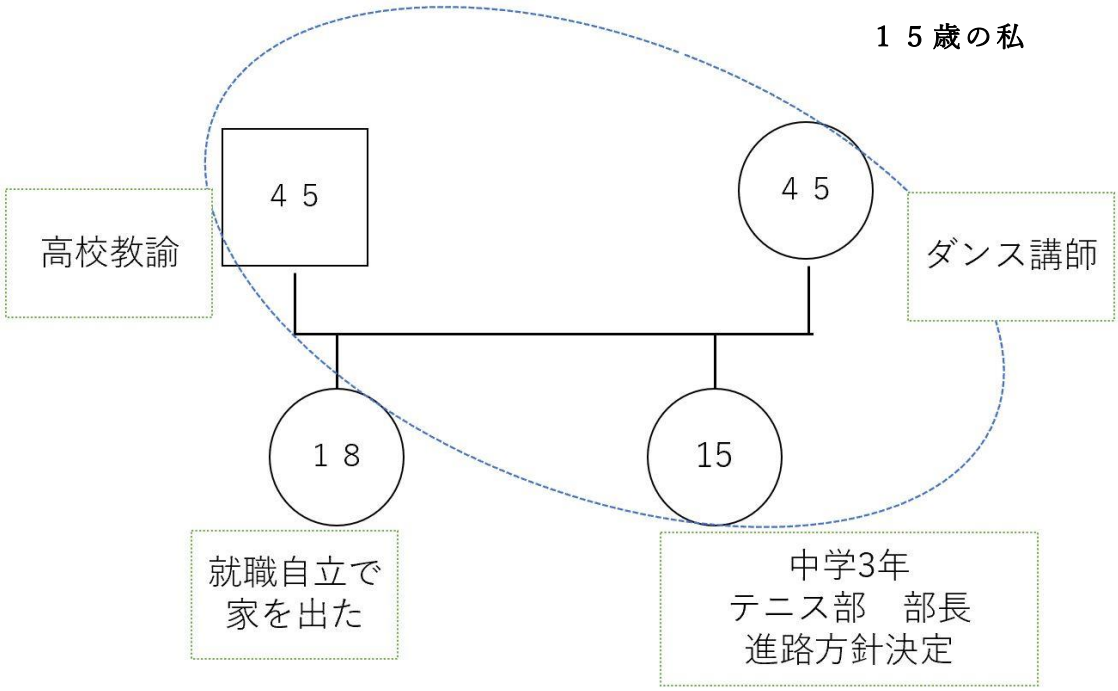
今回の連載を書きながら、私の子育てエピソードを当時の長女（小学高学年頃)がマンガに描いてくれていたことを思い出し、宝箱をひっぱりだしました。チラシの裏に手書きで書かれた棒人間マンガ。せっかくなので、後半にご紹介しようと思います。

「15歳の時」のジェノグラム・・・思春期の思い

2009年10月24日のワークショップのジェノグラム面接演習のテーマは、「１５歳の時」の私になって面接を受ける、というものでした。

面接者の定番フレーズ「ご家族のことについて教えてください。」という言葉で、１５歳にタイムスリップした私がインタビューに答え始めました。

中学３年生になった私は、その春、就職のために家を出た姉を除いて、両親と私の３人で生活をしていました。中学入学時から続けていた軟式テニス部では、部長として活動し、部活仲間と共に、同じ地域の高校へ進学するという方向性も決まっていました。１５歳の私について、20分ほど語りが続きました。



面接後に、面接者と受け手の私で、面接のフィードバックを行いました。面接者は、「とても活発に元気に過ごされていたと感じました。今の木村さんに通じるものがあるように感じました。」と感想を伝えてくれました。その感想を聞いて、私は面接では話せなかったことを伝えたくなりました。

実は、１５歳の私は、とても疲れていました。私の母は、私が中学１年の秋から中学２年の秋まで、家を出て父とは別居していました。私は父と、姉は母と生活していました。↵

１年ほどの別居生活の終わりは、当時住んでいた教員住宅から、一戸建てを購入して、そこへ母と姉が戻るという選択でした。↵

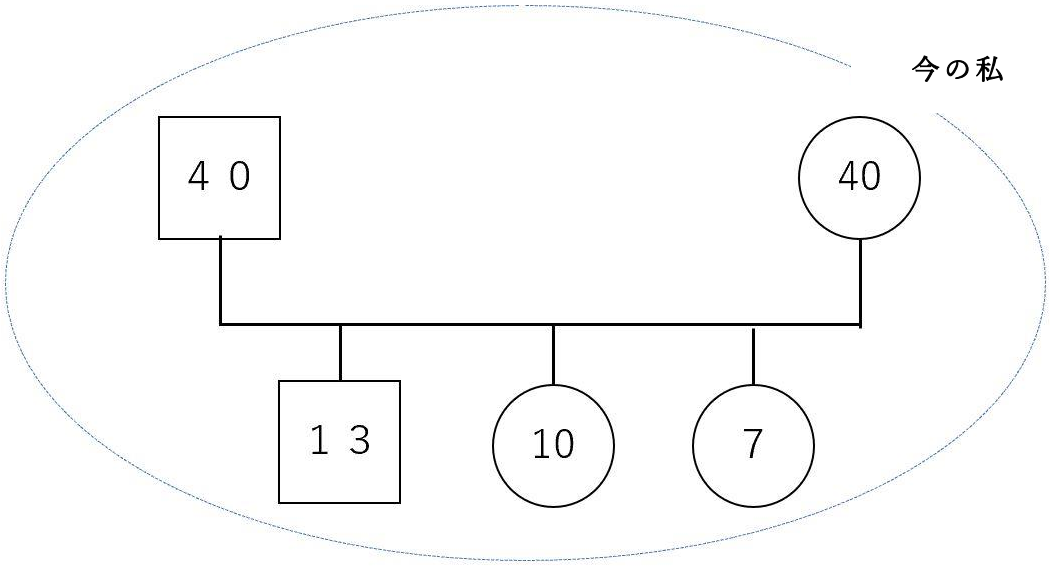
私は、母と一緒に生活できることになったことをとても嬉しく思いました。同時に、また母が家を出ていくようなことにはなって欲しくないと思いました。そこで、母ができるだけ家庭生活に苦痛を感じないように、という子どもらしからぬ母への気遣いを持ちました。家事を手伝う、というのは、洗濯や食後の食器洗い、父と母が二人だけでいる時間を避けるように、その仲介となるべく自分の位置取りに気をつかいました。母のいる生活は嬉しいと同時に私にはとても気を使う時間であったことは間違いありません。↵

面接の時には語れませんでしたが、本当にわかって欲しかったのは、この気持ちだったのですね。今、わかりました。↵

↵

この「１５歳の時」に戻ったジェノグラム面接では、自分の歴史について振り返る、ということが狙いだったと思います。人を支えるには、たくさんの方法があるということ、今ある目一杯だけではなく、今までのことも資源である、ということは常日頃の学びにも通じます。

確かに、15歳の私は、頑張っていたし、色々な気遣いもしていました。けれども、そんな自分を、時がたち大人になった私は、労ってやりたい、という気持ちと、もっと子どもらしくありたかったよね、と声をかけてやりたいと思いました。そして、この１５歳に戻って面接を受けたことで、私は、「今の自分」（２００９年の自分）について気がつきました。「今の自分」は、以下のようなジェノグラムです。

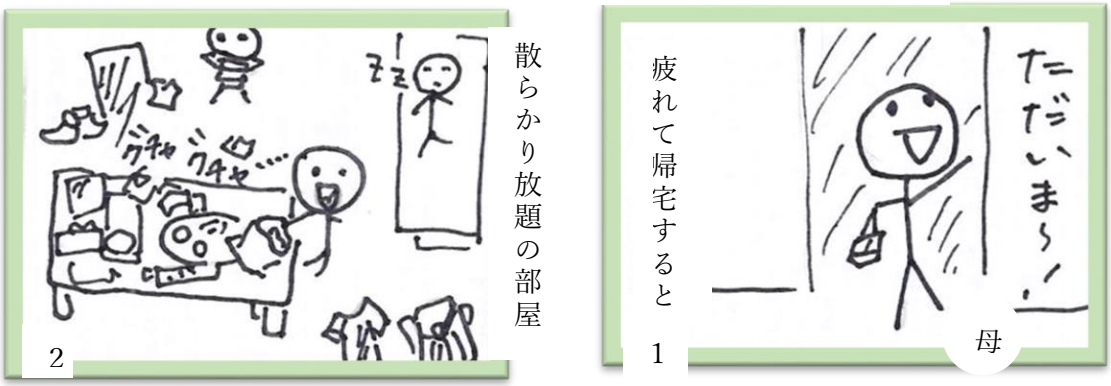


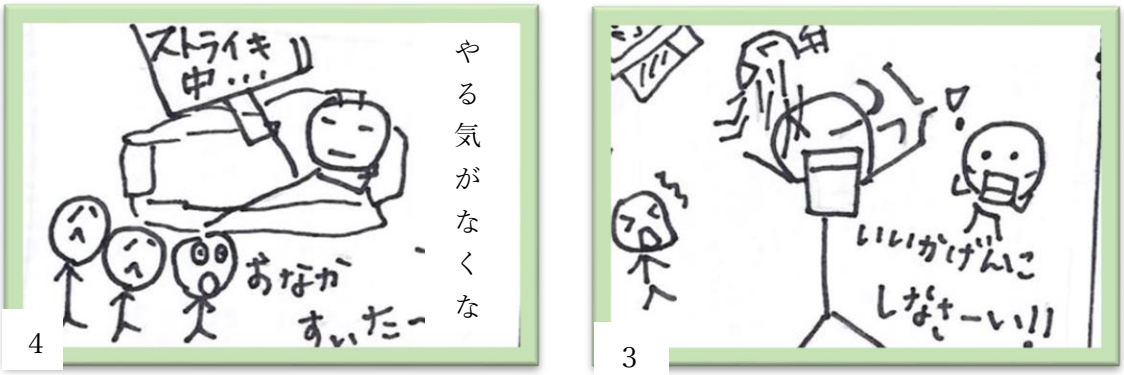
日々の仕事に追われる私は、のんきな長男を始め、子どもたちの手のかかりように、少々呆れていました。もう少し、家の手伝いも、自分たちのことも、「ちゃんとできないものか？私が、中学生の時は、もっといろんなことができていたのに・・・」、そんな風に思うこともしばしばありました。

１５歳の私に戻って面接を受けた時に、私は、気がつきました。「そうか、私の子ども達は、のんきでいいのだ。これが子ども時代なのだ。何の気兼ねもなく、のんきに、好きに生きてくれればいいのだ。」とわかったのです。

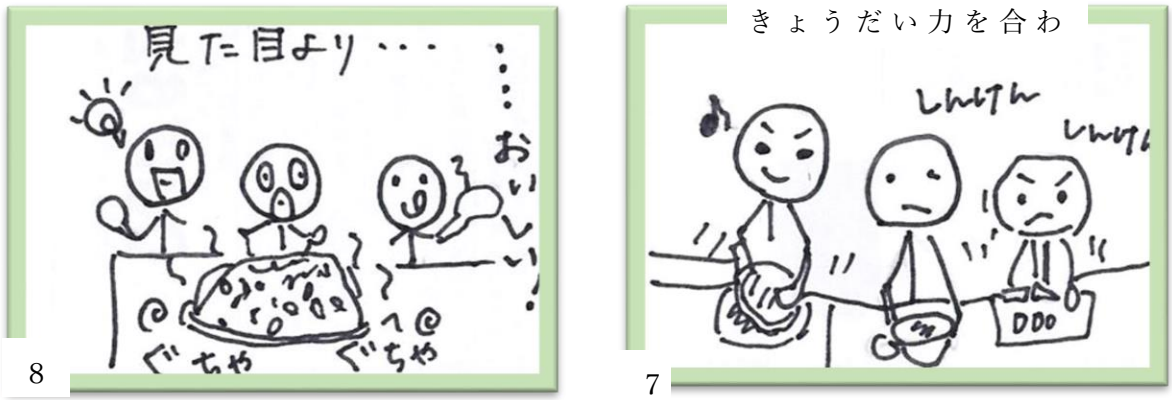
子育ては、日々、精一杯過ぎて、視野が狭くなっていることも多々あります。だからこそ、支援者は「今」だけではない、その人が持っている「今までのことについての」資源についても視野を広げられると良いと感じました。この時、悩んでいたわけでもなく、日々を過ごしていました。けれども、ジェノグラム面接演習での被援助者体験が、私に思わぬ発見をもたらせてくれました。

母のストライキ！


ただいま～！
母
1
疲れて帰宅すると
2
散らかり放題の部屋


いいかげんにしなさーい!!
3
ストライキ中…
おなかすいたー
4
やる気がなくな

自分たちでやりなさーい！
おなかすいた
ダラダラ…
空腹の子ども
5
長男ひらめく！
6


きょうだい力を合わ
しんけん
しんけん
DDO
7
見た目より…
おいしい！
ぐちゃ
ぐちゃ
8

翌日

思いもよらぬ言葉

10

9

母のストライキは・・・

12

なんだか楽しそう♪

11

子ども達の潜在能力を引き出した

©miyu

必死だった子育て、過ぎ去ってみると、楽しく笑える思い出。

良いお母さんではなかったかもしれない。

あの頃は、ごめんね、って思うことたくさんあった。

でも、今は、子ども達、ありがとう！

おわり

対人援助学マガジン読書会報告

対人援助学マガジン読書会（第 4 回）実施報告

2022 年 1 月 22 日に第 4 回目の「対人援助学マガジン読書会」をオンライン（Zoom ミーティング）で開催しました。

第 4 回の指定図書は、河岸由里子さんの「ああ、相談業務」でした。河岸さんは、コロナ禍が訪れる直前、2019 年 12 月に滋賀県で開催された「対人援助学マガジン執筆者と読者の集い」にもはるばるお越しくださったのですが、今回の読書会にはその時の面々も集まりました。

「ああ、相談業務」の連載の背景や、コロナ禍における相談業務の実際、多種多様な仕事をフットワーク軽くこなしていかれる秘訣など、連載の内外に渡るお話をじっくりとうかがいました。「ああ、相談業務」で取り上げる事例も、「先人たちの知恵」の材料もまだまだ尽きることはない（先人たちの知恵はあいうえお順で、現在サ行の“す”）とのことで、本当に恐れ入ります。

第 4 回読書会指定図書執筆者：河岸由里子さん

かうんせりんぐるうむかかし主宰。私設の心理相談室で臨床心理士として相談業務に携わる一方、市の家庭児童相談やスクールカウンセリング、大学での講義など、幅広い職域で活躍されている。対人援助学マガジンでは、読書会で取りあげた「ああ、相談業務」のほか、「先人たちの知恵」をダブル連載中。

（執筆者短信等から抜粋）

◆第 5 回読書会のご案内◆

対人援助学マガジン第 5 回読書会を下記の要領にて開催いたします。

読書会では、指定図書を事前に読んだ参加者が集まり、読書を通して得た気づきや感想、意見を共有することで、より深く、より広く、マガジンを楽しむことができればと考えています。

期日：2022 年 5 月 20 日（金）　21 時から 23 時

定員：10 名程度（先着順）

指定図書：「福祉系対人援助職養成の現場から」　（最新 48 号 48 回連載中）

※当日までに指定図書の最新号を読んでおいてください。

※可能な範囲でバックナンバーおよび前の連載も読んでみてください。

執筆者：西川 友理氏

西川さんは対人援助学マガジン創刊以来、約 12 年間の同タイトルでの長期連載を継続されています。その視点は、未来の支援者を育てるなかでの気づきや大切だと感じたことを契機に、さらに現在の支援者養成の課題や支援者とは何か？を問い続けています。

さらに、当事者活動の場づくりをはじめ、常に若者からの視点も大切にしておられます。対人援助の領域では、次世代の支援者養成が急務とされる中で、今後も大切な視点と言えます。

今回は西川さんの連載をきっかけに、読んだ感想や西川さんに聞いてみたいことなども交える時間を作りたいと思います。

申込方法：

お申込みはメール：takashi_otani7929@yahoo.co.jp まで、件名を「読書会参加希望」としてお送りください。開催期日が近づきましたら、Zoom ミーティングの情報をお送りします。

（編集部）

対人援助学マガジン

第３回　執筆者トークライブ実施報告

2022 年 2 月 25 日（木）の 21 時から 23 時に「対人援助学マガジン第 3 回トークライブ」が開催されました。第 2 回の話者は「人を育てる会社の社長が今思っていること」を連載中の団遊さんです。

トークライブへの登壇を依頼した際、「対談形式なら引き受けます」というお返事を頂き、当日は大谷・千葉編集員や、フロアの参加者も交えてのディスカッションとなりました。

社長を務めておられたアソブロックでの取り組みやその背景、社長を退任されて今考えておられることなど、「仕事と何か？」、「成長とは何か？」を改めて自分に問い直す機会となりました。「成長とは選択肢が増えること」という言葉がとても印象深く心に残っています。選択肢が増えると、どこにでも身を置くことができる。つまり人を自由にさせることにつながるというお話もありました。こうした自由とは何か？という問いも含んだ展開で話は進みました。面白かったのは「嫌われないぐらいがちょうどいい」というお話。好かれると根拠のない自信を持つときもある。そこで努力をするきっかけにならない。嫌われるのは困るけど、好かれないぐらいがちょうどいいという話もリアルに感じました。

今年度、3 か月ごとに読書会とトークライブを企画してきましたが、次年度からは読書会とトークライブをそれぞれ年 2 回のペースで実施する予定にしています。第 4 回のトークライブは 8 月頃に企画する予定です。引き続きよろしくお願いいたします。

読書会やトークライブの開催情報については、Facebook や Twitter などの SNS でもお知らせしますので、ぜひチェックしてください。

◆マガジン公式 Facebook
https://www.facebook.com/taijinenjyogakumagazine

◆マガジン公式 Twitter
https://twitter.com/taimagahenshubu

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

●編集長をしていながらこんな事を書くのも何だが、こう分厚くなると、とても全部読んではいられない。必然的に著者自身の責任校正である。よほどの問題記述でもなければ、ニュースレター拡大版位置づけのマガジンの内容は自由である。査読があるわけでも、評価を付与するのでもなく、個人に委ねるが故のややこしさも含み込んで、自由とはそういうものだと理解した姿勢である。

だから執筆者それぞれの理由で休載もある。ぜひ速やかな復帰を願う。その一方で連載48回目の方がある。考えてみれば分かることだが、12年間、同じ自分で居られるわけがない。人は必ず変化する。いくつになっていようと成長と言ってもいいだろう。その過程を記録している事になる。

マガジンという「場」が設定されたからこそ起こった事態。継続的な「場」を作るとは大したことで、「場」があったからこそ生まれた力があるのだ。是非、新たな方々の参加を！

●世の中の記憶は記録されたものだけが残る。記憶だけのものはやがて忘却される。個人のものであれ、社会の記憶であれ同じだ。だから記述して残しておかなければならない。

「世間はあの頃、口を揃えてあんなことを言ってた！」なんて事を、人間は繰り返してきた。それでも平気で生きているのは逞しい忘却力のたまものだろう。人は懲りない。だから忘れないために記録するのは、その事実に触れた者の責務だ。

●こう書いた二、三日後、ウクライナ侵攻なんて想像を絶する事象が起きた。いったい何時代の話だと思わずにはおれない。二年半前に訪問したあの美しいキエフが爆撃されている。あの街で暮らす人々にこんな厄災が降りかかるなんて･･･とも思ったが、歴史をひもとくとウクライナ国民はずっとこんな事態の中で生き続けてきた。地政学的必然という事らしいが、四方を海に囲まれて陸の国境がほぼない感覚の日本人とは、決定的な差なのだろう。

今、不確定要素山積みの事態を今日の記録者がたくさん書いている。決着点によって選ばれた解説が、いずれ歴史的記述として残されるのだろうが、願わくば戦禍のこれ以上の拡大を回避できた記録であることを祈る。

編集員（チバ　アキオ）

2010 年 6 月から創刊。もうすぐ 12 年。マガジンも 12 歳。当時、幼稚園だった息子もこの春に家を出た。12 年も経てば、人生のステージは変わる。特に若い頃は数年でガラっと変化する。スマホの普及が 4%の時代から、90%の時代になったし、オンライン会議に関してはここ数年でも数倍の普及率で 12 年前は推して図るべし。

そんな中でも、存在し続けるのが対人援助のお仕事。何年後かに消える仕事にもカテゴライズされないともいうけれども、WEB上で済むようにする流れは常にある。さらに経済的事情による支援の退潮はマガジン編集部が活動する都市でも常に背中合わせにあり、その気配が消えたことはない。

そんな中でこのマガジンが扱うテーマでは、政治的に、金銭的に何かを獲得し実現する歩みの部分は少ない。中心的テーマは整わない側面もある状況の中で、いかに工夫し、やりがいを持ち、ともに高めていくかという姿勢である。生まれや学力も資本も関係なく、どんな人にでも触れるチャンスがある。図書館活動の末端の一つといっても良い。こうした活動に参加していることに意義を感じるし、排除の仕組みや排除の力動から距離を置いていることがとても私にあっている。

戦火を国境や独裁者原因論だけで見るのではなく、どこに「境界」を見出すことができるか？も問われている。認知戦という言葉も用いられているが、どの国にいても割を食うのは庶民という現実がある。望まない砲撃、望まない従軍、望まない不便な生活。弱者から倒れ、命を落としていく…。正しさに魅了されている限り十字軍であり、そこからの脱却こそ、ソーシャルワークの歴史そのものである。現状をどう見ることができるか。そこにたけている私たちの役割は思った以上に大きいと思われる。そんな視点を複数もたらすこともできるのがこの対人援助学マガジンである。ここで起こっているのは、世界で起こっていることと同じ。世界で起こっていることは支援の現場でも起こっている。こうした行き来ができることが学びの面白みであり、喜びであり、希望である。だからこそ、手立てのアイディアがもたらせるのである。

今年度はオンラインを用いたマガジンきっかけ読書会、

トークライブを始めた。オンラインツールも活用である。12 年前にはないものも用いてマイナーチェンジもしながら、これからもいろんな工夫もしながら歩んでいくことを強く思った 3 月編集作業だった。

編集員(オオタニ　タカシ)

今号の編集会議では、直近のトークライブの振り返りをはじめ、ロシアのウクライナ侵攻という世界的な事象から個人の人生観・仕事観まで、本当に幅広いテーマが話題になりました。災害や戦争など、一たび重大な事態が生じてしまうと、援助職にできることなどちっぽけで、私たちが日々その意味を信じ、大切にしている営みも吹けば飛ぶようなものに思えてきます。一方、世の中が荒れると急に威勢のよいことを雄弁に語り始める人もいますし、時勢によっては、その語りに惹きつけられる人も少なくないように見えます。

だけど、それでも。自分自身やこの社会が不完全なものであると自覚しつつも、それでも、蛮勇を頼るのではなく、自分自身に起こせるちっぽけな良い変化を求めていきたいと思います。今はまず、不戦の誓いを新たに。「戦争なんてものは、伝えられる生やさしいもんじゃない。戦争なんてものは反対だけしてりゃ、いいんだよ」(永六輔氏)

第49号は2022年6月15日
発刊の予定です。
原稿締切2022年5月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。　現在非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021
大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８
ランブラス二条御幸町４０２　仕事場D・A・N

対人援助学マガジン
通巻48号
第12巻　第4号
２０２２年３月１５日発行
http://humanservices.jp/

表紙の言葉

２０２２年、春の「ぼむマンガ展」に出品した掛け軸マンガ「寿司」からのヒトコマ。

世間はすっかり uber　eats に様変わり。出前のおか持ちなんて死語になりつつある。

私の子どもの頃、にぎり寿司なんて日常食生活のカテゴリーになかった。母が作ってくれるばら寿司、時々巻き寿司。そんなところだったろう。

それが持ち帰り寿司、回転寿司等、どんどんグレードアップで今に至る。

そして世界も寿司、生マグロを食するようになって、価格の高騰、資源不足がささやかれている。

黙ってひっそり食べていれば、ローカルな食習慣として競争相手も登場しなかったのに。

日本食を広めた結果、すっかり高級品になってしまったなんておかしな話が、あちこちに聞こえる。社会システムとはそんな風に組み上がっている。

団士郎　(2022/03/15)